プラトン全集 9

ゴルギアス

加来彰俊訳

メノン

藤沢令夫訳

岩波書店

編集
田中美知太郎
藤　沢　令　夫

目次

ゴルギアス……加来彰俊訳…一
メノン……藤沢令夫訳…二四五

解説
ゴルギアス（三三九）　メノン（三六九）

索引

凡例

一、本全集は底本として、バーネット版プラトン全集(J. Burnet, *Platonis Opera*, 5 vols., Oxford Classical Texts)を用い、これと異なる読みをした箇所は注によって示す。

二、訳文上欄の数字とＢＣＤＥは、ステファヌス版全集(H. Stephanus, *Platonis opera quae extant omnia*, 1578)のページ数と各ページ内のＡＢＣＤＥの段落づけとの対応――おおよその――を示す(ただしＡは省略した)。引用は、このページ数と段落により示される(例えば『パイドロス』253C)。

三、各対話篇における章分けは、一八世紀以降フィッシャー(J. F. Fischer)の校本に由来すると見られる一般に慣用のものに従う。ただし対話篇により章別の一定していないものもあり、この場合は適宜区別を設けた。

四、対話篇名につけられている副題(ないものもある)は、ローマ時代のプラトン全集(トラシュロス)以来の、あるいはさらに古い伝承によるものである。所伝によって異同のある場合は、適切と判断されるものを選んでつけた。

五、ギリシア語の片かな表記は、ΦΧΘとΠΚΤとを同じように「プ」「ク」「ト」とし、母音の長短は普通名詞においてのみ区別し(例、ソピアー)、固有名詞においては区別しない(例、ソークラテースでなく、ソクラテス)。

六、〔 〕の括弧は訳者による文意の補足を示す。

七、略記号　DK＝H. Diels u. W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*.　Diog. L.＝Diogenes Laertios.　古注＝*Scholia Platonica* (ed. W. C. Greene).

八、本全集における対話篇の収録順と各巻への配分は、右のトラシュロス編全集における九つの四部作集(tetralogia)の順序と括り方に従っている。

ゴルギアス

——弁論術について——

加来彰俊訳

登場人物

カリクレス
ソクラテス
カイレポン
ゴルギアス
ポ　ロ　ス
（その他　聴衆）

B

一

カリクレス 争いごとや喧嘩にならソクラテス、そんなふうに加わるべきだと言われているがね。

ソクラテス え？　それではぼくたちは、諺にいうように、「宴会が終ったあとに」やって来たのであって、間に合わなかったというわけかね？

カリクレス そうなんだよ。それも、大へん優雅な宴会だったのにねえ。というのは、ほんのついさっき、ゴルギアスが、いろいろと見事な弁論ぶりを、われわれにみせてくれたのだから。

ソクラテス しかし、そういうことになったのは、カリクレス、ここにいるカイレポンの責任なのだよ。この人のおかげで、ぼくたちはやむなくアゴラ(1)(広場)で時間をつぶされてしまったのだから。

カイレポン いや、そんなことは何も気にしないでください、ソクラテス。ぼくのほうで、その償いもつけますから。というのもぼくは、ゴルギアスには懇意にしてもらっているのです。だから、今がよければ今でも、またなんなら、つぎの機会にでも、ぼくたちはあの人の弁論ぶりをみせてもらうことにしましょう。

カリクレス というのは、どういうことかね、カイレポン。ソクラテスは、ゴルギアスから話が聞きたいのかね。

カイレポン まさにそのためにこそ、ぼくたちは、ここにこうして来ているのだよ。

カリクレス そうか、それなら、もし君たちが、ぼくの家へ来る気持があるのなら……。ゴルギアスは、ぼく

のところに逗留しているのだし、それで君たちは、あの人の弁論ぶりをみせてもらえるだろうから。

ソクラテス　ありがとう、カリクレス。しかし、はたしてあの人は、ぼくたちと一問一答で話し合う気持になってくれるだろうかね？　というのも、ぼくがあの人から直接に聞いてみたいと思っているのは、あの人の技術には、いったいどういう力があるのか、また、あの人が世に公言して教えているのは、どんな事柄なのか、ということなのだからね。で、それ以外の、弁論ぶりのほうは、〔カイレポン、〕君のいうように、またつぎの機会にでも、みせてもらうことにしよう。

c

カリクレス　それは、当の本人に訊ねてみるのが一番だよ、ソクラテス。なぜなら、あなたが聞きたいと思っているそのことだって、あの人にとっては、腕前のみせどころの一つだったのだから。とにかく、今しがたもあの人は、部屋のなかにいた人たちのだれであれ、何なりと好きなことを質問するようにと命じていたのだし、そして、どんなことにでも答えてみせようと言っていたのだから。

ソクラテス　ああ、これはほんとうに、結構な話だ。——さあ、それでは、カイレポン、あの人にひとつ、訊ねてみてくれないか。

カイレポン　何を訊ねましょうか？

1　ここでは「アゴラ」は固有名詞化しているので、原語をカナ書きにしておく。この「アゴラ」は、アテナイの政治、経済、文化および社交生活の中心となっていった場所であるが、ソクラテスがしばしばそこに姿を現わして、人びとと問答を交していたことについては、クセノポンの『ソクラテスの思い出』第一巻（一の一〇）、プラトンの『ソクラテスの弁明』（17C）などを参照。

(447)
D

ソクラテス　あの人は何者かということをだ。

カイレポン　とおっしゃるのは、どういう意味でしょうか？

ソクラテス　たとえばだね、かりにもしあの人が、履きものを作る人だとすれば、むろん、自分は靴屋であると、こう君に答えてくれるだろうと思うのだが。それとも、ぼくの言う意味が、わからないかね。

二

カイレポン　いえ、わかりました。では、訊ねてみることにしましょう。

〔一同、建物のなかに入る〕

どうか、ゴルギアス、わたしに答えてください。このカリクレスの話だと、あなたは、ひとがあなたにどんな質問をするとしても、それに答えてやると公言しておられる、ということですが、それは本当でしょうか。

ゴルギアス　ああ、本当だとも、カイレポン。じつは、今しがたも、ちょうどそのことを公言していたばかりだからね。それにまた、こう言ってもいいのだよ。長い年月になるけれど、いまだかつてだれ一人、このわたしに向かっては、何一つ目新しい質問をした者はなかったのだ、とね。

448

カイレポン　そうしますと、ほんとうにあなたは、わけもなく答えてくださるのでしょうね、ゴルギアス。

ゴルギアス　君はそれを試してみてもいいのだよ、カイレポン。

ポロス　そうだとも、ゼウスに誓って、試してみればいいのだよ。だがね、カイレポン、君さえよければ、試す相手は、このぼくということにしてくれないかね。それというのも、ゴルギアスさんはもうすっかり疲れてお

られるように、ぼくには見受けられるからだ。さっき、たくさんの話をされたばかりだからね。

カイレポン　え？　なんだって？　ポロス。それでは君は、ゴルギアスさんよりも上手に、答えられるつもりでいるのかね。

ポロス　しかし、どうしてそんなことが問題になるのかね。とにかく、君にさえ満足のゆくように答えられるなら、それでいいのではないかね。

B

カイレポン　いや、それなら、それでいいとも。さあ、それでは、せっかく君が望むのだから、ひとつ、君に答えてもらうことにしようか。

ポロス　さあ、質問してごらん。

カイレポン　よし、それでは、質問させてもらおう。——いまかりにゴルギアスさんが、ご兄弟のヘロディコス(1)と同じ技術に心得のある人だとしたら、われわれはこの人を何と呼べば、正しく呼ぶことになるのだろうか。その場合にはむろん、その兄弟の人を呼ぶのと同じ名前で、呼ばなければならぬのではないか。

ポロス　それはまったくそうだ。

カイレポン　したがって、この人は医者であると言えば、それで適切な言い方をしたことになるだろう。

1　ゴルギアスの兄弟である、このヘロディコスについては、医者であった(456B参照)ということ以外には、詳しいことは分らない。プラトンの対話篇によく出てくる(『プロタゴラス』316E、『国家』III. 406A、『パイドロス』227D)同名の人物、メガラ出身でトラキアのセリュンブリアで活躍し、独得の養生法を提唱した医者のヘロディコスとは別人である。

ポロス　そうだ。

カイレポン　ではまた、かりにこの人が、アグラオポンの子のアリストポンや、その兄弟〔のポリュグノトス〕[1]と同じ技術に熟達している人だとしたら、われわれはこの人を何と呼べば、正しいのだろうか。

C

ポロス　むろん、画家とだ。

カイレポン　しかし実際には、この人が心得ておられるのは、どんな技術であり、したがってわれわれは、この人を何と呼べば、正しく呼ぶことになるだろうか。

ポロス　カイレポンよ、人類のもつ数多くの技術は、経験から出発しながら、その経験をつみ重ねるという仕方で、発見されてきたものなのだ。なぜなら、経験こそ、われわれの生活が技術の指針に従って進むようにさせるが、これに反して、無経験は、行きあたりばったりの偶然にまかせるからである。ところで、そういった技術のそれぞれを、それぞれの人がそれぞれの仕方で別々のものを身につけているのであるが、そのなかにあって、最もすぐれた技術を身につけているのが、最もすぐれた人たちなのである。で、ここにおられるゴルギアスさんにしても、その最もすぐれた人たちの一人であって、技術のなかでも、最も立派な技術を身につけておられるのだ。[2]

三

D

ソクラテス　うむ。これはなるほど、ゴルギアス、演説に対する準備のほうは、ポロスには立派にでき上っているように見えますね。でも、今はそれだけではだめなのです。なぜなら、カイレポンに約束したことを、彼は

果していないのですから。

ゴルギアス　それはまた、どうしてかね、ソクラテス。

ソクラテス　質問されていることには、ぜんぜん答えていないように、わたしには見えるのです。

ゴルギアス　それなら、もしよければ、君のほうで、この人に訊ねてみたら？

ソクラテス　いいえ、もしも、あなたご自身に、答えてやろうという気持がおありならばね。わたしとしてはむしろ、あなたにお訊ねできれば、そのほうがずっとうれしいのです。というのもポロスは、いまの話しぶりから察しても、一問一答で話し合うことよりは、いわゆる弁論術のほうの練習をつんできたのだということが、わたしにははっきりとわかりましたからね。

E

ポロス　どうして、そうなのですか、ソクラテス。

1　父アグラオポン（タソス島の人）も画家であったと言われるが、彼の息子たち、アリストポンとポリュグノトスの兄弟も、ともに画家となった。特に後者のポリュグノトスは有名で、前五世紀の前半に活躍し、ギリシア絵画史の第一期を飾る代表的な存在であった。

2　ポロスは演説口調で答えている。これがポロス自身の書物（462B参照）の中からの忠実な「引用」であるか、それともプラトンの「もじり」であるかは決めがたいが、いずれにしても、この文章にはゴルギアスの文体の模倣が見られる。すなわち、訳文では充分に表現されていないけれども、語句の長さをつり合わせたり、対句を用いたり、また頭韻法や脚韻法、つまり語頭や語尾の音や形をそろえたりする工夫がなされている。したがってまた、そういう技巧ばかりが先に立って、この答は、実は答になっていないのである。なお、ここに言われている内容については、アリストテレスもこれを紹介して、「ポロスが正しく言っているように、経験は技術を生むが、無経験は偶然のまぐれあたりをもたらすからだ」と言っている（『形而上学』第一巻（$981^{a}4$–5））。

ソクラテス　どうしてって、それはこうなのだよ、ポロス。カイレポンが訊ねているのは、ゴルギアスさんは何の技術について心得のある方か、ということだったのに、君はまるで、誰かがその技術にけちをつけてでもいるかのように、この人の技術をほめるばかりで、その技術がいったい何であるかということには、答えてくれなかったからだよ。

ポロス　だからそれは、最も立派な技術だと答えたではありませんか。

ソクラテス　うん、それはたしかにそうだろう。しかしだれも、ゴルギアスさんの持っておられる技術が、どのような性質のものであるかを訊ねてはいないのだ。そうではなく、その技術は何であるか、そしてゴルギアスさんを何と呼んだらいいのか、ということを訊ねているのだ。さきほどカイレポンが、君のために例をあげて質問していたときには、君は彼に対して適切に、しかも短い言葉で答えていたのだが、ちょうどあのとおりに今も、その技術は何であるか、そしてわれわれはゴルギアスさんを何と呼んだらいいのか、それを言ってみてくれたまえ。

いや、それよりもむしろ、ゴルギアス、どうか、あなたご自身で言ってみてください、あなたが心得ておられる技術は何であるか、したがって、あなたを何と呼んだらいいのかを。

ゴルギアス　弁論術だよ、ソクラテス。

ソクラテス　そうすると、あなたを弁論家と呼べばいいわけですね。

ゴルギアス　そうだとも、それも、すぐれた弁論家だとね、ソクラテス。もしも君に、ホメロスの言いぐさではないが(1)、「われこそは……」と自分で誇りにしている呼び名で、わたしを呼んでくれる気持があるのならだよ。

ソクラテス　いや、その気持はありますとも。

ゴルギアス　それなら、そう呼んでくれたまえ。

B

ソクラテス　それではまた、あなたは、ほかの人たちをも弁論家にすることができるのだと、こうわれわれは言ってよろしいのでしょうか。

ゴルギアス　そのことこそ、ここだけではなく、よその土地においても、わたしが公言していることなのだ。

ソクラテス　ところで、どうでしょうか、ゴルギアス。いまわたしたちが話し合っているように、一方は質問し、他方は答えるというやり方を、これから先もつづけてもらえるでしょうか。そして、ポロスもやりかけていたような、あのひとりで長い話をすることのほうは、またつぎの機会まで延ばしていただく、ということも……。いや、それはもう約束ずみのことだといってよいですから(2)、その約束にそむかないで、質問には短く答えることにきめてください。

ゴルギアス　答のうちには、ソクラテス、どうしても、長い言葉を使わなければならない場合も、あるものだ

1　「われこそは……」(直訳は「それであることをわれは誇りとする」)というのは、ホメロスの詩に現われる英雄たちが、自分の生まれや血統、また武勇などを誇らかに語るときにつけ加えるきまり文句である。『イリアス』第六巻二一一行、第一四巻一一三行、『オデュッセイア』第一巻一八〇行などを参照。

2　一問一答で議論するという約束をゴルギアスはこれまでにまだしていないから、ここでそれが「約束ずみ」と言われるのには多少問題があり、テキストを修正する試みもなされているけれども、上述448Aで言われているように、どんな質問にも答えてみせるというゴルギアスの一般的な約束をソクラテスは念頭において、それにもとづいて今や、ゴルギアスを問答法のやり方に従わせようとしているのだ、というドッヅの解釈に従っておく。

C よ。しかしまあ、できるだけ短い言葉で、答えるようにしてみよう。というのもじつは、そのことだってまた、わたしの主張していることの一つなのだから。つまり、同じことを言うのに、わたしより短い言葉で言える者は、だれ一人あるまいということもね。

ソクラテス ええ、それを今はお願いしたいですね、ゴルギアス。それではどうか、まさにその、短い話し方というのを、やってみせてください。長い話し方のほうは、またつぎの機会にでも、やってもらうことにして。

ゴルギアス いいとも、やってみることにしよう。そうすれば君は、これ以上に短い言葉で語る人の話は、まだ誰からも聞いたことがないと言うだろうね。

四

ソクラテス さあ、それでは、いいですか、あなたは弁論の技術を心得ておられる人だし、そして、ほかの人D たちをも弁論家にすることができると主張しておられるのだから、それなら、その弁論術というのは、およそ存在するもののうちの、何に関する技術なのですか。たとえば、機織の術は、着物の製作に関する技術ですね、そうでしょう？

ゴルギアス そう。

ソクラテス ではまた、音楽の技術は、歌曲を作ることに関するものではありませんか。

ゴルギアス そう。

ソクラテス これは何とも、ヘラの女神に誓っていいますが(1)、ゴルギアス、あなたのそのお答ぶりには感心し

ますよ。あなたはできるだけ短い言葉で、答えてくださっているのですからね。

ゴルギアス　わたしは、かなり上手にやっているつもりだからね、ソクラテス。

ソクラテス　ごもっともです。さあ、それでは、弁論術についても、どうか、その調子で答えてください。それは、およそ存在するもののうちの、何についての知識ですか。

ゴルギアス　言論についてだよ。(2)

E

ソクラテス　と言われると、その言論とは、どのような言論のことですか、ゴルギアス。はたしてそれは、病人はどのように養生すれば健康になることができるかを、明らかにする言論でしょうか。

ゴルギアス　それは、ちがうね。

ソクラテス　してみると、弁論術というのは、かならずしも、すべての言論に関係があるわけではないのですね。

ゴルギアス　むろん、そうではない。

ソクラテス　でもそれは、人びとを話す能力のある者にするのですね。

1　ヘラは、神々の王ゼウスの妃であるが、家庭婦人の守り神でもあるから、ちょうど男性がゼウスの神に誓ったように、女性の誓いには多くヘラの名が用いられた。しかしここでのように、男性の誓いにヘラの女神が持ち出されることもあり、それはたいていの場合、感歎や嘆賞の言葉を伴っているようである。

2　弁論術の創始者コラクスの著書には、「言論の技術」という標題がついていたと言われる。つまり弁論術は、当時一般に「言論についての技術」という言い方で呼ばれていたのである（『パイドロス』266D参照）。そのことを念頭において、ゴルギアスは答えているわけである。

ゴルギアス　そう。

ソクラテス　では、その話す事柄について、考える能力のある者にもするのではないですか。

ゴルギアス　もちろん、そうする。

450

ソクラテス　ところで、どうでしょうか。いま話に出ていた医術は、病人のことについてなら、人びとを考える能力のある者にも、また、話す能力のある者にもするのですか。

ゴルギアス　それは必ず、そうするね。

ソクラテス　してみると、医術もまたどうやら、言論に関係があるようですね。

ゴルギアス　そのとおり。

ソクラテス　そして、その場合の言論というのは、病気についての言論なのですね。

ゴルギアス　たしかに。

ソクラテス　それではまた体育術も、言論に関係があるのではありませんか。つまり、身体の状態の良し悪しについての言論に。

ゴルギアス　そのとおり。

ソクラテス　さらにまた、その他のもろもろの技術についても、それと同じことが言えるでしょう、ゴルギアス。つまり、それらの技術のどれもが言論に関係があり、そしてその言論とは、それぞれの技術が扱っている当

B

の事柄にかかわるものなのです。

ゴルギアス　そのようだね。

ソクラテス　それならば、いったい、なぜあなたは、その他のもろもろの技術を、それらはどれも言論に関係があるのに、弁論術とは呼ばないのですか。いやしくもあなたが、言論に関係のある技術なら、何であろうと、これを弁論術と呼ぼうとしておられるのならね。

ゴルギアス　それはだね、ソクラテス、その他のもろもろの技術の場合には、その知識は、言ってみればその全部が、手仕事とか、その他それに類する行為にかかわるものであるのに対して、弁論術には、そのような手仕事でなされることは一つもなくて、その技術の働きと、その目的の達成とは、すべて言論を通してなされるからである。そういう理由で、わたしとしては、弁論の技術こそ、言論に関するものであると考えているのであって、その言い方に間違いはないと、わたしとしては主張したいのだよ。

c

五

ソクラテス　それでは、これでもうわたしには、あなたがどのような技術を弁論術と呼ぼうとしておられるかが、わかったことになるのでしょうかね？　でも、いずれすぐに、もっとはっきり理解できるようになるのかもしれません。とにかくまあ、答えてもらいましょう。――われわれはいろいろな技術をもっているのですね、そうでしょう？

ゴルギアス　そうだ。

ソクラテス　ところで、これはわたしの考えなのですが、技術全体の中で、そのうちの或る種のものは、実際の行動が主となっていて、言論はわずかしか必要としないものであるし、またなかには、言論をぜんぜん必要と

しないで、その技術の働きは、黙っていても遂行されるものがいくらかあるわけです。たとえば、絵を描く技術

D や、彫刻の技術がそうですし、ほかにもそういった技術はたくさんあるでしょう。あなたが、弁論術はそれとは関係がないのだと主張しておられるのは、そういった種類の技術のことをさしておられるように思えるのですが、それとも、ちがいますか。

ゴルギアス　いや、これはまったく見事な理解だよ、ソクラテス。

ソクラテス　ところが他方、技術の中のもう一方の種類のものは、言論によって全部をなしとげて、それ以外に実際の行動を必要とすることは、ぜんぜんないといってよいか、あるいはあるとしても、ごくわずかな程度にとどまるものです。たとえば、数論、計算術、幾何学、それにまた将棋の技術がそうですし、ほかにもそういった技術はたくさんあるでしょう。それらの技術の中には、言論と行為とがほとんど半々の役割を果すものもいくらかあるけれども、しかし大部分のものにおいては、言論の果す役割のほうが大きいのです。そして一般に、そ

E れらの技術の働きと、その目的の達成とは、すべて言論を通してなされるのです。弁論術とは、そのような種類の技術にぞくするものであると、こうあなたは言おうとしておられるように、わたしには思えるのですが。

ゴルギアス　それは君の言うとおりだ。

ソクラテス　けれども、少なくともいま例にあげた技術の中のどれ一つをも、あなたは決して弁論術と呼ぼう(1)としておられるのではないと、わたしは考えております。もっとも、言葉の上では、言論を通して目的を達成する技術が弁論術であるというふうにあなたは言われたのだから、それなら、人によっては、その議論に難くせをつけようと思えば、「そうすると、ゴルギアス、あなたは数論のことを弁論術だと言うのかね」と、こう聞き返

ず者だって、ないとはいいませんけれどもね。しかしわたしとしては、あなたが弁論術だと言おうとしておられるのは、数論のことでもなければ、幾何学のことでもないと考えているのです。

451

ゴルギアス　そう、そのとおりなのだ、ソクラテス。君は正しく理解してくれているよ。

六

ソクラテス　さあ、それなら、あなたのほうも、わたしの訊ねていたことに答えて、決着をつけてください。というのは、弁論術とはまさに、主として言論を使用する技術の一つなのであるが、しかしそういう技術は、ほかにもまだいろいろとあるのですから、何に関して、言論において目的を達成する技術が弁論術なのか、それを言ってみるようにしてください。たとえば、さきほどわたしが例にあげていた技術の中の、どれについてでもいいのですが、誰かがわたしにこう訊ねるとしてみましょう。「ソクラテスよ、数論の技術とは何か」と。その人に対してわたしは、ちょうどさきほどのあなたの答のように、「それは言論によって目的を達成する技術の一つである」と、こう答えるとします。そしてもしその人が、「それでは、その技術は、何を対象にしているのか」と、こう重ねて訊ねるなら、それに対しては、「奇数と偶数とを――それぞれが具体的にどれだけの大きさの数であるかにはかかわりなく――取り扱う技術である」と、わたしは答えるでしょう。

B

ところでまた、その男が、「それなら、計算術とは、どういう技術のことを言うのか」と、こう訊ねてくれれば、

1　ドッヅの校本に従い、οὔτοι は οὔ τι に直す。これがF写本も含めてすべての有力写本の読み方である。

C

「それもまた言論によって全部のことをなしとげる技術の一つである」とわたしは答え、そしてもし、「それは何を対象にしているのか」と重ねて訊ねるなら、それに対しては、民会で修正決議案を提出する人たちの言い方にならって(1)、こう答えてやるでしょう。『その他の点においては』、計算術のなすことは数論と『同じであるが』——というのは、両者とも同じもの、つまり奇数と偶数とを取り扱うからであるが——しかし、両者の間にはこれだけの相異点があるのだ。すなわち、計算術のほうは、奇数と偶数とが、おのおのそれらだけの間においても、また相互の間においても、どのような数量的関係にあるかを考察するものである(2)」と。

さらにまた、誰かから天文学のことを訊ねられて、「それもまた言論によって全部のことをなしとげるのだ(3)」とわたしが答えるとき、「しかし、天文学が用いるその言論とは、ソクラテス、何を対象にしているのか」とその人が訊ねるなら、それに対しては、「星や太陽や月の運動について、それらの速度は相互にどうなっているかを考察するのだ」と、こう答えてやるでしょう。

ゴルギアス　そう、君のその答は、それで正しいのだよ、ソクラテス。

D

ソクラテス　さあ、それでは、あなたのほうも、正しく答えてくださいよ、ゴルギアス。というのも、弁論術とはまさに、言論によって全部のことをなしとげて、その仕事を完成する技術にぞくしているわけですからね。そうではありませんか。

ゴルギアス　そのとおりだ。

ソクラテス　では、その技術は、何を対象にしているのか、言ってください。弁論術の用いる言論が取り扱っている対象とは、およそ存在するもののうちの、いったい、何なのですか。

ゴルギアス　それはね、ソクラテス、人間にかかわりのある事柄のなかでも、一番重要で、一番善いものなのだよ。

七

ソクラテス　しかしですね、ゴルギアス、あなたの言われるその一番善いものということだって、いろいろとE異論があって、まだ少しも明白ではないのです。というのもあなたは、人びとが酒の席で、つぎのような歌をう

1　民会に上程されている議案に対して、修正または付加の条項を含む別の決議案を提出しようとする場合には、前の議案と重複するところは、「その他の点においては、政務審議会（または誰それ）の案と同じであるが」と言ってすましてしまうのが慣例であった。その言い方をここでもまねたわけである。

2　計算術とは、今日のいわゆる「算術」にあたるもので、加減乗除の四則を内容とするものであった。すなわちそれは、ここで述べられているように、奇数と偶数との間の、もしくは奇数と奇数、あるいは偶数と偶数との間の、つまり、あらゆる数の間における量的関係を問題にして、実際上の計算を行なうところのものなのである。これに対して数論は、そういった量的関係ではなしに、数そのものについて考察する学問で、その内容は、記数法から始まり、単位となる数の定義、数の種類とその定義（たとえば奇数と偶数、倍数と約数など）、数の形状（たとえば正三角形数、正方形数など）、さらには比例論や無理数論などを含むものであった。ただしここでは、「計算術」との対比で、ごく簡単な定義があたえられている。

3　ここで「天文学もまた言論（理論）によって全部のことをなしとげる」と言われているのは、諸種の道具機械を使っての観測が天文学研究の重要な要素となっている今日の実状からすれば、奇異に聞こえるかもしれないが、しかしこれは、当時の観測器具がきわめて貧弱であったために、天文学研究は多分に理論的（思弁的）な性格のものとならざるをえなかったという事情にもよるが、もっと本質的には、天文学の対象が、『国家』（Ⅶ.528A,E）のなかで述べられているように、「回転している立体」であるとすれば、天文学は本来、立体幾何学の次に位すべきものであり、したがって他の数学と同列におかれていたからであると考えられる。

たっているのを、お聞きになったことがあると思う。つまりその歌(1)では、人びとはこう歌いながら、人生の善きものを数え上げているわけです――

一番善いのは健康で

器量のよいのがそのつぎだ

さて三番目は――と、この歌の作者は言うのですが――

正直にかせいだ財産だ

ゴルギアス　うん、それは聞いたことがあるよ。しかし何のために、そんな歌を持ち出すのかね。

ソクラテス　それはつまり、こういうわけなのです。いまかりに、この歌の作者がほめているような、そういった善きものを作り出す専門家たち、つまりそれは、医者と、体育教師と、そして実業家ということになりますが、その人たちが、この場に現われてあなたの傍に立ったとしてみましょう。そして、まず医者が、こう口を切るものとします。――「ソクラテスよ、ゴルギアスは君をだまそうとしているのだ。なぜかといえば、人間にとっての最高の善いものを扱っているのは、この人の技術ではなくて、それはむしろ、ぼくの技術なのだから」と。そこで、わたしとしては、その人にこう訊ねるとします。「しかし、そう言う君自身は、いったい、何者かね」。「医者だよ」というのが、その男の答でしょう。「そうすると、君の言いたいのは、どういうことなのかね。はたして、君の技術のもたらすものが、最高の善いものだというのかね」と訊ねるなら、「もちろんだとも、ソクラテス、健康をもたらすのだから(2)。それとも、人間にとって、健康にまさる善が、何かほかにあるとでもいうのかね」と、その男は答えるにちがいないです。

それからまた、医者のつぎには、体育教師が口を出すとしてみましょう。「いいかね、ソクラテス、それはぼくだって、驚くにちがいないものね、もしも、ゴルギアスが君に対して、ぼくがぼくの技術から作り出してみせるものよりももっと善いものを、彼自身の技術から、作り出してみせることができるなら」と。そこでその人に向かっても、わたしはまたこう言うでしょう。「しかしそれなら、君、そういう君は、いったい何者かね。そして君の仕事は何だというのかね」。「体育教師さ。そしてぼくの仕事というのは、人びとを身体の面で美しく、また強くすることだ」と、その男は答えるでしょう。

ところで、体育教師のつぎには、実業家が、あたりの者一同をすっかり見くだしながら——とわたしは思うのですが——こう言うとしてみましょう。「まあ、考えてもごらん、ソクラテス。ゴルギアスのところにであろうと、 c 他のどんな人のところにであろうと、何かが、富よりも善いものであることが、君に明らかになるものなら」と。そこで、われわれとしてはその人に向かって、こう訊ねることになるでしょう。「というと、それはどういう意味

1 ここで「歌」と訳された原語は「スコリオン」である。「スコリオン」というのは、酒の席のあとで余興にうたわれた歌で、その歌の作り方、歌い方にはいろいろなやり方——ひとりの人がその場で即興的に一句を作って歌い、つぎの人はそれにつづけてつぎの句を作って歌うという、いわば連歌形式のものや、あるいは、すでに作られている歌を順番に一句ずつ歌うとか、またはそれを全員で唱和するやり方など——があったようである。ここに引用されている「スコリオン」は、古注によると、シモニデス(一説ではエピカルモス)の作であったと言われているが、確かなことは分らない。
なお、人間にとっての「善」をこの順序で数えることは、『メノン』(87E)、『法律』(I. 631C, II. 661A)などにも見られる。

2 ドッツの校本に従い、〈ἦς γ'〉 ὑγίεια; と読む。

なのかね。はたして君が、その富を作る人だというわけかね」と。「そうだ」と彼は言うでしょう。「それは、君が何者だからか」と訊ねれば、「実業家だから」と。「すると、どうだっていうのかね。君は、人間にとっての最高の善いものは、富であるというふうに判定するのか」とわれわれが訊ねるなら、「もちろん」と彼は答えるでしょう。「しかしまあ、こっちをごらんよ。ここにおられるゴルギアスさんは、自分のところにある技術のほうが、君の技術よりも、もっと善いものを作り出せるのだと、異議を申し立てておられるのだ」とわれわれが言うなら、

D むろんそのつぎには、その男はこう訊ねてくるでしょう。「それでは、その善いものというのは、いったい、何のことかね、ゴルギアスに答えてもらってくれ」と。

さあ、そういうわけですから、ゴルギアス、あなたは、わたしからだけではなく、その人たちからも質問されているのだと考えて、あなたが人間にとっての最高の善いものだと言われているもの、そしてあなたこそ、それを作り出す専門家であると主張しておられるもの、そのものとは、いったい何であるかを、どうか答えてみてください。

ゴルギアス それはね、ソクラテス、ほんとうの意味で最高の善いものなのだよ。つまり、それによって人びとは、自分自身には自由をもたらすことができるとともに、同時にまた、めいめい自分の住んでいる国において、他の人を支配することができるようになるものなのだ。

ソクラテス それで、いったい、そのものとは何だと言われるのですか。

E **ゴルギアス** わたしの言おうとしているのは、言論によって人びとを説得する能力があるということなのだ。つまり、法廷では裁判官たちを、政務審議会ではその議員たちを、民会ではそこに出席する人たちを、またその

他、およそ市民の集会であるかぎりの、どんな集会においてでも、人びとを説得する能力があるということなのだ。しかも、君がその能力をそなえているなら、医者も君の奴隷となるだろうし、体育教師も君の奴隷となるだろう。それからまた、あの実業家とやらにしても、じつは、他人のために金儲けをしていることが明らかになるだろう。つまり、自分のためにではなく、弁論の能力があり、大衆を説得することのできる、君のために金儲けをしているのだということがね。

八

453

ソクラテス 今度こそどうやら、ゴルギアス、あなたが弁論術をどんな技術であると考えておられるかを、ほぼ納得のいくところまで示してくださったように思われます。それでももしわたしに、多少でも理解ができているとするなら、弁論術とは「説得をつくり出すもの」(1)であって、それのおこなう仕事のすべてと、その仕事の眼目とは、結局、そのことに帰着するのだと、こう言っておられるわけです。それとも、弁論術には、聴衆の心に説得をもたらすこと以上の能力があるのだと、何かそんなふうに言われる理由でもあるでしょうか。

1　この定義はプラトンの創作ではなく、当時すでに広く世に知られていたものであったと思われる(それは弁論術の始祖、テイシアスやコラクスの定義であるとか、あるいはゴルギアス自身の定義であるとか、さらには、ゴルギアスの弟子のイソクラテスの定義であるとか、いろいろに伝承されている)。プラトン自身は後に、「弁論術とは言論による魂の一種の誘導である」(『パイドロス』261A)というふうに言い代えているが、アリストテレスも同じように、「弁論術とは、それぞれの事柄について可能な説得の手だてを見てとる能力である」(『弁論術』第一巻(1355b25-26))と規定している。

がその仕事の眼目だからね。

ゴルギアス　いや、何もないよ、ソクラテス。それは君の定義したとおりで充分だと思う。というのは、それ

B

ソクラテス　ではまあ、聞いてください、ゴルギアス。どうか、よく承知しておいてもらいたいのですが、このわたしという人間は、自分で信じているところによれば、こういう人間なのです。つまり、ひとが互いに話し合いをするときに、その話で問題になっている事柄そのものについて知りたいと願う者が、もし誰かいるとすれば、このわたしもまた、そういう人間の一人だということです。ところで、あなたもまたそういう人であることを期待しているのですが。

ゴルギアス　で、それで、どうなるのかね、ソクラテス。

ソクラテス　それはこれから、わたしのほうで言いましょう。わたしとしては、あなたが言われているような、弁論術のもたらす説得というのが、いったい、どういう説得のことであり、また、どんな事柄についての説得なのか、いいですか、その点がもう一つ、わたしにははっきりしないのですよ。とはいっても、わたしが考えてみて、あなたが言おうとされているのは、たぶん、こういう説得のことであり、また、こういった事柄についての説得であろうということは、大体の見当ならつけているのです。でも、わたしはやはり、あなたが言われているところの弁論術のもたらす説得が、いったい、どういう説得のことであり、また、何についての説得であるかを、

C

あなたに訊ねてみることにしたいのです。

それでは、いったい何のために、わたしは自分では見当がついているのに、自分のほうからは言おうとしない

で、あなたに訊ねるようなことをするのでしょうか。それはなにも、あなたという人にどうこうしようというのではなく、このいまの議論のためにすることなのです。つまり、いま問題になっている点が、われわれにできるだけはっきりするような方向に、この議論を進めたいからなのです。それで、あなたに重ねてお訊ねするわけですが、そうするのも当然であると、あなたには思われないかどうか、まあよく見てください。たとえば、かりにいまわたしが、ゼウクシス[1]という人は、画家のなかでもどのような画家かと、あなたに訊ねているとします。その場合、もしあなたが、彼は肖像画家だと答えてくださるとすれば、それに対しては、肖像のなかでもどのようなものを、またどんな場所に描いている人かと、こうあなたに訊ねるのは、当然ではないでしょうか。

ゴルギアス　それはたしかに当然だ。

D

ソクラテス　その理由は、ほかにもいろいろな画家たちがいて、彼が描いているのとはちがった肖像を数多く描いている、という点にあるのでしょうか。

ゴルギアス　そのとおり。

ソクラテス　だが、もしかりに、ゼウクシス以外にはだれも、肖像を描いている者はないとすれば、あなたのさっきの答で、よかったわけですね。

ゴルギアス　もちろん、そうだ。

1　南イタリアのヘラクレイアの人。前五世紀の後半に活躍し、ギリシア絵画史の第二の時期を代表する著名な画家であった。特に、女性像の美しさにかけては、彼の右に出るものはなかったと言われている。

ソクラテス　さあ、それでは、弁論術についても、言ってみてください。どうですか、弁論術だけが説得をつくり出すのだと、あなたには思われますか、それとも、ほかにもそうする技術はあるのですか。わたしの言おうとしているのは、こういうことなのです。およそ何かを教える人は、自分の教えることについては、説得するのですか、それとも、しないですか。

ゴルギアス　いや、しないということはないよ、ソクラテス。むしろ、何よりもまず説得するのだ。

E

ソクラテス　それならもう一度、さきほど話に出ていたあの同じ技術にかえって、議論を進めることにしましょう。数論の技術は、そしてその技術に心得のある人は、およそ数に関することなら何でも、われわれに教えるのではないですか。

ゴルギアス　たしかに。

ソクラテス　それではまた、説得もするのではないですか。

ゴルギアス　そう。

ソクラテス　してみると、数論の技術もまた、「説得をつくり出すもの」だ、ということになりますね？

ゴルギアス　そうなるようだ。

454

ソクラテス　ところで、もし誰かが、その説得とは、どのような説得であり、また何についての説得であるかとわれわれに訊ねるなら、われわれはその人に対して、それは奇数と偶数の全部について、教えて理解させるような説得であると、こう答えるでしょう。それからまた、さっき話に出ていたその他の技術についても、それらはすべて「説得をつくり出すもの」であること、そしてその場合の説得とは、どのような説得であり、また何に

ついての説得であるかを、われわれは明らかにしてやることができるでしょう。それとも、できないでしょうか。

ゴルギアス　いや、できるとも。

ソクラテス　してみると、弁論術だけが「説得をつくり出すもの」ではない、ということになりますね。

ゴルギアス　それは君の言うとおりだ。

九

ソクラテス　さて、それなら、そういった成果をあげるのは、なにも弁論術だけではなく、ほかにもそのようにする技術はいろいろあるのだとすると、さきほどの肖像画家の場合と同じように、いまのように言う者に対しては、そのつぎには当然、こう重ねて訊ねることができるでしょう。——弁論術は説得の技術であるとしても、その説得とは、いったい、どのような説得であり、また何についての説得であるか、と。それとも、そんなふうに重ねて訊ねることは、当然であるとあなたには思われませんか。

B

ゴルギアス　それは当然だと思う。

ソクラテス　では、いまの質問に答えてください、ゴルギアス、あなたにもそれが当然だと思われるからには。

ゴルギアス　いいとも、ソクラテス、わたしの言うのは、こういう説得のことなのだ。つまり、さっきも言っていたように、法廷やその他のいろいろな集会においてなされる説得であり、またそれは、正しいことや不正なことについての説得なのだ。

ソクラテス　ええ、じつは、わたしとしても、あなたが言おうとされているのは、そのような説得のことであ

り、またそれらのことについての説得であろうということは、大体の見当ならつけていたのです、ゴルギアス。でも、わたしがこのすぐ後で、何かつぎのようなことを――それはわかりきったことのように思われてはいるけれども、しかしわたしとしてはやはり、重ねて訊ねてみたいことなのですが――あなたに訊ねるとしても、あなたが驚かれないように言っておきましょう。というのは、くり返すことになりますが、わたしが質問を重ねるのは、このいまの議論が最後まで順序を追って進められるためであって、決してあなたという人にどうこうしようというのではないのです。いな、むしろ、わたしたちが互いに当て推量して、相手の言葉を早呑込みする習慣をつけることなく、あなたはあなた自身の見解を、はじめの前提に従いながら、あなたの思うとおりに最後まで述べていただこう、というためなのですから。

C

ゴルギアス　それはたしかに正しいやり方だと思うね、ソクラテス。

ソクラテス　さあ、それでは、こういう点についても、調べてみることにしましょう。どうですか、あなたは「学んでしまっている」ということを認めますか。

ゴルギアス　認める。

ソクラテス　では、どうでしょう。「信じこんでいる」ということは？

ゴルギアス　それも、認める。

D

ソクラテス　それでは、「学んでしまっている」のと、「信じこんでいる」のとは、つまり知識と信念とは、同じものだと思いますか、それとも、別のものでしょうか。

ゴルギアス　わたしは、別のものだと思うがね、ソクラテス。

ソクラテス　ええ、それでよろしいのです。しかしその点は、つぎのことからもおわかりになるでしょう。つまり、誰かがあなたに、「ゴルギアスよ、信念には、虚偽のものと、真実のものとがあるのか」と、こう訊ねるなら、あなたはおそらく、それを肯定されるだろうと、わたしは思いますからね。

ゴルギアス　そう、肯定するね。

ソクラテス　では、どうですか。知識が、偽りであったり、真であったりするでしょうか。

ゴルギアス　いや、それは絶対に、そんなことはない。

ソクラテス　してみると、その点からしてもまた、知識と信念とが同じものでないということは、明らかですね。

ゴルギアス　それは君の言うとおりだ。

E

ソクラテス　ところで、学んでしまっている者も、信じこんでいる者も、説得されているという点では、変りはないのですね。

ゴルギアス　そのとおり。

ソクラテス　では、よろしければ、説得には二種類あるということにしましょうか。一つは、知識の伴わない、信念だけをもたらす説得であり、もう一つは、知識をもたらす説得であると。

ゴルギアス　それでいいだろう。

ソクラテス　さて、それでは、弁論術は、法廷やその他のいろいろな集会において、正と不正に関する事柄を取り扱いながら、いったい、どちらの説得をつくり出すのでしょうか。それは、知ることなしに、ただ信じこむ

ということだけが生ずるような説得なのですか、それとも、知ることになる説得のほうですか。

ゴルギアス それはむろん、ソクラテス、信じこむことになる説得のほうだろうね。

455

ソクラテス そうすると、どうやら、弁論術というのは、「説得をつくり出すもの」だといっても、その説得とは、正と不正について、そのことを教えて理解させるのではなく、たんに信じこませることになるような、そういう説得のようですね。

ゴルギアス そうだ。

ソクラテス したがってまた、弁論家というのも、正しいことや不正なことについて、法廷やその他の集会を教えることのできる人ではなく、ただ信じさせることができるだけの人間なのですね。というのはむろん、あれだけ多く集まっている人たちに、しかもそのように重大な事柄を、短時間のうちに教えるなどということは、とうてい、できないことでしょうからね。

ゴルギアス それはたしかに、できないことだ。

一〇

ソクラテス さあ、それでは、わたしたちが弁論術について述べていることは、いったい、どういう意味をもつことなのか、調べてみることにしましょう。といいますのも、わたしは自分でもまだ、自分の言おうとしている

B

ることの意味が、よくつかめないでいるのですから。

国家が医者とか、船大工とか、その他なにかほかの部門の専門家を公務のために雇おうとして、その選考の会

(1)

議を開くような場合には、どうでしょうか、弁論の心得ある者だからといって、そのことで意見を述べるということはないでしょうね、そうではありませんか。というのはむろん、それぞれの者の選考にあたっては、その道に最も精通している技術者が選ばれるべきだからです。同じようにまた、城壁の構築とか、港湾や船渠の建設について、会議がもたれる場合にも、意見を述べるのは、弁論家ではなくて、大工の棟梁でしょう。さらにまた、指揮官の任命とか、敵方に対する軍隊の配置とか、あるいは陣地の占領とかに関して、討議がなされる場合にも、C そのときに意見を述べるのは、軍事専門家たちであって、弁論の心得ある者ではないでしょう。それとも、ゴルギアス、そういった事柄に関してのあなたのご意見はどうなのでしょうか。というのも、あなたは、ご自分が弁論家であるだけでなく、ほかの人たちをも弁論の心得ある者にすることができると主張なさっている以上、あなたの技術に関することは、あなたの口から聞かせてもらうのが、適当でしょうからね。

そして、今はわたしとしても、あなたの利害のことをもまじめに心配しているのだと、そう考えてくださいね。といいますのは、この部屋の中にいる者たちのうちには、たぶん、あなたに弟子入りしたいと思っている人だって、いるはずですからね。わたしの見るところでは、そういう人が、何人かは、いや、相当の数いるようなのです。もっとも、その人たちは、たぶん遠慮をして、あなたにしつこく訊ねることはしないでしょうけれどもね。

1　古代ギリシアの多くの都市国家では、公に選出された医者を国家は「公務員」として雇い、彼は国庫から支給を受けて、一般の患者からは医療費を取らずに無料で診療する制度があった。そこで評判のよい医者は他国の市民でも高給で雇われることになったが、そのような例で最もよく知られているのは、ヘロドトス『歴史』第三巻（一三一）が伝えているクロトンの人デモケデスである。なお、514Dを参照。

(455)
D
だから、わたしから重ねて質問を受けられるなら、その人たちからも重ねて質問されているのだと、そう考えてください。で、それは、こういう質問なのです。——「ゴルギアスよ、あなたのもとで勉強するなら、われわれは何を得ることになるのか。どんな事柄について、われわれは国家に提案することができるようになるのか。それはただ、正と不正についてだけであろうか、それとも、今しがたソクラテスが話していたような事柄についても、提案することができるようになるのだろうか」とね。——さあ、それでは、その人たちに答えてやるようにしてみてください。

ゴルギアス いいとも。それならわたしのほうで、ソクラテス、弁論術がもっている力の全部を、包みかくさずに、はっきりと君に見せてあげることにしよう。ちょうどいい具合に、君のほうから話のいとぐちを見つけて

E
くれたのだから。というのはつまり、むろん君は百も承知だろうけれども、あの船渠も、アテナイの城壁も、そして港湾の施設も、テミストクレスの提案にもとづいて生まれたものであるし、またその一部は、ペリクレスの勧告によってできたものであって(1)、決して職人たちの意見によって生まれたものではないのだよ。

ソクラテス たしかに、テミストクレスについては、そんなふうに伝え聞いております、ゴルギアス。また、ペリクレスのほうについては、彼が「中の城壁」のことでわれわれに勧告していたときに、わたし自身も直接、彼から話を聞いたのです。

456
ゴルギアス それだけではなく、君がさきほど話していた人たちの、選考が行なわれるような場合にも、ソクラテス、君が現に目にしているとおり、それらのことについて提案し、そして自分の意見を通す人たちは、弁論家なのだよ。

ソクラテス　それを不思議に思っていますからこそ、ゴルギアス、さきほどからわたしは、弁論術の力とはいったいどういうものなのかと、訊ねているわけなのです。実際、そのように見てくると、その力の大きさは、何か人間業を超えたもののようにわたしには見えるのですから。

二

ゴルギアス　もし君が、何もかもわかっていてくれたのならなあ！　ソクラテス。弁論術は、言ってみれば、

1　テミストクレス（前五二八頃―四六二年頃）は、前五世紀初頭に活躍したアテナイの政治家。彼はアテナイを強大な海軍国にすることを政策としたが、前四九三／二年にアルコンの職につくと、従来からあったパレロン港のほかに、ペイライエウスをアテナイの外港とすることを計画し、その三つの港湾（カンタロス、ゼア、ミュニキア）の施設をととのえ、そこに軍艦を入れるための船渠を造った。そしてペルシアやアイギナの侵攻に備えて、ペイライエウスの半島全体を城壁で取り囲み、そこを一つの要塞化する工事に着手した。その後、ペルシア軍の侵入によって、アテナイ市の古くからの城壁は破壊されたので、その戦争の勝利（前四七九年）の後に、彼はアテナイ市を取り巻く城壁を再建し、また前述のペイライエウスを囲む城壁をも完成した。

　しかし、それらの城壁だけでは、もし敵が優勢な陸軍をもって侵入してきた場合には、アテナイとその外港との連絡は切断される恐れがあったので、テミストクレスの死後のことであるが（前四六〇年頃）、アテナイとペイライエウス、アテナイとパレロンを結ぶ二つの「長い城壁」が築かれることになり、それらは数年間で完成した。前者は「北の城壁」と呼ばれ、後者は「南の城壁」あるいは「パレロン城壁」と呼ばれた。

　しかしながら、それでもまだ弱点があった。パレロンとペイライエウスを結ぶ海岸線は、防備のない沼地のままで海に向かってあいていたからである。そこでこの弱点を克服するために、前四四五年頃、ペリクレスの勧告にもとづいて、それら二つの城壁の間に、アテナイとペイライエウスを結ぶもう一本の城壁が、「北の城壁」と平行に（「パレロン城壁」とは斜めに）構築されたのである。これがつぎに言われている「中の城壁」である。

ありとあらゆる力を一手に収めて、自分のもとに従えているのだのにね。で、そのこととの立派な証拠を君に話してあげよう。わたしは、これまでに何度も、わたしの兄弟〔のヘロディコス〕[1]や、その他の医者たちといっしょに、

B 彼らの患者のところへ行ったことがある。それは患者たちのなかでも、薬をのもうとしなかったり、あるいは、医者に身をまかせて切ったり焼いたりされるのをきき入れないでいる病人だったのだが、その病人を、当の医者は説得できないでいるときに、このわたしがかわって説得してやったのだ。ほかでもなく、弁論術を用いてだよ。

しかしまた、こういうことも言っておこう。いまかりに、弁論の心得ある者と医者とが、君の望むどの国へでも出かけて行って、民会でなり、あるいはその他のなんらかの集会において、彼らのうちのどちらが、公務のために働く医者として選ばれるべきかを、言論によって競争しなければならないとしてみよう。その場合には、医

C 者はまったくものの数ではなくて、弁の立つ人のほうが、その気になりさえすれば、選ばれることになるだろう。そしてそのことは、他のどんな専門家を相手にして争う場合でも同じであって、弁論の心得ある者は、ほかのだれにも負けずに、自分のほうが選ばれるように説き伏せることができるはずである。なぜなら、どんな事柄について論ずるのであろうと、大衆の前でなら、弁論の心得ある者が、他のどんな専門家に比べても、説得力において劣るということはないからである。かくて、その技術の力というのは、それほどに大きなものであり、また、そのような性質のものなのだ。

しかしながら、ソクラテス、弁論術を実際に用いるにあたっては、ほかのどんな競技の場合にも必要であるの

D と、同じ注意が必要なのである。というのは、ほかの競技の術にしても、それを学んだからといって、だれかれ

の見境もなしに、どの人に向かってでも、これを用いるべきではないからだ。すなわち、ひとが拳闘や、パンクラティオン[2]や、また武装して戦う術を学んで、敵にも味方にも負けないほどに強くなったからといって、そのことのゆえに、味方の者たちを殴ったり、突き刺したり、殺したりするようなことがあってはならないからだ。しかしまた他方、ゼウスに誓って言うのだが、もしだれかが相撲場に熱心に通って、身体つきがよくなり、拳闘の心得ができたものだから、そこで、自分の父や母を、あるいはその他、家族や友人たちのうちの誰かを、殴ることがあるとしても、それだからといって、体育教師や武装して戦う術を教えた人たちを憎んだり、国家から追放したりしてはならないのである。というのは、教えた人たちのほうは、敵や不正を加える者どもに対して、それらの術を正しく用いるようにという意図で授けたのであるが、つまり、こちらから先に手を出すのではなく、自分たちの身を守るようにするためだったのであるが、習った人たちのほうがその教えをゆがめて、その力と技術とを正しくない仕方で使っているからだ。だから、決して、教えた人たちが悪いのではないし、また、そのことに関して、その技術が責任を問われることもなければ、その技術が悪いのでもないのだ。そうではなくて、その技術を正しく用いない人たちが悪いのだとわたしは思う。

E

457

そこで、弁論術についても、これと同じことが言えるわけだ。つまり弁論家は、どんな人たちを向こうに廻してでも、またどんな事柄についてでも、弁じる能力をもった人間である。だから彼は、要するに、何を話題に選

1　448B 注1を参照。
2　拳闘とレスリングとをいっしょにしたような競技であって、相手を倒すためにはほとんどいかなる手段も許されていた。

B ぶのであろうと、大衆の前でなら、ほかの誰よりも説得力があるわけだ。しかしながら、たとえそうする能力があるとしても、医者たちからその名声を剝ぎとっていいわけのものではないし、また、その他の専門家たちに対しても、やはりそうすることは許されないのである。いな、競技の術を用いる場合もそうであったように、弁論術も正しく用いなければならないのだ。

しかしまた他方、誰かが弁論の上手な者となり、そこでその能力と技術とによって、不正を行なうことがあるとしても、それを教えた者を憎んだり、国家から追放したりすべきではないとわたしは考える。というのは、教

C えたほうの者は、これを正しく使用するようにという意図で授けたのだが、習ったほうの者が、それを逆の目的に用いているからだ。だから、そのように正しくない仕方で使用する者を憎んだり、追放にしたり、また死刑にしたりするのは、正当であるけれども、教えた人にそんなことをするのは、正当ではないのである。

一二

ソクラテス　あなたにも、ゴルギアス、数多くの討論の経験がおありだろうし、そしてそれらの際には、つぎのような事実を充分に見てこられたことと思うのです。すなわち、話し合いをする人たちは、何について話し合おうとしているのであれ、そのことについて互いに教えたり教えられたりしながら、双方の納得のゆくまでその事

D 柄をはっきりさせてから、その対談を終りにするということは、なかなか容易にはできないことなのです。いな、もし両者が何らかの点で意見を異にし、その一方が、他方の言うことは間違っているとか、明瞭でないとか言ったりすれば、そう言われたほうは、腹を立ててしまい、それは自分と張り合うために言われたことであって、そ

の議論で問題になっている事柄は少しも探究しようとはせずに、ただ議論に勝ちたいばかりにそう言っているのだと、こう考えるものなのです。そしてなかには、結局は、とても見苦しい別れ方をする者だってあるわけです。つまり、その場に居合わせた人たちでさえ、どうしてこんな連中の話を聞く気になったのかと、自分自身のためにやりきれない気持になるようなことを、彼らは互いに言ったり言われたりしながら、悪態のかぎりをつくしたのちに、別れるというわけなのです。

E

では、いったい何のために、こんなことを言うのかといいますと、それはつまり、いまあなたが言われていることは、あなたが弁論術について最初に言われたことと、完全に首尾一貫しているのでもなければ、調和してもいないように、わたしには思われるからです。そこで、わたしが恐れるのは、あなたを反駁することで、わたしは事柄そのものを目ざして、それが明白になることを狙っているのではなく、あなたという人を目標にして、議論に勝ちたいばかりにそう言っているのだと、こうあなたに受けとられはしまいかということなのです。だから、

458

わたしとしては、もしあなたという方も、このわたしと同じような人間の一人であるのなら、よろこんで、あなたに最後まで質問をつづけさせてもらいますが、そうでなければ、これでやめることにしたいのです。

ところで、そういうわたしとは、どんな人間であるかといえば、もしわたしの言っていることに何か間違いでもあれば、こころよく反駁を受けるし、他方また、ひとの言っていることに何か本当でない点があれば、よろこんで反駁するような、とはいってもしかし、反駁を受けることが、反駁することに比べて、少しも不愉快にはならないような、そういう人間なのです。なぜなら、反駁を受けることのほうが、より大きな善であるとわたしは考えているからです。それは、自分自身が最大の害悪から解放されるほうが、他の人をそれから解放するよりも

より善いことであるのと、ちょうど同じ程度により善いことだからです。というのは、いまちょうどわたしたち
B が論じ合っている事柄について間違った考えをもつことほど、人間にとって大きな害悪になることは、何もない
と思うからです。

さて、それでは、あなたもまた、そういう人間であることを認められるのなら、わたしたちは話し合いをつづ
けることにしましょう。しかしまた、あなたにはやめにするほうがよいと思われるなら、この話はもうこれまで
にして、ここで打ち切ることにしましょう。

ゴルギアス いや、わたしとしては、ソクラテス、自分もやはり、君が指摘しているような、そういう人間で
あることを認めるよ。ただしかし、ここにいる人たちのことをも考えに入れておかねばならなかったのだろうね。
というのは、じつをいうと、君たちがやって来るよりもずっと前から、わたしはここにいる人たちに対して、た
C くさんの話をしてみせていたのだ。そこで、わたしたちがこれからも話をつづけるとなると、今またおそらく、
話をずっと長びかせることになるだろう。だから、この人たちの都合も考えてやらなければならないのだよ。こ
のなかには、何かほかの仕事にとりかかりたいと思っている人たちがいるかもしれないのに、その者たちを引き
とめるようなことになってはいけないものね。

一三

カイレポン ゴルギアスにソクラテス、まあ、ご自分で直接、この人たちのどよめきの声を、聞いてごらんな
さいよ。あなた方が何か話してくださるなら、それを聞きたいと、この人たちは望んでいるのですから。しかし、

この人たちのことはおいて、とにかく、ぼく自身だけのことにかぎってみても、今のような話が、しかもそんな成行きをみせているのに、それを放っておいて、何かほかの仕事をするほうがもっとさし迫ったことになるほど、それほどに暇のない身分ではありたくないものですねえ！

D **カリクレス** 神々に誓って、そのとおりだとも、カイレポン。それにまた、ぼく自身にしても、これまで数多くの討論の席に居合わせたことはあるが、今ほど楽しい思いをしたことが、かつてあったかどうか、わからないぐらいだものね。だから、少なくともぼくに関するかぎりは、よしあなた方が一日じゅう話をつづけられるつもりだとしても、ぼくにはうれしいですよ。

ソクラテス いや、ぼくのほうは、カリクレス、いっこう差支えはないのだよ、ただ、ゴルギアスさんさえ、その気になってくださるのなら。

ゴルギアス そうすると、結局は、ソクラテス、わたしがその気にならなければ、恥をかくことになるのだね。だれでも好きなことを質問するようにと公言していたのは、ほかならぬこのわたしだったのだから。しかし、そ

E れはそれとして、ここにいる人たちにもそうするのがよいと思われるのなら、話をつづけることにして、そして君は、何なりと好きなことを質問してみたまえ。

ソクラテス では、聞いてください、ゴルギアス、あなたが言われたことのなかで、どういう点がわたしには不審に思えるかを。きっと、あなたは正しく言われたのだろうが、わたしのほうで間違って受けとっているのかもしれませんからね。——あなたの主張というのは、もしだれかがあなたのところで学びたいと思えば、あなたはその人を弁論の心得ある者にすることができる、ということなのですね。

ゴルギアス　そうだ。

ソクラテス　その結果、その人は、どんな事柄についてでも、大衆の前でなら、説得力のある者になる、というわけですね？　ただしそれは、教えることによってではなく、説き伏せることによってですけれども。

ゴルギアス　そのとおり。

459

ソクラテス　実際、あなたは今しがた、こう言われていたのですものね。健康に関する事柄についても、弁論家のほうが医者よりも、説得力があるだろうと。

ゴルギアス　そう、それは、大衆の前でなら、と言っていたのだよ。

ソクラテス　では、その「大衆の前で」ということは、「ものごとを知らない人たちの前で」ということではないですか。というのはむろん、ものごとのわかっている人たちの前でなら、弁論家のほうが医者よりも、説得力があるはずはないでしょうから。

ゴルギアス　それは君の言うとおりだ。

ソクラテス　それでは、医者よりも説得力があるはずだとすれば、知識のある者よりも説得力がある、ということになりませんか。

ゴルギアス　それはたしかに、そうなる。

B

ソクラテス　その当人は、医者ではないのにですね？　そうでしょう。

ゴルギアス　そうだ。

ソクラテス　ところで、医者でないとすれば、その者はむろん、医者が知識をもっている事柄については、知

識のない者でしょう。

ゴルギアス　むろん、そうだ。

ソクラテス　そうすると、弁論家のほうが医者よりも、説得力があるという場合には、知識のない者のほうが知識のある者よりも、ものごとを知らない人たちの前でなら、もっと説得力がある、ということになるでしょう。どうですか、そういう結論になりますか、それとも、何か別の結論になるでしょうか。

ゴルギアス　いや、この場合には、そういう結論になるね。

ソクラテス　いや、この場合だけではなく、その他のどんな技術に対してでも、弁論家と、そして弁論術とは、いまと同じような関係にあるということになるでしょう。つまり弁論術は、事柄そのものが実際にどうであるかを、少しも知る必要はないのであって、ただ、何らかの説得の工夫を見つけ出して、ものごとを知らない人たちには、知っている者よりも、もっと知っているのだと見えるようにすればよいわけなのです。

c

ゴルギアス　それなら、弁論術というものは、たいへん重宝なものだということになるのではないかね、ソクラテス、ほかのいろいろな技術は学ばなくても、ただこの一つの技術を学んでおくだけで、専門家たちに少しもひけをとらないというのであれば。

一四

ソクラテス　ええ、それはまあ、そうであることによって、弁論家が、ほかの人たちにひけをとるか、とらないかということは、もしそれがわたしたちの議論の上からみて、何か意味のあることなら、やがてまもなく調べ

(459)

てみることになるでしょう。(1) しかし今は、それよりも先に、こういった点について調べてみることにしましょう。

D ——はたして弁論の心得ある者は、正と不正、美と醜、善と悪についても、ちょうど健康に関することや、その他ほかの技術の対象となっているものを扱う場合と、同じようにするものなのでしょうか。つまり、何が善で何が悪か、何が美で何が醜か、また何が正で何が不正かという、そういった事柄そのものについては、何も知らないのだけれども、しかし、それらの事柄について説得する方法は工夫しているから、そこで、自分は知らないながらも、同じようにものごとを知らない人たちの前でなら、知っている者よりも、もっと知っているのだと思われ

E るようにするのでしょうか。それとも、弁論家たるものは、それらの事柄について、ほんとうに知っていなければならないのであり、したがって、弁論術を学ぼうとする者は、それらの事柄についての知識をあらかじめ持った上で、あなたのところへ来るべきなのでしょうか。だが、もしそうでない場合には、弁論術の教師であるあなたは、入門者に、それらの事柄については何一つ教えられるわけではないけれども——なぜなら、それはあなたの仕事ではないのですから——しかし、何も知らない大衆の前でなら、その人が、そのような事柄については、ほんとうは何も知らない者であるのに、知っている者だと思われるようになさるのであり、また、ほんとうはすぐれた者ではないのに、すぐれた者だと思われるようになさるのでしょうか。それともまた、そういう場合には、つまり、その人がそれらの事柄についての真実を前もって知っているのでなければ、あなたはその人に弁論術を教えることはぜんぜんおできにならないのでしょうか。いや、それとも、ゴルギアス、そういった点についての、

460 真相はどうなのでしょうか。さあ、ゼウスに誓って、さっきあなたが言われていたように(2)、包みかくさないで、弁論術の力とはいったいどういうものであるかを、言ってみてください。

ゴルギアス　いや、わたしとしては、こう思っているのだがね、ソクラテス。もしその人が、それらの事柄についてたまたま知らないでいるのなら、わたしのところから、それらの事柄をも学ぶことになるだろう、とね……

ソクラテス　そこで、ちょっと待ってください。これはいいことを言ってくださいました。それでは、あなたが誰かを弁論の心得ある者になさるとすれば、その人は、正しいことや不正なことについて、必ず知っているのだということになりますね。それは、前もって知っているのであろうと、あるいは、あなたから教えられて、後から知るのであろうと、どちらであろうともですよ。

B

ゴルギアス　そうなるよ、たしかに。

ソクラテス　では、どうでしょう。大工のことを学んだ者は、大工になるのですね。そうではありませんか。

ゴルギアス　そうだ。

ソクラテス　ではまた、音楽のことを学んだ者は、音楽家になるのではありませんか。

ゴルギアス　そうなる。

ソクラテス　さらに、医学のことを学んだ者は、医者になるし、そして、その他のことも同じ理屈で、そうなるのですね。つまり、それぞれその道のことを学んだ者は、その知識が各人をつくりあげるような、そういう者になるのですね。

ゴルギアス　たしかに。

1　この点は後に466 A sqq.で取り上げられる。

2　455 D参照。

ソクラテス　それではまた、その理屈に従うと、正しいことを学んだ者は、正しい人になるのではありませんか。

ゴルギアス　それはどうしても、そうなるだろうね。

ソクラテス　ところで、正しい人は、正しいことを行なうのでしょう？

ゴルギアス　そうだ。

C

ソクラテス　そうすると、必然的に、弁論の心得ある者は正しい人であるし、また、正しい人は正しいことを行ないたいと望んでいる、ということになるのではありませんか。

ゴルギアス　そうなるようだね。

ソクラテス　したがって、少なくとも正しい人は、どんな場合にも決して、不正を行なうことを望まないでしょう。

ゴルギアス　それは必ずそうだ。

ソクラテス　ところで、さきほどの話では、弁論の心得ある者は、必ず正しい人でなければならないのですね。

ゴルギアス　そうだ。(1)

ソクラテス　だとすると、弁論の心得ある者は、どんな場合にも決して、不正を行なうことを望まない、ということになるでしょう。

ゴルギアス　そうなるようだね。

一五

ソクラテス　さて、あなたは少し前に、[2] こんなふうに言われたのですが、覚えておられるでしょうか。――拳闘家が拳闘の術を用いて、[3] そして不正を行なうとしても、それを教えた体育教師を訴えたり、国家から追放したりすべきではないが、それと同様に、たとえ弁論家が弁論術を不正に用いることがあるとしても、それを教えた者を訴えたり、国家から追い出したりすべきではなく、むしろ、実際に不正を行なう者、つまり、弁論術を正しくない仕方で使う者をそうすべきである、と。どうですか、そういうことが言われたのではなかったですか、それとも、言われませんでしたか。

D

ゴルギアス　それは、言われたね。

ソクラテス　ところが今は、同じその弁論の心得ある者は、どんな場合にも決して、不正を行なうことはありえないだろう、ということが明らかになったのですね。そうではありませんか。

E

ゴルギアス　そう、明らかになったね。

ソクラテス　それにまた、最初の頃の話では、ゴルギアス、弁論術は言論に関するものであるが、その言論と

1　三つ前のソクラテスの言葉、「そうすると、必然的に……」以下、ここの「そうだ」というゴルギアスの答までの問答には、論旨の重複や不明確な点があるというので、注釈家たちの間に種々と原文の削除や修正の試みがなされているが、今は一応バーネットの校本どおりに読んでおく。

2　456D～457C参照。

3　ドッヅその他多くの校本に従い、このあとにある καὶ ἀδίκως χρῆται の語句は削る。

は、偶数や奇数についてのものではなく、正と不正についての言論であると言われていたのです。そうではなかったですか。

ゴルギアス　そうだった。

ソクラテス　ですから、わたしとしては、あなたがあのときにそのように言われた際には、弁論術というものは——それはいつも正義について論ずるものだとすれば——決して不正なことをなすものではありえないだろうというふうに、受け取っていたのでした。ところが、少し後になって、弁論家は弁論術を不正に使用することもあるだろうと言われたので、それでわたしは驚いてしまって、そしてそれらの言葉は互いに調和しないと考えたものですから、あのようなことを言ったわけでした。——つまり、もしあなたが、このわたしと同じように、反駁を受けることは得になると考えられるのなら、話をつづけるのは甲斐のあることだけれども、もしそうでないとすれば、やめにするほうがよいでしょう、とね。ところで、その後で、わたしたちがよく調べてみた結果は、あなたが自分でもごらんになっているとおり、弁論家が弁論術を不正に使用したり、不正を行なう気になったりすることは、ありえないことだというふうに、わたしたちはあらためて意見の一致を見たわけです。さて、そうだとしますと、そういった事柄の真相がいったいどうであるかは、犬に誓って(1)いいますが、ゴルギアス、少々の対談ぐらいでは、とうてい充分に考察することはできないのです。

461

B

一六

ポロス　なんですって？　ソクラテス。あなたは弁論術について、いまあなたが言われているように、ほんと

うにそんなふうに考えておられるのですか？　それとも、あなたのつもりでは……ゴルギアスさんは、弁論の心得ある者が正しいことも、美しいことも、善いことも知らないのだと認めるのは、気まりが悪いと思われて、もしひとがそれらのことを知らないで自分のところへ来た場合には、自分のほうで教えてやるだろうということをもつけ加えてあなたに同意されたものだから、そこで、おそらくその同意がもとになって、話の中に何か矛盾したことが出てきたのでしょうが……それこそが、あなたがしてやったりと喜んでおられることなのだ。あなたが自分でそういった質問の出せるところへ、議論を運んでおいて……。けれども、弁論家は自分でも正しいことを知っているし、他の人たちにもそれを教えるだろうということを、誰がまったく否定するだろうと思いますかね。いや、そんなところへ話を持って行くなんて、ずいぶん失礼なやり方ですよ。

ソクラテス　ああ、これは見上げたものだよ、ポロス。いや、ほんとうに、君、われわれが仲間や息子たちを持っているのはむだではないわけだ。つまり、われわれ自身は年が寄っているから、躓いて倒れることがあるかも知れんが、そんなときには、君たち若い者が傍にいて、われわれの生活を言行いずれの面においても、立て直してくれるためなのだ。そこで、いまの場合にしても、ゴルギアスさんとぼくとが、これまでの議論のどこかで躓いているのだとすれば、君は傍にいるのだから、われわれを助け起こしてくれたまえ。それが君のなすべき当

1　この「犬に誓って」という言い方を、ソクラテスは後にも(466C, 482B)用いているし、また他の対話篇のなかでもしばしば用いている。そして犬のほかにも、鵞鳥やプラタナスの木や牡羊などが誓いの対象にされたのだが、この一見奇妙に聞こえる誓い言葉の用法は、古人の説明によると、神々の名を軽々しく口にしないようにするためであったと言われるが、同時にまた、文意をいっそう強調する効果をもっているとも言われている。

然の義務だからね。そして、ぼくのほうとしても、これまでに同意されてきたことのなかで、もし何かが君には適切に同意されていないように思われるのであれば、君の望むどんな点でも取り消して、言い直していいつもりでいるよ。ただし、君が一つのことだけを、守ってくれるならばだよ。

ポロス　一つのことって、何でしょうか。

ソクラテス　あの長談義を、ポロスよ、君がひかえてさえくれればだ。君は最初、その手を使おうとしていたのだけれども。

ポロス　なんですって？　それならぼくには、言いたいだけのことを言う自由が、ないということになるのですか。

E

ソクラテス　いや、それはたしかに、君、君としてはひどい目をみることになるだろうね、君はアテナイへやって来ていながら、そこはギリシアの中でも一番言論の自由があるところだのに、その土地において、君だけがひとりその恩恵にあずかれないとすればだよ。しかしまあ、君、立場をかえてみてごらん。君が長話ばかりしていて、質問には答える気持がないでいるときに、もしぼくのほうに、君の話を聞かないで、立去ってもよいという自由がないだろうとすれば、今度は逆に、ぼくのほうがひどい目をみることになるのではないかね？

462

しかし、それはそれとして、もし君が、これまでなされてきた議論のことをいくらかでも心配してくれて、そして、さっきも言ったように、この議論を立て直してくれるつもりがあるなら、君の思うように論点を置き換えた上で、ちょうどぼくとゴルギアスさんとでしていたように、今度は君とぼくとで交代に、問い手になったり答え手になったりしながら、反駁したり、また反駁されたりするようにしてくれたまえ。というのはむろん、ゴル

ギアスさんにおできになることは、君にもできると主張するわけだろうからね。どうだね、そうではないのか。

ポロス もちろん、そうです。

ソクラテス そうすると、君だってまた、ひとは何なりと好きなことを、自分に対して質問するようにと、いつの場合でもすすめているのではないかね、答えるすべは心得ているのだというわけでね。

ポロス たしかに、そのとおりです。

B

ソクラテス さあ、それなら、いまの場合も、質問するほうに廻るなり、あるいは、答えるほうになるなり、どちらなりと、君の好きなほうをしたまえ。

一七

ポロス よろしいです。それではどうか、あなたは答えるほうになってください、ソクラテス。——ゴルギアスさんは、弁論術のことで答えに窮しているとあなたに思われるからには、あなたは、それを何であると主張なさるのですか。

ソクラテス というと、そもそも君の質問は、ぼくがそれをどんな**技術**であると主張するか、ということなのかね。

ポロス そうです。

ソクラテス 技術なんかではないと、ぼくには少なくとも思われるのだがね、ポロス、君には本当のことを打ち明けるとすればだよ。

ポロス　しかしそれなら、弁論術は何であると、あなたには思われるのですか。

ソクラテス　うん、それは、君が書物の中で――ぼくはそれを最近読ませてもらったのだが――技術をつくる

C　と言っているところのものだよ。

ポロス　というと、それは何のことですか。

ソクラテス　一種の経験のことだ。

ポロス　そうすると、弁論術は経験であると、あなたには思われるのですか。

ソクラテス　そうなのだ、ただしそれで、君に異論がなければだよ。

ポロス　何についての経験でしょうか。

ソクラテス　ある種の喜びや、快楽をつくり出すことについての経験だね。

ポロス　それなら、弁論術は立派なものであると、あなたには思われませんかね、人びとを喜ばせることができるものだとすれば。

ソクラテス　え？　どうだって？　ポロス。それでは君は、ぼくがそれを何であると主張するかを、ぼくから

D　もう聞いてしまったのかね。だから君は、そのつぎのことを訊ねているというわけかね、つまり、それが立派なものであるとぼくには思われないか、と。

ポロス　だって、あなたがそれを一種の経験であると主張されるのを、ぼくはもう聞いてしまったのではないですか。

ソクラテス　それなら、どうだろう、君は喜ばせるということを重んずるようだから、少しばかりぼくを喜ば

せてくれるかね。

ポロス　ええ、いいでしょう。

ソクラテス　いま、ぼくにこう訊ねてみてくれ。料理法はどんな技術であるとぼくには思われるか、と。

ポロス　では、訊ねましょう。料理法はどんな技術ですか。

ソクラテス　技術なんかではないよ、ポロス。

ポロス　それなら、いったい、何ですか。言ってください。

ソクラテス　では言おう、一種の経験だよ。

ポロス　何についての(1)経験ですか、言ってください。

ソクラテス　では言おう、喜びや快楽をつくり出すことについての経験だよ、ポロス。(2)

E

ポロス　そうすると、料理法と弁論術とは、同じものなのですか？

1　バーネットの校本では τίς; であるが、その他ほとんどすべての校本では τίνος; となっている。後者を採る。

2　二つ前のソクラテスの言葉、「技術なんかではないよ、ポロス」から、この言葉までは、ドッヅの校本では(ヒルシッヒ、シャンツ、ザウペ、フリートレンダーも同じ)、ソクラテスとポロスの間の言葉の割りふりが次のように改められている。

ソクラテス　技術なんかではないよ、ポロス。——「では、何なのか？」と言いたまえ。

ポロス　ええ、そう言いましょう。

ソクラテス　一種の経験だよ。——「では、何についての経験か？」と言いたまえ。

ポロス　ええ、そう言いましょう。

ソクラテス　喜びや快楽をつくり出すことについての経験だよ、ポロス。

しかし、ここでは一応、中世写本どおりのバーネットの校本に従っておく。

ソクラテス　いや、決してそうではないが、しかし両方とも、同じ営みのなかの一部門ではある。

ポロス　その営みというのは、何のことですか。

ソクラテス　本当のことを言うのは、少し失礼なことになりはしまいかね。というのは、ゴルギアスさんのために、言うのが憚られるからだが。つまり、この人の仕事をぼくは茶化そうとしているのだと、そう思われるのではないかとね。しかしぼくとしては、ゴルギアスさんの扱っておられる弁論術が、ぼくの言おうとしているそれにあたるかどうかは、知らないのだよ。だって、さっきの話からも、この人がいったいそれを何と考えておられるかは、われわれには少しも明らかにならなかったのだから。しかし、ぼくが弁論術と呼んでいるものは、何ら立派なものの部類にははいらない、ある事柄の一部門なのだ。

463

ゴルギアス　というと、ソクラテス、その事柄というのは、何のことかね。言ってくれたまえ。わたしにはひとつも遠慮はいらないよ。

一八

ソクラテス　それなら、言わせてもらいますが、ゴルギアス、わたしにはこう思われるのです。それは、技術の名に値するような仕事ではないが、しかし、機を見るのに敏で、押しがつよくて、生まれつき人びととつき合うのが上手な精神の持主が、行なうところの仕事なのです。そして、その仕事の眼目となっているものを、わたしとしては、迎合(コラケイアー)と呼んでいるのです。この迎合の仕事には、ほかにもいろいろと多くの部門があるように思いますが、たとえば、料理法もその一つなのです。それは一般に技術であると思われていますが、

B

しかしわたしに言わせるなら、技術ではなくて、経験や熟練であるにすぎません。そして弁論術も、この種の仕事の一部門であるとわたしは呼んでいるのですが、さらにまた化粧法も、それからソフィストの術も、そうなのです。つまりそれらは、四つの対象に応じて、四つの部門をつくっているわけです。

さて、そういうわけですから、もしポロスがこのことについて訊ねたいと望むのなら、彼に訊ねさせることにしましょう。というのは、弁論術は、迎合という仕事のなかの、どのような部門であるとわたしが主張するかを、彼はまだ聞いてしまっているわけではないのですから。いや、その点については、わたしがまだ何も答えてはいないのだということに、彼は気がついていないのです。それだのに彼は、わたしがそれを立派なものだと考えているのではないかと、問い返しているのですからね。しかしわたしとしては、まず、弁論術とは何であるかを答えないうちは、それを立派なものと考えるか、それとも醜いものと考えるかを、彼に答えるようなことはしないつもりです。なぜなら、それは正しいやり方ではないからだよ、ポロス。しかし、もし君がぼくの考えを知りたいのなら、弁論術とは、迎合のなかの、どのような部門であるとぼくが主張するかを、訊ねてみたまえ。

C

ポロス　では、訊ねますから、どのような部門であるかを答えてください。

D

ソクラテス　はたして、ぼくが答えたなら、君はわかってくれるだろうかね？　弁論術とは、ぼくに言わせるなら、政治術の一部門の映像なのだが。

ポロス　で、それで、どうなんですか？　弁論術は立派なものだと言われるのですか、それとも、醜いものだと？

ソクラテス　もちろん、醜いものだよ。――というのは、劣悪なものは醜いと、ぼくは呼ぶからね。――むろ

んこれは、ぼくの言おうとすることが、君にはすでにわかっているものとして、答えなければならないとしたらの話だがね。

ゴルギアス　いや、ゼウスに誓って、ソクラテス、このわたし自身にさえ、君の言おうとしていることは、理解できないでいるのだよ。

E

ソクラテス　それは当然でしょう、ゴルギアス。まだ何一つはっきりしたことを、わたしは話していないのですから。ところが、このポロスときたら、〔その名前のごとくに〕(1)若くて性急でしてね。

ゴルギアス　しかしまあ、この人にはかまわずに、わたしに言ってくれたまえ。君が、弁論術は政治術の一部門の映像であると言うのは、どういう意味なのかね。

ソクラテス　いや、それならわたしのほうで、弁論術がわたしにはどんなものに見えるかを、話してみることにしましょう。で、もしそれが、わたしの言うとおりでない場合には、反駁は、ここにいるポロスにやらせてください。——あなたはもちろん、身体というもの、また魂というものを、お認めになるでしょうね。

464

ゴルギアス　もちろん、認める。

ソクラテス　ではまた、それらのどちらにも、何か良い状態というものがあると思いませんかね。

ゴルギアス　それは、あると思う。

ソクラテス　では、どうでしょう？　実際はそうでないのに、ただそう思われているだけの良い状態というものは？　たとえば、それはこういうことです。身体の調子は良さそうに思われているけれど、しかし実際には、それが良い状態にないことは、医者とか体育教師のある者とかを別にすれば、一般の人には容易に気づかれない

ような、そういう人たちがたくさんいるでしょう。

ゴルギアス　それは、君の言うとおりだ。

ソクラテス　つまり、わたしが言いたいのは、身体や魂が良い状態にあるように思わせはするけれども、実際

B　には、それによって少しも良い状態になっていないような、そういう働きをするものが、身体の場合にも、魂の場合にも、あるということなのです。

ゴルギアス　それは、あるね。

一九

ソクラテス　さあ、それでは、できることなら、もっとはっきりと、わたしの言おうとしていることを、あなたにわかってもらうようにしましょう。――対象はいま言われた二つなのだから、それに応じて二つの技術があるわけです。すなわち、一方、魂にかかわる技術のほうは、これを政治術と呼び[2]、他方、身体にかかわる技術の

1　「ポロス」という名前には、「仔馬、若駒」の意味がある。それにかけて「若くて性急」であると言われたわけである。

2　人間の魂・精神（プシューケー）を対象とする技術が、ここでは政治術（ポリティケー）の名前で総称されているが、後にカリクレスとの問答においてよりいっそう明らかにされるように、ソクラテス（プラトン）の考えでは、真の政治の技術とは、人間の精神（魂）ができるだけすぐれた善いものとなるように、つまり、人間が立派なすぐれた市民（ポリテース）となるように、配慮するところのものでなければならない。そこで、それを自己の使命として実践していたソクラテスは、まさにそういう意味で、自分だけがただ一人、当代の人たちのなかでは、真の意味での政治の仕事にたずさわっている人間だと公言することができたのである（521D参照）。

ほうには、そうすぐとは一つの名称をあたえることはできませんけれども、身体の世話をするという点では、それは一つのものであって、そのなかには二つの部門があると言っているのです。つまり、その一つは体育術であり、もう一つは医術です。これに対して、政治術のなかで、体育術に相当するものは立法術であり、また医術に相当するものは司法〔の術〕です。そして、それらどちらの組の技術も、それぞれ同じ対象を扱っているのだから、互いに共通する点があるのだが、つまり医術は体育術と、また司法〔の術〕は立法術と共通するところがあるのだが、しかしそれにもかかわらず、ある点では相互に異なっているのです。

C　かくて、これら四つの技術があって、そしていつも最善ということをめざしながら、前者の組は身体の、後者の組は魂の世話をしているのですが、そのことを迎合の術は感知すると——という意味は、はっきり認識してというのではなく、当て推量してということなのですが——自分自身を四つに分けた上で、いま言われた技術のそれぞれの部門の下にこっそりもぐり込み、そのもぐり込んだ先のものであるかのようなふりをしているのです。

D　そして、最善ということにはまるっきり考慮を払わずに、そのときどきの一番快いことを餌にして、無知な人びとを釣り、これをすっかり欺きながら、自分こそ一番値打ちのあるものだと思わせているのです。

さて、そんなしだいで、医術のもとには料理法がもぐり込んでいて、身体にとっての一番よい食べ物を知っているかのようなふりをしているから、そこで、もし料理人と医者とが、子供たちの前とか、あるいは大人でも、子供同様に思慮の足らない者たちの前で、食べ物のよい悪いについては、どちらがよく知っているか、それは医

E　者か、それとも料理人か、ということを競い合わなければならないとしたら、医者のほうは、餓え死にするよりほかはないことになるでしょう。

465 さて、こういったことこそ、わたしが迎合と呼んでいるものなのです。そして、そのようにするものは醜いと、ぼくは主張しているのだよ、ポロス。——というのは、これは君に対して言うことだからね(1)。——なぜなら、それは最善ということを無視して、快いことだけを狙っているからなのだ。また、そういう料理法のようなものは、技術であるとは認めずに、むしろ経験であると主張しているのだ(2)。なぜなら、それは、自分の提供するものが本来どんな性質のものであるかについて(3)、何の理論も持たず、したがって、それぞれの場合において、なぜそうするのかという理由を述べることができないからである。しかしぼくとしては、およそ理論を持たないものなら、そのようなものを技術とは呼ばないよ。だがもし、それらの点について君に異論があるなら、その説明はいくらでも引き受けるつもりでいる。

二〇

B さて、医術のもとには、いまも言ったように、料理法という迎合がしのび込んでいるのだが、他方、体育術のもとには、これと同じようにして、化粧法がしのび込んでいる。その化粧法は、ずるくて、ごまかしがうまく、また生まれの卑しい、自由人らしからぬものなのだが、姿形や皮膚の色、肌の滑らかさや衣装によってごまかす

1　これは、463Dのポロスの問いに対して答えたものである。

2　技術(テクネー)と、経験(エンペイリアー)ないしは熟練(トリベー)、あるいは迎合(コラケイアー)との差異は、後に501A～Bでもう一度詳しく語られることになる。

3　この箇所は、アスト、シュタルバウムの解釈に従って、ὃ προσφέρει の語句を削る。

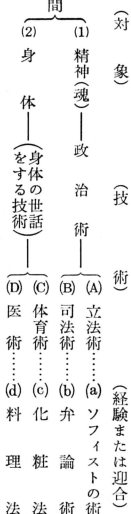
(465) から、人びとに借りものの美をわがもののように考えさせて、体育術によって得られる自己本来の美をないがしろにさせることになるのである。

さて、長談義にならないように、あとは幾何学者たちの流儀にならって、君に説明してみたいと思う。たぶん、C 君はもう、ついてこれるはずだからね。――つまり、化粧法の体育術に対する関係は、ソフィストの術の立法術に対する関係に等しく、また、料理法の医術に対する関係は、弁論術の司法(裁判)の術に対する関係に等しい、ということである。(1) しかしながら、さっきも言われたように、それらの間には、元来はそのような区別があるのだけれども、他面ではまた、それらは近い関係にもあるから、ソフィストと弁論家とについていえば、彼らは、同じ領域において同じ事柄を扱う者として、混同されているのである。そこで、彼ら自身としても、お互いに自分たちをどう扱ってよいかわからないでいるし、またその他、世間一般の人たちにしても、彼らをどう扱ってよいかわからないでいるのである。それにまた実際、かりにもし、魂が身体の監督をするのではなく、身体が自分 D で自分の監督をするのだとしたら、そして、料理法と医術とが魂の監視のもとに区別されるのではなく、身体が自分だけで自分の気にいるものを基準にして、判定を下すのだとしたら、大方はアナクサゴラスの言っている(2)ようなことになっただろうからね、ポロス君。というのは、君はそれらの学説には通じているはずだから、わかってくれるだろうが、医術にぞくすることも、健康のためになることも、また料理法にぞくすることも、区別のないものになってしまい、「すべてのものはいっしょくたに」同じところにごたまぜにおかれることになっただろうからね。

さて以上によって、ぼくが弁論術をどういうものであると主張するかを、君は聞いたわけだ。つまりそれは、

E 魂の領域において、ちょうど身体の領域における料理法に相当するものだ、ということである。ところでぼくは、君には長い話をすることを許さないでおいて、自分ではかなり話を長くしてしまっているというのは、これはどうもおかしなやり方だったかもしれない。でもぼくのほうは、大目に見てもらってよい理由があるのだ。というのは、ぼくが短く話していたときには、君はそれを理解することができなかったのだし、ぼくのあたえた答も、君はどうにも扱いかねて、詳しい説明を求めたからである。だから、もしぼくのほうでも、君は答えてくれてい466るのに、それをどう扱ってよいか、もてあましているようなら、君も話をひきのばすがいいよ。しかし、もてあまさなければ、ぼくのするままにさせておいてほしいのだ。それが正当なやり方だからね。そこで今の場合も、君がなんとかぼくのその答を扱えるものなら、扱ってみたまえ。

1　464B以下ここまでに述べられてきた、技術と経験（または迎合）のそれぞれ四つの種類と、それら相互の対応関係を、一覧表にして示せば、次のようになる。

（対象）		（技術）		（経験または迎合）
人間	(1) 精神（魂）	政治術	(A) 立法術	(a) ソフィストの術
			(B) 司法術	(b) 弁論術
	(2) 身体	（身体の世話をする技術）	(C) 体育術	(c) 化粧法
			(D) 医術	(d) 料理法

そして、これらの技術と迎合の術との間には、「幾何学者たちの流儀にならって」いえば、次のような比例式が成り立つと言われているのである。

(A) 立法術：(a) ソフィストの術＝(C) 体育術：(c) 化粧法
(B) 司法術：(b) 弁論術＝(D) 医術：(d) 料理法

2　アナクサゴラス（前五〇〇頃—四二八年頃）は、小アジアのクラゾメナイ出身の自然哲学者。約三〇年間（前四六〇頃—四三〇年頃？）アテナイに滞在し、ペリクレスの側近として活躍したが、晩年には、ペリクレスの政敵のために不敬罪に問われてアテナイを去り、故郷に近いランプサコスの地で没した。ここで言及されている、「すべてのものはいっしょくたにあった」(Fr.1(DK))という言葉は、彼の書物の開巻劈頭にあったと言われている。

二一

ポロス　それでは、あなたの主張というのは、どうなんですか。弁論術は迎合であるとあなたには思われるのですか。

ソクラテス　いや、ぼくとしてはたしか、迎合の一部門であると言ったはずだがね。しかし君は、その年でいて、もう覚えてはいないのかね、ポロス。そんなことでは、この先また何をしてくれることだろうねえ！

ポロス　それでは、すぐれた弁論家たちが、それぞれの国において、迎合家たちのように、下らない者と考えられている、とこうあなたには思われるのですか。

B

ソクラテス　それは、質問として聞いているのかね？　それとも、何か演説でも始めるところかね。

ポロス　もちろん、質問しているのです。

ソクラテス　そう、それなら、下らない者としてどころか、まるっきり考えにも入っていないように、ぼくには思われるね。

ポロス　え？　考えにも入っていないのですって？　どうしてそうなのですか？　彼らこそ、それぞれの国において、一番の実力者ではないですか。

ソクラテス　いや、そんなことはないよ、もしも、君の言う実力があるということが、その当の実力者にとっては、何かためになる善いことだという意味ならばだよ。

ポロス　それはもちろん、その意味です。

ソクラテス　それならば、弁論家たちは、その国の人たちの中では、一番非力な者であるようにぼくには思われるね。

ポロス　なんですって？　彼らは、ちょうど独裁者たちがするように、誰であろうと、死刑にしたいと思う人を死刑にするし、また、これと思う人の財産を没収したり、国家から追放したりするのではないですか。

C

ソクラテス　しかしね、ポロス、犬に誓っていうのだが、君の言うことの一つ一つについて、ぼくはとまどうのだよ。はたして君は、自分のほうからそんなことを言い出して、君自身の意見を述べているのか、それとも、ぼくに質問しているのか、どちらだろうか、とね。

ポロス　いや、ぼくとしてはむろん、あなたに質問しているのです。

ソクラテス　そう、それならそれでいいとも、君。そうすると、君は同時に二つのことを、ぼくに質問しているのだね。

ポロス　どうして、二つのことですか。

ソクラテス　君はさっき、何かこんなふうに言ったのではないかね？　――「そもそも弁論家たちは、ちょうど独裁者たちがするように、誰であろうと、死刑にしたいと思う人を死刑にするし、また、これと思う人の財産を没収したり、国家から追い出したりするのではないか」と。

D

ポロス　たしかに、そう言いました。

二三

ソクラテス　それなら、君に言うが、その質問は二つのことをふくんでいるのだ。そこで、その両方に対して君に答えることにしよう。つまりぼくとしては、ポロス、さっきも言っていたように、弁論家たちも、また独裁者たちも、それぞれの国においては、一番微力な者であると主張するのだ。なぜなら彼らは、自分たちがほんとうに望んでいることを、いわば何一つしていないからだ。もっとも、自分たちに一番よいと思われることは、何でもしているのだろうけれどもね。

E

ポロス　その何でもしているということが、大きな実力があるということではないですか。

ソクラテス　いや、そうではない、少なくともポロスの主張によればね。

ポロス　え？　ぼくがそうではないと主張しているのですって？　とんでもありませんよ、ぼくはたしかにそうだと主張しているのです。

ソクラテス　いや、それは……まあ、何に誓ってもいいけれど、とにかく君は、そうは主張していないのだ。大きな実力があるというのは、その実力者当人にとっては、善いことであると君は主張していたのだから。

ポロス　ええ、それはそのとおりですからね。

ソクラテス　では、もしひとが、分別を欠きながら、自分に一番よいと思われることは何でもしている場合、それを善いことだと君は思うのかね。それをしも君は、大きな実力があることだと言うのかね。

ポロス　いいえ、それは、そうは言いません。

467

ソクラテス　それなら、君はぼくを反駁して、弁論家たちは分別をそなえた人であること、また、弁論術は迎合ではなくて、技術であることを証明すべきではないかね。さもなくて、もしぼくを反駁されぬままに残しておくかぎり、それぞれの国において、何でも自分の思い通りにする弁論家たちや、また独裁者たちは、そうすることによって、何一つ善いことを得ているのではない、ということになるだろう。しかし、実力があるというのは、君の主張によれば、善いことなのだ。けれども、分別を欠きながら、思い通りのことをするのは、君も認めているように、ためにならぬ悪いことなのである。それとも、そうではないのかね。

ポロス　それは、そうです。

ソクラテス　それではどうして、弁論家たちは、あるいは独裁者たちは、それぞれの国において、大きな実力者でありうるだろうか。もしこのソクラテスが、ポロスによって反駁されて、彼らは望んでいることをしているのだということを、認めるのでないかぎりはだよ。

B

ポロス　この人ったら……

ソクラテス　そう、認めてはいないのだよ、彼らが望んでいることをしているのだとはね。さあ、ぼくを反駁してみたまえ。

ポロス　あなたはさっき、彼らは自分たちに一番よいと思われることをしているのだということに、同意されたのではありませんか。

ソクラテス　うん、それは今でも同意する。

ポロス　それなら、望んでいることをしているのではないですか。

ソクラテス　いや、それは認めない。

ポロス　自分たちの思う通りのことはしているのに、ですか？

ソクラテス　うん、それは認める。

ポロス　ほんとうに、あきれたことをおっしゃるのですね、そしてまた度外れなことを、ソクラテス。

ソクラテス　いや、悪口はよしてもらいたいね、おお、好漢ポォロス君よ。(1)——君の言葉づかいをまねて、君

c　に呼びかけようとすれば、こうでも言えばよいのかね。しかしまあ、それはそれとして、もし君がぼくに質問をつづけることができるなら、ぼくの言っていることは間違いだということを証明してみたまえ。だが、それができないようなら、今度は、君は答えるほうになってくれないか。

ポロス　ええ、いいですとも、答えるほうに廻りましょう。あなたがいったい何を言われるか、それが知りたくもありますからね。

二三

ソクラテス　では聞くが、君にはどちらだと思われるかね。人びとが望んでいるのは、何であれ、彼らがそのときどきにしていることだろうか。それとも、そのためにそれをしているところの、その目的となっているもののほうだろうか。たとえば、医者から薬をもらってのむ人たちは、彼らが現にしていること、つまり薬をのんで苦い思いをすることを、望んでいるのだろうか。それとも、薬をのむ目的となっていること、つまり健康になることのほうを、望んでいるのだろうか、君にはどちらだと思われるかね。

ポロス　それはむろん、健康になることのほうです。

D

ソクラテス　ではまた、海を渡って貿易する人たちや、その他の金儲けの仕事にたずさわる人たちも、彼らがそのときどきにしていること、それが彼らの望んでいることではなく——なぜなら誰が、航海に出て、危険を冒したり、苦労したりすることを望むものがあろうか——そうではなくて、彼らが望んでいるのは、航海の目的となっていること、つまり富を得ることだと思う。なぜなら、富のためにこそ、彼らは航海するのだから。

ポロス　たしかに。

ソクラテス　それなら、すべてどんな場合についてでも、それと同じことが言えるのではないか。つまりひとが、何かのために何かをしている場合、現にしている当のそのことが、彼の望んでいることではなく、していることの目的となっているもののほうを、彼は望んでいるのではないかね。

ポロス　そうです。

E

ソクラテス　さて、およそ世に存在するものの中で、善いものか、悪いものか、もしくは両者の中間の、善くも悪くもないものか、このうちのどれかでないようなものが、はたして何かあるだろうか。

1　「おお、好漢ポォロス君よ」と訳した原文は、「オー・ロォーステ・ポォーレ」であって、「オー」音がくり返されているし、またそのつぎの「君の言葉づかいをまねて、君に呼びかけようとすれば」と訳した原文は、「ヒナ・プロスエイポー・セ・カタ・セ」であって、「セ」の語が反復されていて、ポロスの文体（448C注2参照）のもじりになっている。ポロスのいやみのある言い方に対して、ソクラテスはこんなふうにしてしっぺい返しをしているわけである。

ポロス　それはどうしたって、そのうちのどれかでなければなりませんよ、ソクラテス。

ソクラテス　では、善いものと君が言うのは、知恵や、健康や、富や、その他そういったもののことであり、また悪いものとは、それらと反対のもののことではないか。

ポロス　そうです。

ソクラテス　また、善くも悪くもないものとしては、どうだね、つぎのようなものをあげるのかね。つまり、時には善い性質のものになるが、時には悪い性質のものになり、また時にはそのどちらの性質にもならないもの、たとえば、坐るとか、歩くとか、走るとか、航海するとかいうようなこと、さらにはまた、石とか、木材とか、その他そういったようなもの――そういうもののことを言うのではないかね。それとも君が、善くも悪くもないものと呼ぶのは、それらとはちがった何か別のもののことだろうか。

468

ポロス　いいえ、それらのもののことです。

ソクラテス　では、つぎの点はどちらだろうか。人びとが何かをする場合、善いことのために、そういった中間的なことをするのだろうか。それとも、中間的なことのために、善いことをするのだろうか。

ポロス　それはむろん、善いことのために、中間的なことをするのです。

ソクラテス　してみると、われわれが歩く場合にも、善を求めて歩くのであって、つまり、歩くほうがよいと思うから歩くのであり、反対にまた、立ちどまる場合にも、同じ目的のため、つまり善のために立ちどまるのだ。そうではないかね。

B

ポロス　そうです。

ソクラテス　では、かりにわれわれが、誰かを死刑にするとすれば、その死刑にするのも、また追放にしたり、財産を没収したりするのも、そうするほうが、しないよりも、われわれにとっては善いことだと思うから、そうするのではないか。

ポロス　まったくです。

ソクラテス　したがって、すべてそういったことをする人たちは、善のためにそうするのだ、ということになる。

ポロス　そうです。

二四

ソクラテス　ところで、こういう点については、ぼくたちの意見は一致していたのではないかね。つまり、われわれが何かのためにしていること、そのことをわれわれは望んでいるのではなく、われわれがそうしているのはまさにそのためであるところの、その目的となっているもののほうを望んでいるのだということは。

C

ポロス　たしかに。

ソクラテス　したがって、われわれは、ひとを斬り殺したり、国家から追放したり、財産を没収したりすること、ただそれだけを単純に望んでいるのではなく、もしそれがわれわれの益になるのなら、そうすることを望むが、害になるのなら、望まない、ということになるのだ。なぜなら、君も認めているように、善いことをわれわれは望んでいるのであって、善くも悪くもないことは望まないし、まして悪いことを望むということもないから

だ。どうだね、そうではないのか。ぼくの言うことは正しいと思うかね、ポロス。それとも、間違っているかね。……どうして答えてくれないのかね。

ポロス　正しいです。

D

ソクラテス　では、そういった点については、ぼくたちの意見は一致しているものとして、それでもし誰かが——それは独裁者でも、または弁論家でも、どちらでもよいが——ある人を死刑にするとか、国家から追放するとか、財産を没収するとかするなら、それはそうするほうが自分のために善いと思ってするわけだが、しかしほんとうは、より悪いことである場合でも、むろんその男は、自分の思う通りのことはしていることになるだろう。そうではないかね。

ポロス　そうです。

ソクラテス　それではたして、望んでいることをしていることにもなるのだろうか、もしもそれが、ほんとうは悪いことだとしたならだよ。……どうして答えてくれないのかね。

ポロス　いや、その場合は、望んでいることをしているのだとは思えません。

E

ソクラテス　それなら、そのような人間が、彼の住んでいる国において、大きな実力をもつということはあり得るだろうか、いやしくも、大きな実力をもつということが、君の同意に従って、何か善いことだとすればだよ。

ポロス　いいえ、あり得ません。

ソクラテス　してみると、ぼくの言っていたことは正しかった、ということになるのだね。ひとは一国のうちにおいて、自分の思う通りのことをしていても、それでもって大きな実力者であるということにはならないし、

また、自分の望んでいることをしているということにもならない、と言っていたのはだよ。

ポロス まるでもうあなたといったら、ソクラテス、あなたには、この国において、あなたの思う通りにする自由があるよりも、むしろ、それのないほうがいいとでもいったような口ぶりですねえ！ それにまたあなたは、誰かが自分の思うとおりの人を死刑にしたり、財産を没収したり、牢獄につないだりするのを見ても、少しも羨ましくはないかのようですねえ。

ソクラテス 君の言うのは、正義に従ってそうしている人の場合かね？ それとも、不正な仕方でそうしている場合かね。

ポロス それはどちらにしたって、両方の場合とも羨ましいのではないですか。

ソクラテス 口を慎しむがいいよ、ポロス。

ポロス いったい、どうしてでしょう？

ソクラテス どうしてって、羨むに値しない連中を羨むことはないし、惨めな人たちを羨むこともないからだよ。いなむしろ、そういう連中は、哀れんで然るべきだからね。

ポロス なんですって？ ぼくの言っている人たちがそのような状態にあるのだと、あなたには思われるのですか。

ソクラテス それ以外にないではないかね。

ポロス それなら、自分の思う通りの人を死刑にし、しかも、その死刑にするのが正義にかなっている場合で

も、そうする人は惨めであり、また哀れであると思われるのですか。

ソクラテス　いや、その場合は、そうは思わないよ。しかし決して、羨ましいとも思わないね。

ポロス　でも、あなたはさっき、惨めであると言われたのではないですか。

B

ソクラテス　うん、それは、君、不正な仕方で人を死刑にする者がそうなのだよ。その上また、そういう人は哀れでもあると言うのだ。けれども、正当な理由にもとづいて人を死刑にする者だって、羨むには足りないのだ。

ポロス　ほんとうは、不正な仕方で死刑になる者のほうが、哀れであり、また惨めなのでしょうがねえ。

ソクラテス　いや、不正な仕方で死刑にする者よりも、まだましだとも、ポロス。また、正当な理由があって死刑になる者よりも、惨めさは少ないのだ。

ポロス　どうしていったい、そういうことになるのですか、ソクラテス。

ソクラテス　どうしてって、人に不正を行なうのは、害悪の中でもまさに最大の害悪だからだ。

ポロス　え？　それが最大の害悪なんですか？　自分が不正を受けるほうが、もっと大きな害悪ではないですか。

ソクラテス　いや、とんでもない。

ポロス　するとあなたは、人に不正を行なうよりも、むしろ、自分が不正を受けるほうを望まれるのですね？

C

ソクラテス　ぼくとしては、そのどちらも望まないだろうね。だがもし、人に不正を行なうか、それとも、自分が不正を受けるか、そのどちらかがやむをえないとすれば、不正を行なうよりも、むしろ不正を受けるほうを選びたいね。

ポロス　そうするとあなたは、独裁者の地位には、つきたくないのですね。
ソクラテス　うん、つきたくはないね、もしも君が、その独裁者の地位にあるということで、ぼくと同じ意味のことを言おうとしているならだよ。
ポロス　いえ、ぼくが言おうとしているのは、さっきと同じことですよ。つまり一国のなかで、自分の思う通りのことを何でも行なえる自由があるということです。死刑にするなり、追放にするなり、またその他、どんなことでも自分の考えどおりに行なってですね。

二五

ソクラテス　仕合せな人だよ、君は。それでは、今度はぼくのほうで話すから、君は言葉でもって、ぼくを攻D撃してくれ。いまかりにぼくが、人の出盛っているアゴラ(広場)で、短刀を小脇にしのばせながら、君に向かってこう話しかけるとしてみよう。――「ポロスよ、ぼくにはたったいま、独裁者がもつような驚くべき力が具ったばかりなのだよ。その証拠に、君の目の前にいるこの人たちの中で、誰かは今すぐにでも死んでしまうべきだとぼくに思われるなら、そう思われた者は誰であろうと、立ちどころに殺されてしまっているだろうからね。また、この人たちの中の誰かは、頭を砕かれるべきだと思われるなら、直ちに砕かれてしまっているだろうし、着物をひき裂かれるべきだと思われるなら、ひき裂かれてしまっているだろうからね。――そのようにぼくは、こEの国では大きな実力をもつ者になっているのだ」とね。
さて、君がぼくの言うことを信じない場合には、隠し持った短刀を出して君に見せるとするのだ。そうすれば、

君はそれを見て、きっとこう言うだろう。──「おお、ソクラテス、そんなふうにすれば、誰だって、大きな実力をもつ者になれるだろう。だって、そのやり方でもって君は、これと思うどんな家でも、火をつけて焼くことができるし、またアテナイの船渠でも、そこに入っている三段櫓の軍船でも、それから公私すべての商船でも、焼くことができるのだから」とね。

しかし、そんなふうに何でも自分の思い通りにすることが、大きな実力があるということではないようだね。それとも君には、そうだと思われるのかね。

ポロス　いえ、少なくとも、いまのような意味でなら、そうではないです。

ソクラテス　それならなぜ、そのような力はいけないというのか、その理由を、君は言うことができるかね。

ポロス　ええ、できます。

ソクラテス　では、いったい、なぜかね？　言ってみたまえ。

ポロス　なぜって、そんな行動をする者は、必ず罰をうけるにきまっているからです。

ソクラテス　ところで、その罰をうけるということは、悪いことではないのか。

ポロス　まったくです。

ソクラテス　そうすると、なんと君！　もう一度また君には、こう見えることになったのだよ。つまり、自分の思い通りにするということは、もしそれがそうする人にとって、ためになるという結果を伴うのであれば、善いことであるし、そしてそのようにするのが、どうやら、大きな実力があるということなのだ。しかし、そうでない場合には、思い通りにするということは、悪いことであり、したがって、微力であるということになるのだ。

B　だがここで、つぎの点も調べてみることにしよう。さきほどから言われている、人びとを死刑にするとか、追放にするとか、また財産を没収するとか、そういうことをするのは、時にはそのほうがよい場合もあるけれども、時にはそうでない場合もあるということ、その点では、ぼくたちの意見は一致しているのではないかね。

ポロス　ええ、一致しています。

ソクラテス　では、その点はどうやら、君からもぼくからも認められているのだね。

ポロス　そうです。

ソクラテス　それなら、どういう場合に、そういうことをするほうがよいと、君は主張するのかね。君はどこにその境界線を引くのか、言ってくれたまえ。

ポロス　いや、あなたのほうで、ソクラテス、それに答えてください。

C　**ソクラテス**　よし、それなら、ぼくから聞くほうが望ましいのであれば、ぼくのほうで言うことにしよう、ポロス。すなわち、ひとがそれらのことを正義に従ってなす場合は、よいのであり、反対に、不正な仕方でなすときは、害になるのだ。

二六

ポロス　あなたを反駁するのは、なんと難しいことでしょうねえ！　ソクラテス。いや、あなたの言われることが本当でないということぐらい、子供だって反駁できるのではないですか？

ソクラテス　うん、それなら、その子供に、ぼくは大いに感謝するだろう。しかし君にだって、同じくらい感

謝するのだがね、もし君がぼくを反駁して、馬鹿げた考えから解放してくれるならだよ。とにかく、さあ、親しい人に親切にする労をおしまないで、反駁してくれたまえ。

D

ポロス　ええ、いいですとも、ソクラテス。あなたを反駁するのには、何も昔の事柄を持ち出す必要は少しもないのです。あなたをすっかり反駁して、世間には、不正を行なっていながら、幸福な人間がたくさんいるということを証明するのには、あのきのう、おとといの出来事で充分なんですから。

ソクラテス　というと、その出来事というのは、どのようなことかね？

ポロス　むろんあなたは、ペルディッカスの子の、ほら、あのアルケラオス(1)が、マケドニアを支配しているのを、見ておられるでしょう？

ソクラテス　さあね、見てはいないにしても、とにかく、話には聞いているよ。

ポロス　それなら、あなたにはどう思われますか、あの人は幸福でしょうか、それとも不幸でしょうか。

ソクラテス　それはわからないよ、ポロス。だって、あの人とはまだつき合ったことがないのだから。

E

ポロス　なんですって？　つき合ってみれば、わかるけれども、それ以外の仕方では、あの人が幸福であることは、即座にはわからないのですか。

ソクラテス　わからないね、ゼウスに誓ってもいい。

ポロス　それではもちろん、〔ペルシアの〕大王(2)が幸福であることもわからないと言われるのでしょうね、ソクラテス。

ソクラテス　そうなのだ。それでしかも、ぼくの言うことに間違いはないはずだよ。というのは、教養と正義

の徳の点で、彼がどのような状態にあるかを、ぼくは知らないのだから。

ポロス　え？　なんですって？　幸福の全体は、そのことにかかっているのですか？

ソクラテス　そう、ぼくに言わせるなら、そういうことになるね、ポロス。なぜかといえば、男でも女でも、立派な善き人が幸福であるし、反対に、不正で邪悪な者は不幸である、というのがぼくの主張だから。

ポロス　そうすると、いまのアルケラオスは、あなたの説によると、不幸だというわけですか？

471

ソクラテス　うん、それは君、もしも彼が不正な人間ならばだよ。

ポロス　いや、それはもちろん、不正な人間ですとも、どうしてそうでないことがあるものですか。少なくともあの男には、彼が現在占めている王の位につく資格は、ぜんぜんなかったのです。彼は、父ペルディッカスの兄である、アルケタスの奴隷だった女から生まれた身分の者であり、本来ならば当然、アルケタスの奴隷となってしかるべきものだったのです。だから、もし彼に正しいことを行なう意志があったとすれば、アルケタスに奴隷として仕え、そしてそれで、あなたの説に従えば、幸福になっていたのでしょうがねえ。ところが実際には、最大の不正を犯してしまったものだから、驚くばかりに不幸な者となっている、というわけなのです。

1　アルケラオスは父ペルディッカス二世の死後、マケドニアの王(在位前四一三―三九九年)となる。彼は軍隊を整備し、道路や要塞を築造してマケドニアの強大化をはかるとともに、ギリシア文化の愛好者で、エウリピデス、アガトン、ゼウクシスなど数多くのギリシアの詩人、芸術家をペラの宮廷に招いて、マケドニア文化の向上につとめた。ソクラテスも招待されたが応じなかったということが伝えられている(アリストテレス『弁論術』第二巻(1398a24)、Diog. L. II. 25 参照)。

2　「大王」といえば、ペルシア大王をさすのが慣例であった。ペルシア大王は、当時一般のギリシア人にとっては、この世の幸福の権化であると信じられていた。

(471)
B　とにかく彼ときたら、まず第一に、自分の主人であり、また伯父でもあるところの、当のその人〔アルケタス〕を、ペルディッカスがその人から奪い取った王位を返してやるからという口実で呼びにやって、その人とその息子のアレクサンドロス——つまり自分の従兄弟で、年もほぼ同じぐらいだったのですが——その二人を客として迎え、したたか酔わせてから、馬車の中へ放りこみ、夜中に連れ出して、咽喉笛をかき切り、両方ともを亡きものにしてしまったのです。しかも、そういう不正なことをしたのだから、この上もない不幸な者となってしまっているのに、自分ではそれと気がつかないで、またそのことを後悔もしないで、それどころか、その後しばらく

C　たつと、今度は、自分の弟——つまりペルディッカスの正嫡の子で、当時まだ七歳ぐらいの子供だったのですが、そして本来ならば当然、王の位はその子のものになるはずだったのですけど——その子を育てあげて、その上で王の位をその子に返してやるという、正義にかなった行為をすることで、幸福になろうとは望まないで、かえって、井戸の中へ突き落して、溺死させておきながら、その子の母のクレオパトラに向かっては、鵞鳥を追いかけているうちに、はまり込んで死んでしまったのだと言ったのです(1)。

さて、そんなしだいで、今やあの男は、マケドニアに住む人たちの中では、最大の不正を行なってしまっているのだから、マケドニア人全体の中でも一番不幸な者であって、世に言われるように、一番幸福な者では決して

D　ないわけです。そこできっと、あなた方アテナイ人の中にも、あなたを始めとして、アルケラオスのような人になるぐらいなら、むしろどんな人間でもいいから、ほかのマケドニア人になるほうをよしとする者が、いることでしょうねえ！

二七

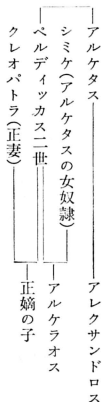
ソクラテス　この話の初めにも、ポロス、ぼくは君を、弁論術に関しては、なかなか立派な教育を受けているように思われると褒めたが、しかし一問一答で話をすることのほうは、なおざりにしてしまったようだと言ったはずだね[2]。それで、今もこれが、子供でもそれを用いるなら、ぼくをすっかり反駁することができるだろうという、議論なのだね、そうではないのかね。そしてその議論でもって、ぼくは今君のために、君の思うところでは、すっかり反駁されてしまっている、というわけなのだね。それはつまりぼくが、不正を行なっている者は幸福ではないと主張するからなのだが。しかし、君、それはいったい、どんな根拠にもとづいているのかね。いな、それどころか、君の主張していることの何一つをも、ぼくは君に同意してはいないのだよ。

E　**ポロス**　いや、それは、あなたに同意しようという気持がないからですよ。ぼくの言うとおりだとは思っておられてもですね。

ソクラテス　おめでたい人だよ、君は。弁論術のやり方でもって、君はぼくを反駁しようとかかっているのだ

1　ここで念のために、アルケラオス一族の関係を系図で示すと、つぎのようになる。

- アルケタス ― アレクサンドロス
- シミケ(アルケタスの女奴隷) ― アルケラオス
- ペルディッカス二世
- クレオパトラ(正妻) ― 正嫡の子

2　448D参照。

が、それはちょうど、法廷において相手を反駁しているつもりの人たちがするのと、同じだからね。というのは、あそこでも、一方の側の人たちが、自分たちの申立てる陳述について、数多くの、しかも名の通った人びとを証人として持ち出しているのに、相手側のほうは、だれかくだらない証人を一人しか、あるいはその一人さえも持ち出せないでいるような場合には、前者は後者を反駁しているように思えるからなのだ。しかし、この種の反駁は、真理に対しては、何の値打ちもないのだよ。なぜなら、ひとは時によると、数多くの、しかもひとかどの人物と思われている人たちによって、偽りの証言をされて敗れることもありうるからだ。

472

そこで今の場合も、もし君が、ぼくの言うことは間違いであると、ぼくに反対して証言する人たちを持ち出そうと思うなら、アテナイの人たちも、よその国の人たちも、ほとんどすべての者が、君の話している事柄については、一致して賛成してくれるだろう。たとえば、君が望むなら、ニケラトスの子のニキアス(1)が、そして彼とともに彼の兄弟たちが、君のために証人となってくれるだろう。彼らの声望のほどは、ディオニュソスの神域に列をなして立っているあの鼎が、彼らの奉納したものであることからも知られるはずだ。また、望むなら、スケリ

B

アスの子のアリストクラテス(2)も、証人に立ってくれるだろう。ピュティオス・アポロンの社(3)にある、あの見事な献納品は、これまた彼の寄進したものなのだ。さらにまた、望むなら、ペリクレスの一族全体(4)が、あるいは、この土地において君が選びたいと思う、ほかのどの一族でも、君のために証人となってくれるにちがいないのだ。

しかしながら、ぼくとしては、たとえぼく一人になっても、君に同意しないつもりだ。というのは、君は論証の力でぼくが同意せざるをえないようにしているのではなく、ぼくに対して偽りの証言をする人たちを数多く持ち出すことによって、ぼくの財産である真理から、ぼくを追い出そうとかかっているからなのだ。しかしまた、

ぼくのほうとしても、君自身を、たとえ君一人ではあっても、ぼくの言うことに同意してくれる証人としてしまうのでなければ、ぼくたちの話し合っている事柄については、何一つ語るに足るほどのことも、ぼくはなしとげてはいないのだと思っている。しかしそれはまた、君の場合でも同じであって、もし君が、あの今あげたような

C 他の証人たちをすべてお払い箱にして、ただの一人ではあっても、このぼくを君のための証人とするのでなければ、君によってもまた、何事もなしとげられてはいないと思うのだ。

1　ニキアス（前四七〇頃—四一三年）は、ペロポンネソス戦争期（前四三一—四〇四年）に活躍したアテナイの政治家。彼は穏健な保守（寡頭）派に属し、また和平論者の代表的存在として、一時（前四二一年）、スパルタとの間に平和条約を結ぶことに成功した（それは彼の名をとって「ニキアスの和約」と呼ばれている）。しかしその後、アルキビアデスなどによる主戦論者が勝ちを占め、シケリア遠征が企てられたとき（前四一五年）、彼はそれに極力反対したけれども、国民から推されて遠征司令官の一人となり、シケリアの地に渡ったが、結局、戦いに敗れて捕えられ、処刑された。

2　アリストクラテスの詳しい生涯は不明であるが、「ニキアスの和約」の締結者の、アテナイ側代表の一人だったと言われている。彼は、前四一一年に民主制の変革によってつくられた「四〇〇人政府」の一員となったが、後にテラメネスなどと組んでこれを倒す計画に参加した。そして前四〇六年のアルギヌゥサイ島沖海戦のときには指揮官の一人であったが、後にそのときの不手際を問われて、死刑を宣告された。ここでは、アリストパネスの『鳥』（一二五行）に言われているように、急進的な寡頭派の代表的人物としてあげられているのだろう。

3　この社は、アテナイ市の東南の方向、有名な「オリュンペイオン」（ゼウスの社）と隣り合せにあったと伝えられている。

4　ペリクレスその人の名があげられていないのは、この対話が行なわれたと想定されている年代には、彼はすでに故人となっていたからである（それに反して、ニキアスやアリストクラテスはまだ生存中の人間として扱われている）。しかしペリクレスは、その一族とともに、アテナイの民主派の代表的存在だったので、ここでポロスの意見に賛成して、彼のために証人となってくれる人たちとしては、アテナイの政界の各派を代表する人物が全部網羅されているわけである。

かくて、君や、その他世の多くの人たちが考えているような、そういう反駁の方法もあるにはちがいないが、しかしそれとは別に、ぼくはぼくで考えているような、反駁の方法もあるわけだ。だから、それら二つの方法を相互に比べてみて、両者の間にはどこか互いに異なる点が出て来るかどうかを、調べてみることにしよう。それにまた事実、ぼくたちが意見を異にしている問題たるや、決して些細なものではなくて、むしろ、それについて知っているのは大へん立派なことであるが、知らないのではまったく不面目なことになる、といってもよいほどのものなのだからね。というのもその問題とは、要するところ、誰が幸福であり、誰が幸福でないかを、知って

D

いるか、それとも知らないでいるか、ということに帰着するのだから。早い話が、まず第一に、いま話題になっていることでいえば、もし君が、アルケラオスは不正な人間だけれども、幸福であると考えているなら、ひとは不正を行ない、そして不正な人間となっていても、仕合せであることができると、君は考えているわけだ。どうだね、君はそう信じているものと、ぼくたちは受けとっておいていいのではないかね。

ポロス　ええ、それでいいです。

二八

ソクラテス　それに対して、ぼくのほうは、そういうことは不可能であると主張しているのだ。この点が、ぼくたちの意見が食い違っている一つなのだ。まあ、それはそれでおこう。しかしそれなら、ひとは不正を行なっていても、裁きを受け、罰に処せられるなら、それで幸福になるのだろうか。

ポロス　とんでもありません。そんなことにでもなれば、一番不幸になるでしょうからね。

E

ソクラテス　しかし、そうすると、不正を行なっている者が、裁きを受けなければ、君の説だと、幸福になるのだね？

ポロス　そうです。

ソクラテス　だが、ぼくの考えでは、ポロスよ、不正を行なっている者や、不正な人間は、どっちみち不幸だけれども、しかし、不正を行なっていながら、裁きも受けず、罰にも処せられないなら、そのほうがもっと不幸であり、それに比べると、神々や人間たちによる裁きを受けて、罪の償いをするなら、その者の不幸はまだしも少ないのだ。

473

ポロス　ほんとうに奇妙なことを、言おうとされるのですね、ソクラテス。

ソクラテス　しかし、君にだって、ぼくと同じことを言うようにさせるつもりだよ。君を友人と考えればこそ、同じことが言ってもらいたいのだから。——ところで、今のところは、以上あげたような点で、ぼくたちの意見は食い違っているのだ。それではまあ、君もひとつ考えてみてくれ。ぼくはさきほどの話の中で、人に不正を行なうほうが、自分が不正を受けるよりも、もっと悪い（害になる）ことだと言ったように思うが。

ポロス　ええ、たしかに。

ソクラテス　ところが君は、自分が不正を受けるほうが、もっと悪いことだと言ったのだ。

ポロス　そうです。

ソクラテス　また、不正を行なっている人たちは、不幸であると言ったのは、ぼくのほうであり、そしてそのために、君によってすっかり反駁されたわけだ。

ポロス　ゼウスに誓って、そのとおりでした。

B

ソクラテス　それは、君の思うところでは、だがね、ポロス。

ポロス　ええ、しかも、ぼくの思っていることに間違いはないのですから。

ソクラテス　かもしれないね。ところで、君はまた別に、不正を行なっている人たちが幸福であるのは、彼らが裁きを受けない場合であると、こう言ったのだ。

ポロス　たしかに、そう言いました。

ソクラテス　だが、ぼくのほうは、彼らこそ一番不幸であり、それに比べると、裁きを受ける人たちの不幸は、まだ少ないと主張しているのだ。どうだね、この点も反駁してくれるかね。

ポロス　いや、それを反駁するのは、前のあれよりも、もっと難しいでしょうねえ！　ソクラテス。

ソクラテス　いや、難しいどころではないよ、ポロス、むしろ不可能なのだ。なぜなら、真理はいかなるときにも決して反駁されないのだから。

ポロス　と言われるのは、どういうつもりですか？〔それなら、こう言えば、どうでしょう。〕いまかりに一

C

人の男が、不正を犯しながら、独裁者になろうと陰謀を企てていて、逮捕されたとしてみましょう。そして逮捕されてからは、拷問にかけられたり、局部を切りとられたり、両眼を焼かれてえぐり出されたり、そのほかにも数々のありとあらゆるひどい暴行を、自分自身が受けるだけでなく、自分の妻子たちが受けるのも見た上で、最後には、はりつけにされたり、火炙りの刑にされたとしてごらんなさい。それでも、そういう状態にあるほうが、かりにその男が逮捕を免れて、独裁者の地位につき、その国の支配者として、何でも自分の望み通りにしながら、

その国の市民たちのみならず、よその国の人たちにも羨望される者となり、幸福者だとされて、一生を送り通す場合よりも、もっと幸福なのでしょうかねえ？　どうです、これでもまだあなたは、さっきのことを反駁するのは、不可能だと言われるのですか。

二九

ソクラテス　今度は、お化けでおどそうというのだね、ポロス、まったくいい気なものだよ。しかも、反駁はしないでおいて。さっきは、証人を出すというやり方をしたばかりだのに。しかしまあ、それはそれとして、君の言葉を少しばかり思い出させてもらおうか。——「不正なしかたで、独裁者になろうと陰謀を企てていて……」と、こう君は言っていたね？

ポロス　ええ、言いました。

ソクラテス　それなら、そのどちらも、つまり、不正なしかたで独裁者の地位をかちえた者も、また逮捕されて裁きを受けている者も、その一方が、他方よりも、より幸福であるということは決してないだろう。なぜなら、二人とも不幸なのだから、その不幸な二人のなかには、より幸福な者はありえないだろうからだ。しかし、より不幸な者ということになれば、それは逮捕を免れて、独裁者となっている者のほうだろう。……君のその態度は、何かね？　ポロス。君は笑っているのか？　それがまたもう一つの、反駁の方法だというわけかね、ひとが何かを言い出せば、反駁はしないで、あざ笑うというのがだよ。

ポロス　あなたはもう、すっかり反駁されてしまっているのだとは思いませんかね、ソクラテス。この世のだ

れ一人認めないような、そのようなことを言われるに至ってはですよ。まあその証拠に、ここにいる人たちの誰にでも、聞いてごらんなさいよ。

ソクラテス　ポロスよ、ぼくはあいにくと、政治家の部類にははいらないのでね。現に昨年も、ぼくは抽籤で政務審議会の一員に選ばれ、そしてぼくの部族が執行部の役を勤めることになり、ぼくはその議長として、ある議案を投票に付さなければならないことがあったのだが、そのときぼくは、投票に付するすべを知らなかったもので、人びとの嘲笑を招いたのだった(1)。だから今の場合も、ここにいる人たちの投票を求めるように、ぼくに命ずることはしないでくれたまえ。それよりは、君にはもうこれまでのやり方以上によい反駁の方法がないのなら、

474

さっきぼくが言っていたように、今度は代って、ぼくに反駁の役をまかせて、そして、反駁とはこうあるべきだとぼくの考えているような、そういう反駁を、君は受けてみることにしたまえ。というのもぼくは、どんな話をするにしても、それについての証人を、一人だけは立てることができるからだ。つまりその証人とは、ぼくの話相手となっている当のその人のことだ。そして多くの人たちには目もくれないというわけだ。つまりぼくは、一人の人の票を獲得することは知っているが、多くの人たちとは話し合うこともしないのだ。だから、もし君に、

B

今度は代って、ぼくの質問に答えながら、反駁を受けようという気持があるなら、まあ、見てごらん。というのも、ぼくとしてはこう思っているからなのだ。――それはなにもぼくだけではなく、君にしても、またその他の人たちにしても、不正を受けるよりは不正を行なうほうが、また、裁きを受けるよりは受けないほうが、より悪いことであると考えているのだ、とね。

ポロス　しかし、ぼくのほうは、ただぼくだけではなく、世の中のほかのだれ一人も、そうは考えていないと

思うのですがね。それだのにあなたは、不正を行なうよりも、むしろ不正を受けるほうを選ばれるのでしょうかね？

ソクラテス　そう、そして君も、またほかのすべての人も、そのほうを選ぶだろうね。

ポロス　いや、とんでもないです。それはぼくだけではなく、あなたも、またほかのどんな人も、そのほうを選ぶ者はいないでしょう。

C

ソクラテス　では、もうこれ以上は、君はどうしても答えてくれないというのかね。

ポロス　いえ、答えましょう。あなたがいったいどういうことを言われるか、知りたくもありますからね。

ソクラテス　さあ、それでは、知るためには、言ってくれたまえ。ぼくはもう一度初めから、君に訊ねている

1　政務審議会（ブーレー）とは、クレイステネスの改革（前五〇八／七年）によって生まれた民主国家アテナイの最高の行政機関で、それはアテナイの一〇の部族から抽籤によって各〻五〇人ずつが選び出され、計五〇〇人をもって構成されていた。そして一年を一〇期に分かち、その一期を各部族の代表五〇人が抽籤の順で交替に執行委員（プリュタネイス）となり、国政のほとんど全部を総攬し、事実上の中央政府の仕事をした。その委員長（エピスタテース）は一昼夜で交替し、前五世紀においては少なくとも、彼が政務審議会の議長および民会の議長の役をつとめた。

ソクラテスがここで言及しているのは、例のアルギヌゥサイ島沖海戦（前四〇六年）に関連する事件であろう。その海戦においてアテナイ艦隊は勝利をえたけれども、指揮官たちの処置がよろしきをえなかったため、多数の人命と艦船を失なう結果になった。そこで後に、その責任が問われ、そのときの将軍であった六人の者を一括裁判に付する動議が民会に提出された。しかし、この一括裁判というやり方は違法であったから、当時、政務審議会の執行委員の一人であったソクラテスは——彼がその当日「議長」であったかどうかについては議論がある——終始その動議の上程に反対したけれども、結局はむなしい抵抗に終ってしまった。『ソクラテスの弁明』32Bを参照。

のだというつもりになってね。——君にはどちらが、より悪い(害になる)ことだと思われるかね、ポロス、不正を行なうほうかね、それとも、不正を受けるほうかね。

ポロス それはむろん、不正を受けるほうです。

ソクラテス それならしかし、どうだろうか。より醜いのは、どちらかね。不正を行なうほうかね、それとも、不正を受けるほうかね。答えてくれたまえ。

ポロス それは、不正を行なうほうです。

三〇

ソクラテス それではまたそのほうが、より悪いことでもあるのだ、いやしくも、より醜いのであれば。

ポロス いいえ、決してそんなことはありません。

D

ソクラテス ああ、それでわかったよ。君はどうやら、美しいことと善いことは同じではないし、また、悪いことと醜いことも同じではない、と考えているらしいね。

ポロス もちろん、同じではありません。

ソクラテス しかしそれなら、つぎのことは、どう考えるかね。すべて美しい(立派な)もの、たとえば、身体でも、色でも、形でも、声でも、また風俗習慣でも、それらのものを君は何の基準にも照らすことなしに、それぞれの場合に美しいと呼ぶのかね。たとえばまず、身体をとりあげてみれば、君が立派な美しい身体を、美しいものであると言うとき、それは有用性の点で、つまり、それぞれの身体が何かに対して役に立つとすれば、その

ものとの関連で美しいと言うのではないかね。あるいは、何らかの快楽の点で、つまり、その身体が眺められるときに、眺める人たちを喜ばせるなら、その点で美しいと言うのではないかね。どうかね、身体の美しさについて語る場合に、何かそれら以外の観点をあげることができるかね。

E

ポロス いいえ、できません。

ソクラテス ではまた、その他のどんなものについてでも、同じことが言えるのであって、つまり、形でも色でも、それらのものに君が美しいという名をつけて呼ぶ場合には、それは何らかの快楽のためか、それとも有益さのためか、もしくは、それら両方のためではないかね。

ポロス そのとおりです。

ソクラテス それは声の場合でも、またすべて音楽に関係のあるものの場合でも、同じことではないかね。

ポロス そうです。

ソクラテス さらにまた、法律や風俗習慣の方面のことにしても、およそ立派で美しいものは、むろん、いま言われたような観点、つまり有益なものであるか、快適なものであるか、それとも、それら両方のものであるかという、そういった観点を抜きにしてはあり得ないだろう。

475

ポロス あり得ないと思います。

ソクラテス それではまた、学問の立派さということだって、同様ではないかね。

ポロス まったくです。それに、いまあなたが試みておられる定義の仕方だって、見事なものです、ソクラテス、その見事である(美しい)ということを定義するのに、快と善(有益さ)とによってなさっているのは。

ソクラテス　それなら、醜いということのほうは、その反対のもの、つまり苦痛と害悪とによって、定義されるのではないか。

ポロス　それは必然にそうなります。

ソクラテス　そうすると、二つの美しいもののうちで、その一方がより美しい場合には、そのもののほうが、いま言われた二つのうちのどちらかの点で、またはその両方の点でまさっているから、それでより美しいのだ、ということになるね。つまり快楽の点で、あるいは有益さの点で、もしくはその両方の点でまさっているから、そうなのだね。

ポロス　たしかに。

B

ソクラテス　他方また、二つの醜いもののうちで、その一方がより醜い場合にも、そのもののほうが、苦痛の点で、あるいは害悪の点で、〔もしくはその両方の点で〕まさっているから、それでより醜いのだ、ということになるだろう。どうだね、これは必然にこうなるのではないかね。

ポロス　そうなります。

ソクラテス　よし来た！　さあ、それでは、不正を行なうのと、不正を受けるのとについて、今しがたはどんなふうに言われていたのかね。不正を受けるのはより悪いことであるが、しかし不正を行なうほうがより醜いことであると、こう君は言っていたのではないかね。

ポロス　ええ、そう言っていました。

ソクラテス　それなら、不正を行なうほうが、不正を受けるよりも、より醜いのだとすると、そのほうがより

苦痛なことであり、それで苦痛の点でまさっているから、より醜いのであるか、それとも害悪の点で、もしくはその両方の点でまさっているから、そうなのか、そのどれかであるということになるのではなかろうか。これも必然にこうなるのではないかね。

ポロス　そうならざるをえません。

三一

c

ソクラテス　では、まず最初に、こういう点について調べてみることにしよう。はたして、不正を行なうほうが、不正を受けるよりも、苦痛の点でまさっているのか。つまり、不正を行なう人たちのほうが、不正を受ける人たちよりも、もっと苦痛を感じているのか。

ポロス　いや、ソクラテス、少なくともそういうことは、ぜったいにありません。

ソクラテス　してみると、少なくとも苦痛の点では、まさっていないのだね。

ポロス　ええ、決して。

ソクラテス　では、苦痛の点ではまさっていないとすると、もはや両方の点でまさるということもありえないだろう。

ポロス　ありえないようです。

ソクラテス　では、残るところは、もう一方の点で、ということになるね。

ポロス　ええ。

ソクラテス　つまりそれは、害悪の点で、ということだね。

ポロス　そうらしいです。

ソクラテス　そうすると、不正を行なうほうが、不正を受けるよりも、害悪の点でまさっているのなら、そのほうが、より悪いということになろう。

ポロス　むろん、そうなります。

D

ソクラテス　ところで、不正を行なうほうが、不正を受けるよりも、より醜いということは、世の多くの人たちによってのみならず、君によってもまた、さきほど認められていたのだ。どうだね、そうではなかったのかね。

ポロス　そうでした。

ソクラテス　そして今や、そのほうがより悪いということが、明らかにされたのだ。

ポロス　そうらしいですね。

ソクラテス　それなら君は、そのより悪くて、より醜いことのほうを、そうであることのより少ないものよりも、選ぶのだろうか？　さあ、躊躇しないで、答えてくれ、ポロス。君がそれに答えたからといって、何もほんとうの害を受けるわけではないのだから。いや、君は男らしく、ちょうど医者に身をゆだねるようなつもりで、この議論に身をゆだねながら、答えてくれたまえ。そして、ぼくの訊ねていることに対して、肯定するなり、否定するなりしてくれ。

E

ポロス　いや、むろん、そちらのほうを選びはしませんよ、ソクラテス。

ソクラテス　しかし、世の中には誰かほかに、そちらのほうを選ぶ者がいるだろうか。

ポロス　いや、いないと思います。少なくともいまの議論に従うかぎりはですよ。

ソクラテス　してみると、ぼくの言っていたことは正しかったわけだね。つまり、ぼくだけではなく、君にしても、また世の中のほかの誰にしても、不正を受けるよりは、不正を行なうほうを選びはしないだろうと、言っていたのはだよ。なぜなら、不正を行なうほうが、より悪い(害になる)ことなのだから。

ポロス　そうらしいです。

ソクラテス　それでは、ほら、わかるだろう、ポロス、このぼくの反駁を、前の君の反駁と比べてみるなら、両者の間にはぜんぜん似たところがないということが。いな、君には、このぼくを除いて、ほかの人たちが全部、同意してくれているが、しかしぼくには、君さえ同意して証人となってくれるなら、たとえそれが君一人だけであっても、それで充分なのだ。そしてぼくとしては、ただ君の票だけを獲得すれば、ほかの人たちのことはどうでもかまわないわけだ。

476

さて、この点については、これで片づいたことにしておこう。で、そのつぎには、ぼくたちの意見が食い違っていた、第二の点について考察をすすめることにしよう。つまりそれは、不正を行なっている場合に、裁きを受けるのは、はたして君が考えていたように、害悪のなかでも最大のものであるのか、それとも、ぼくがまた考えていたように、裁きを受けないほうが、もっと大きな害悪であるのか、という点なのだ。で、その点は、こういうふうにして考察することにしよう。——不正を行なっている場合に、裁きを受けるのと、正義に従って懲らしめられるのとは、同じであると君は言うかね。

ポロス　同じです。

(476) B

ソクラテス　では、正しいことは、それが正しくあるかぎり、そのすべてが立派である(美しい)、ということはないのだというふうに君は言うことができるかね。それで、よく考えた上で、答えることにしてくれ。

ポロス　いや、考えるまでもなく、そのすべてが立派であると思います、ソクラテス。

三二

ソクラテス　ではさらに、こういう点も考えてみてくれ。もしひとが何かをするなら、そのする人によってされることが、必ずまた何か、なければならないのか。

ポロス　なければならないと思います。

ソクラテス　はたして、そのされるほうは、するほうのものがするのと同じ内容のこと、また同じ性質のことをされるのかね。ぼくの言うのは、たとえば、こういうことだ。もしひとが殴るとすれば、何かが必ず殴られるのか。

ポロス　必ず殴られます。

C **ソクラテス**　そしてもし、その殴る人が、激しく殴るとか、あるいは速く殴るとかすれば、殴られるほうの者も、それに応じた仕方で殴られるのか。

ポロス　そうです。

ソクラテス　してみると、殴られるほうの者に生じる状態は、殴るほうの者がなす行為に相応するわけだ。

ポロス　まったくです。

ソクラテス　ではまた、ひとが〔治療のために焼鏝（やきごて）を使って〕焼くとすれば、何かが必ず焼かれるのではないか。

ポロス　もちろんです。

ソクラテス　そしてもし、その焼き方が、激しいか、あるいは苦痛になるようなものであれば、焼かれるほうのものは、焼くものの焼き方に応じた、そういう焼かれ方をするのか。

ポロス　そのとおりです。

ソクラテス　ではまた、ひとが(1)〔メスを振って〕切る場合でも、同じことが言えるのではないか。つまり、何かが切られるのだから。

ポロス　そうです。

ソクラテス　そしてもし、その切口が、大きいか、深いか、または苦痛になるようなものであれば、切られる

D

ほうのものは、切るものの切り方に応じた、そういう切られ方をするのか。

ポロス　明らかに、そうです。

ソクラテス　それでは、いままでのことをひとまとめにすると、さっき言ったように、あらゆる場合について、するほうのものがするような、そういう性質のことを、されるほうのものはされるのである、ということになるが、それを君は同意してくれるかどうか、まあ、見てくれたまえ。

ポロス　ええ、同意します。

1　バーネット以外のほとんどすべての校本が、ストバイオスの τις の読み方をとっている。これを採用する。

E

ソクラテス　では、以上のことは同意されたものとして、さて、裁きを受けるということは、何かをされることかね、それとも、することかね、どちらだろう？

ポロス　それはきまっています、ソクラテス、されるのです。

ソクラテス　では、されるのであれば、誰かする人によって、そうされるのではないか。

ポロス　もちろんです、懲らしめる人によってです。

ソクラテス　ところで、しかるべく懲らしめる人は、正義に従って懲らしめるのだね？

ポロス　そうです。

ソクラテス　それは、正しいことをすることによってかね、それとも、そうではなしにか。

ポロス　正しいことをすることによってです。

ソクラテス　そうすると、懲らしめられる者は、裁きを受けることによって正しいことをされるのではないか。

ポロス　明らかに、そうです。

ソクラテス　ところで、正しいことは、立派なことであると同意されていたはずだが。

ポロス　たしかに。

ソクラテス　そうすると、それら両者の間において、一方、正しいことをする人のほうは、立派なことをするのだし、他方、それをされる人、つまり懲らしめられる人のほうは、立派なことをされるわけだ。

ポロス　そうです。

三三

ソクラテス　それでは、もしも立派なことをされるのだとすると、善い（ためになる）ことをされるのではないかね。というのも、立派な（美しい）ことは、快いことか、有益なことか、〔それともその両方か、〕そのうちのどれかなのだから。〔しかも、懲らしめられることは、快いことではないはずだから。〕

ポロス　それは必然にそうなります。

ソクラテス　してみると、裁きを受ける人は、ためになる善いことをされるのだね？

ポロス　そうらしいです。

ソクラテス　したがって、利益を受けるわけだね？

ポロス　ええ。

ソクラテス　はたして、その利益というのは、ぼくが考えているような利益のことだろうか。つまり、正義に従って懲らしめられるなら、その人は魂の上でよりすぐれた者になるという？

ポロス　でしょうね。

ソクラテス　すると、裁きを受ける人は、魂の劣悪さから解放されるのだね？

ポロス　ええ。

B

ソクラテス　それでは、最大の悪から解放されるということになるのかね。――しかしまあ、その点は、こういうふうに考えてみたまえ。財産の状態において、君が人間の悪と認めるものは、貧乏以外に何かあるかね。

ポロス　いいえ、ありません、貧乏がそうです。

ソクラテス　では、身体の状態では、それは何かね。虚弱、病気、醜さ、その他そういったものを、悪であると言うのだろうか。

ポロス　そうです。

ソクラテス　それではまた、魂にも、何か悪い状態があると、君は考えているのではないか。

ポロス　もちろんです。

ソクラテス　では、君がその悪い状態と呼ぶものは、不正、無学、臆病、その他そういったもののことではないのか。

ポロス　まったくです。

c

ソクラテス　それなら、財産と、身体と、魂との——それらは三つなのだから——三つの悪い状態、つまり、貧乏と、病気と、不正とを、君はあげたことになるのではないか。

ポロス　そうです。

ソクラテス　では、それら三つの悪い状態のなかでは、どれが一番醜いのだろうか。不正や、そして要するに魂の劣悪さが、そうではないのか。

ポロス　それは大いに、そうです。

ソクラテス　それでは、一番醜いのなら、また一番悪い(害になる)のだね？

ポロス　と言われると、ソクラテス、それはどういう意味でしょう？

ソクラテス　こういう意味だ。すなわち、一番醜いものは、いつの場合でも最大の苦痛を、あるいは最大の損害を、もしくはその両方ともをもたらすから、それで一番醜いのである。この点は、前に同意されたことから出てくることなのだ。

ポロス　それはたしかに、そうです。

ソクラテス　ところで、不正や、そして一般に魂の劣悪さが、一番醜いものであるということは、今しがたぼくたちによって同意されたばかりなのだね？

D

ポロス　同意されました。

ソクラテス　それなら、魂の劣悪さは、非常に苦痛なことであり、それでその苦痛の点でまさっているから、いま言われた三つの悪い状態のなかでは、一番醜いのであるか、それとも有害さの点で、もしくはその両方の点でまさっているからそうなのか、このうちのどれかであるということになるのではないか。

ポロス　それはどうしても、そうなります。

ソクラテス　ではたして、不正であることや、また放埒、臆病、無学であることのほうが、貧乏していることや、病気していることよりも、もっと苦痛になることだろうか。

ポロス　いいえ、ぼくはそうは思いません、ソクラテス、少なくともこれまでの話からですとね。(1)

1　「少なくともこれまでの話からですとね」という句は、むしろつぎのポロスの答、「そのようです」の後に移す方が自然であるという解釈もあるが、一応この位置においておく。ポロスの上すべりした答の一例とみてよかろう。

E

ソクラテス　してみると、何かとてつもないほどに大きな害や、また驚くばかりの悪をもたらすという点で、魂の劣悪さは、その他のものを凌駕しているから、それで、すべての悪い状態のなかでも、一番醜いわけだ。君の言うように、それは少なくとも苦痛をあたえるという点では、まさっているのではないから。

ポロス　そのようです。

ソクラテス　ところでさて、害悪をもたらすという点でまさること最大のものは、およそ存在するもののなかでも、最大の悪であろう。

ポロス　ええ。

ソクラテス　したがって、不正や、放埒や、その他一般に、魂の劣悪さは、およそ存在するもののなかでも、最大の悪である、ということになるのだね？

ポロス　そうなるようです。

三四

478

ソクラテス　さて、それでは、貧乏から解放してくれるのは、どんな技術かね。それは金儲けの術ではないかね。

ポロス　そうです。

ソクラテス　また、病気から解放してくれるのは、どんな技術かね。医術ではないのかね。

ポロス　きまっています。

ソクラテス　では、不正やその他の悪徳から解放してくれるのは、どんな技術かね。……もし、そうすらすら

とは答えられないようなら、まあ、こんなふうに考えてみたまえ。どこへ、またどういう人たちのところへ、身体を患っている人たちを、われわれは連れて行くのかね。

ポロス それはもちろん、医者のところへです、ソクラテス。

ソクラテス では、不正を行なっている人たちや、放埒にふるまっている連中は、どこへ連れて行ったらいいのかね。

ポロス 裁判官のところへ、とおっしゃりたいのでしょう？

ソクラテス そう、それは裁判を受けさせるためではないかね。

ポロス それは認めましょう。

ソクラテス ところで、そういう連中をしかるべく懲らしめる人たちは、何らかの正義(司法の術)を用いて懲らしめるのではないかね。

ポロス むろん、そうです。

B

ソクラテス してみると、貧乏から解放するのは、金儲けの術であり、病気から解放するのは、医術であり、そして放埒や不正から解放するのは、裁判(正義・司法)である、ということになる。

ポロス そうなるようです。

ソクラテス それでは、それらのうちでは、どれが一番立派なものかね。

ポロス それらといいますと？

ソクラテス つまり、金儲けの術と、医術と、裁判のうちではだ。

ポロス　それはだんぜん、ソクラテス、裁判がぬきんでていますよ。

ソクラテス　そうすると、今度もまた、裁判は、快楽か、利益か、もしくはその両方を、一番多くつくり出すということになるのではないかね、もしもそれが一番立派な（美しい）ものだとすると。

ポロス　そうです。

ソクラテス　それではたして、治療を受けるのは快いことかね。そして治療を受ける人たちは、そのときに愉快な気持でいるのかね。

ポロス　いいえ、ぼくにはそうは思われません。

ソクラテス　しかしとにかく、ためにはなるのだね？　そうだろう？

ポロス　そうです。

c

ソクラテス　というのも、それによってひとは、大きな悪から解放されるからであり、したがって、苦痛を忍んでも健康になるのは、有利であるというわけなのだ。

ポロス　もちろん、そうです。

ソクラテス　では、そういうふうにしたなら、つまり治療を受けるなら、ひとは身体に関して、一番幸福になれるのだろうか。それとも、初めから病気にもかからない場合が、そうなのだろうか。

ポロス　それはむろん、病気にもかからない場合です。

ソクラテス　それは、そうだね。というのは、思うに、悪から解放されるという、そのことが幸福だったのではなく、初めからぜんぜん悪をもたないということが、幸福だったのだから。

D

ポロス　そのとおりです。

ソクラテス　では、どうだろう。身体にでも、あるいは魂にでも、悪いところをもっている二人のうちで、治療を受けてその悪から解放される人と、治療を受けないでその悪をそのまま持ちつづけている人とでは、どちらがより不幸だろうか。

ポロス　それは明らかに、治療を受けない人のほうです。

ソクラテス　ところで、裁きを受けるということは、最大の悪、つまり悪徳からの解放だったのではないか。

ポロス　そうでした。

ソクラテス　それというのも、裁きは、人びとを節度のある者にし、より正しい者となし、かくして、悪徳の医術となるからであろう。

ポロス　そうです。

ソクラテス　そうすると、一番幸福なのは、魂のなかに悪をもたない人間なのだ。というのも、その悪こそ、もろもろの悪のなかでも最大のものであることが明らかにされたのだから。

E

ポロス　むろん、そうです。

ソクラテス　ところで、二番目に幸福なのは、その悪から解放される人だろう。

ポロス　そうらしいです。

ソクラテス　で、その人とは、説諭されたり、叱責されたり、裁きを受けたりする人のことだったのだ。

ポロス　ええ。

ソクラテス　したがって、その悪をもったままでいて、それから解放されない人は、一番不幸な生活を送る、ということになるのだ。

ポロス　そうなるようですね。

479

ソクラテス　では、その一番不幸な生活を送る人というのは、まさにこういう人のことではないかね。つまり、最大の悪事を犯し、最大の不義不正を行ないながら、うまく立ちまわって、説諭されることも、懲戒されることも、また裁きを受けることもないようにしている者があるとすれば、誰であろうと、まさにそのような人こそ、それなのではないかね。たとえば、君の主張によると、アルケラオスはそれに成功しているのだし、またその他の独裁者たちや、弁論家たちや、権力者たちにしても、そうだということなのだが。

ポロス　そうかもしれませんね。

三五

ソクラテス　というのも、ねえ君、そういった連中が自分たちのためにやりとげていることはといえば、それはちょうどだれかが、たいへん重い病気にかかっていながら、身体についての過ちの償いを、医者によって受けることがないようにと、つまり、焼かれたり切られたりすることは苦痛だからというので、まるで子供のように恐れて、治療を受けないようにと、なんのかのとうまくごまかしているのと、ほとんど同じだといっていいだろ

B

うからだ。どうだね、君にもそう思われないかね。

ポロス　そう思われます。

ソクラテス　それというのも、その病人には、どうやら、健康ということ、つまり身体のすぐれたあり方とは、どういうものであるかが、よくわかっていないからのことらしいのだ。ところで、こういう例をあげるのも、いまぼくたちによって同意されたことから判断すると、裁きを免れようとする人たちだって、おそらく、何かこれと似たようなことをしているにちがいないからだよ、ポロス。すなわち彼らは、裁きを受けることの苦痛はよく見抜いているが、しかしそれが有益であるということについては、盲目であり、そして、不健康な身体をもって生きるよりは、魂が健全ではなく、ひびがはいっていて、不正で、不敬虔であることのほうが、どれほどもっと不幸であるかということが、わかっていないからなのだ。だからまた彼らは、何とでもして裁きを受けないようにと、そして最大の悪からは解放されないようにと、百方手をつくしているわけだ。つまりそのためには、金銭の用意もし、味方もととのえ、また、できるだけ説得力をそなえた語り手となるように努力してだね。しかしながら、もしぼくたちの同意していたことが真実だったとすれば、ポロスよ、この議論からどんな結論が出てくるかを、君は気がついているかしら？　それとも、なんならいっしょに、その結論を出してみることにしようか。

C

ポロス　あなたにそれがよいと思われるなら、そうしましょう。

ソクラテス　ではたして、不正であることや、不正を行なうことは、最大の悪であるという結論になるのかね。

D

ポロス　そうなるようですね。

ソクラテス　それからまた、裁きを受けるということは、その悪からの解放である、ということが明らかになったのか。

ポロス　でしょうね。

ソクラテス　しかしそれに反して、裁きを受けないのは、その悪をとどめることなのか。

ポロス　ええ。

ソクラテス　してみると、ただ不正を行なうだけのことなら、もろもろの悪のなかでも、大きさの点で第二番目のものであるが、しかし、不正を行ないながら裁きを受けないでいるとなると、これは本来、ありとあらゆる悪のなかでも最大の、そして第一番目のものだということになる。

ポロス　そうらしいですね。

ソクラテス　ところで、君、ぼくたちの意見が食い違っていたのは、そもそも、この点についてではなかったのかね。つまり、君のほうは、アルケラオスを、彼は最大の不正を行なっていながら、何の裁きも受けていないから、幸福であるとしたのだが、しかしぼくは反対に、アルケラオスであろうと、他の何びとであろうと、不正E
を行ないながら裁きを受けない者があるとすれば、その者は当然、他のどんな人たちにもまさって不幸であるはずだし、また一般に、いつの場合でも、不正を行なう人のほうが不正を受ける人よりも、そして裁きを受けない人のほうが裁きを受ける人よりも、もっと不幸であると考えていたからなのだ。——どうだね、これがぼくによって言われていたことではなかったかね。

ポロス　そうでした。

ソクラテス　それでは、そう言われていたのは真実であったということが、証明されたのではないかね。

ポロス　そのようです。

三六

480

ソクラテス　では、その点はそれでいいとして、さてそれで、もし以上述べたことが真実であるとするなら、ポロスよ、弁論術がもつというあの大きな効用とは、いったい、何だということになるのかね。というのもじつのところ、いま同意されたことにもとづいていえば、ひとは自分で自分自身に最大の注意を払って、不正を行なわないようにしなければならないからだ。さもないと、害悪をいっぱい背負いこむことになるわけだから。そうではないのかね。

ポロス　まったくです。

ソクラテス　だがもし、不正を行なってしまったのなら、それを行なったのが自分自身であろうと、あるいは自分が面倒を見ている誰かほかの人であろうと、とにかく不正を行なった者は、自分からすすんで、できるだけ早く裁きを受けることになる場所へ、行かなければならないのだ。ちょうど病気になったときには医者のところへ行くように、この場合には裁判官のところへね。それも、不正という病気がこじれてしまって、魂のなか深くまで膿み腐らし、これを不治のものとすることがないようにと、大急ぎでだね。それとも、ほかにどう言えばいいのかね、ポロス、もしもさきほど同意されたことが、われわれのところにとどまっているとすればだよ。どうだね、いまのように言えば、前の話と調子が合うけれども、それ以外の言い方をしたのでは、合わないにきまっているのではないかね。

B

ポロス　ええ、それ以外には、何とも言いようがありませんからね、ソクラテス。

ソクラテス　してみると、不正を弁護するという目的のためには、その不正を行なったのが自分自身であろうと、両親であろうと、仲間たちであろうと、子供たちであろうと、あるいは、祖国が不正を行なっている場合であろうと、弁論術は、われわれにとって何の役にも立たないということになるのだよ、ポロス。ただしひとが、

C

反対の目的のためになら役に立つと解釈してくれるなら、話は別になるけれどもね。――すなわち、誰よりもまず自分自身を告発すべきであり、それに次いでは、身内の者でも、またその他友人たちの中で、それぞれの場合に不正を行なう者があれば、その者をも告発すべきであり、そして、その非行を包みかくさずに、白日の下に持ち出すべきであるが、それは裁きを受けて健全な者となるためである。そしてそのような際には、自分自身にも、ほかの人たちにも、卑怯な真似をさせないで、ちょうど医者に身をまかせて切ったり焼いたりしてもらうときと同様に、善きこと美しきことを求めながら、苦痛は勘定に入れずに、立派な男らしい態度で、眼をつぶって、そ

D

の裁きに身を委ねるようにしむけるべきである。すなわちもし、笞刑に値する不正を行なっているのなら、身を委ねて笞打たせ、また縛られるに値することをしているなら、縛らせ、罰金に値することなら、罰金を払い、追放に値することなら、追放になり、死刑に値することなら、死刑になる、というようにしてだね。そうするのにはまず、自分が自分自身の、あるいはその他、身内の者の告発人となり、そしてその非行が明らかとなることによって、最大の悪である不正から解放されるようにという、その目的のためにこそ、弁論術は用いるのでなければならない、というふうに解釈してくれるのならだね。――どうだね、そんなふうにぼくたちは主張しようかね、それとも、そう主張してはいけないのかね、ポロス。

E

ポロス　それは、ぼくには少なくとも、途方もないことのように思われるのですがね、ソクラテス。でも、あ

なたにとっては、おそらくそれで、前の話と辻褄が合うわけでしょうね。

ソクラテス それなら、あの前の話もいっしょに、ご破算にしてしまうか、それとも、あれを認めるなら、この今のことは、それからの結論として、必然に出てくるのではないかね。

ポロス ええ、それはとにかく、そうですけど……

ソクラテス ところで、今度は反対に、いまとは逆の場合で、かりにひとが誰かに対して、それは自分の敵にでもいいし、またはどんな人にでもいいが、害を加えなければならないのだとしてみよう。ただし、自分のほうは、その敵から被害を蒙ることはないとしての話であるが——というのは、それは警戒すべきことだからね——そうではなく、その敵が、誰かほかの人に対して不正を行なっている場合のことであるが。そんなときには、その敵が裁きを受けないように、また裁判官のところへも行かないように、ひとは言行いずれの面においても、あらゆる手段をつくして、工作しなければならないわけだ。しかし、もし裁判官のところへ行ってしまったのなら、そのときは、その敵が訴訟にうち勝って罰を受けないですむように、いなむしろ、もし彼が大金を持ち逃げしていたとするなら、それを返すことなく、所持したままで、自分のためにも家族のためにも、不正に、しかも神々を無視した態度で費い果すように、またもし、死刑に値する悪事を行なっていたのなら、できることなら決して死刑にならずに、むしろ悪人のままでいつまでも死なないでいるように、しかし、もしそれができないことだとすれば、そういう人間のままで、できるだけ長時間生きながらえるように、取り計らわなければならないのだ。そのような目的のためになら、ポロスよ、弁論術は役に立つものであるとぼくには思われるのだ。けれども、およそ不正を行なう意志のない人間にとっては、それの効用は大したものだとは思われないよ、よし、これまでの

481

B

話の中にはどこにも明らかにされなかったような効用が、何かあるとしてもだよ。

三七

カリクレス　おい、どうなんだい？　カイレポン。ソクラテスは、あんなことを本気で言っているのかね。それとも、冗談かね。

カイレポン　ぼくには、なみなみでないほど、本気だと思われるがね、カリクレス。でもそれは、当の本人に訊ねてみるのが一番だよ。

カリクレス　いや、それはむろん、神々にかけて、そうしたいと思っているよ。……どうか、言ってくれたまえ、ソクラテス。あなたはいま本気なのか、それとも冗談なのか、われわれはいったい、どちらだと考えたらいいだろうね？　というのは、もしもあなたが本気であって、そしてあなたの言っていることがまさに真実だとすれば、われわれ人間の生活は、まったくあべこべになっているのではなかろうか？　そして、どうやらわれわれは、なすべきこととは反対のことばかりしているらしい、ということになりはしないかね。

C

ソクラテス　カリクレスよ、人間の心理状態には——人それぞれによって違いはあるにしても——何か共通するものがあるというのではなくて、われわれのなかの一人は、ほかの者たちにはうかがい知れない、その人だけに固有な気持をもっているのだとしたら、その人が自分の気持をほかの人に理解させるということは、なかなか容易なことではなかったろうね。ところで、ぼくがこんなことを言いだしたのも、じつは、ぼくと君とは現在、何か同じような心理状態にあるのだということに、気がついたからなのだ。というのはつまり、ぼくたちは二人で

D

あるが、めいめい二人のものに恋しているわけだ。ぼくが恋しているのは、クレイニアスの子のアルキビアデス(1)と哲学とであり、君はまた君で二人のもの、つまり、アテナイの民衆(デモス)とピュリランペスの子のデモス(2)とに恋しているのだ。

さて、ぼくはつねづね感づいているのだが、君はなかなかの剛の者であるにもかかわらず、君の愛人が主張することなら、どんなことであろうと、また、それがどんなふうに主張されるのであろうと、君はそれに反対する

1　アルキビアデス(前四五〇―四〇四年)は、名門に生まれ、美男子で、財産はあり、才能も豊かであったが、傲慢で、節操なく、放埒で、まったく一世の「驕児」と呼ばれるにふさわしい生涯を送った。若くして数々の軍功をたてたが、クレオン亡きあとは民主派の指導者として、主戦論者の先頭に立ち、ニキアスの反対を押し切ってシケリア遠征を企て(前四一五年)、自らも指揮官の一人として出征した。しかし、その出発直前に起った瀆神事件のために本国に帰還を命じられると、彼は政敵の策謀に陥ることを恐れて、スパルタに逃亡し、祖国を裏切った。だが、やがてスパルタの信任を失った彼は、ペルシアの大守の許に逃れて、その助けで帰国を計ったが、すぐには成功せず、前四一一年の寡頭派の革命の際に、サモス島に逃れていた民主派の艦隊の将軍に迎えられて、スパルタの艦隊を打ち破った功績により、前四〇七年にやっと帰国を許された。しかしその翌年、彼の不在中に、部下がノティオンの海戦で失敗したので、再び嫌疑をかけられ、トラキアのケルソネソスの地に隠棲した。そして前四〇四年、アテナイの敗戦による革命のため、彼はさらにプリュギアに逃れていたところを、刺客のために殺された。彼とソクラテスとの間の親密な関係については、『饗宴』の後半でアルキビアデスが行なっているソクラテス讃美演説によく描かれている。

2　このピュリランペスが、『カルミデス』(158A)にあげられている同名の人物と同一人なら、彼はプラトンの母の叔父にあたる人であり、またその母が夫の死後再婚した相手でもある。彼はペリクレス側近の一人であり、たびたびアジア大陸に外交使臣として赴き、その堂々たる体軀とすぐれた気品とで人目を惹いたと言われている。
息子のデモスは、おそらく、彼とプラトンの母との間にではなく、先妻との間に生まれた子供であったろうと推測される。デモスが当時評判の美少年であったことは、アリストパネスの『蜂』(九七行)などからも知られる。

(481) E

ことができないで、上を下にと自分の考えを変えているのだ。つまり、民会においては、君が何か意見を述べたあとで、アテナイの民衆がそうではないと言えば、君はたちまち考えを変えて、彼らの望むとおりのことを語るのだし、また、ピュリランペスの若者である、あの美しいデモスに対しても、やはりそれと似たような弱みを君は見せているのだ。それというのも、君は、愛人の意向や言葉に逆らうことができないからである。したがって、君が話をするときはいつでも、それら愛人のことを気にして話をするわけだから、君のそういう話はいかにもおかしいと驚く人があるかもしれないが、そんな時には、君はその人に対して、もし正直に言おうとするのであれば、たぶん、こう言うだろう。——誰かがまず、君の愛人に、そういう話をするのをやめさせるのでなければ、君だってやはり、そういう話をするのを決してやめはしないだろう、とね。

482

さてそれなら、ぼくからもまた、これと似たようなことを聞かなければならぬのだと思ってくれたまえ。そして、ぼくがあんな話をしているからといって、驚いていてはいけないのだ。それよりもむしろ、ぼくの愛人である哲学に、あんな話をするのをやめさせるようにしてくれたまえ。なぜなら、ねえ君、ここだけの話だけれども、君がいまぼくから聞いていることは、じつは哲学が話しているのだから。しかも、ぼくにとっては、この愛人は、もう一人の愛人よりも、はるかにずっと移り気なところが少ないのだ。というのは、そのいま話したクレイニアスの子のほうは、その時どきで言うことがちがうけれども、哲学のほうは、いつでも同じ話をしてくれるからだ。ところで、その哲学が話していることに、君はいま驚いているのであり、しかも、その話がなされていたあいだは、君自身もその場に居合わせていたのだ。

B

だから、反駁するのなら、哲学を反駁して、さっきも言っていたことだが、不正を行なうのが、そして不正を

行ないながら裁きを受けないのが、ありとあらゆる害悪の中でも一番のひどいものである、ということはないのだと証明してくれたまえ。そうでなくて、もし君がそのことを反駁されないままに残しておくようなことがあれば、エジプト人の神である犬を誓いに立ててもいいが、カリクレスは、ほかならぬ君と意見が一致しないということになるだろうよ、カリクレス。いな、君は一生涯、自分自身と調子が合わずに暮すことになるだろう。とはいえ、すぐれた人よ、ぼくとしてはこう考えているのだ。よし、ぼくのリュラ琴の調子が合わないで不協和な音をだすとか、ぼくが費用を負担することになる合唱隊がそのありさまであるとか、また、世の大多数の人たちがぼくに同意しないで反対するとしても、そのほうが、ぼくは一人であるのに、ぼくがぼく自身と不調和であったり、自分に矛盾したことを言うよりも、まだましなのだとね。

C

三八

カリクレス ソクラテスよ、あなたは議論となると、まるでもう正真正銘の大道演説家かなんぞのように、気負い立つようだね。現に今だって、あなたはそんな俗受けのする話をしているのだが、それもつまりはポロスが、さっきのゴルギアスさんの場合と、同じ羽目におちこんだからのことなのだよ。自分では、ゴルギアスさんがあなたを相手に、そうした羽目におちこまれたのを、非難していたくせにね。というのは、ポロスはたしかこう言っていたはずだからだ。——弁論術を学びたいと思っている者が、正しいことについての知識をもたずに、ゴルギアスさんのところに来た場合、ゴルギアスさんはその人に、そのことを教えられるだろうかどうかと、あなたから質問されたとき、ゴルギアスさんは弱気になり、もし教えないと言えば、人びとは感情を損ねるかもしれ

D

ないからという、世の人一般に見られる人情にまけて、教えてやると答えられたのだ。そこで、そのことを同意されたがために、自分で自分に矛盾することを言わざるをえぬようにさせられてしまったのだが、あなたはまさにそれを、してやったりとばかりに喜んでいるのだ――とまあ、何かそのようなことをポロスは言って、そしてあなたをあざ笑っていたのだが、(1)少なくともぼくの見るところでは、あの時には、それは正当なことだったのだ。

ところが、今は逆に、ポロス自身がそれと同じ羽目におちいることになったのだ。そこで、ぼくとしては、不正を行なうほうが不正を受けるよりも醜いということを、彼があなたに容認したという、まさにその点では、彼をほめるわけにはいかないのである。なぜなら、その点を同意したからこそ、今度は彼自身が、議論のなかで、E あなたによって足枷をかけられ、くつわをかまされてしまったのだ。それは彼が、心に思っていたとおりのことを、そのまま口に出して言うのを遠慮したからなのである。つまり、あなたという人はほんとうに、ソクラテスよ、真理を追求していると称しながら、あのような月並みで、俗受けのすることへ、話をもっていくのだからなあ。あのようなことは、自然の本来(ピュシス)においては美しいことではなく、ただ法律習慣(ノモス)の上でだけ、そうであるにすぎないのに。(2)

483 ところで、その自然と、法律習慣とであるが、この両者はたいていの場合、互いに相反するものなのである。だから、もしひとが遠慮をして、心に思っていることをそのまま思いきって口に出すのでなければ、ひとは矛盾したことを言わなければならぬようにさせられるのだ。そこで、そのことを、つまりその巧妙な手を、あなたはよく心得ていて、議論の中でずるいことをするわけなのだ。つまり、ひとが法律習慣の上でのことを念頭におい

て話をすれば、あなたはそれをこっそりすりかえて、自然の上でのことにして問い返し、また反対に、ひとが自然のことを話せば、あなたはそれを法律習慣のことにしてだね。早い話が、たとえばさっきの、不正を行なうのと不正を受けるのとの場合にしても、ポロスは法律習慣の上でのより醜いことを話しているのに、あなたはその話を自然の上でのことにして追求していたのだ。というのは、自然の本来においては、より醜いのは、すべてまたより害悪となるもののほうがそうなのであるが、つまり、不正を受けることのほうがそうなのだが、しかし、法律習慣の上では、反対に、不正を行なうほうがより醜いからである。なぜなら、不正を受けるなどという、そ B ういう憂き目は、男子たるものの受けることではさらになくて、むしろ、生きているよりは死んだほうがましな、何か奴隷といったような者の受けるべきことだからだ。つまり、不正を受け、辱めを蒙っても、自分で自分自身をも、また自分が面倒を見てやっている他の人をも、助けることのできないような者があるとすれば、誰であろ

1　バーネットおよびラムの校本では、καταγελᾶν と不定法になっているが、その他のすべての校本では κατεγέλα と直接法未完了過去になっている。後者を採用する。
　なお、バーネットやドッヅの校本では、ὀρθῶς の語の後にコンマがおかれているが、他の校本のように、コンマはその語の前に移す。

2　自然の本性、つまり自然本来のあり方(ピュシス)と、人間の作為である法律や習慣(ノモス)とを対立させる考え方は、最初は、自然哲学者たちの研究から生まれたものと思われるが、それはやがて政治論や法律論、さらに倫理道徳説の分野にまで拡大適用された。そして、それまで神聖視されていた伝統的な道徳や慣習、また法律制度が、海外知識の普及とか度重なる政変や戦争の結果などによって、その絶対性が疑われることになると、それらに対して人びとが漠然と抱いていた不信や疑惑に、明確な表現を与えるのにそれは役立つことになった。そしてそれは後には、一群のソフィストたちによって唱えられていた利己的な現実主義の主張のための有力な武器ともなったのである。カリクレスもまた当時流行のこの対立概念を利用して、自己の「強者の正義」論に補強を試みようとするわけである。

うと、そのような人間の受けるにふさわしいことだからである。

しかしながら、ぼくの思うに、法律の制定者というのは、そういう力の弱い者たち、すなわち、世の大多数を占める人間どもなのである。だから彼らは、自分たちのこと、自分たちの利益のことを念頭において、法律を制定しているのであり、またそれにもとづいて賞賛したり、非難したりしているわけだ。つまり彼らは、人間たちの中でもより力の強い人たち、そしてより多く持つ能力のある人たちをおどして、自分たちよりも多く持つことがないようにするために、余計に取るのは醜いことで、不正なことであると言い、また不正を行なうとは、そのこと、つまり他の人よりも多く持とうと努めることだ、と言っているのだ。というのは、思うに、彼らは、自分たちが劣っているものだから、平等に持ちさえすれば、それで満足するだろうからである。

C

三九

かくて、以上のような理由で、法律習慣の上では、世の大多数の者たちよりも多く持とうと努めるのが、不正なこと、醜いことだと言われているのであり、またそうすることを、人びとは不正行為と呼んでいるのだ。しかし、ぼくの思うに、自然そのものが直接に明らかにしているのは、優秀な者は劣悪な者よりも、また有能な者は無能な者よりも、多く持つのが正しいということである。そして、それがそのとおりであるということは、自然はいたるところでこれを明示しているのだが、つまりそれは、他の動物の場合でもそうだけれども、特にまた人間の場合においても、これを国家と国家の間とか、種族と種族の間とかいう、全体の立場で考えてみるなら、そのとおりなのである。すなわち、正義とは、強者が弱者を支配し、そして弱者よりも多く持つことであるという

D

ふうに、すでに結論は出てしまっているのだ。なぜなら、ほかにいったいどういう正義をかかげて、クセルクセス[1]はギリシアの地に兵を進めてきたのだろうか。あるいは、彼の父〔ダレイオス一世〕[2]がスキュティア人たちのところへ攻め入ったのには、ほかにどんな正義があったというのだろうか。あるいはまた、そういう例なら、ひとはほかにいくらでもあげることができるだろう。いや、それは言うまでもなく、この人たちがそういうことをしているのは、自然――つまり正義の自然本来のあり方に従ってであると思う。

E

それにまた、そうだ、ゼウスに誓っていいが、彼らはたしかに法にも従っているのだ。しかしその法とは、自然の法であって、おそらくわれわれが勝手に制定するような法律ではないだろう。われわれはその法律なるものによって、自分たちのなかの最も優れた者たちや最も力の強い者たちを、ちょうど獅子を飼いならすときのように、子供の時から手もとにひきとって、これを型通りの者につくり上げているのだ。平等に持つべきであり、そしてそれこそが美しいこと、正しいことだというふうに語りきかせながら、呪文を唱えたり、魔法にかけたりし

484

1　ペルシア帝国の王(在位、前四八六―四六五年)。バビロニアやエジプトの反乱を平定した後、父王の遺志をついで、海陸の大軍をととのえ、ギリシア遠征を企てた(前四八〇年)。テルモピュライの戦でスパルタ王レオニダスを敗死させ、アッティカ領内に侵入し略奪したが、サラミスの海戦に敗れて帰国した。

2　クセルクセスの父ダレイオス一世(在位、前五二二―四八六年)は、古代ペルシア帝国の基礎を築いた偉大な君主。各地に転戦し、南はエジプト、リュディアから、東はインド地方まで征服したが、西北の国境から侵入するスキュティア人を懲らすために、前五一二年頃その地に軍を進め、ドナウ河流域にまで遠征した。その後、小アジアのギリシア人諸都市が反乱を起こしたとき、これを援けたギリシアを憎み、ギリシア征討の軍を送った。最初の遠征軍は中途で挫折し、二度目の軍はマラトンの戦(前四九〇年)で敗れた。三度目の遠征を計画しながら、エジプトの反乱を鎮定するために出陣していて死んだ。

て、彼らをすっかり奴隷にしてだね。しかしながら、ぼくの思うに、もしかして誰か充分な素質をもった男が生まれてきたなら、その男は、これらの束縛をすべてすっかり振い落し、ずたずたに引き裂き、くぐり抜けて、われわれが定めておいた規則も術策も呪文も、また自然に反する法律や習慣のいっさいをも、これを足下に踏みにじって、このわれわれの奴隷となっていた男は、われわれに反抗して立ち上り、今度は逆に、われわれの主人として現われてくることになるだろう。そしてそのときこそ、「自然の正義」は燦然と輝き出すことになるのだ。

B ところで、ピンダロス(1)もまた詩の中で、ぼくの言っていることを証明してくれているように思われる。つまり、その詩の中で、彼はこう言っているのだ——

法こそは　万物の王なれ
死すべきもの　不死なるもの　なべてのものの

と。しかし、その法とは、彼の主張によると、こういうものなのだ——

非道のかぎりをなしつつも
至高の腕力にて　これを正しとす
その証拠に　ヘラクレスの所業(2)をあげん
なんとなれば　無償にて……

とまあ、何かそのようなことを彼は言っているのだ。——というのも、ぼくはその詩を完全に覚えているわけではないからだが。——しかしとにかく、彼がそこで言わんとしているのは、こういうことなのだ。つまりヘラクレスは、金を払って買ったのでもなければ、贈物として与えられたのでもないのに、ゲリュオネス(3)のところから

C 牛を駆り出して連れ去ってしまったというのである。それは、牛であろうと、その他の財産であろうと、およそ劣者、弱者のものは、すべて優者、強者の所有に帰するということ、これこそが自然本来における正義だと考えたからだというのである。

四〇

かくて、事の真相は以上述べたとおりなのであるが、これはあなたにもわかってもらえるであろう、あなたが

1　ピンダロス(前五一八―四三八年)は古代ギリシアの生んだ最もすぐれた叙情詩人の一人。

「法(ノモス)こそは万物の王なれ」と訳した句は、後には諺のようになって、世の習俗(ノモス)の力の強大さを言い表わすのに用いられた(ヘロドトス『歴史』第三巻(三八)、『プロタゴラス』337D参照)。ここでカリクレスは、その「法」を「自然の法」の意味にとって、これを自己の「自然の正義」論に利用しようとするわけであるが、それがピンダロスの意図でもあったかどうかは疑問である。彼はむしろ、神の意志である「運命の掟」のようなものを考えていたのではないかと推測されている。なお、プラトンは『法律』(IV. 715A)のなかでもこの詩句を引用している。

2　ヘラクレスは言うまでもなく古代ギリシアの英雄伝説に登場する代表的な人物。ここで言及されているのは、彼のいわゆる「十二の難業」のうちの第十番目にあたるもので、それはつぎに述べられているように、ゲリュオネスのところから牛を分捕って連れ帰ることであった。

3　ゲリュオネスとは、ゴルゴンのメドゥサの子孫で、胴体は一つだが、腿から下と、肩から上は三人前の、つまり手足が六本ずつで、頭が三つある怪物であった。彼は世界の西の果て、オケアノスの大洋の中にあるエリュテイア島に、莫大な数の牛の群を所有して住み、それを牧人エウリュテイオンが管理し、怪犬オルトロスが番をして守っていた。

ヘラクレスは西に向かって出発し、多くの土地をへてオケアノスの大洋のほとりまで来たが、問題はいかにしてこの大洋を渡るかにあった。彼は太陽に弓をひいて、太陽が毎夕それに乗って東へ帰る大きな黄金の盃を借り、これに乗って大洋を渡り、その島について、番犬も牧人も、そして最後にはゲリュオネスをも殺して、彼の飼っていた牛の群を分捕り、これを駆り立てて連れ帰ってきたという。

哲学をもういい加減にやめにして、それよりももっと重要な仕事へ向かうならばだね。というのは、いいかね、ソクラテス、哲学というものは、たしかに、結構なものだよ、ひとが若い年頃に、ほどよくそれに触れておくぶんにはね。しかし、必要以上にそれにかかずらっていると、人間を破滅させてしまうことになるのだ。なぜなら、せっかくよい素質をもって生まれて来ていても、その年頃をすぎてもまだ哲学をつづけていたのでは、立派なすぐれた人間となって、名声をうたわれる者となるのにぜひ心得ておかなければならないことがらを、どれもみな

D

心得ないでしまうにきまっているからだ。すなわち、そのような人間は、国家社会に行なわれている法律や規則にもうとい者となるし、また、公私いろいろの取り決めにあたって、人びとと交渉するのに用いなければならない口上も知らず、さらに、人間がもついろいろな快楽や欲望にも無経験な者となるからである。つまり、一口でいえば、人さまざまの性向について、まるっきり心得のない者になるからなのだ。だから、そんな状態で、公私

E

いずれにもせよ、何らかの行動に出るようなことがあれば、物笑いの種になるだけであろう。それはちょうど、政治の仕事にたずさわっている者たちが、逆に、あなた方が日常行なっている談話や討論に加わった場合には、笑い物になるだろうとぼくは思うけれど、それとまったく同じことなのだ。そこでつまり、エウリピデスのつぎの文句[1]がちょうどあてはまることになるわけだ。——人それぞれが、それにおいて才の輝く者となり、またそれへと懸命になるもの

それにこそ、日の大半を割きながら

それとはすなわち、われとわが最も得意とするところ

485

というわけなのだ。これに反して、自分の不得手とするところ、そこからは逃げて、それを悪しざまに言うので

ある。そしてもう一方の、得意とすることのほうはたたえるのであるが、それはわが身可愛さからであって、そうすれば、自分で自分を賞賛することになると考えるからなのだ。

けれども、一番正しいのは、哲学と政治のその両方にたずさわることだと思う。哲学には、教養のための範囲内で、ちょっとたずさわっておくのはよいことであるし、若い時に哲学をするのは、少しも恥ずかしいことではない。しかし、もはや年もいっているのに、人がなお哲学をしているとなると、これは、ソクラテスよ、滑稽な B ことになるのだ。そしてぼくとしては、哲学をしている連中に対しては、ちょうど片言をいったり、遊戯をしたりしている人間に対する場合と、非常に似た感じを受けるのだ。つまり、そのような話し方がまだ似つかわしい小さな子供が、片言をいったり、遊戯をしたりしているのを見る場合は、ぼくはうれしくなるし、可愛らしいと思う。この子の年頃には、それは似つかわしいし、自由市民の生まれにもかなうように思われるのだ。ところが、これに反して、まだほんの小さな子が、いやにはっきりした話し方をするのを聞いたりすれば、これは何か興ざめた感じで、耳障りでもあるし、奴隷の身分にふさわしいもののように思われる。他方また、大の男が片言をい C っているのを聞くとか、あるいは遊戯をしているのを見るとかする場合は、それは滑稽で、一人前の男のすることとも思えず、そんな奴はぶん殴ってやってもいいように思われるのだ。

で、ぼくとしては、これと同じ感じを、哲学をしている連中に対してもいだいているわけだ。つまり、若い年

1 次の詩句は、後に485E〜486A、および486B〜Cで断片的に引用されているものとともに、エウリピデスの今は現存しない作品『アンティオペ』から取られたものである。485E注2を見よ。

頃の者が哲学をしているのを見れば、ぼくは感心するし、それはふさわしいことだと思う。そしてそういう人間には、何か自由人らしさがあるように思うのだ。これに反して、この年頃に哲学をしないような者は、自由市民とは思えず、将来においても決して、立派なよい仕事をする見込みのぜんぜんない者だと思う。しかしながら、

D 実際、いい年になってもまだ哲学をしていて、それから抜け出ようとしない者を見たりするときは、ソクラテスよ、そんな男はもう、ぶん殴ってやらなければいけないとぼくは思うのだ。なぜなら、そういう人間は、さっきも言ったことだけれど、いかによい素質をもって生まれて来ていたところで、もう男子たる資格のない者となってしまっているからだ。かの詩人〔ホメロス〕(1)が、男子たるものの栄誉を輝かす場所としてあげている、あの一国の中央の、人の集まるアゴラ(広場)を避けて、社会の片隅にもぐりこみ、三、四人の青少年を相手にぼそぼそと

E つぶやくだけで、その余生を送り、自由に、大声で、思う存分の発言をすることもなくなっているからである。

四一

だがね、ソクラテス、ぼくはあなたに対しては、かなりの好意を寄せているのだ。だから、今のぼくの気持は、さっき言及したあのエウリピデスの劇の中の、ゼトスがアンピオンに対して抱いていた気持(2)と、おそらく同じだといっていいかもしれない。つまり、ぼくもあなたに対しては、かのゼトスがその兄弟に向かって言っているのと、何か同じようなことを言ってみたいという気持になっているのだ。――「ソクラテスよ、あなたは心にかけなければならないことを、なおざりにしている。そして、あなたの持って生まれた魂の資質はそれほどに高貴なものであるのに、何か若い者向きの恰好で人目を惹こう(3)としているのだ。だから、裁判の審議にあたっては、あ

486

なたは自分のために、正当な意見を述べることもできなければ、また、まことしやかなこと、人を信じさせるに足ることを、大声で言う(4)こともできないだろう。それにまた、ほかの人のために、思いきった勧告をしてやることもできないだろう」とね。

それでいてだよ、親愛なるソクラテス——どうか、気を悪くしないでくれたまえ、あなたに対する好意から言うのだから——あなたは、そういう状態にあることを恥ずかしいとは思わないのかね。ぼくの見るところでは、あなたにしても、またその他、たえずますます哲学に深入りして行く連中にしても、そういう状態にあると思われるのだが。なぜなら、今もし誰かが、あなたをでも、あるいは、そういった連中のなかの他の誰をでも逮捕して、何も悪いことはしていないのに、しているのだといって、牢獄へ引っぱって行くのだとしてごらん。いいか

1 『イリアス』第九巻四四〇—四四一行の詩句が念頭にあったと思われる。

2 ゼトスとアンピオンは、エウリピデスの悲劇『アンティオペ』の女主人公、アンティオペの双子の兄弟。彼らは後に協力してテバイの城を築き、その支配者となるのだが、ここに引用されているのは、山中で生まれて捨て去られていた彼らが、牛飼に拾われて、成長して行く場面の一つを描いた部分であったろうと想像される。

この兄弟は、性格をまったく異にしていた。ゼトスのほうは牛飼として、また猟師として、膂力も強く、荒々しい性質で、活動的な毎日を過していた。それに反してアンピオンのほうは、リュラ琴を愛し、音楽を好んで、水の流れをも感動させるほどの名手になっていた。二人は互いに自分の選んだ生き方を自慢し、相手のそれを悪く言って、言い争っていたとみられるが、ここでは、ゼトスがアンピオンに向かって、その非活動的な生き方を非難している箇所が引用されている。カリクレスはこれを借りて、実際の政治活動に従事している自分をゼトスになぞらえ、哲学に耽っているソクラテスをアンピオンに見たてて、忠告するわけである。

3 有力写本どおりに διατρέπεις と読む。

4 ボーニッツの提案に従って、λάβοις を λάκοις にかえる。

B ねく、あなたはそのとき、どうしてよいかわからないで、目を白黒させているだろうし、また言うべき言葉も知らないで、ぽかんと口をあけているだけだろうからね。そして、法廷へ出頭したなら、あなたを訴えた告発人が、じつにつまらない、やくざな人間であったとしても、もしその男があなたに死刑を求刑しようと思えば、あなたは死刑になってしまうだろうからね。

C とはいえ、ソクラテスよ、どうしてそんなものが、知恵の名に値するといえるだろうか。「素質のよい人間を引きとっておきながら、これを劣悪な者にしてしまうような技術」ではね。つまり、自分で自分を助けることもできないし、また最大の危険から自分だけではなく、他の何びとをも救い出すことができないで、敵のために全財産を剝ぎとられ、何のことはない、一国の中で公民権を奪われた生活を送ることになる、というような人間にしてしまうのではね。いや、そのような人間には、少し柄の悪い言い方をしてもよければ、横っ面に平手打ちを食らわせてやっても、咎めを受けないですますことができるだろう。

さあ、それなら、あなた、ぼくの言うことをきき入れて、「人を反駁するなどということはやめにして、それよりも、実務に関するよき嗜みを養うようにしたまえ」。そして、思慮のある者と評判されるにいたるような事柄に、精を出すのだ。馬鹿話というべきか、無駄口というべきか、「あんな気の利いたふうなことは、ほかの人たちにまかせておいてだよ。そんなことをしていると、鐚一文も入らない空家で暮すことになるのだから」。そ

D んな些細なことを問題にして、人を論駁している連中ではなしに、生活の資も、名声も、その他の数々のよきものもそなえている人たちのほうを、見ならうようにしてだね。

四二

ソクラテス　いまかりに、ぼくの魂が黄金でできているとしたなら、カリクレスよ、人びとが黄金を検査するのに用いる石の一つ、それもとびきり上等なのを見つけ出したときに、ぼくは大喜びするだろうとは思わないかね。つまり、その石というのは、ぼくがそれへ自分の魂をあてて調べてみたとき、ぼくの魂は立派に世話ができているということを、もしそれが認めてくれるなら、ぼくは満足すべき状態にあるのであって、ぼくにはもう[1]ほかの試金石は何もいらないのだということが、よくわかるはずのものなのだがね。

E

カリクレス　いったいまた、何のために、そんなことを訊ねるのかね、ソクラテス。

ソクラテス　それはこれから、ぼくのほうで君に説明してあげよう。つまりぼくは、いま君に出会ったことによって、そのような思いもかけない幸運にめぐりあったと思っているのだよ。

カリクレス　いったい、どうしてかね。

ソクラテス　それはね、ぼくの魂が思いなすことについて、君がぼくに何かを同意してくれるなら、そのことはもうそれで、まさに真理であるということが、ぼくにはよくわかっているからなのだ。というのは、ひとが相

487

手の魂を検査して、それが正しい生き方をしているか否かを、充分に吟味しようとするなら、その人は三つの条件を——つまり、知識と、好意と、そして率直さとを、そなえていなければならないと、ぼくは思うのだが、君

1　ドッヅの校本に従い、οὐδὲν [μ'] ἔτι δεῖ ἄλλης βασάνου と読む。

はそれらを三つとも、全部そなえているからなのだ。すなわち、ぼくはたくさんの人に出会うけれども、彼らは君ほどには賢くないから、ぼくを吟味することができないのである。また、ほかに賢い人たちはいることはいるけれども、しかし彼らは、君ほどにはぼくのことを心配してくれないから、ぼくに対して本当のことを言おうとしてくれないのだ。さらにまた、ここに見えている外国からの客人、ゴルギアスさんとポロスとは、賢い人ではあるし、ぼくに対しては好意をもってくださるのだが、ただ、どちらかといえば率直さがたりなく、必要以上に遠慮深いところがあるのだ。だって、どうしてそうでないことがあるものか。とにかく、このご両人の遠慮深さといったら、お二人のどちらも、大勢の人たちの前で、自分で自分に矛盾するようなことを、その遠慮深さのゆえに、あえて言うようになってしまわれたほどだからね。それも、一番重大な事柄に関してなのだよ。

B ところが、君のほうは、ほかの人たちが持っていない、それらの性質を全部そなえているわけだ。すなわち、まず、君の受けた教育は充分なものであって、その点はアテナイ人の多くが認めるところであろう。その上また、君はぼくに対して好意的でもある。それには、どういう証拠があるかって？　よろしい、ぼくのほうで君に話してあげよう。ぼくはちゃんと知っているのだよ、カリクレス、君たちは四人組んで、知恵の仲間をつくっていたのだということをね。その四人とは、君と、アピドナイ区の人テイサンドロスと、アンドロティオンの子のアンドロンと、そしてコラルゲイス区の人ナウシキュデスなのだ。(1) そして、いつの時だったか、ぼくは、君たちがどの程度まで知恵を修める(哲学する)べきかということの、相談をし合っているのを耳にしたことがある。そして

C そのとき、君たちの間では、何かこのような意見が勝ちを占めたのを、ぼくは知っているのだ。つまりそれは、あまり哲学に熱心になって、細かいことにまで立ち入ることはすまい、というような意見だったのだ。いな、必

D 要以上にそういう知恵がつきすぎ、知らないうちに人間が台なしになっていることのないように、互いに気をつけようと君たちは忠告し合っていたのだ。さて、ぼくはいま君から、君が君自身の一番親しい仲間の者たちにしていたのと同じ忠告を、このぼくにもしてくれるのを聞くわけだから、君がぼくに対してほんとうに好意的であるということの充分な証拠を、ぼくは持っているわけだ。さらにまた、君が遠慮をしないで、何でも率直に話してくれるような人間だということは、君が自分で言っていることでもあるし、少し前の君の話ぶりが、それを裏書きしてもいるのだ。

E だから、これらの点に関しては、今や明らかに、つぎのようなことが言えるわけだ。すなわち、もし君が議論のなかで何かのことをぼくに同意してくれるなら、そのことはもうそれで、君とぼくとによって充分に吟味されてしまったことになるだろうし、もはやそれ以上、ほかの試金石にかけて調べてみる必要はないことになるだろう。なぜなら、君がそのことを承認してくれたのは、知恵の不足によるのでもなければ、遠慮のしすぎによるのでもないだろうし、さらにはまた、その承認によって、ぼくを欺こうとしているわけでもないだろうからね。なぜな

1 カリクレスの仲間であるこれら三人の人物については詳細不明。

テイサンドロスは、ここで名前があげられているだけである。

アンドロンは、『プロタゴラス』に描かれている富豪カリアス邸の集会に出席し、ソフィストのヒッピアスを取り巻いていた連中の一人として、その名前があげられている(315C)。彼は前四一一年の「四〇〇人政府」の一員で、また後にアンティポンの告発者となった人と同一人かもしれない。

ナウシキュデスは、クセノポンの『ソクラテスの思い出』第二巻(七の六)やアリストパネスの『女の議会』(四二六行)にあげられている人物と同一人なら、押麦製造で産をなし、たびたび公儀の費用を負担した人物であった。

ら、君は自分でも言っているように、ぼくに好意をもつ友人なのだから。したがって、君とぼくとの間で意見が一致すれば、もうそれでほんとうに真理の究極に達したことになるだろう。

ところで、カリクレスよ、何について考察するのが最も望ましいかといえば、それは、君がぼくに対して非難していた、あの問題についてであろう。つまり、ひとは年老いたると若いとを問わず、どのような人間であるべきか、また、どんな仕事にどの程度まで従事すべきか、という点について考察することであろう。というのは、

488

もしこのぼくが、ぼく自身の生活において、何か間違ったことをしているのであれば、この点はよく承知しておいてもらいたいのだが、ぼくがそんな過ちを犯しているのは、故意にそうしているのではなく、ぼくの無学のためだからね。だから、君としては、初めにぼくを諭してくれていたときの調子を最後まで忘れることなく、ぼくが従事しなければならないのはどんな仕事か、また、どうすればそれを身につけることができるかを、ぼくに充分わかるように明示してほしいのだ。それで、もしもぼくが、今は君に同意しておきながら、後になってその同意しておいたとおりに行なっていないのを、君が見つけたとすれば、そのときにはもう、ぼくなんてまったく仕

B

様のない馬鹿者だと考えてくれたまえ。そうして、もうそれ以後は、何の取柄もない者とみなして、ぼくを諭すようなことはしてくれなくてもいいよ。

ところで、もう一度初めから、くり返して言ってくれないかね。君にしても、またピンダロスにしても、「自然の正義」とは、どういうことだと主張するのかね。それは、強者が弱者のものを力ずくで持ち去り、優者が劣者を支配し、そして立派な者が下らない者よりも多く持つということなのかね。まさか君は、正義が、これとは何か別のことだと言うのではあるまいね。いや、ぼくの記憶に間違いはないのかね。

カリクレス　そう、それがあのときもぼくの言っていたことだし、今でもその主張に変りはない。

四三

ソクラテス　しかし、どうだろう。君が「優者」と呼んでいるのと、「強者」と呼んでいるのとは、同じ人のことかね？　じつは、あのときにも、君がいったいどういうことを言おうとしていたのか、ぼくにはよく理解できなかったからなのだが。いったい、どちらかしら？　君が強者と呼んでいるのは、力のある人たちのことであり、それで、力のない人たちは、力のある人に服従しなければならないというわけかね。つまり、そういう意味であのときにも君は、大国はより強いのだから、すなわち、より力があるのだから、自然の正義に従って、小国へ侵攻するのだと、こう指摘していたように思われるのだが。「より強い」と、「より力がある」と、そして「より優れている」とは、同じ意味だという考えでだね。――それとも、より優れてはいるが、しかし、より弱くて、また力も劣る、ということがあるのか。あるいはまた、より強くはあるが、しかし、より劣悪である、ということがあるのか。いやそれとも、「より優れている」ということと、「より強い」ということとの定義は、同じなのかね。どうか、まさにその点を、はっきり規定してくれたまえ。「より強い」と、「より優れている」と、そして「より力がある」とは、同じ意味なのかね、それとも、ちがうのかね。

カリクレス　いや、いいとも。ぼくのほうで、あなたにはっきり言っておこう、それらは同じ意味なのだ。

ソクラテス　それでは、どうだろう。多数の者は一人よりも、自然本来においては、より強いのではないかね。そして、まさにその多数の者が、一人に対抗して、法律を制定しているのだが、君もさっき言っていたようにだ

(488)

ね。(1)

カリクレス それはもちろん、そうだ。

ソクラテス そうすると、多数の者の定める法規は、より強い人たちの定める法規だ、ということになるね。

カリクレス たしかに。

E **ソクラテス** ではまた、より優れた人たちの定める法規でもある、ということになるのではないかね。なぜなら、君の説によると、より強い人たちというのは、より優れた人たちのことであるはずだから。(2)

カリクレス そうだ。

ソクラテス だとすると、彼ら多数の者の定める法規は、自然本来において、美しいものだということになるのではないかね。とにかく、それはより強い人たちの定めるものなのだから。

カリクレス それは認めよう。

ソクラテス さて、それなら、その多数の者である大衆は、法を定めるにあたって、そもそもこんなふうに考えているのかね。つまり、これもまたさっき君が言っていたとおりだけれども、(3)平等に持つことが正しいのであり、また、不正を行なうほうが不正を受けるよりも醜いのだと。どうだね、そのとおりかね、それとも、ちがうのかね。そして、今度はまた君のほうが、遠慮をしたために、ここでぼくによってつかまることのないように気をつけてくれよ。……大衆はそう考えているのかね、それとも、考えてはいないのかね。つまり、より多く持つことではなくて、平等に持つことが正しいのであり、また、不正を行なうほうが不正を受けるよりも醜いのだと。

489 さあ、言い惜しみをしないで、その質問に答えてくれたまえ、カリクレス。君がもしぼくに同意してくれるなら、

ものの見分けの充分につく人が同意してくれたというわけで、ぼくの考えは、すでに君から確証ずみということになるだろうから。

カリクレス いや、たしかに、大衆というものは、そんなふうに考えているよ。

ソクラテス してみると、たんに法律習慣の上のことだけではないのだね、不正を行なうほうが不正を受けるよりも醜いとか、また、平等に持つことが正しいとかいうのは。それはまた、自然の本来においても、そうなのだね。したがって、君がさきほど言っていたことは、どうやら、本当ではなかったようだし、また、ぼくに対してこう言って非難していたのも、あたっていなかったということになるようだね。つまり、君の言うところによると、法律習慣と自然とは相反するものであり、そしてまさにそのことをぼくはよく承知していて、議論の中でずるいことをしながら、ひとが自然の上でのことを考えて話をすれば、ぼくはそれを法律習慣のほうにもっていくし、反対に、ひとが法律習慣の上でのことを考えて話をするなら、ぼくはそれを自然のほうにもっていくのだ、ということだったのだが。

B

四四

カリクレス 〔傍白〕この人ったら、いつまでたっても、馬鹿話をやめることはないだろうなあ……

1 483C～484A 参照。
2 πολύ を、ヘルマンの提案に従って、που に変える。
3 483C, 483E～484A 参照。

まあ、言ってくれたまえ、ソクラテス。あなたはそんないい年をしていながら、語句の穿鑿(せんさく)をしたり、また、C ひとが言い損いでもすれば、それをもっけの幸いと考えたりして、恥ずかしくはないのかね？　なぜなら、ぼくがより強い者であると言っているのは、より優れた者であるということとは別の、何かだとでも思っているのかね。「より優れている」ということと、「より強い」ということとは、同じだというのがぼくの主張であることは、さっきからあなたに言っているではないか。それとも、ぼくの言う意味が、奴隷たちだとか、またおそらくは身体が頑健であるということ以外には、何の取柄もない種々雑多な連中だとか、そういう屑のような連中がかき集められて、そしてこの連中が言い出すことなら、それがそのまま法規になるのだと、そんなことだとでも思っているのかね。

ソクラテス　いや、それならそれでいいよ、世にも賢明なカリクレス君。そういう意味なのかね、君が言おうとしているのは。

カリクレス　むろん、そういう意味だとも。

D **ソクラテス**　いや、それはね、君、ぼく自身もさっきから、君が「より強い」と言っているのは、何かそのような意味のことだろうと、見当はつけていたのだよ。それでいて、ぼくがしつこく訊ねるわけは、君が言おうとしていることの意味を、はっきり知りたいと思う気持が強いからなのだ。というのは、むろん君は、二人のほうが一人よりも優れているのだとか、また、君の奴隷たちは君よりも体力が強いからといって、それで君よりも優れているのだとか、そんなふうに考えているのではあるまいからね。さあ、それなら、もう一度初めから、言ってみてくれないか。君がより優れた人たちだと言っているのは、いったい、どういう意味なのかね。それは、体

力の強い人たちのことではないということになったのだから。それに、お偉い方、もう少しお手柔かにぼくを教えて、先へ導いてくれないかね。そうでないと、君の講義に出席するのは、やめなければならなくなるからね。

E

カリクレス　皮肉を言うのだね、ソクラテス。

ソクラテス　いや、皮肉ではないよ、カリクレス、それには、あのゼトスを誓いに立ててもいいのだ。[1] 君のほうこそ、その人物を借りて、さっきはさんざん、ぼくに皮肉を言っていたのだが。しかし、それはそれとして、さあ、言ってみたまえ。君がより優れた人たちだと言っているのは、どんな人たちのことかね。

カリクレス　立派な人たちのことを、ぼくは言っているのだよ。

ソクラテス　それごらん。君自身、あれこれと言葉を並べるだけで、その内容については何一つ明らかにしてくれないではないか。それなら、この点について、君は言ってくれるつもりはないだろうかね？　君の言う優者や強者とは、より思慮のある人たちのことかね、それとも、誰かほかの人たちのことかね。

カリクレス　いや、ゼウスに誓って、その思慮のある人たちのことを、ぼくは言っているのだ。それは断じてそうだとも。

490

ソクラテス　そうすると、君の説に従えば、一人でも思慮のある者なら、万人の思慮のない者たちよりも、より強いということがしばしばあるわけだね。そして、この思慮のある者が支配し、他の思慮のない者たちは支配

1　先に(485 E sqq.)カリクレスは、自分の説の証人として、エウリピデスの劇『アンティオペ』のなかの人物、ゼトスを持ち出し、その人物の言葉を借りて、ソクラテスにさんざん毒づいていたのであるが、ソクラテスはその同じ人物を自分の言葉の誓いに立てることによって、カリクレスに応酬するわけである。

されるべきであり、また、支配する者は支配される者たちよりも多く持つべきである、というわけなのだね。というのは、その点が君の言いたいところだと思われるからだが。そしてぼくは、言葉尻を追いかけているのではないのだよ。——もしも、その一人の者が、万人の者たちよりも、より強いのであればだね。

カリクレス そう、それがぼくの言おうとしていることなのだ。つまり、ぼくの考えでは、より優れているなら、すなわち、より思慮があるなら、その人はくだらない連中を支配し、そして彼らよりも多く持つという、そのことこそ「自然の正義」であるということなのだから。

四五

B **ソクラテス** そこで、ちょっと待ってくれたまえ。今度はまた、君はいったい、どういうことを言おうとしているのかしら？ かりにもしわれわれが、現在そうであるように、同じ場所に大勢集まっていて、そして数多くの食べ物や飲み物が、われわれの共有になっているとしてみよう。しかも、われわれのなかには、強健な人もおれば、弱体な人もいるというふうに、われわれは多種多様な人間であるとしよう。ただし、われわれの中の一人は、医者であるがゆえに、飲食物のことについては、ほかの者よりも思慮があるけれども、しかし当然のことながら、ある人たちよりは強健であるが、他の人たちよりは弱体であるとしよう。さて、そういう場合には、その医者は、飲食物のことについて、われわれほかの者よりも思慮があるのだから、したがって、より優れているし、また、より強いということになるのではなかろうか。

カリクレス それはたしかに、そうなる。

C

ソクラテス　それなら、はたしてその医者は、より優れた者であるという理由で、それらの食べ物のなかから、われわれほかの者よりも、多くの分け前にあずかるべきだろうか。それとも、その医者は、支配する資格があるという点では、すべての食べ物を分配してやる責任があるけれども、しかし、それらの食べ物を消費して、自分の身体のために使うという点では、もし害を受けまいとするのであれば、欲ばってはならないのであって、ある人たちよりはもちろん多く取るとしても、他の人たちよりは少なく取るべきだろうか。そして、もしたまたまその医者が、みなの誰よりも一番身体が弱かったとすれば、一番優れた人ではあるにしても、みなの誰よりも一番少なく取るべきだろうか。どうだね、カリクレス、そうではないのかね、君。

カリクレス　あなたの話といえば、食べ物だとか、飲み物だとか、医者だとか、つまりはそういうくだらぬことばかりなのだ。しかし、ぼくの言っているのは、そういうことではないよ。

D

ソクラテス　君がより優れた人と言っているのは、より思慮のある人のことではないのかね。どうだね、これは認めるのかね。認めないのかね。

カリクレス　それは認める。

ソクラテス　ところで、より優れた人は、より多く持つべきであると、こう君は言っているのではないのか。

カリクレス　うん。だがそれは、食べ物のことでもなければ、飲み物のことでもないのだ。

ソクラテス　ああ、わかったよ。でなければ、たぶん、着物のことだろうね。そして、機織りの一番上手な人が、一番大きな着物を持つべきであり、また、だれよりも美しい着物を、だれよりもたくさん身につけて、歩き廻るべきだろうね。

カリクレス　なに、着物だって？　どんな着物のことかね？

ソクラテス　でなければ、履物のことだろう。きっと、そのことについて最も思慮があり、最も優れた人が、

E 余計に取るべきだろう。つまり靴屋が、たぶん、だれよりも大きな履物を、だれよりもたくさん履いて、そこらへんを濶歩すべきだろうね。

カリクレス　ああ、今度は履物かね。どんなのをだって言うのかね？　ほんとうに、くだらぬことばかり言っている！

ソクラテス　いや、もしも君の言うのが、そういうことではないとすれば、たぶん、こういうことかもしれない。たとえば、土地のことについて思慮があり、そして卓越した立派な農夫、その人こそおそらく、種子を余計に取るべきであり、そしてできるだけ多くの種子を、自分の土地に使うべきだろうね。

カリクレス　よくもまあ、いつまでもそう同じことばかり言えるものだねえ！　ソクラテス。

ソクラテス　いや、それは、言っていることが同じだというだけではないのだよ、カリクレス、その上また、同じ事柄についても言っているのだ。

491 **カリクレス**　神々に誓って、そのとおりだとも。まったくの話、あなたはいつだって、靴屋だとか、洗い張り屋だとか、肉屋だとか、そして医者だとかのことばかり話していて、いっこうにやめようとはしないのだ。まるでぼくたちの議論は、その人たちのことを問題にしてでもいるかのようにね。

ソクラテス　それなら、どんな人たちのことを問題にしているのか、さあ、君のほうで言ってくれたまえ。より強くてより思慮のある人は、いったい、何を余計に持つなら、その余計に持つことが正しいことになるのかね。(1)

それとも君は、ぼくが案を出しても、受けつけてくれないし、またそうかといって、自分からすすんで言ってくれることもないのだろうか。

カリクレス　いや、ぼくとしては、もうさっきから言っているはずだ。まず第一に、ぼくの言う強者とは、どんな人たちのことかといえば、それは、靴屋でもなければ、肉屋でもないのだ。そうではなく、国家公共の事柄 B に関して、それはどうしたならよく治められるか、ということに思慮のある者が、もし誰かいるとすれば、その人たちのことなのだ。そして、たんに思慮があるだけではなく、その上また勇気もある人たちのことなのだ。つまり、思いついたことはなんでもやり遂げるだけの力をもっていて、そして精神の柔弱さのために、途中でへこたれてしまうことのない人たちのことなのだ。

四六

ソクラテス　ほら、わかるかね、世にもすぐれたカリクレス君、君がぼくを非難するのと、ぼくが君を非難するのとは、同じ点においてではないということが。なぜなら、君は、ぼくがいつも同じ話をするといって、それでぼくを咎めるけれども、しかしぼくのほうは、それとちょうど正反対の理由で、君を咎めるからなのだ。つま C り、君はいつだって、同じ事柄について同じことを言わずに、ある時には、優者や強者とは、より力のある人た

1　この箇所はドッヅの校本に従って、οὔκουν σὺ ἐρεῖς περὶ τίνων; ⟨τίνων⟩ ὁ κρείττων .... πλέον ἔχων ... πλεονεκτεῖ; と読む。

ちのことだと規定したし、つぎにはまた、より思慮のある人たちのことだと規定したのだが、今はまた今で、何か別なものを持ち出してきているからだ。すなわち、強者や優者とは、勇気のある人たちのことだと、君によって言われているのだから。しかし、どうか、君、君の言う優者や強者とは、いったい、どんな人たちのことであり、また何についてそうであるのかを言って、このへんで片をつけてくれないかね。

カリクレス　いや、ぼくとしては、もう言ってしまったはずだよ。それは、国家公共の事柄に関して思慮があり、勇気のある人たちのことだ、とね。なぜなら、その人たちこそ、国家を支配するのがふさわしいし、そしてD正義とは、その人たちがほかの人たちよりも、つまり、支配する人たちが支配される人たちよりも多く持つという、そのことなのだから。

ソクラテス　では、どうだろうね。自分自身のことは、君、どうなっているのかしら？　はたして、その支配する人たちは、自分自身をなんらかの意味で支配しているのだろうか、それとも逆に、自分自身については、支配されたままになっているのだろうか(1)。

カリクレス　というと、それは、どういう意味かね。

ソクラテス　その人たちのひとりひとりが、自分で自分自身を支配しているのか、と聞いているのだよ。それとも、そんなことは、つまり自分で自分自身を支配するということは、ぜんぜん必要のないことであって、ほかの人たちを支配すれば、それで足りるのかね。

カリクレス　その、「自分自身を支配する者」というのは？

ソクラテス　いや、何もこみいったことではなく、世の多くの人たちが言っているとおりの意味だよ。すなわち、自分で自分自身にうち克ち、節制する人のことで、つまり自分のなかにあるもろもろの欲望や、それに伴う快楽を支配する者のことなのだ。

E

カリクレス　なんてあなたは甘い人なんだろうねえ！　あなたの言う節制家とは、なあんだ、あのお人よしの、とんま連中のことかね。

ソクラテス　いや、どうしてそんなことがありえよう。ぼくが言おうとしているのはそんな意味でないということは、だれだってわからぬ人はないはずだが。

カリクレス　いやいや、あなたの言っているのは、絶対にそれにちがいないのだ、ソクラテス。けれども、人間、およそどんなものにもせよ、何かに隷属しているのであれば、どうして幸福になれるだろうか。いや、むしろ、こんなふうにするのが、自然本来における美しいこと、正しいことなのだ。それを今、ぼくはあなたにざっくばらんに話してみよう。つまり、正しく生きようとする者は、自分自身の欲望を抑えるようなことはしないで、欲望はできるだけ大きくなるがままに放置しておくべきだ。そして、できるだけ大きくなっているそれらの欲望に、勇気と思慮とをもって、充分に奉仕できる者とならなければならない。そうして、欲望の求めるものがあれば、いつでも、何をもってでも、これの充足をはかるべきである、ということなのだ。しかしながら、このよう

492

1　このソクラテスの言葉については、語句の切り方や意味のとり方に問題があって、校訂者によって各人各様の修正や削除の試みがなされているが、写本の読み方を最大限に守りながら、しかも最も妥当な解釈と思われるのは、バーネットやクロワゼの読み方なので、今は一応それに従って訳しておく。

なことは、世の大衆にはとてもできないことだとぼくは思う。だから、彼ら大衆は、それをひけ目に感じるがゆえに、そうした能力のある人たちを非難するのだが、そうすることで彼らは、自分たちの無能力を蔽い隠そうとするのである。そして、放埒はまさに醜いことであると主張するのだが、ぼくが先ほどの話の中で言っておいたように、こうして彼らは、生まれつきすぐれた素質をもつ人たちを奴隷にしようとするわけなのだ。そしてまた、自分たちは快楽に満足をあたえることができないものだから、それで節制や正義の徳をほめたたえるけれども、それも要するに、自分たちに意気地がないからである。

B　けれども、始めから王子の身分に生まれた人たちだとか、あるいは、自分みずからの持って生まれた素質によって、独裁者の地位であれ、権力者の地位であれ、何らかの支配的な権力を手に入れるだけの力をそなえた人たちだったとしたら、およそそのような人たちにとっては、節制や正義の徳よりも、何がほんとうのところ、もっと醜くて、もっと害になるものがありうるだろうか。その人たちには、数々のよきものを享受することが許されているし、しかもそれを妨げるものは何もないのに、自分たちのほうからすすんで、世の大衆の法律や言論や非難を、自分たちの主人として迎え入れるようなことをしたのではね。いや、彼らは、正義や節制の徳という、その結構なものによって、かえって不幸にされるのだということは、これはどうしても避けられないのではないか

C　ね、もしも彼らが、自分たちの味方の者に対して、敵に与えるよりも、何ひとつ余計に分けてやることをしないというのではね、しかも、せっかく自分が支配している国のなかで、そのありさまだとしたならばだよ。

いや、ソクラテス、真実には――その真実を、あなたは追求していると称しているのだが――こうなのだ。つまり、贅沢と、放埒と、自由とが、背後の力さえしっかりしておれば、それこそが人間の徳(卓越性)であり、ま

た幸福なのであって、それ以外の、ああいった上べを飾るだけの綺麗事や、自然に反した人間の約束事は、馬鹿げたたわごとにすぎず、何の値打ちもないものなのだ。

四七

D **ソクラテス** ほんとうに憚ることもなしに、カリクレスよ、君は率直に語って、議論を展開するのだね。ほかの人たちなら、心には思っていても、口に出しては言おうとしないようなことを、君はいま、はっきりと述べてくれているのだから。それでは、ぼくは君にお願いしておくけれど、どんなことがあっても、その調子をゆるめないようにしてくれたまえ。ひとはいかに生きるべきかということが、ほんとうに明らかになるためにね。そこで、まあひとつ、ぼくに聞かせてくれたまえ。君の主張だと、もしひとが、人間としてあるべきような者になろうとするなら、もろもろの欲望を抑えてはならず、むしろ、それらをできるだけ大きくなるがままに放置しておいて、ともかく何とかして、それらに満足をあたえるように工夫すべきであり、そしてそれこそが人間の E 徳であると、こう言っているのだね。

カリクレス そう、それがぼくの主張していることだ。

ソクラテス そうすると、何ひとつ必要としない人たちが幸福であると言われているのは、間違いだということになるのだね。

カリクレス そう、間違いだとも。だって、もしそうだとすれば、石や屍が一番幸福だということになるだろうから。

ソクラテス　しかし、それにしても、君の言うとおりだとしたら、〔石や屍に劣らず〕生もまた、恐ろしいものになるのだがね。というのは、いいかね、エウリピデスがつぎの詩句のなかで言っていることが、よし真実だとしても、ぼくは別に驚きはしないだろうからだ。つまり、彼の言っているのは――

誰が知ろう、この世の生は死であって
死こそがまことの生であることを

というのだ[1]。そこで、われわれはおそらく、ほんとうは死んでいるのかもしれない、としてもだよ。というのは、493 ぼくはかつて賢者たちの一人[2]から、実際、こんな話を聞いたことがあるからだ。つまり、その話によると、われわれは現在死んでいるのであって、肉体（ソーマ）がわれわれにとっての墓（セーマ）であり、また、魂のなかのいろいろな欲望が宿っている部分は、説得にまけて、あれこれと考えを変えるような性質のものなのである。そこで、ある才智にたけた男が――それはたぶん、シケリアかイタリアの人だったと思うが――その部分についてこんな物語を作ったというのである。すなわち、その部分は、たやすく説得されて（ピタノス）、信じやすいものであるところから、言葉を少しもじって、その部分に甕（ピトス）という名をつけ、また、思慮の足らない間抜けな連中（アノエートス）のことを、孔のあいた抜け作（アミュエートス＝秘儀にあずかっていない人）と呼び、さらに、B そうした思慮の足らない連中の魂のなかの、いろいろな欲望が宿っている部分、つまり、その放埒でしまりのない部分を、貪欲で満ち足りることがないというところから譬えて、孔のあいた甕であるというふうに言った、というのである。

かくして、この男が示そうとしていることは、カリクレスよ、君が考えているのとはちょうど正反対のことに

なるわけだ。すなわち、ハデス——というのはむろん、見えないところ(アイデス)という意味だが——そのハデスの国(冥界)にいる者たちの中では、この連中、つまり秘儀にあずかっていない人たちこそ一番不幸であり、彼らは孔のあいた甕のなかへ、これまたそういった孔のあいた容器である篩でもって、くり返し水を運びつづけている、というわけなのだ。ところで、その男が篩と言っているのは、ぼくにこの話をしてくれたあの賢者の語るところによると、魂のことだというのである。そして、魂が——といってもそれは、思慮の足らない連中の魂のことだけれども——篩にたとえられたのは、その魂は信念がないのと、忘れっぽいのとで、何ごともしっかりと持ちこたえることができないから、それで孔だらけの状態にあるとみなされたためだ、ということである。

C

なるほど以上の話には、たしかに、いくらか奇妙に聞こえる点があるかもしれない。だがしかし、もしなんとかぼくにできるものなら、ぼくとしては君に証明してみせて、君が考えを入れかえてくれるように説得したいと

1　この詩句は、エウリピデスの今は失われた作品『ポリュイドス』からの引用であると思われる(Fr. 639(Nauck))。『プリクソス』という作品にも、これと同じように、「誰が知ろう、死と呼ばれているものは生であって、生こそまことの死であることを」(Fr. 830(Nauck))という詩句があったと伝えられている。

2　これが誰を指すかは分らないが、オルペウス教・ピュタゴラス主義者たちのなかの誰かが漠然と指されているのであろう。「われわれは現在死んでいるのであって、肉体(ソーマ)がわれわれにとっての墓(セーマ)である」というのは、『クラテュロス』(400C)、『パイドン』(62B)、『パイドロス』(250C)、ピロラオス(Fr. 15(DK))などに言われていることから知られるように、オルペウス教・ピュタゴラス主義の教義であった。

なお、つぎの「ある才智にたけた男」は、明らかにいまの「賢者たちの一人」とは別人であるが、この人物についても、それはシケリアのアクラガス出身のエンペドクレスのことであるとか、あるいは南イタリアに根拠地をもったピュタゴラス学派のピロラオスを指しているとか、いろいろに推測されているけれども、特定することはむつかしい。

思っていることを、その話は明らかにしているのだ。つまりぼくは、満ち足りることのない放埒な生活の代りに、節度があって、いつでもその時どきのあり合わせのもので満足し、それで充分とするような生活のほうを、君が選ぶように説得したいわけなのだ。

D ところで、ぼくはなんとか君を説得して、そして君は、節度のある人たちのほうが、放埒な連中よりも幸福であるというふうに、考えを入れかえてくれているのだろうか(1)。それとも、ほかにもそのような物語をたくさんしたところで、君はやはり少しも考えを入れかえてはくれないのだろうか。

カリクレス それは、あとのほうが本当だろうね、ソクラテス。

四八

ソクラテス よし！ それなら、もう一つ別のたとえ話を、君にしてみることにしよう。それも今のと同じ学派から借りてきたものなのだが。つまり、思慮分別のある人と、放埒な人と、両者それぞれの生活について、君の言おうとしているのは、こういうことになるのかどうか、まあ、よく見てごらん。——いま二人の人がいて、そのどちらもたくさんの甕をもっているとしてみよう。そして、一方の人が持っている甕は、どれも傷のない健

E 全なもので、中は充満しているとしよう。つまり、その一つには酒が、他の一つには蜜が、もう一つには乳が、そしてその他数多くの甕にも、それぞれ数多くのものが一杯はいっているとしよう。ただし、それらの甕の一つ一つを充たしている液体は、世に稀れなものであり、なかなか手に入れにくく、数々の困難な労苦を伴って、やっと手にはいるものだとしておこう。さて、その人のほうは、いちど甕を充たしてしまえば、あとはもう注ぎ入

れることもしなければ、そのことで気をもむようなこともなく、その点に関しては落ちついておられるわけだ。ところが、もう一方の人にとっては、液体のほうは、前の人の場合と同じように、それを手に入れることは、むつかしいにはしても、可能であるのだが、しかし肝心の、それを入れる容器のほうが、孔があいていたり、ひび割れがしているものだから、したがって、夜となく昼となく、たえずそれを充たさなければならないし、もしそうしなければ、極度の苦痛を味うことになるわけだ。

494

さて、それでは、両者それぞれの生活がそのようなものだとするときに、放埒な人の生活のほうが、節度のある人の生活よりも幸福であると、はたして君は言うだろうか。どうだね、そんなふうにいえば、ぼくはなんとか君を説得して、節度のある生活のほうが、放埒な生活よりもすぐれたものであることを、承認させることになるだろうか。それとも、これでもまだ説得することにはならないのかね。

カリクレス 説得するまでにはいかないね、ソクラテス。なぜなら、自分の甕を充たしてしまったあの男には、もはや快楽なるものは一つもないのだから。いや、そんなのは、ぼくがさっき言っていたように、まるで石のような生活だよ。充たしてしまったからには、もはやその人は、喜びも苦痛も感じることなく生きることになるのだから。しかし、快適な生活とは、できるだけたくさん流れ込むという、まさにそのことにあるのだ。

B

ソクラテス そう、それでは、たくさん流れ込むとするなら、出て行くもののほうも、たくさんでなければならないし、したがって、それが流れ出るための孔も、何か大きなものでなければならぬ、ということになるので

1 バーネット、クロワゼ、ラム以外の校本ではすべて、μετατίθεσαι と読んでいる。これに従う。

はないかね。

カリクレス それはたしかに、そうなる。

ソクラテス 今度はまた、〔あの貪欲で有名な〕たげりの生活のことか何かを、君は言おうとしているのだね、屍や石の生活のことではなしに。それではまあ、言ってもらうことにしよう。君が快適な生活と言っているのは、たとえば、飢えていて、その飢えているときに食べるということ、そういうことなのかね。

カリクレス そうだ。

C **ソクラテス** それからまた、渇いていて、その渇いているときに飲むということ、そういうこともかね。

カリクレス そうだとも。それにまた、ほかのもろもろの欲望だって、全部持っていて、そしてそれらを充たす力があるのだから、充たして、喜びを感じながら、幸福に生きるということを言っているのだ。

四九

ソクラテス ああ、これはよく言ってくれた、すばらしいよ、君！ 最初もそうだったように、君は最後までその調子でつづけてくれたまえ。そして遠慮をして、尻込みすることのないようにしてもらいたいね。しかし、そういうぼくだって、どうやら、尻込みしてはならないようだ。それではまず、こういう点について言ってもらうことにしようか。ひとが疥癬にかかって、かゆくてたまらず、心ゆくまで掻くことができるので、掻きながら一生を送り通すとしたら、それでその人は、幸福に生きることになるのだろうか、どうだね。

D **カリクレス** なんて突拍子もないことを言い出す人なんだろうね、あなたは、ソクラテス。何のことはない、

あなたはまったくの大道演説家だよ。

ソクラテス　うん、それだからこそ、カリクレス、ぼくはポロスやゴルギアスさんの度肝を抜くことにもなったのだし、また尻込みさせることにもなったのだ。しかし、君のほうは決して、たじろぐこともなければ、尻込みすることもないだろう。なにしろ、君は勇気のある人だからね。しかし、それはとにかく、いまのぼくの質問に、ただ答えてくれたまえ。

カリクレス　それなら、言わせてもらうが、その掻いている人だって、快い生き方をしていることにはなるだろう。

ソクラテス　では、快い生き方だとすると、それは幸福な生き方でもあるわけではないか。

カリクレス　たしかに。

E

ソクラテス　それはただ、頭だけを掻きたいときのことかね？　……それとも、さらにもっと何かを君に訊ねてみることにしようか。さあ、よく見てごらん、カリクレス、もしだれかが、その頭とか何とかにつながることを、つぎつぎと全部君に訊ねるとすれば、君はそれに対してどう答えるだろうか？　そして、そういったようなことがらの極点にあるのは、男娼たちの生活なのだが、その生活こそは恐るべきものであり、恥ずべきものであり、また惨めなものではないのか。それとも君は、その連中が、欲するものを存分に充たしているなら、それで

1　「たげり」とかりに訳した原語は「カラドリオン」である。千鳥科（charadriadae）にぞくする鳥であることは間違いないと思われるが、正確にそれが何という名の鳥であるかは、よく分らない。古注には、それはたいへん貪欲な鳥で、「食べるがはやいか排泄する」と言われている。

幸福なのだと、あえて言うだろうか。

カリクレス　そんなところへ話をもって行って、あなたは恥ずかしくはないのかね、ソクラテス。

ソクラテス　というと、ここへ話をもって来たのは、このぼくなのかね、憚りのない人よ。それともそれは、どんな仕方で喜びを感じているのであろうと、とにかく喜びを感じている者が幸福なのだと、無条件にそう主張して、快楽のなかでもどんなのがよい快楽で、どんなのが悪い快楽であるかを区別しないような人、そういう人のほうではないのかね。

495

しかし、それはそれとして、今からでもよいから、言ってみてくれないか。君は、快と善とは同じものだと主張するのかね、それとも、快のなかには善くないものもあると言うのかね、どちらだろう？

カリクレス　別のものだと主張すれば、ぼくの議論は首尾一貫しないことになるかもしれないから、まあ、そうならないように、両者は同じものだと主張しておこう。

ソクラテス　君は最初の約束を裏切るのだね、カリクレス。それでは、君はもうぼくと一緒に、事の真相を充分に究明することはできなくなるだろう。かりにも君が、君自身の思うところに反したことを、言おうとするのであればだよ。

B

カリクレス　それはあなただって、そうしているのだから、ソクラテス。

ソクラテス　いや、それなら、ぼくのほうも、もしほんとうにそうしているのなら、正しいやり方をしていないということになる。それは君の場合も同じだけれども。しかし、まあ、君、よく注意して見てごらん、何がなんでも喜びを感じてさえいれば、それが善いことだということには、おそらくならないだろう。なぜなら、もし

そのとおりだとすると、今しがたぼかして言われたような、ああいった数多くのいかがわしいことが、ほかにもまだいろいろと、それからの結論として出てくることは明らかなのだから。

カリクレス あなたの考えでは、そうかもしれないがね、ソクラテス。

ソクラテス しかし、君はほんとうに、カリクレス、そんなことをあくまでも言いはるつもりかね。

カリクレス もちろん。

五〇

C

ソクラテス それなら、君は本気でそう言っているものとして、ぼくたちは、君のその説に検討を加えてみることにしようか。

カリクレス いいとも、大いにやってもらおう。

ソクラテス さあ、それでは、そうしていいということだから、まず、つぎの点をはっきり区別してくれたまえ。――知識というものを、君は認めるだろうね?

カリクレス 認める。

ソクラテス また、知識(思慮)を伴うところの、ある種の勇気もあるのだと、君は今しがた言っていたのではないか。[1]

1 491B参照。

カリクレス そう、言っていた。

ソクラテス では、君が勇気と知識とを、二つのものとして語っていたのは、それらは別々のものだと考えるからではないか。

カリクレス たしかに。

ソクラテス では、どうだろう。快楽と知識とは、同じものかね、それとも、別のものかね。

D

カリクレス むろん、別のものだ。そんなことはわかりきっているではないかね、賢明この上ないあなたならね。

ソクラテス そもそも、勇気もまた、快楽とは別のものかね。

カリクレス もちろん。

ソクラテス さあ、それでは、以上のことを忘れないでおこうね。アカルナイ区の人カリクレスは、快と善とは同じものであるが、知識と勇気とは相互に別のものであり、また、それらは善とも別のものであると、こう言っていたのだということをね。

カリクレス ところが、アロペケ区の人ソクラテスは、それらのことをわれわれに同意しないのだ、とね。それとも、彼は同意するのかね？

E

ソクラテス いや、同意しないね。だが、カリクレスだって同意しないだろうとぼくは思うな、もしも彼が、自分で自分自身をしかるべく観察してみるならばだよ。なぜなら、まあ、答えてみてごらん。よくやっている(仕合せな)人たちは、悪くやっている(不仕合せな)人たちとは、反対の状態にあるのだと、君は考えないかね。

カリクレス　それは、そう考える。

ソクラテス　では、それらの状態が相互に反対のものだとすれば、それらの状態については、ちょうど健康と病気についての場合と、同じような関係が成り立たなければならないのかね？　というのはつまり、ひとは健康でありながら、同時にまた病気でもある、ということは無論ないだろうし、また健康と病気とから同時に離れる、ということもないだろうからね。

カリクレス　というと、それはどういう意味かね。

496

ソクラテス　たとえば、身体のどの部分についてでもいいから、それだけをとり出して調べてごらん。ひとは眼を病むことがあるね？　そしてそれには眼病という名前がついているのだね？

カリクレス　そんなことはわかりきっている。

ソクラテス　むろん、その人は、その同じ眼について、同時にまた健康でもある、ということはないだろうね？

カリクレス　それはぜったいにありえない。

ソクラテス　では、その人が、眼の病気から離れるときには、どうなのかね。はたしてそのときには、眼の健康からも離れるのであり、そこで結局は、両方の状態から同時に離れてしまっているのかね。

カリクレス　いや、決して。

B

ソクラテス　というのは、思うに、もしそうだとすれば、不可思議で、理屈に合わぬことになるのだからね。そうだろう？

カリクレス　それは大いにそうだ。

ソクラテス　だから、そうではなくて、ひとは交互に、それらの状態のどちらか一方を受けとったり、また失ったりするのだとぼくは思うが。

カリクレス　それは認めよう。

ソクラテス　それでは、強さと弱さについても、同じことが言えるのではないか。

カリクレス　そうだ。

ソクラテス　速さと遅さについてもかね。

カリクレス　たしかに。

ソクラテス　はたしてまた、もろもろの善いことや幸福と、それらに反対の、悪いことや不幸についても、ひとは交互に、それらのどちらか一方を受けとったり、また、どちらか一方から離れたりするのか。

カリクレス　それはどうしても、そうなるだろう。

c　**ソクラテス**　そうすると、ひとが同時にそれから離れたり、また同時にそれを持ったりするような、何かそういうものを、もしわれわれが見つけ出したとすれば、少なくともそれらのものは、明らかに、善と悪とではありえない、ということになるだろう。この点については、ぼくたちの意見は一致しているのかね？　それでは、よくよく考えた上で、答えてくれたまえ。

カリクレス　いや、考えるまでもなく、それには文句なしに同意する。

五一

ソクラテス　さあ、それでは、前に同意されていたことに戻ってもらうことにしよう。君の言っていた、あの飢えているということだが、それは快いことかね、それとも、苦しいことかね、どちらだと君は言おうとしていたのかね。ぼくが訊ねているのは、飢えていることそのことなのだよ。

カリクレス　むろんそれは、苦しいことだ。しかし、飢えているときに食べるのは、快いと言っているのだよ。

ソクラテス　わかったとも。しかしとにかく、飢えていることそのことは、苦しいのだね。そうではないのか。

D

カリクレス　そうだ。

ソクラテス　では、渇いていることも、そうではないのか。

カリクレス　それは大いにそうだ。

ソクラテス　それでは、もっと多くの例について訊ねて行くことにしようか。それとも、一般に欠乏や欲望は、どれもみな苦しいものであることを、君は認めてくれるかね。

カリクレス　認めるから、もう訊ねないでくれ。

ソクラテス　では、その点はそれでよいことにしよう。ところでしかし、渇いているときに飲むのは快いことであると、こう君は主張しているのだね、そうではないのか。

カリクレス　そう、それを主張しているのだ。

ソクラテス　それでは、君の言っているその言葉の中で、「渇いているときに」というのは、むろん、苦痛を

E

感じているときに、ということではないのか。

カリクレス そうだ。

ソクラテス 他方また、「飲む」というのは、欠乏を充たすことであって、そしてそれが快楽なのだね？

カリクレス そう。

ソクラテス それでは、飲むという面において、ひとは快い思いをしているのだと、こう君は言おうとしているのではないかね。

カリクレス たしかに。

ソクラテス ところでそれは、渇いているときに、なのだね？

カリクレス それは認めよう。

ソクラテス だからつまり、苦痛を感じているときに、なのだね？

カリクレス そうだ。

ソクラテス そうすると、こういう結論になるのだが、君はそれに気がついているかしら？ つまり君が、「渇いているときに飲む」と言う場合には、苦痛を感じていながら同時に快い思いをしているのだ、と言っていることになるのだが。それとも、そういうことが、同じ場所と時間とにおいて、両方ともに一緒に生ずるということはないのかね。それは魂においてであろうと、身体においてであろうと、君の好きなように、そのどちらの場合においてでもかまわないけれど。というのは、そのどちらの場合であっても、いまの問題には関係がないと思うからだが。どうだね、いま言われたような結論になるのかね、それとも、ならないのかね。

497

カリクレス　それは、そうなる。

ソクラテス　ところで、ひとはよくやっていながら、同時にまた悪くやっているということは不可能であると、こう君は主張しているのだ。

カリクレス　そう主張している。

ソクラテス　だがしかし、苦痛を感じていながら、快い思いをしていることは可能であるということに、君は同意したのだ。

カリクレス　そうらしいね。

ソクラテス　してみると、快い思いをしているのはよくやっていることではなく、また、苦痛を感じているのも悪くやっていることではない、ということになるのだ。したがって、快は善とは別のものになるわけだ。

カリクレス　何だかわからんけど、あなたは賢い人ぶって屁理屈をこねているのだよ、ソクラテス。

ソクラテス　いや、君にはわかってはいるのだけど、わからないようなふりをしているだけだよ、カリクレス。さあ、もう少し先まで進んでみてくれ。そうしたら、ぼくをたしなめようとしている君のほうが、どんなに賢い

B

人間であるかが、わかるだろう。(1)――われわれ一人一人は、飲むことによって渇きがやむとともに、それと同時にまた、快い気持のほうもやんでしまうのではないかね。

カリクレス　何のことだか、さっぱりわからないよ。

1　この箇所は、ὅτι ἔχων λῃρεῖς の語句の扱い方について異論があるが、いまは一応その語句を削除しておく。

ゴルギアス　いやいや、そんな言い方をしてはいけないよ、カリクレス。われわれのためにも答えてあげなさい。それでこの議論も片づくことになるのだから。

カリクレス　しかし、ソクラテスという人は、いつでもこうなのですよ、ゴルギアス。些細な、ほとんど取るに足らないようなことを問い返しては、人を反駁するのです。

ゴルギアス　しかし、そんなことは、君には何も関係がないではないかね。いずれにしろ、そういったふうな、ことの大小軽重の評価は、君の役目ではないのだから、カリクレス。さあ、ソクラテスの言うとおりになって、どうであろうと、彼の好きなように反駁させてごらん。

c

カリクレス　それなら、あなたは、そういった些細(スミクラ)で、けちなことを質問するがいいよ。とにかく、ゴルギアスさんにはそうするのがいいと思われるのだから。

五二

ソクラテス　君は仕合せな人だよ、カリクレス。「小秘儀」(スミクラ)にあずかるよりも先に、「大秘儀」のほうにあずかってしまったとはね。(1) しかしぼくは、それが許されていることだとは思っていなかったよ。それではまあ、君がさっき答え残したところから、答えてもらうことにしよう。われわれ一人一人は、渇いているのと快いのとを、両方とも一緒に感じなくなるのではないかね。

カリクレス　それは認めよう。

ソクラテス　ではまた、飢えているとか、その他もろもろの欲望と、それらの快楽とは、両方とも一緒になく

なるのではないか。

カリクレス　そのとおり。

ソクラテス　それならまた一般に、苦痛と快楽とは、両方とも一緒になくなるのではないか。

カリクレス　そうだ。

D

ソクラテス　ところが、これに反して、善いものと悪いものとは、君が同意していたように、両方とも一緒になくなるということはないのだ。それともしかし、今となっては、君はそれに同意しないのかね。

カリクレス　いや、同意するよ。で、それでいったい、どうなるのかね？

ソクラテス　どうなるかって、ねえ君、善いことは快いことと同じではなく、また、悪いことも苦しいことと同じではない、ということになるのだよ。なぜなら、それらはそれぞれ別々のものであるからこそ、一方の快と苦とは、両方とも一緒になくなるが、他方の善と悪とは、そうではないからだ。だとすれば、快いことが善いことと、あるいは、苦しいことが悪いことと、どうして同じものでありえようか。

1　カリクレスの「そういった些細で(タ・スミクラ)……」という言葉を受けて、「小秘儀」(タ・スミクラ〔ミュステーリア〕)と言われたのである。ここで「秘儀」(ミュステーリア)と言われているのは、アッティカ領内のエレウシスの地で行なわれた、大地母神デメテルとその娘コレ(ペルセポネ)を祭る祭儀のことであり、その秘儀は「小」と「大」に分かれていた。すなわち、まず春の早い時期に、コレの冥府からの帰還を祝って、アテナイ市において予備的な「浄め」の儀などの「小秘儀」が行なわれ、それに参加した者だけが、秋の収穫時に、今度はエレウシスの神殿において奥儀を受けることができたのである。

しかし、なんなら、つぎのような仕方でも調べてみたまえ。——というのは、そういうふうにしてみても、君

E

の説は首尾一貫したものにはならないだろうと思うからだ。でもまあ、よく見てごらん。——君が善い人たちを善いと呼ぶのは、その人たちにいろいろな善いことがそなわっているからではないかね。それはちょうど、美しさがそなわっている人たちを美しいと呼ぶようなものだが。

カリクレス それはそうだ。

ソクラテス では、どうだろう。無思慮で臆病な連中を、君は善い(すぐれた)人たちと呼ぶのかね。いや、そうではあるまい。少なくともさっきは、そうではなかったのだ。むしろ、勇気があり思慮のある人たちを、君は善い人たちだと言っていたのだ。それとも、君が善い人たちと呼ぶのは、その人たちのことではないのかね。

カリクレス それはたしかに、その人たちのことだ。

ソクラテス では、どうかね。思慮のそなわらない子供が、喜んでいるのを、君はこれまでに見たことがあるかね。

カリクレス あるとも。

ソクラテス しかし大人のほうは、思慮の足らない者が喜んでいるのを、君はまだ見たことはないのかね。

カリクレス それは、見たようには思うがね。しかし、それがいったい、どうしたというのかね。

ソクラテス いや、何でもないかもしれない。とにかくまあ、答えてもらおう。

カリクレス 見たことはある。

ソクラテス では、どうかね。思慮分別がありながら、苦痛を感じたり、喜んだりしているのは?

498

カリクレス　それも認めよう。

ソクラテス　ところで、どちらがより多く喜んだり、苦痛を感じたりするのかね。それは、思慮のある人たちのほうかね、それとも、無思慮な連中のほうかね。

カリクレス　それはどちらでも、大してちがいはないようにぼくは思うがね。

ソクラテス　いや、その答でも充分だ。ところで、戦場において臆病な男を、君はこれまでに見たことがあるかね。

カリクレス　もちろん、あるとも。

ソクラテス　では、どうだったかね。敵が退却して行ったときには、どちらがより多く喜んでいたように君には思われたかね。臆病な連中のほうかね、それとも、勇気のある人たちのほうかね。

B

カリクレス　それは両方ともそうだったように、ぼくには思われたがね。しかしまあ、そうでなかったとしても、とにかく、ほとんど同じ程度にそうだったよ。

ソクラテス　それはまあ、どちらでもいいよ。しかしとにかく、臆病な連中も喜ぶのだね？

カリクレス　それは大いに、そうだ。

ソクラテス　無思慮な連中だって、どうやら、そうらしいね。

カリクレス　そう。

ソクラテス　ところで、反対に、敵が攻め寄せて来るときには、臆病な連中だけが苦痛を感じるのかね、それとも、勇気のある人たちもそうなのかね。

カリクレス　それは両方ともだ。

ソクラテス　はたして、同じ程度にかね？

カリクレス　それはおそらく、臆病な連中のほうがより多くであろう。

ソクラテス　しかし、敵が退却して行くときには、彼らのほうがより多く喜ぶのではないかね。

カリクレス　たぶんね。

ソクラテス　それならば、無思慮な連中も思慮のある人たちも、また臆病な連中も勇気のある人たちも、君の言うところによれば、ほとんど同じ程度に、苦痛を感じたり、また喜んだりするのではないかね。いやむしろ、C 臆病な連中のほうが勇気のある人たちよりも、より多くそうするのではないかね。

カリクレス　そうだ。

ソクラテス　ところで、思慮があり勇気のある人たちは、善い(すぐれた)人たちであるし、また臆病で無思慮な連中は、悪い(劣った)人たちなのだね？

カリクレス　そう。

ソクラテス　したがって、その意味での善い人たちと悪い人たちとは、ほとんど同じ程度に喜ぶし、また、ほとんど同じ程度に苦痛を感じるのだね。

カリクレス　それも認めよう。

ソクラテス　それならはたして、善い人たちと悪い人たちとは、ほとんど同じ程度に善い人であるし、また、ほとんど同じ程度に悪い人なのかね。いや、悪い人たちのほうが、もっとずっと善い人なのかね。

五三

D

カリクレス いや、ゼウスに誓って、何を言っているのか、さっぱりわからないよ！

ソクラテス わからんのかね、君は。善い人たちが善いのは、いろいろな善いことがその人たちにそなわっているからであり、また悪い人たちが悪いのも、いろいろな悪いことがそなわっているからであるということ、そして、その善いこととは快楽のことであり、また悪いこととは苦痛のことであるということ、これが君の主張なのだがね。

カリクレス それはわかっている。

ソクラテス それなら、喜んでいる人たちには、彼らが喜んでいるかぎり、善いこと、つまり快楽がそなわっているのではないか。

カリクレス もちろん、そうだ。

ソクラテス では、善いことがそなわっているのだから、喜んでいる人たちは善い人なのではないか。

カリクレス そうだ。

ソクラテス では、どうかね。苦痛を感じている人たちには、悪いこと、つまり苦痛がそなわっているのではないか。

カリクレス そなわっている。

E

ソクラテス ところで、悪いことがそなわっているから、悪い人たちは悪いのだと君は主張しているのだ。そ

れとも、もはやそうは主張しないのかね。

カリクレス　いや、そう主張する。

ソクラテス　してみると、喜んでいる人は、誰であろうと、善い人であるし、反対に、苦痛を感じている人は、誰でも悪い人である、ということになるのだ。

カリクレス　たしかに。

ソクラテス　その喜んだり、苦痛を感じたりする程度が多ければ多いほど、それだけ多く、その人たちは善い人であったり、悪い人であったりするわけだね。また、その程度が少なければ少ないほど、それだけ少なくそういう人であるし、その程度がほとんど同じくらいであれば、ほとんど同じ程度にそういう人である、ということになるのだね。

カリクレス　そう。

ソクラテス　ところで君は、思慮のある人たちと無思慮な連中とは、また臆病な連中と勇気のある人たちとは、ほとんど同じ程度に喜んだり、また苦痛を感じたりするのだと、こう主張しているのではないのか。あるいはまあ、臆病な連中のほうがそうする程度はずっと多いのだとか……

カリクレス　そう主張している。

ソクラテス　では、いままでに同意されたことからは、どんな結論がわれわれに出て来るかを、ぼくと一緒に推理してみてくれないか。というのは、「よいことは二度でも三度でも話すのがよい」[1]ということだから。そしてまた、それをよく考えてみるのもだね。——思慮があり、勇気のある人は善い(すぐれた)人であると、こうわ

れわれは主張しているのだ。そうだろう？

カリクレス　そうだ。

ソクラテス　だが、無思慮で、臆病な人は悪い（劣悪な）人であると――

カリクレス　たしかに。

ソクラテス　しかしまた、喜んでいる人は善い人なのだと――

カリクレス　そう。

ソクラテス　だが、苦痛を感じている人は悪い人なのだと――

カリクレス　きまっている。

ソクラテス　ところで、いま言われた意味での善い人と悪い人とは、同じ程度に苦痛を感じたり、また喜んだりするのだと。しかしおそらくは、悪い人のほうがそうする程度はずっと多いのだろうと――

カリクレス　そう。

B

ソクラテス　そうすると、悪い人は、善い人と同じ程度に悪いことになるし、また同じ程度に善いことになるのではないかね。あるいはむしろ、悪い人のほうが善い人よりも、ずっと善いことになるのではないか。どうだね、こういう結論になるのではないかね。それはまた前に言われたような、ああいう結論にもなるけれどもね、(2)

1　これは古注によると、エンペドクレスの「必要なことは二度でも言うのがよい」(Fr. 25(DK))という言葉から出たものだとされている。

2　これは494C～Eで述べられた、疥癬にかかって掻きつづけている者が幸福であるとか、男娼たちの生活が理想的なものであるとかいう結論をさしている。

もしもひとが、快いことと善いこととは同じであると主張するならばだよ。どうだね、それらの結論は必然ではないのかね、カリクレス。

五四

カリクレス　いいかね、ソクラテス、さっきからずっとぼくは、あなたの質問に一つ一つうなずきながら、おとなしく話を聞いてきたのだが、心の中ではこう考えていたのだよ。誰かが冗談で、あなたにどんなことを認めてやる場合でも、あなたはまるで子供のように喜んでしまって、それにしがみついているのだとね。まるであなたといったら、ぼくであろうと、あるいは世の中のほかの誰であろうと、ある種の快楽は善いものであるが、ある種の快楽は悪いものであるというふうには、考えていないと思っているみたいだものねぇ！

ソクラテス　おやおや、これはひどいね、カリクレス。なんて君は意地の悪い人なんだろう。そしてぼくをまるで子供扱いにしているのだね。同じことを時にはこうだと主張し、また時にはああだと主張して、ぼくをすっかりたぶらかしたりしてさ。とはいえ、最初の頃は、ぼくはまさか君によって、故意にだまされるようなことになろうとは思ってもいなかったよ。君を友だちのつもりでいたのだからね。ところが、今となってみると、ぼくはすっかり嘘をつかれていたわけだ。さて、こうなった以上は、ぼくとしてはどうやら、昔の諺にあるように(1)、「今あるものを上手に利用し」、君から「与えられるものはありがたく受け取る」ということにせざるをえないようだね。

ところでそれでは、君がいま言っているように、いろいろな快楽があるなかで、ある種の快楽は善いものだが、

ある種の快楽は悪いものである、というのがどうやら事実らしいね。そうだろう？

D

カリクレス　そうだ。

ソクラテス　ではたして、善い快楽とは有益な快楽のことであり、悪い快楽とは有害な快楽のことかね。

カリクレス　たしかに。

ソクラテス　ところで、有益な快楽とは、何か善いことをもたらす快楽のことであり、これに反して、何か悪いことをもたらす快楽が、有害な快楽かね。

カリクレス　そのとおり。

ソクラテス　それでは、君の言おうとしているのは、はたしてこういうふうな快楽のことだろうか。たとえば、身体の面では、さきほど話に出ていた(2)、食べるとか飲むとかということにおいて生ずる快楽があるが、それらの快楽のなかで、身体のうちに健康とか、強さとか、その他なんらかの身体の卓越性をつくり出す快楽、そういう快楽は、善い快楽であるが、それらと反対のものをつくり出す快楽は、悪い快楽かね。

E

カリクレス　それはまったくそうだ。

1　二つの格言的な言い方が重ねるようにして用いられている。最初の「今あるものを上手に利用する」とか、「現にあるもので最善をつくす」とかいう意味のほうは、七賢人の一人ピッタコスの言葉であったとか、あるいは喜劇作家エピカルモスの言葉であったとか言われている。これは『法律』(XII. 959C)のなかでも引用されている。次の「与えられるものはありがたく受け取る」とか、「もらいものにはけちをつけない」とかいう意味のほうは、出所は明らかでないが、『エウテュデモス』(285A)や『アルキビアデスII』(141C)のなかでも言及されている。

2　496C～D参照。

ソクラテス　では、苦痛の場合も同様であって、ある種の苦痛は益になるが、ある種の苦痛は害になるのか。

カリクレス　もちろん。

ソクラテス　それでは、快楽でも苦痛でも、益になるもののほうを選ぶべきであるし、またそのほうが生ずるようにすべきではないか。

カリクレス　たしかに。

ソクラテス　しかし、害になるもののほうは、そうすべきではないのだね。

カリクレス　むろん、そうだ。

500

ソクラテス　それというのも、君がもし覚えていてくれるなら、すべてどんなことでも、善いことのためになされるべきであるというのが、ぼくたち、つまり、ポロスとぼくとの考えだったのだからね。(1)はたして、君もまたそんなふうに、ぼくたちと同じ考えになってくれるだろうか。すなわち、善があらゆる行為の目的であって、その善のために、他のすべてのことはなされるべきであるが、その他のことのために、善がなされるべきではない、というふうにだね。どうだね、君もぼくたちのほうに票を入れて、第三番目の賛成者になってくれるかね。

カリクレス　いいとも。

ソクラテス　そうすると、ほかのこともそうなのだが、快いこともまた、善いことのためになすべきであって、快いことのために、善いことをなすべきではないのだ。

カリクレス　たしかに。

ソクラテス　ではたして、もろもろの快いことのなかから、どのようなのが善いことであり、どのようなの

が悪いことであるかを選び分けるのは、すべてどの人にでもできることかね。それとも、そうするのには、それぞれの事柄について技術の心得ある人をまたなければならないのか。

カリクレス むろん、技術の心得ある人をまたなければならない。

五五

ソクラテス それでは、いまのことのほかに、ぼくがゴルギアスさんとポロスとに向かって話していたことを、ここで思い出してみることにしよう。君が覚えていてくれるなら、ぼくはまたこんな話もしていたのだから。[2] すなわち、人びとのためにものごとを用意し、ととのえてくれる仕事にはいろいろなものがあるが、そのうちのある種のものは、快楽に達するので充分として、まさにこの快楽だけをもたらしてくれるけれども、より善いことやより悪いことについては、何も知らないものである。他方、これに対して、もう一方の種類のものは、何が善いことであり、何が悪いことであるかを、よく知っているものである。そしてぼくは、快楽を目標とするほうの仕事にぞくするものとしては、料理法という、技術ではなしに、経験をあげたし、他方、善を目標とするほうの仕事にぞくするものとしては、医療の技術をあげたのであった。

B

そこで、友情の神ゼウスの名にかけて、カリクレスよ、どうか、君自身としても、ぼくに対して冗談半分の態度をとるべきではないと考えてくれたまえ。また、その場その場の思いつきを、心にもないのに、答えるような

1 468B参照。
2 464B～465C参照。

(500)
C

こともしないでくれ。さらにまた、ぼくのほうから話すことも、冗談のつもりで受け取ってもらっては困るのだ。なぜなら、君も見ているとおり、いまぼくたちが論じ合っている事柄というのは、ほんの少しでも分別のある人間なら誰であろうと、そのこと以上にもっと真剣になれることが、ほかにいったい何があろうか、といってもよいほどの事柄なのだからね。その事柄とはつまり、人生いかに生きるべきか、ということなのだ。すなわち、君がぼくに勧めているような、それこそ立派な大の男のすることだという、弁論術を修めて民衆の前で話をするとか、また、君たちが現在やっているような仕方で政治活動をするとかして、そういうふうにして生きるべきか、それとも、このぼくが行なっているような、知恵を愛し求める哲学の中での生活を送るべきか、そのどちらにすべきであるかということであり、そしてまた、後者の生活法は前者のそれと比べて、いったい、どこにその優劣はあるのか、ということなのだ。

D

ところでそれには、おそらくこういうふうにするのが一番よい方法だろう。つまり、ぼくがさっき試みていたように、まず、それらの生活を区別することである。そしてその区別がついて、その点でお互いの意見が一致したなら、その上で、もしほんとうにそれらの生活が二種類のものだということになれば、どこに両者の優劣はあるのか、またそれで、両者のうちのどちらの生活を送るべきか、ということをよく調べてみることだ。しかし、おそらくまだ君には、ぼくの言おうとすることがどういうことか、わかってはいないだろうね。

カリクレス　むろん、わかってはいない。

ソクラテス　いいとも、ぼくのほうで、もっとはっきり君に説明してあげよう。「善」というものがあり、「快」というものがあるということ、そして快は善とは別のものであり、また両者それぞれを獲得するために、

努力し工夫しているような仕事があるのだということ――つまり、その一方は、快の狩猟であり、他方は、善の狩猟なのであるが――そういった点については、君とぼくとはすでに意見の一致を見たのだからして……いや、しかし、まさにその点を、君はぼくに賛成してくれるのか、してくれないのか、それをまず最初に決めておいてもらおう。どうだね、賛成してくれるかね。E

カリクレス そのとおりだと認めよう。

五六

ソクラテス さあ、それでは、ぼくがこの人たちにも話しておいたことだが、あのときぼくの話していたことは正しかったと君に思われたのであれば、どうかその点は、しっかりと確認しておいてくれたまえ。ところで、あのときの話というのは、こういうことだったように思う。すなわち、料理法は技術ではなくて、経験であるとぼくには思われるが、他方、医術のほうは技術なのである。というのは、その一方のもの、つまり医術のほうは、501自分が世話をしてやるものの本性をも、また自分が取り行なういろいろな処置の根拠をもよく研究していて、そしてそういったことの一つ一つについて理論的な説明を与えることができるのだが、これに反して、もう一方のものは、快楽――その快楽を目あてに奉仕するというのが、それの行なう仕事の全部なのであるが――その快楽へと、文字通りに非技術的な仕方で、向かって行くのである。つまりそれは、快楽の本性をも、それの原因をも調べてみることはしないし、また理論をまったく無視したやり方で、分類して数え上げるということもまるっきりといってよいほどしないで、ただ熟練と経験にたよって、いつもはこうなるということの記憶を保存しているB

だけであるが、そのことによってまた、快楽をもたらすことに成功しているわけなのだ。

それではまず、以上のぼくの話が、満足すべきものであると君には思われるかどうか、そしてまた魂に関しても、何かこれと似たようなやり方をする二種類の仕事があるのかどうか、その点を調べてみてくれたまえ。すなわち、そのうちの一方は、技術的なものであり、魂にとっての最善が何であるかについて、あらかじめ何らかの考慮をしているものであるが、これに反して、もう一方のものは、最善ということは無視して、これまたさっきの身体の場合と同じように、ただ魂の快楽だけを問題にし、どうしたなら魂に快楽がもたらされるか、ということは研究しているけれども、快楽のなかでも、どれはより善いものであり、どれはより悪いものであるかということについては、考えてみようともしなければ、また、より善いことになろうが、より悪いことになろうが、ただ気に入られて喜ばれさえすれば、それ以外のことにはぜんぜん、関心がないといったものなのである。というのもぼくには、カリクレスよ、そのようにしているものがあると思われるからなのだ。そしてぼくとしては、そのようなやり方こそ「迎合」であると主張しているのだ。その対象が身体であろうと、魂であろうと、あるいはまた、ほかの何であろうと、もしひとがそのものの快楽だけに気をつかって、より善いことやより悪いことについては、考えてもみないようなものがあるとすれば、そのものについても同じことなのだ。ところで、どうかね、君は以上の点に関しては、ぼくたちに同調して同じ意見を述べてくれるかね。それとも、反対するのかね。

C

カリクレス いや、反対しないで、賛成しておこう。それであなたの話も片がつくし、ここにおられるゴルギアスさんにも喜んでもらえるのならね。

ソクラテス では、どうだろう。一人の魂を相手にする場合には、いま言われたようなことがあるが、二人、

D

ないしは数多くの人の魂を相手にする場合には、そういうことはないのかね。

カリクレス　いや、それは、二人でも、数多くの人でも変りはない。

ソクラテス　そうすると、一団となって集まっている数多くの人の魂を、一度に喜ばすということも可能ではないかね、その際、最善ということはまったく度外視してだよ。

カリクレス　それは、可能だと思う。

五七

ソクラテス　では、そうすることを仕事にしているものには、どんなものがあるかを、君は言うことができるかね。いや、なんなら、ぼくのほうで一つ一つ訊ねて行くから、そのような仕事に属すると思われるものは肯定し、属さないと思われるものは、否定してくれたまえ。

E

では、まず第一に、笛吹きの術を調べてみることにしよう。その術は、何かそういった性質のものであるように、君には思われないかね、カリクレス。つまり、われわれの快楽だけを追いかけて、そのほかのことは何一つ心にかけないようなものだとは。

カリクレス　それは、そう思われる。

ソクラテス　ではまた、その種のものはすべて、たとえば、競演の場で演奏されるキタラ（竪琴）の術のようなものも、そうではないのか。

カリクレス　そうだ。

ソクラテス　では、合唱隊に稽古をつけたり、ディテュランボスの詩を作ったりすることは[1]、どうかね。それも明らかに、何かそういった性質のものであるように、君には見えないかね。それとも君は、メレスの子のキネシアス[2]は、聴衆がそれを聞くことによって一層すぐれた人間になるような、何かそういうことを語ろうとして、心をくだいているのだと思うかね。いや、それとも、彼が語ろうとしているのはただ、観客の群れを喜ばせるはずのことだけかね。

502

カリクレス　それはむろん、あとのほうだ、ソクラテス、少なくともキネシアスに関するかぎりはね。

ソクラテス　では、彼の父親のメレスは、どうだったのかね。彼がキタラに合わせて歌っていたときには、はたして、最善ということを念頭においていたと君には思われたかね。それとも、あの男は、一番快いことにさえも目を向けてはいなかったのか。というのは、あの男が歌えば、観客を不快にしたからだが。いや、それでは、考えてみてくれ。一般にキタラに合わせて歌う術や、ディテュランボスの詩を作ることは、すべて快楽のために発明されているのだとは思われないかね。

カリクレス　それは、そう思われる。

B

ソクラテス　では、さらに、あの荘重ですばらしい詩、悲劇の創作が、真剣になって目ざしていることは何だろうか。それが真剣になって試みていることは、君の見るところでは、つぎのどちらだと思うかね。それはただ、観客を喜ばせるということだけかね。それともまた、観客にとって快いこと、気に入られていることであっても、ためにならぬ悪いことなら、そのことは言わないようにとし、他方、不快なことであっても、有益であれば、観客が喜ぼうと喜ぶまいと、そのことはせりふでも言い、合唱隊でも歌うように、あくまでも頑張り通すというこ

ともするのかね。悲劇の創作が心がけているのは、そのどちらのやり方であると君には思われるかね。

C

カリクレス その点は明白だよ、ソクラテス。それはむしろ快楽のほうへ、つまり、観客を喜ばせることのほうへ、すっかり傾いてしまっているのだ。

ソクラテス それなら、カリクレス、そのようなやり方こそ迎合であると、ぼくたちは今しがた言っていたのではないか。

カリクレス たしかに。

ソクラテス さて、それでは、もしひとがどんな種類の詩からでも、節（メロス）とリズム（リュトモス）と韻律（メトロン）とを取り除いてしまえば、あとに残るのは、ただの言葉だけではないかね。

カリクレス 当然そうなる。

ソクラテス では、それらの言葉が、群れつどう大勢の民衆に向かって、語られているのではないか。

---

1 合唱隊と訳された「コロス」は、また舞踊団でもある。したがって、それに稽古をつけるというのは、祭礼の折に上演するために、歌の指導をするとともに舞踊を教えることでもある。それは、その詩を作った詩人の役目であった。そしてこの合唱隊によって歌い踊られる詩の一種がディテュランボスなのである。この詩はもとはディオニュソス神を讃えた歌であったらしいが、後にはその神とは特別の関係がなくなり、広く神話伝説を主題にして物語的に歌う、一定の形式をもつ合唱隊歌となった。

2 前五世紀末にアテナイで活躍した有名なディテュランボス詩人（前四五〇頃—三九〇年頃）。彼の詩は空想に富み、はなやかな言葉や豊富な比喩に充ち、また煽情的な音楽を伴うものであったから、古い伝統をもつその詩の品位を傷つけるものとして、当時の喜劇作家たち、とりわけアリストパネスによってはげしく非難された。彼の父メレスについては、生涯不明。

カリクレス　そうだ。

ソクラテス　してみると、詩を作るということは、一種の大衆演説だということになるね。

カリクレス　そうなるようだ。

D

ソクラテス　しかもそれは、弁論術の技巧をこらした大衆演説だということになるだろう。それとも君には、詩人たちは劇場において、弁論術の技巧を使って話しているように思われないかね。

カリクレス　それは、そう思われる。

ソクラテス　そうすると、ぼくたちは今や、ある種の弁論術を発見したわけだ。それは、子供も、女も、男も、また奴隷も自由市民もいっしょに入りまじっているような、そういう民衆に対してなされる弁論術であって、ぼくたちのあまり感心しないものではあるけれども。なぜなら、それは迎合の術であると、ぼくたちは主張しているのだから。

カリクレス　たしかに。

五八

ソクラテス　さて、それはそれでいいとして、今度はしかし、同じ民衆であっても、アテナイの市民たちの集まりを相手にする弁論術、それはどうなのかね。また、そのほかにも、諸国の自由なる市民たちの集まりを相手にする弁論術について、われわれはいったい、どう考えたらいいのだろうか。弁論家たちはいつも、最善のことを念頭において、自分たちの言論によって市民たちができるだけすぐれた人間になるようにという、そのことを

E

狙いながら、話をするのだと君には思われるかね。それとも、この人たちもまた、市民たちの機嫌をとることのほうへすっかり傾いてしまっていて、そうして、自分たちの個人的な利益のために公共のことをなおざりにしながら、まるで子供たちにでも対するような態度で、市民大衆につき合い、ただもう彼らの機嫌をとろうと努めるだけであって、そうすることがしかし、彼らをいっそうよい人間にするのか、あるいはより悪い人間にするのかという、その点については、少しも考慮を払わないものなのかね。そのどちらだと君は思うかね。

503

カリクレス　その質問には、もはや単純に、どちらだとは答えられないよ。なぜなら、話をするのにも、市民たちのことを本気で心配して話をする人たちもあるし、他方には、あなたの言うような、そういう連中もあることだから。

ソクラテス　いや、その答でも結構。というのは、よしいまの質問がほんとうに二つの答を許すのだとしても、そのうちの一方は、おそらく迎合であり、恥ずべき大衆演説であろう。それに反して、もう一方のもの、つまり、市民たちの魂ができるだけすぐれたものになるようにはかってやり、そして聴衆の耳に快くひびこうが、不快に聞こえようが、いつでも最善のことを語って、終始一貫、その態度を守り通すことのほうは、立派なものだからである。しかし、君はこれまでにまだ、そのような弁論術を見たことはあるまい。いや、それとも、もし君が弁論家たちのなかから、誰かそういうふうにしている人の名前をあげることができるなら、誰がそういう人であるかを、どうしてぼくにも早く打ち明けてくれないのかね。

B

カリクレス　いや、ゼウスに誓って、ぼくとしては、少なくとも現代の弁論家たちの中からは、だれ一人、そのような人の名前をあげることはできないよ。

ソクラテス　それなら、どうかね。昔の人たちの中からなら、誰かの名前をあげることができるのかね。アテナイ人は、それ以前はもっとつまらぬ人間だったのに、その人が弁論活動を始めてからは、その人のおかげで、よりすぐれた人間になったと評判されるような、誰かそういう人の名前をだよ。ぼくは、誰がそういう人であるのか、知らないでいるのだから。

C　**カリクレス**　なんだって？　テミストクレスがすぐれた人だったということを、あなたは聞いてはいないのかね。それに、キモンや、ミルティアデスや、それからまた近年亡くなった、あのペリクレス――彼の話はあなたも直接に聞いたわけだが――その人たちが、すぐれた人間だったということを。(1)

ソクラテス　うん、それはそうかもしれないね、カリクレス。もしも、君が前に言っていたように、自分の欲望も他人の欲望も充足させるということ、それがほんとうの人間の徳(卓越性)というものならばだよ。だが、もしそうではなくて、そのあとの議論で、ぼくたちが同意しなければならなかったように、もろもろの欲望のなかD　でも、それが充たされるなら人間をよりすぐれた者にするような、そういう欲望は充たすが、より劣悪な者にするような欲望は充たさないということ、これこそがほんとうに人間の徳であって、しかもそうするのには、何か技術が要るというのであれば、君がいまあげた人たちの中の誰かが、それのできるすぐれた人であったとは……さあ、どう言ったらよいのか、ぼくにはよくわからないのだがね。

カリクレス　いや、それは、あなたの探し方がよければ、見つかるだろうよ。(2)

ソクラテス　では、その言葉どおりに、ゆっくりと腰を落ちつけて、よく調べてみながら、はたして、いまあげられた人たちの中に、誰かそういう人がいたかどうかを、見てみることにしよう。さあ、それでは、すぐれた人、つまり最善のことを目ざして話をする人というのは、どんな話をするにしても、ただでたらめに話すのではなくて、何か一つの目標に目を向けながら、話すのではないかね。そのことは、ほかのどんな職人の場合でも同様だろう。すなわち、彼ら職人たちは、自分たちの作ろうとしているものに目を向けながら、その一人一人が自分の

E

1　ここにあげられた四人は、いずれも前五世紀のアテナイを代表する偉大な政治家。

テミストクレス（前五二八頃—四六二年頃）については、455E 注1を参照。

キモン（前五一二頃—四四九年）は、名門の出で、富裕をもって聞こえ、寡頭派に属し、反ペルシア・親スパルタ主義者として知られた。テミストクレスやアリステイデスの亡きあと、政界に君臨し、アテナイの海外支配権拡張のために各地に転戦して武勲をたてた。

ミルティアデス（前五五〇頃—四八九年）は、前述のキモンの父であり、特に晩年、マラトンの戦（前四九〇年）においてペルシア軍を撃退したことにより、一躍、国民的英雄となった人物。

ペリクレス（前四九五頃—四二九年）は、キモンが追放されてから、民主派の指導者として登場し、国内的には各種の民主化政策を遂行するとともに、対外的にはアテナイをエーゲ海世界に君臨する一大海上帝国にまで仕上げて、アテナイの黄金時代をつくり出した大政治家。

なお、これら四人の人物の晩年の運命については、後述516A, D～E の注をみよ。

2　前のソクラテスの言葉の終りの部分から、このカリクレスの言葉までは、一般の校本では、テキストの読み方を多少かえて、言葉の割りふりがつぎのようになっている。

ソクラテス　……君がいまあげた人たちのなかに、誰かそのようにすることのできる人がいたと、君は言うことができるかね。

カリクレス　どう言ったらよいのか、ぼくにはよくわからないがね。

ソクラテス　いや、それは、君の探し方がよければ、見つかるだろうよ。では、ゆっくりと腰を落ちつけて……

しかし今は一応、バーネットの校本に従って読んでおく。

作品に加えるものを加えているのであるが、それはただでたらめに選び出して加えているのではなく、[1] 自分の作り上げようとしているものが、ある一定の形をとるようにとしているわけだ。たとえば、なんなら、肖像画家でも、家大工でも、船大工でも、その他どんな職人でも、そのなかから誰なりと、君の好きな人をとりあげて、調べてごらん。いかに彼らの一人一人が、自分の作品のどの部分を定めるのにも、その一つ一つの部分を一定の秩序にかなうようにしているか、しかもその上、一つの部分は他の部分とぴったり適合したものとなり、また調和するようにさせて、かくして、その作品の全体を、整然と秩序づけられたものに組み立てようとしているか、ということがわかるだろう。

504

そこでもちろん、その他の職人たちもそうであるが、特にまた、さきほど話に出ていた身体を扱う人たちである、体育教師や医者たちにしてみても、おそらく彼らは、身体に秩序を与えて、その全体をきちんと整えるであろう。どうだね、これはこのとおりだということをぼくたちは認めるのかね、それとも、認めないのかね。

カリクレス　そのとおりだとしておこう。

ソクラテス　そうすると、家の場合でも、整然としていて、秩序のある家は、役に立つよい家だろうし、反対に、無秩序なものは、悪い家だろう。

カリクレス　そのとおり。

ソクラテス　それは、船の場合でも同様ではないかね。

B

カリクレス　そうだ。

ソクラテス　さらにまた、われわれの身体の場合でも、それは同じだと言っていいのかね。

カリクレス　たしかに。

ソクラテス　では、魂の場合は、どうなのかね。それは無秩序となることによって、すぐれた魂となるのだろうか。それとも、ある種の規律と秩序を持つときに、そうなるのだろうか。

カリクレス　これまでの議論からすれば、それにも同意しなければなるまいね。

ソクラテス　ところで、身体の場合には、その規律と秩序から生まれる状態には、どんな名前がついているのかね。

カリクレス　健康とか強健とかいったことを、たぶんあなたは言っているのだろう。

c

ソクラテス　そうだ。では、今度は、魂において、規律と秩序から生まれる状態には、どんな名前がついているのかね。身体の場合と同じように、その名前を見つけて、言ってみるようにしてくれたまえ。

カリクレス　しかし、なぜあなたは、自分で言おうとしないのかね、ソクラテス。

ソクラテス　いや、そうするのがよければ、ぼくのほうで言うことにしよう。それで、君のほうは、ぼくの言うことが当っていると思えば、肯定し、そうでないと思えば、反駁して、ぼくの言うなりにならないでくれたまえ。というのは、ぼくの思うところでは、身体の規律正しい状態には「すこやかな(健)」という名前がついてお

1　この箇所は、一般の校本どおりに、つぎのように読む。ὥσπερ καὶ οἱ ἄλλοι πάντες δημιουργοὶ βλέποντες πρὸς τὸ αὑτῶν ἔργον ἕκαστος οὐκ εἰκῇ ἐκλεγόμενος προσφέρει ἃ προσφέρει πρὸς τὸ ἔργον τὸ αὑτοῦ, ...（バーネットは、βλέποντες と πρὸς τὸ ἔργον τὸ αὑτῶν (B : αὑτοῦ, Par.²) を削り、προσφέρει ἃ προσφέρει (Y) をたんに προσφέρει とだけ読んでいる。また、クロワゼ、ドッヅは、πρὸς τὸ ἔργον τὸ αὑτῶν だけを削っている。）

り、そしてそのことにもとづいて、身体には健康をはじめ、その他の身体上の徳(卓越性)が生まれてくるわけだ。どうだね、これはこうなのかね、それとも、ちがうのかね。

カリクレス そのとおりだ。

D

ソクラテス 他方また、魂の規律や秩序に対しては、「法にかなった」とか「法」とかいう名前がつけられている。そしてそのことによって人びとは、法に従う人にも、また節度のある人にもなるわけだ。そして、そういう状態にあることが正義の徳であり、また節制の徳なのだ。どうだね、君はこれを認めるかね、それとも、認めないのか。

カリクレス そうだとしておこう。

六〇

ソクラテス それでは、あのぼくの言うような弁論家(1)、すなわち、技術の心得のあるすぐれた弁論家は、人びとの魂にどんな内容のことを語りかけるにしても、いま言われたようなことを念頭におきながら、語りかけるのではないかね。それはまたどんな行動をとる場合でも同様であって、何か贈物をするにしても、また何かを奪い去るにしても、いつもこういうことを心において贈ったり、奪い去ったりするだろう。すなわち、彼の同胞の市民たちの魂の中に、正義の徳が生まれて、不正は取り払われるように、また節制の徳がその中に生まれて、放埒は取り払われるように、そしてその他にも美徳が生まれて、悪徳は去って行くように、ということにいつも心を向けながらである。どうだね、君はこれを承認してくれるかね、それとも、してくれないのか。

E

カリクレス　承認しよう。

ソクラテス　それはそうだものね、カリクレス。実際、身体の場合を考えてみても、もしそれが病気をしていて、悪い状態にあるのだとすれば、そのような身体には、どんなにたくさんの、しかも非常においしい食べ物や飲み物を、あるいはそのほかの何をあたえたところで、いったい、何の役に立つだろうか。もしもそれが、何らかの点で身体をより多く益するものでないとしたなら、いや反対に、正しく評価してみれば、益することのより少ないものでさえあるとしたなら。どうだね、これはこのとおりかね。

505

カリクレス　そうだとしておこう。

ソクラテス　それというのも、人間、身体の状態が悪くては、生きていても何の得るところもないからだと思う。なぜなら、そういう状態では、必ずまた悪い（不幸な）生き方をすることになるからだ。どうだね、そうではないのか。

カリクレス　そうだ。

ソクラテス　だからまた、もろもろの欲望を満足させるということも、たとえば、飢えているときには食べたいだけ食べるとか、渇いているときには飲みたいだけ飲むとかいうことも、もしその人の身体が健康であれば、医者はたいていの場合、許してくれるけれども、しかし病気のときには、その人の欲しがるもので欲望を充たすことを、いわば絶対に許さないのではないかね。少なくともその点は、君も承認してくれるかね。

1　503A〜D参照。

B

カリクレス　承認しよう。

ソクラテス　では、魂についても、ねえ君、これと同じ扱い方をすることになるのではないかね。すなわち、魂が劣悪な状態にあるかぎり、つまり無思慮で、放埒で、不正で、そして不敬虔なものであるかぎりは、そういう魂には欲望の満足を禁じるべきであり、そして、その魂がよりすぐれたものになるのに役立つこと以外は、何ごとも勝手にさせないようにすべきである。君はこれを認めるかね、それとも、認めないのか。

カリクレス　認める。

ソクラテス　というのは、おそらくそういうふうにするのが、その魂自身にとっては、よりよいことだからであろう。

カリクレス　たしかに。

ソクラテス　それではその、欲しがるものから遠ざけて禁じるということが、つまり、抑制するということではないかね。

カリクレス　そうだ。

ソクラテス　してみると、その抑制されることのほうが、君がさっき考えていたような(1)、あの無抑制の放埒よりも、魂にとってはよりよいことになるのだ。

C

カリクレス　何を言っているのか、ぼくにはさっぱりわからないね、ソクラテス。しかしまあ、誰かほかの人にでも訊ねてごらんよ。

ソクラテス　〔傍白〕ほら、この男はね、我慢ができないのだよ、自分のためになることをしてもらうのがね。

そして自分では、いま話題になっている当のそのこと、すなわち抑制されることをいやがるのだ。

カリクレス ああ、そうだとも。それに、あなたの言っていることなんか、ぼくにはまるっきり興味がないのだ。これまでのことだって、ゴルギアスさんのために答えたまでだからね。

ソクラテス そうかねえ。それならそれで、ぼくたちはこれからどうしたらいいのかね。この議論は途中で打ち切りにするのかね。

カリクレス それはあなたが、自分で決めたらいいだろう。

ソクラテス しかしだね、物語だって、中途半端のままに残しておくのは、神意にもとると言われているのだよ。いや、頭なしで歩き廻らないように、頭をつけてから、やめるべきだということだ。だから、このぼくたちの議論も頭(仕上げ)をもつように、残りのことにも相手になって答えてくれないかね。

D

六一

カリクレス なんてあなたは強引な人だろうねえ、ソクラテス。だが、ぼくの言い分のほうは納得してもらえるのなら、この議論はこれでやめにするか、それとも、誰かほかの人を相手にして、話をつづけてもらいたいね。

ソクラテス それでは、誰かほかに、相手になってやろうという人はあるのかね？ というのも、諸君、われわれはこの議論を、未完成のままで残しておかないようにしようではないかね。

1　491E sqq. 参照。

カリクレス　しかし、あなたが自分ひとりで、この議論を最後までしてしまうことはできないものだろうかね？　あなたのほうだけで話すなり、あるいは、答がいるなら、あなたが自分で自分に答えるなりして。

E

ソクラテス　それではぼくに、エピカルモスの言ったとおりになれというわけだね。つまり、「これまでは二人で話していたことを、これからはぼく一人で間に合うように」[1]しろとね。しかしどうみても、そうなるよりほかはないのかもしれないね。だが、もしそうすることになるなら、ぼくたちはみな、いま話題になっている事柄について、その真実は何であり、また何が偽りであるかを、お互いに競い合って知るようにしなければならないと、こうぼくは思うのだ。というのは、それが明らかになることは、ぼくたちすべての者にとって、共通に善いことなのだから。

506

さて、それならぼくは、ぼくにこうだと思われるとおりに、この議論を進めてみることにしよう。それでもし、諸君のなかの誰かに、ぼくがぼく自身に同意をあたえていることは、事実に反していると思われるなら、その人は話の中に割り込んで、ぼくを反駁してくれなくてはいけない。それというのも、いいかね、諸君、ぼくとしては、これからぼくが話そうとしていることは、決して知っていて話すのではなく、むしろ、諸君とともに共同で探究しようとしているからなのだ。したがって、ぼくに異議を申立てる人の言い分に、何か一理あるということが明らかになれば、ぼくがまず一番に、その人の賛成者になるだろう。とはいうもののしかし、ぼくがこんなことを言うのも、この議論は最後までやりとげられるべきであると、諸君に思われるならばのことであって、もし諸君がそれを望まないのであれば、ここでもう打ち切って、われわれは別れることにしようではないかね。

ゴルギアス　いや、わたしには、まだ決して別れてはならないと思われるがね、ソクラテス。むしろ君に、こ

B の議論を最後までつづけてもらうべきだと思う。で、それはほかの諸君だってそう思っているように、わたしには見えるのだ。というのは、わたし自身のことにかぎってみても、君がひとりでその残りも詳しく話してくれるのを、聞きたいと思っているからなのだ。

ソクラテス　いや、それはもちろん、ゴルギアス、わたし自身としても、許されることなら、このカリクレスとよろこんでもっと話をつづけたいところだったのです。あのゼトスの言い分に対しては、アンピオンの言い分を、この人に報いてやるまではですよ。[2] ところが、カリクレスよ、君のほうが、この議論をぼくと一緒に最後までやりとげる気持がないのだから……。しかしまあ、それはそれで仕方がないとしても、とにかく君は、ぼくの

C 話すのを聞いていて、もしぼくの言うことに何か適切でないと思う点があれば、そのときは、ぼくの発言を押えてくれたまえ。たとえ君がぼくを反駁するとしても、ぼくは君に対して、ちょうど君がぼくに対してしたように、腹を立てるようなことはしないからね。いや、それどころか、君は最大の恩人として、ぼくの心のなかにその名

1　前五世紀前半にシケリアのシュラクゥサイを中心に活躍した喜劇作家。数多くの作品を書いたが、題名が伝わるのみで、断片しか残っていない。

2　485Esqq. 参照。つまりその箇所において、カリクレスは、エウリピデスの劇『アンティオペ』のなかの、ゼトスの役割を借りながら、自分の選んでいる生き方、つまり世の表面に出て実際の政治活動をし、それによって名声をあげるのが、男子たる者の本懐であることを説いて、ソクラテスがやっているような、世間の片隅にかくれて、少数の若者たちとひそひそ話をしながら、哲学の研究に耽っている生活を難じていたのである。そこでソクラテスとしては、反対にアンピオンの立場に立って、もしカリクレスが対話をつづけてくれるなら、自分の行なっている哲学の生活のほうが、真によりすぐれた生き方であることを証明して、彼の非難に報いたいと思っていたわけである。

前を書きとどめられることになるだろう。

カリクレス　まあいいから、自分で話して、片をつけてくれたまえ。

六二

ソクラテス　では、ぼくのほうでもう一度初めから、これまでの議論を要約してみるから、聞いていてくれたまえ。

はたして、快と善とは同じものであるか。

――同じものではない。それは、ぼくとカリクレスとで意見の一致を見たとおりだ。(1)

では、どちらだろうか。快が善のためになされるべきか、それとも、善が快のためになされるべきか。

――快が善のためになされるべきである。

さて、快とは、それがそなわったときに、われわれが快い気持になるようなもののことであり、また善とは、

D　それがそなわっているときに、われわれが善い人であるようなものなのか。

――たしかにそうだ。

ところで、われわれが善い人であるのも、またその他、およそ善くあるかぎりのすべてのものが善いのも、それは、なんらかのよさ(徳)がそなわっているからなのか。

――ぼくには、そのことは必然であると思われるがね、カリクレス。

しかるに、それぞれのものがもつよさは、つまり道具でも、身体でも、さらには魂でも、あるいはどんな生き

ものでも、それらのものがもつよさは、偶然のでたらめによってではなく、それらのおのおのに本来与えられている、規律と、秩序正しさと、技術とによって、[2] 一番見事にそなわってくるのである。これははたしてこのとおりかね。

——ぼくとしてはそう主張するのだからね。

してみると、[3] それぞれのものがもつよさというのは、規律によって整えられ、秩序づけられていることなのか。

——ぼくとしてはそう主張したいのだがね。

E

そうすると、それぞれのものに固有な、ある秩序が、それぞれのものの中に生まれてくるときに、存在するもののそれぞれを善いものにするわけか。

——ぼくにはそう思われる。

それならば、魂もまた、自己自身の秩序をもつもののほうが、それをもたぬ無秩序な魂よりも、より善いのだね。

——それは必然にそうなる。

ところで、秩序をもつ魂は、節度があるのだね。

——むろん、それにちがいない。

だが、節度のある魂は、思慮節制のある魂なのだね。

1　494C～499B参照。
2　規律や秩序正しさと、技術とのつながりについては、503E～504A参照。
3　ドッヅの校本に従い、ἆρα を ἄρα に直して読む。

――それはどうしても、そうでなければならない。

してみると、思慮節制のある魂は、すぐれた善い魂だということになる。ぼくとしては、これ以外に言えないのだよ、親愛なるカリクレス君。しかし君のほうで、もし言うことができるなら、教えてくれたまえ。

カリクレス　まあ、いいから、話をつづけてくれ。

ソクラテス　それでは、つづけることにしよう。思慮節制のある魂が、すぐれた善い魂だとすれば、これと反対の状態にある魂は、劣悪な魂なのだ。で、それは、無思慮で、放埒な魂のことだったのだ。

――たしかに、そうだった。

さらにまた、思慮節制のある人というのは、神々に対しても、人間たちに対しても、当然なしてしかるべきことをなすであろう。というのは、もしそうでないことをなすのであれば、思慮があることにはならないだろうからだ。

B

――それは必ず、そうでなければならない。

そこで、人間たちに対してしかるべきことをなすのであれば、正しいことをなすのであり、他方、神々に対してそうであれば、敬虔なことをなすのである。ところで、正しいことや敬虔なことをなす者が、正しい人、敬虔な人であるということは必然である。

――それはそのとおりだ。

さらにまた、そのような人は勇気のある人でもある、ということは必然である。なぜなら、追求してはならないことを追求したり、避けてはならないことを避けたりするのは、決して思慮のある人間のすることではないか

らだ。いな、事柄でも人間でも、また快楽でも苦痛でも、避けるべきは避け、追求すべきは追求し、また踏みとどまるべきところには踏みとどまって忍耐するのが、思慮のある人間のすることだからだ。したがって、カリクレスよ、その思慮節制のある人というのは、いまぼくたちが見てきたように、正しくて、勇気があって、そして敬虔な人であるから、〔それらの基本的な徳を全部そなえているという意味で〕完全に善い人なのだ。しかるに、善い人というのは、何ごとを行なうにしても、それをよく、また立派に行なうものだ。で、よいやり方をする者は仕合せであり、幸福であるが、これに反して、劣悪で、そのやり方の悪い者は不幸である、ということは万々間違いないのだ。ところで、このあとの人というのは、思慮節制のある人とは反対の状態にある人、すなわち、君がほめたたえていた[1]、あの放埒な人のことだろう。

六三

さて、ぼくとしては、こういった事柄については、以上述べたとおりであるとしておき、そしてそれは真実であると主張しておこう。ところで、もしそれが真実だとすれば、どうやら、こういう結論になりそうだ。すなわち、幸福になりたいと願う者は、節制の徳を追求して、それを修めるべきであり、放埒のほうは、われわれ一人一人の脚の力の許すかぎり、これから逃れ避けなければならない。そして、できることなら、懲らしめを受ける必要のひとつもないように努めるべきだが、しかし、もしその必要がおきたのなら、それを必要とするのが自分

1　491E～492C 参照。

自身であろうと、身内のなかの誰かほかの者であろうと、あるいは、一個人であろうと、国家全体であろうと、いやしくも幸福になろうとするのであれば、その者は裁きにかけられて、懲罰を受けるべきである。これこそ、ひとが人生を生きる上において、目を向けていなければならない目標であると、ぼくには思われるのだ。そして、自分自身に関することも、国家に関することも、すべてをこの目的に傾注しながら、すなわち、仕合せになろう E とする者には正義と節制の徳がそなわるようにとしながら、その目的にそって行動しなければならないのだ。もろもろの欲望を抑制されないままに放置しておいて、それらを充足させようと試みながら――それは果てのない禍となるのだが――そんな盗人の生活を送るようなことはしないでだ。なぜなら、そのようなことをする者は、他のどんな人間にも、また神にも、愛される者となることはできないだろうからだ。というのは、そのような者は、誰とも共同することができないだろうし、そして共同のないところには、友愛はありえないだろうからだ。

508 しかし、賢者たち[1]はこう言っているのだよ、カリクレス、天も地も、神々も人々も、これらを一つに結びつけているのは、共同であり、また友愛や秩序正しさであり、節制や正義であると。だから、そういう理由で彼らは、この宇宙の総体を「コスモス（秩序）」と呼んでいるわけだ。わかったかね、君、無秩序とも放埒とも言ってはいないのだよ。ところが君は、賢い人だというのに、そういったことにはどうも注意を払っていないように思われる。いな、君は、幾何学的な平等[2]が、神々の間でも、人間たちの間でも、大いなる力をもっていることに気がついていないのだ。それどころか君は、なにがなんでも人より余計に持つことに努めなければならないと考えている。これもつまりは君が、幾何学の勉強をおろそかにしているからなのだ。

B まあ、それはそれとしておこう。それでは、いまのこの説を反駁して、幸福な人たちが幸福であるのは、正義

や節制の徳をもつことによってではなく、また不幸な人たちが不幸なのも、悪徳をもつことによってではないということを証明するか、それとも、いまの説が真実であれば、それから生まれる結論は何であるかを調べるか、そのどちらかをわれわれはしなければならないわけだ。ところで、あの前に言われていたことは、カリクレスよ、すべてみなそれからの結論だったのだよ。その点については、君はぼくに、本気で言っているのかどうかと、訊ねていたのだけれどもね。(3) それはぼくが、もし何か不正を行なっている者があれば、それを行なっているのが自分自身であろうと、息子であろうと、仲間の者であろうと、ひとはその者を告発すべきであるし、また弁論術は、その目的のためにこそ用いるのでなければならない、と言ったからだったがね。それからまた、ポロスは気おくれがして承認したのだと君の考えていたこと、(4) つまり、不正を行なうのは不正を受けるよりも、醜いことである

1 ピュタゴラス学派の人たちを指しているものと思われる。この万有の総体に「コスモス」(宇宙＝「秩序」の意)の名をあたえたのは、ピュタゴラスその人が最初であったと伝えられている(Diog. L. VIII. 48)。また、そのピュタゴラス学派と密接な関係があり、初めはその学派の一員であったとも考えられるエンペドクレスが——彼はまたゴルギアスの師であったとも言われているのであるが——万物の結合と分離の原因を、それぞれ「愛」(親和)と「争い」とに求めた(Fr. 17, 35(DK))ことはよく知られている。

2 これは「比例的な平等」というのに同じ。「算術的な平等」に対して言われる。平等をこの二種類に区別し、そして正義の本質は平等にあるのだから(483C, 489A参照)、正義をもそれに従って二種類(匡正的正義と配分的正義)に区別することは、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』(第五巻)の読者にはよく知られていることであるが、しかしこの区別はすでにプラトン(『法律』VI. 757B〜C)にも、また同時代の他の人たち(たとえば、イソクラテス『アレオパギティコス』(二一))にも知られていたことである。

3 481B参照。

4 482D〜E参照。

(508)
C

だけ、それだけまた悪い（害になる）ことでもあるということ、あれもじつは本当のことだったのだ。さらにまた、ほんとうの意味での弁論家になろうとする者は、だから、正しい人でなければならないし、正しいことについての知識をもった人でなければならない、ということもだよ。この点はまた、ポロスの言っていたところによると、(1)ゴルギアスさんはそれを認めないでは気まりが悪いと思って同意されたのだ、ということだけれどもね。

六四

さて、事実は以上言われたとおりだとすると、君がぼくに対して非難していることは、いったい、どういうことになるのか、その点を今度は調べてみることにしよう。それはこんなふうに言われているのだが、はたしてそれは適切な言い方であるのか、どうか。つまり、君の言うところによると、このぼくは、ぼく自身に対しても、また友だちや身内のなかのだれ一人に対しても、助けをあたえることができないし、また最大の危険から救い出す力もないのであって、それどころかぼくは、ちょうど公民権を剝奪された者たちが、どんな人の意のままにでもなるように、もし誰かが――君の使っていたあの無遠慮な言い方をまねるとすれば(2)――「横っ面に平手打ちを食らわせる」とか、あるいは財産を没収するとか、または国家から追放するとか、さらに、極端な場合には、死刑にすることを望むのなら、そう望む人の意のまま次第であるのだと、こういうわけなのだがね。そして、そういう状態にあることは、君の説によると、何よりも一番恥辱であるということなのだ。

D

では、これに対して、ぼくの説がどういうものであるかというと、これはすでに何度も言われてきたことではあるが、ここでもう一度それをくり返しても、何ら差支えはないであろう。つまり、ぼくは認めないのだよ、カ

E リクレス、不正な仕方で横っ面を張りとばされることが、最大の恥辱であるとはね。また、ぼくの身体なり巾着なりが、切り取られるのが恥辱であるともね。いなむしろ、ぼくをでも、またぼくの持物をでも、不正な仕方で殴ったり、切ったりすることのほうが、もっと恥ずかしいことであり、もっと害になることだと、ぼくは主張するのだ。さらに、そのほかにも、ものを盗んだり、奴隷に売ったり、壁を破って家へ押し入ったり、要するに、どんなことであれ、ぼくにでも、またぼくの持物にでも不正を行なうのは、その不正を受けるぼくにとってよりは、むしろ不正を行なうその人のほうにとって、もっと害になることであるし、もっと恥ずかしいことであると、ぼくは主張するのだ。その点は、すでにさきほどの議論の中のあのところで、(3) われわれにはそのとおりであることが明らかにされているのであって、ぼくに言わせるなら、しっかりと押えられ、縛りつけられているのだといってもいいよ。それも、いくらか乱暴な言い方が許されるなら、鉄と鋼の論理によってそうされているわけだ。

509 ——とにかく、以上見たところでは、そう思われるのだからね。そこで、この堅い論理の縛めを、君なり、あるいは、君よりも威勢のいい他の誰かなりが、打ち破って解き放つのでないかぎり、いまぼくが言っているのとちがった言い方をしたところで、それは適切な言い方になるはずはないのだ。というのは、ぼくとしてはいつでも同じことを言うわけだが、つまりぼくは、それらのことがほんとうはどうであるかを知らないのだけれども、しかし、こうして今のように、ぼくが出会って話した人たちの中では、だれ一人それとちがった言い方をして、笑

1　461B参照。
2　486C参照。
3　474C～475E参照。

い物とならずにおられる者はいないからなのだ。

だから、ぼくとしてはもう一度、そういったことについては、以上述べたとおりであるとしておこう。ところで、もしそれがそのとおりであり、そして不正は、それを行なう当の人にとって、害悪のなかでも最大のものであり、また、その最大の害悪よりもさらに大きな害悪は——もしもそういうものがありうるとすればだが——不正を行なっていながら裁きを受けないのが、それであるとするなら、ひとはどんな助けを自分自身にあたえることができないときに、ほんとうの意味で笑い物となるのだろうか。それはそもそも、こういう助けではないのかね。つまり、われわれを最大の害悪から防いでくれる助けではないのかね。いや、たしかに、その助けを、自分自身にも、また自分の友人や身内の者たちにも、あたえることができないのが一番恥ずかしいことであり、二番目の害悪から防いでくれる助けをあたえることができないのが、二番目に恥ずかしく、三番目からのが、三番目であり、そして以下そのとおりである、ということは万々間違いないのだ。すなわち、それぞれの害悪の本来の大きさに応じて、その害悪から身を守ることができるということの立派さの程度もきまるし、また、それができないということの恥ずかしさの程度もきまるわけなのだ。どうだね、これとはちがうのかね、それとも、このとおりかね、カリクレス。

カリクレス　いや、それにちがいないよ。

六五

ソクラテス　それでは、この二つの害悪、ひとに不正を行なうのと、自分が不正を受けるのとの、二つの害悪

があるときは、不正を行なうほうがより大きな害悪で、不正を受けるほうの害悪は、それに比べるとより小さなものであると、こうわれわれは主張しているのだ。それなら、人は何を身に備えたなら、自分を助けることができて、その結果、不正を行なわないことから生ずる益と、不正を受けないことから生ずる益との、その両方ともを持つことになるのだろうか。それは、能力を備えることによってなのか、それとも、その意志がありさえすればいいのか。ぼくの言うのは、こういう意味だ。不正を受けることを望みさえしなければ、それでひとは不正を受けずにすむのだろうか。それとも、不正を受けないようにする能力を備えたときに、ひとは不正を受けることはなくなるのか、どちらかというのだ。

カリクレス　それはもちろん、能力を備えたときだよ。

ソクラテス　では、不正を行なうほうについては、どうかね。不正を行なう意志さえなければ、それで充分なのか。つまりそれなら、不正を行なうことはないだろうというわけでだね。それとも、その不正を行なわないということのためにも、何らかの能力と技術[1]を備えなければならないのか。というのは、もしもそれらの技術や能力を学んで修得するのでなければ、不正を行なうかもしれないという理由でだね。いったい、どちらだろうか。……さあ、それなら、せめてこの点だけでも、ぼくに答えてくれないかね、カリクレス。ぼくとポロスとは、前の議論のなかで[2]、だれ一人、不正を行なうことを望む者はなく、不正を行なう者はすべて心ならずもそれを行な

1　ここの「技術」という語の意味については、500A, 503D を参照。
2　467C～468E 参照。

(509)

うのだ、ということに意見の一致を見ていたのであるが、ぼくたちがそのように同意せざるをえなかったのは、正しかったのか、それとも、間違っていたのか、君にはどちらだと思われるかね。

510

カリクレス　その点は、正しかったということにしておこう、ソクラテス、それでこの議論が片づくものならね。

ソクラテス　そうすると、どうやら、そのことのためにも、つまり、われわれが不正を行なわないようにするためにも、何らかの能力と技術を備えなければならないらしいね。

カリクレス　たしかに。

ソクラテス　さて、それでは、不正を受けることはまったくないか、あるいは受けたとしても、それを最小限に食い止めるための備えとなる技術とは、いったい、どういうものなのだろうか。ぼくが考えているのと同じ技術のことを、君もまた考えているのかどうか、ひとつ、調べてくれたまえ。というのは、ぼくにはこんなのがそれであるように思われるからだが。つまり、自分自身が一国の支配者となるか、あるいは、独裁者にさえなるか、もしくは、現に存在している政体に味方する党派の者となるか、そのどれかになるのでなければならぬと思われるのだ。

B

カリクレス　それごらん、ソクラテス、あなたが何かよいことを言いさえすれば、ぼくにはどんなにあなたを褒める用意があるか、わかるだろう。いまのあなたの発言は、まことによかったとぼくは思うね。

六六

ソクラテス　それなら、つぎに言うことも、当をえていると思われるかどうか、よく調べてみてくれ。人と人とが、可能なかぎり最も親しい間柄になるのは、昔の賢い人たちが言っているように、「似た者が似た者に[1]」対する場合であると、ぼくには思われるのだが、君にもそう思われないかね。

カリクレス　そう思われる。

ソクラテス　それでは、粗野で教養のない独裁者が支配者の地位についているところでは、もし誰かがその国において、その独裁者よりもずっとすぐれた人間だったとすれば、むろんその独裁者は、その人を恐れるだろうし、真底からその人と親しくなることは、決してできないのではなかろうか。

C

カリクレス　それはそのとおりだ。

ソクラテス　しかしまた、もし誰かがその独裁者よりもずっと劣った人間だったとしても、その人だってまた、決して親しくなることはできないだろう。なぜなら、その独裁者はその人を軽蔑するだろうし、友だちに対するような真面目な関心を、その人に払うことも決してないだろうから。

カリクレス　それも本当だ。

ソクラテス　そうすると、残るところは、ただつぎのような者だけが、語るに足るほどの者として、そのよう

1　「似た者は似た者に親しい」という言い方については、すでにホメロスの『オデュッセイア』のなかに、「神はつねに似た者には似た者を遣わしたもうがゆえに」(第一七巻二一八行)という語句が見られる。そしてそれはまたエンペドクレス哲学の基本的な考え方であったとも言える。プラトンはこの格言的な言い方をしばしば利用している(『饗宴』195B、『リュシス』214B、『プロタゴラス』337Dなど)。

な独裁者に親しい者となるわけだ。つまりそれは、独裁者がなす非難と賞賛とに調子を合わせながら、彼と似た性格の者となっていて、甘んじてその支配を受け、そしてその支配者の下に隷属しようとする者があるなら、誰

D

であろうと、そういう人間のことなのだ。そのような人こそ、その国では大きな権力をもつ者になるだろうし、誰だってその人に不正を加えて、平気でおられる者はいないだろう。そうではないかね。

カリクレス そうだ。

ソクラテス そこでもし、そういった国において、誰か若い者の一人が、「どうしたなら、ぼくは大きな権力をもつ者になれて、誰もぼくに不正を加える者はないようになるだろうか」と、心の中で考えてみたとすれば、彼のとるべき道は、どうやら、こういうことになるらしい。つまりそれは、若い頃からすぐに、喜ぶのも腹を立てるのも、主人と同じものによってそうするように自分を習慣づけて、そうして、できるだけその主人に似た性格の者となるように工夫する、ということなのだ。どうだね、そうではないかね。

カリクレス そうだ。

ソクラテス それでは、そうすることによって、不正を受けないということのほうは、そして君たちが言うところの、一国の中で大きな権力をもつ者になるということは、充分に達成されたことになるだろう。

E

カリクレス たしかに。

ソクラテス ではたして、不正を行なわないということのほうも、その方法によって達成されるのだろうか。それとも、これはとんでもない話であって、もしもひとが、不正な人間である支配者に似た性格の者となり、そしてその支配者の下で大きな権力をもつのだとしたら、そのことはとうてい望めないことになるのかね。いやむ

しろ、ぼくとしてはこう思うのだ。もしもそういうふうだとすると、その人の準備というのは、いまとはまったく反対に、できるだけ多くの不正を行ない、そして不正を行なっていても罰を受けないですますことができる、ということを目的にしたものになるだろうと。そうではないかね。

カリクレス そう見えるね。

511

ソクラテス それなら、その人は、最大の害悪を背負いこむことになるだろう。主人の真似をして、そしてそれによって得た権力のために、その人の魂は邪悪なものとなり、すっかり損われてしまっているのだから。

カリクレス どうしてそうなるのかは知らないが、あなたはそのときどきで議論を上下にひっくり返してしまうのだね、ソクラテス。いや、あなたにはわかっていないのだが、真似をしているその人は、真似をしないでいるあの者を、もし望むなら、死刑にするだろうし、持物も奪い取るのだよ。

B

ソクラテス わかっているとも、カリクレス君、ぼくが聾でないかぎりはね。それは君からも、またポロスからも、さっきからさんざん聞かされていることだし[1]、そしてそのほかにも、この町に住むほとんどすべての人たちから、聞かされていることだからね。しかし君のほうも、ぼくの言うことを聞いてみてくれ。なるほど、その人は、もし望むなら、死刑にはするだろう。しかしそれは、邪悪な者でありながら、立派なよい人間を殺すことになるのだよ。

カリクレス それこそがまさに、嘆かわしいことではないのかね。

1　466B～C, 486B～C参照。

ソクラテス　いや、少なくとも、ものの道理のわかっている人間には、そうではないのだ。それは、これまでの議論が示しているとおりなのだ。それとも、君の考えでは、人間が自分のために用意工夫すべきことは、できるだけ長い時間生きながらえるということであり、それで、われわれをいつでももろもろの危険から救ってくれる技術——たとえば、君がぼくにそれの修得を命じているところの、法廷において身を全うさせてくれる弁論術、それもその一つなのだが——そういう技術を修得すべきだというのかね。

C

カリクレス　そうだとも。ゼウスに誓って、あなたにそう忠告するのは、決して間違ってはいないのだ。

六七

ソクラテス　では、どうかね、世にもすぐれた人よ。はたして、泳ぐことの知識も、何か崇高なものだと君には思われるのかね。

カリクレス　いや、それはむろん、ゼウスに誓って、そうは思わない。

ソクラテス　でもたしかに、その知識だって、人びとを死から救うのだがね、その知識が必要とされるような、何かそういったところに、人びとが落ちこんだ場合にはだよ。だが、もし君がその知識は些細なものだと思うなら、ぼくは君にそれよりももっと重要なものをあげてみよう。つまり、航海の技術だ。その技術は、たんに生命だけではなく、身体も、財産も、極度の危険から救ってくれるのだ。その点では、それは弁論術と変りはないのだ。しかもその技術は、控え目で慎しみ深く、そして何かすばらしいことをやりとげているかのように構えて、偉ぶることもしないのだ。いな、法廷弁論の術と同じだけのことをなしとげていながら、つまり、もしアイギナ

D

島[1]からこの土地まで無事に送りとどけたとすれば、それに対しては、ほんの二オボロス請求するだけだと思うし、またもしエジプトや黒海地方からの場合であれば、それだけの大きな親切に対して、すなわち、いまも言ったように、当人も、子供たちも、財産も、また女たちも無事に送りとどけて、港へ上げておきながら、それに対しては、多く請求したところで、せいぜい二ドラクメまでだと思う。[2] しかも、その技術の所有者であり、それだけのことをなしとげた、当のその人はというと、上陸したなら、海岸に沿って自分の船のあたりをつつましい態度で散歩しているだけなのだ。それというのも、ぼくの思うに、一緒に乗ってきた船客たちを海の藻屑としなかったことで、彼らのうちの誰には利益をあたえ、誰には害を加えることになったか、そんなことはわかったものではないということを、彼は反省することができるからなのだ。それは船客たちを、身体の面でも魂の面でも、彼らが乗船したときに比べて、少しもよりよい人間にして上陸させたのではないということを、彼はよく承知しているからである。そこで、彼はこう反省しているわけだ。すなわち、船客たちの中の誰かが、身体の面で、重い不治の病気にかかっていながら、海に溺れて死ぬことがなかったとすれば、その人は死ななかったがゆえに、かえって不幸であり、したがって、自分によって何ら利益を受けてはいないのであるが、それだのに、もし誰かが、

E

512

1 アテナイの外港ペイライエウスから東南の海上、約二〇マイルほど沖にあるサロニカ湾内の島。

2 「オボロス」、「ドラクメ」はともに当時の貨幣の単位(銀貨)。六オボロスで一ドラクメになる。参考までに、この運賃を他の場合と比較しておけば、前五世紀末の職人の標準賃金は一日一ドラクメであったという記録があるし、また学者の計算によれば、当時独身の男子が生活をしてゆくのには一日二オボロス、夫婦者では三オボロスが必要であったと言われている。なお、当時の裁判官の日当は一日三オボロスであった。このような比較からみれば、この運賃はきわめて安いものであったように見える。

身体よりももっと大切なものである魂のなかに、数多くの不治の病気をもっている場合には、この人のほうは生きながらえるべきであり、そして海からであろうと、法廷からであろうと、あるいは、その他のどんな場所からであろうと、この人を救うなら、それがこの人のためになるだろうなんて、そんなことはありえないというわけなのだ。いなむしろ、邪悪な人間にとっては、生きているのはよりよいことではない。なぜなら、そういう人は必ず悪い(不幸な)生き方をするにきまっているからだ、ということを彼はよく知っているからである。

B

六八

そういうわけだから、船の舵をとる船頭は、よしわれわれの身を救っているのだとしても、普通、偉そうにはしないのである。それにまた、兵器の製造人だって、君、それは同じことなのだ。彼は、人の身を救う能力においては、船頭は言うまでもなく、ときには、将軍にも、またその他のどんな人にも劣ることはないのだけれども。なぜなら彼は、国家全体を救うことだってあるからだ。まさか君は、彼を弁護士なみだとは思うまいね。とはいえ、カリクレスよ、もしも彼が、君たちがしているのと同じように、自分の仕事にもったいをつけて弁じ立てるつもりになれば、それ以外の仕事はまるっきり意味がないとでも言わんばかりに、君たちは兵器の製造人になるべきであると論じて、その仕事へと勧めながら、その弁舌でもって君たちをすっかり圧倒してしまうことだろうね。というのは、彼には言うことが充分あるのだから。

C

しかし、それでもやはり君は、彼をも、また彼の技術をも軽蔑して、そして侮蔑の意味をこめながら、彼のことを「兵器屋」という名で呼ぶだろうし、また、彼の息子に自分の娘を嫁がせるつもりもなければ、逆に、自分

のほうで彼の娘を貰うつもりもないだろう。とはいえ、君は、君自身の仕事をほめて語っていることのなかから、いったい、いかなる正当な根拠を引き出して、兵器の製造人なり、またその他、ぼくが今しがたあげていた人たちを、軽蔑しようとするのかね。

D いや、ぼくにはわかっているとも、君は、その人たちよりもすぐれた人間であり、すぐれた家柄の生まれだと言いたいのだろう。しかし、その「よりすぐれている」ということだが、もしそれがぼくの言うような意味のことではなくて、ひとがどのような性質の者であるにせよ、そのことは問わないで、ただ自分と自分の持物とを救って安全に保つという、まさにそれだけのことが、人間としての卓越性(徳)であるとするなら、兵器の製造人であれ、医者であれ、またその他、およそ安全に保つという目的でつくられているかぎりの諸技術に対する君の難くせというものは、まったく滑稽なことになるのだよ。

E だがね、君、よく見てごらん、高貴であるとか、すぐれているとかいうことは、安全に保つとか、保たれるとかいうこととは、まったく別なことではないだろうかね。というのは、いったい、どれほどの時間を生きながらえるかという、そういうことを、少なくとも真実の男子たる者は、問題にすべきではないし、また生命に執着してはならないからである。いな、それらのことについては神様におまかせし、そして定められた死の運命は何ぴとも免れることはできないだろうという女たちの言葉を信じて、そのつぎに来る問題、すなわち、これから生きるはずの時間を、どうしたなら最もよく生きることができるかという、そのことのほうを考えてみるべきだから

513 である。——それはそもそも、自分の住んでいる国の政治体制に、自己をすっかり同化させることによってであるのか、だから、いまの君の場合にしても、もし君がアテナイの民衆に愛される者となり、この国で大きな権力

をもつ者になろうとしているのであれば、君はできるだけアテナイの民衆に似た性格の者となるべきであるのか、というそのことのほうを考えてみなければならないわけだ。

さあ、それでは、そうすることが、君にとっては、またぼくにとってもだが、ほんとうに利益となることなのかどうか、よく見てくれたまえ。用心しないと、おそろしいことには、君、あの魔法によって月を引きおろす女たち、テッタリアの魔女たちが、その代償としてこうむったと伝えられるような災難に、(1) ぼくたちはあわないともかぎらないからね。というのはつまり、ぼくたちが一国の中で、君の望むような権力を選び取ろうとすれば、それはぼくたちの一番大切なものを賭けてのことになるだろうからだ。

しかしながら、もしも君が、この国の政治体制に、よりよい側面にであろうと、より悪い側面にであろうと、

B

とにかく似た性格の者となってはいないにもかかわらず、その君をこの国において大きな権力をもつ者にしてくれるはずの、何かそういった技術を、世の誰でもが簡単に君に授けてくれるかもしれないと考えているとするなら、その君の考え方は、当を得たものではないとぼくには思われるよ、カリクレス。というのは、もしも君が、アテナイの民衆(デモス)に——それにそうだ、ゼウスに誓っていいが、ピュリランペスの子のデモスにも——愛されるような仕方で、何か本物の仕事をなしとげようとしているのであれば、君はたんに彼らの模倣者たるにとどまるべきではなく、真底から彼らに似た性格の者となっていなければならないからだ。そこで、君を彼らに一番似た性格の者に作りあげてくれる人、その人こそ君を、君がなりたがっているような政治家に、そしてまた弁論家にしてくれるだろう。というのは、誰にしても、自分たちの気質にかなった調子で話がなされるときには、

C

うれしく思うものだけれども、なじみのない調子で話されると、不愉快に感じるものだからだ。もっとも、君に

何か異論があるというのなら、話は別になるけれどもね、親愛なる人よ。どうだね、以上のことに対して、ぼくたちは何か言うことがあるのかね、カリクレス。

六九

カリクレス どうしてそうなるのかは知らないが、あなたの言うことはもっともだと思われるよ、ソクラテス。けれども、ぼくの気持は、世の多くの人たちが感じているものと同じなのだ。つまり、これですっかり、あなたの言うことを納得したわけではないのだ。

ソクラテス それはね、カリクレス、民衆(デモス)への愛着が君の心の中にあって、ぼくに抵抗しているからだよ。けれども、ぼくたちがその同じ問題を何度もくりかえして、もっとよく検討してみるなら、君はきっと納得してくれるようになるだろう。

D

しかし、それはそれとして、身体でも魂でも、それぞれのものの世話をするのに、二通りのやり方があるとぼくたちは主張していたのを、(2)ここで思い出してもらうことにしよう。つまり、その一つは、快楽を目あてにしてその対象とつき合うものであり、もう一つは、最善のことを目ざしながら、ご機嫌とりをするのではなく、あく

1　テッタリアの魔女たちは魔法をあやつり、毒を盛る技術にすぐれていた(メディアの物語参照)。その上彼女らは、夜の女神ヘカテと特別な関係にあったので、天上から月を引きおろす力をもっていたと言われる(アリストパネス『雲』七四九行参照)。しかしその行為のゆえに、代償として、彼女らは視力を奪われたり、子供(一説には足)を失うという罰を課せられたと伝えられている。

2　500 Bsqq.、および 464 Bsqq. 参照。

までも自己の立場を守り通してその対象とつき合うものである、ということであった。これが、あのときにぼくたちの区別していたことではなかったかね。

カリクレス　たしかに。

ソクラテス　そうすると、その一方は、つまり快楽を目ざしているもののほうは、卑しいものであり、まさに迎合以外の何ものでもないのだ。そうだろう？

E

カリクレス　お望みなら、あなたのために、そうだとしておこう。

ソクラテス　これに対して、もう一方のほうは、身体であろうと、魂であろうと、われわれの世話をするものが、できるだけ善いものになるようにするのだね。

カリクレス　たしかに。

ソクラテス　それならわれわれは、国家とその市民たちに対して、まさにそのような態度で世話をするように試みなければならないのかね。つまり、市民たち自身を、できるだけすぐれた人間にするようにしてだね。なぜなら、そのことなしには、前の議論の中で(1)ぼくたちが知ったように、ほかにどんな親切をその上にほどこしてみたところで、何の役にも立ちはしないだろうから。すなわち、莫大な財産でも、人々を支配する力でも、または

514

その他のどんな権力でも、これを獲得しようとしている人たちの精神が、もしも立派ですぐれたものではないとすればだよ。これは、このとおりだとしていいのかね(2)。

カリクレス　いいとも、それがあなたの気にいるのなら。

ソクラテス　それでは、カリクレスよ、こう考えてみてくれ。いまかりにぼくたちが、国家公共の仕事にぞく

することを公人の資格で行なおうとしていて、建築関係の仕事、つまり城壁とか、船渠とか、神殿とかいうような建物の中でも、一番重要な建物の建築にとりかかるように、お互いに勧め合っているのだとしてみてごらん。B そんな場合には、どうだろうか、ぼくたちは当然、ぼくたち自身をよく調べてみて、まず第一には、ぼくたちにはその技術、つまり建築術の心得があるのか、ないのか、またあるとすれば、それは誰から学んだのか、ということをお互いに吟味すべきだろうか。どうだね、そうすべきだろうか、それとも、その必要はないのかね。

カリクレス　それはたしかに、そうすべきだろう。

ソクラテス　それではまた第二に、こういう点も調べてみるべきではないだろうか。つまり、ぼくたちはかつて個人的に、誰か友だちのためにでも、あるいは、ぼくたち自身のものとしてでも、何かの建物を建てたことがあるのかどうか、そして、もしあるとすれば、その建物は立派なものであるか、それとも、まずいものであるか、というその点もだ。そして調べてみた上で、ぼくたちの先生がたは、名の通ったすぐれた人たちであったし、またC その先生がたとともに、ぼくたちは数多くの立派な建物を建てたのであるが、先生がたから離れてからも、ぼくたちが独力で建てた建物も、数多くあるのだということがわかったとすれば、つまり、ぼくたちがそのような状態にあるかぎり、国家公共の仕事に向かって進んで行くことは、思慮のあるふるまいであったろう。だが、これに反して、もしぼくたちが、ぼくたち自身の先生を示すこともできず、また建物のほうも、一つもあげること

1　504E～505A参照。
2　φῶμεν の代りに θῶμεν と読む。これがF写本も含めてすべての有力写本の読み方である。

ができないか、あるいは数多くあげたところで、それらが何ら取るに足らないものばかりだとすれば、実際、そのような有様でありながら、公共の仕事にとりかかったり、お互いにそうするように勧め合ったりするのは、これはむろん、無考えなことであろう。どうだね、以上言われたことは、正しいと主張していいかね、それとも、

D

いけないかね。

カリクレス それでいいだろう。

七〇

ソクラテス では、ほかのどんな場合についても、同様であろうが、特にまた、いまもしぼくたちが、国の医者となって公に働こうとしていて[1]、ぼくたちにはその資格が充分あるつもりで、お互いにそうするように勧め合っているのだとしてみよう。むろんその場合には、ぼくは君に対して、君はまたぼくに対して、こんなふうに訊ねながら、お互いをよく調べ合うことだろう。——「さあ、それでは、神々に誓って、そういうソクラテス自身の、身体の健康状態はどうなのか。あるいは、これまでに誰か、奴隷であろうと、自由市民であろうと、ソクラテスのおかげで、病気から解放された者がいるのか」と。そしてまた、ぼくのほうとしても、それと同じような

E

ことを、君について調べるだろうと思う。そして調べてみた結果、ぼくたちのおかげで身体のよくなった者は、よその町の人にも、この町の人にも、また男にも女にも、だれ一人いないということがわかったとすれば、ゼウスに誓っていうが、カリクレスよ、人間、考えがないといっても、これほどまでの無考えにおちいっているのは、ほんとうに滑稽なことではないだろうかねえ！ つまり、まだ民間の人として活動している間に、手当り次第に

いろいろとやってみて、しかしそのうちには成功することも多くなり、そういうふうにしてその技術に充分習熟するに至る、ということのないうちに――それこそ諺に言われている、「陶器づくりの術を習うのに大甕から始めようとする」(2)ということなのだが――自分でもいきなり公の仕事にとりかかろうとしたり、また同じような状態にある他の人たちにもそうするように勧める、というそれほどまでに考えがないのではねえ。そういうふうな行動をとるのは、無考えなことであると、君には思われないかね。

カリクレス　それは、そう思われる。

515

ソクラテス　ところで、話を実際のことに返すと、世にもすぐれた人よ、君は自分が国家の政治に関する仕事にたずさわり出したばかりであり、そして、このぼくにもそうするように勧めて、ぼくがそうしないのを非難しているわけだから、それなら、さっきと同じように、ぼくたちはこんなふうに質問して、お互いをよく調べ合ってみるべきではないだろうか。――「さあ、それなら、カリクレスはこれまでに、市民たちの中の誰かを、一層すぐれた人間にしたことがあるのか。以前は劣悪な人間であったのに、つまり不正で、放埒で、無思慮な者であったのに、カリクレスのおかげで、立派なすぐれた人間になった者が、誰かいるのか。それは、よその町の人でも、この町の人でも、あるいは、奴隷でも自由市民でも、誰でもよいけれども」と。――さあ、ぼくに言ってご

1　455B注1参照。

2　これは言うまでもなく、「小さいもの、易しいことから始めずに、いきなり大きなもの、難しいことに取り組む」ことを言い表わした諺。『ラケス』(187B)にもこの諺が用いられている。アテナイは陶器の主要生産地であり、その技術は高度に発達していたので、この諺もそれに関連して生まれたわけである。

(515) B

らん。もし誰かが、そういった点で君を吟味するとしたら、カリクレスよ、君はそれに対して、どう答えるつもりかね。君と交際したおかげで、誰がよりすぐれた人間になったと、君は主張するのだろうか。……君は返事をしぶっているのかね、君が公人として働こうとする前の、まだ私人として活動していた頃になしとげた、何か君の業績というようなものが、もしほんとうにあるとするならばだよ。

カリクレス 議論に勝ちたい一心なのだね、ソクラテス。

七一

ソクラテス いや、勝ちたくて訊ねているのではないよ。そうではなくて、いったい、われわれのところでは、市民の一員として政治活動をするのには、どういう仕方でこれをなすべきであると君は考えているのか、それを C ほんとうに知りたいからなのだ。それでは君は、国家の政治の仕事にたずさわることになった場合、われわれ市民ができるだけすぐれた者になるようにということ以外に、何か気をくばることがあるのだろうか。いや、それこそがまさに、政治にたずさわる人間のなすべきことであるということは、もうすでに何度もぼくたちが意見の一致をみてきたことではなかったのか。どうだね、その点では意見が一致していたのかね、それとも、一致してはいなかったのかね。答えてくれたまえ。……一致していたのだよ。ぼくが君に代って答えよう。

さて、そのことを自分の国のために実現しようと努力するのが、すぐれた政治家のなすべきことであるとするなら、さあ、今や思い出して、君が少し前にあげていたあの人たち(1)について、つまりペリクレスや、キモンや、D ミルティアデスや、そしてテミストクレスのことだが、君は今でもやはり、彼らはすぐれた政治家であったと思

っているのかどうか、ぼくに言ってくれたまえ。

カリクレス それは、そう思っている。

ソクラテス では、もしも彼らがすぐれた政治家だったのなら、明らかに、彼らのひとりひとりが、市民たちをより劣悪な人間から、よりすぐれた人間にしたはずである。どうだね、ほんとうにそうしたのかね、それとも、しなかったのかね。

カリクレス そう、したのだ。

ソクラテス そうすると、ペリクレスが民衆の前で語り始めた、その政治生活の初期の頃には、彼の晩年の頃よりも、アテナイ人はより劣悪な人間だったのだね。

カリクレス たぶんね。

ソクラテス いや、「たぶん」ではなくて、ねえ君、これまでに同意されたことからすれば、それは必然にそうでなければならないのだ。もしもあの人が、ほんとうにすぐれた政治家だったのならだよ。

E

カリクレス で、それでいったい、どうだと言うのかね？

ソクラテス いや、何でもないかもしれない。しかしつぎに、こういう点について答えてみてくれ。アテナイ人は、ペリクレスのおかげで、以前よりすぐれた人間になったと言われているのかね。それとも、まったく反対に、彼によってすっかり駄目にされたと言われているのかね。というのも、ぼくとしては、こういうことを聞い

1　503C 参照。

ているからだ。つまりペリクレスは、公の仕事に手当を支給する制度を最初に定めた人なのだが、そのことによって彼は、アテナイ人を怠け者にし、臆病者にし、噂好きのおしゃべりにし、また金銭欲のつよい人間にしてしまったのだ、とね。

カリクレス　そんなことは、耳のつぶれた〔スパルタびいきの〕連中から聞いていることなんだろう、ソクラテス。

ソクラテス　しかし、つぎに言うことは、もはや噂に聞いている程度のことではなく、君にしてもぼくにしても、はっきりと知っている事実なのだ。つまりペリクレスは、最初の頃は評判がよかったし、アテナイ人は彼に対して、ただの一度も破廉恥な罪を宣告するようなことはしなかったのだ、彼らがまだ劣悪な人間であった頃にはね。ところが、彼らがペリクレスのおかげで立派なすぐれた人間となってからは、つまり、あの人の生涯も終る頃になって、アテナイ人は彼に対して、公金費消のかどで有罪の宣告をし、もう少しで死刑の判決を下すところまで行ったのだ。それはむろん、彼を悪人と考えたからだがね。

516

七二

カリクレス　だから、どうだと言うのかね。そういうことがあったから、ペリクレスは無能な政治家だったというのかね。

ソクラテス　とにかくだよ、驢馬でも、また馬や牛でも、これらの世話をする管理人がそんなていたらくであったとしたら、無能な管理人だと思われただろうからね。つまり、それらの動物を引きとったときには、自分を

蹴ることも、角で突くことも、また嚙みつくこともなかったのに、世話をした結果は、粗暴なものになって、そういう乱暴なことを何でもするものにしたのならだよ。それとも君は、どんな動物の世話をする、どんな管理人であろうと、おとなしいのを引きとっておきながら、引きとったときよりも粗暴なものにしてしまうなら、そのような管理人は、無能であるとは思わないかね。どうだね、そう思うかね、それとも、思わないかね。

カリクレス それはたしかに、そう思う。これも、あなたを喜ばせるために、答えているのだけれど。

B

1 この手当支給制度は、抽籤制と並んで、アテナイの民主政治を支える重要な柱であった。なぜなら、これによって貧しい市民にも政治に参加する余裕が与えられ、すべての市民が平等な政治権力を持つという、民主政治の原則が実質的に保証されたからである。ところで、この手当にはいろいろな種類のものがあったが、資料の上で明確にペリクレスが創設したとみなされているのは、(イ)裁判官に対する日当である(アリストテレス『政治学』第二巻(1274a8–9)、『アテナイ人の国制』(二七の三)参照)。そのほかに、明確な記録はないが、おそらくペリクレスの時代から支給されたと思われる手当には、(ロ)アルコンをはじめ、抽籤によって選ばれた諸役人への手当、(ハ)政務審議会の議員への手当、(ニ)軍人に対する軍務手当、(ホ)ディオニュシア祭に上演される演劇観覧料として、貧しい市民に支給された観劇手当がある。なお、ペリクレス時代以後のものであるが、(ヘ)民会出席手当もある。

2 親スパルタ派の人びとを指す。彼らは国内の民主派に対抗して、少数者支配のスパルタの政治制度を模範とし、スパルタと提携することを念願としていたから、その国の風俗を模倣して、短い上着を着たり、体育を愛好したりしたが、なかでもここで言われているように、革紐を手に巻いて相手を打つボクシングの練習に身を入れたから、そのために「耳をつぶしていた」わけである。

3 ペロポンネソス戦争の初期にペリクレスがとった作戦は、アッティカの土地を放棄して、アテナイ市内に籠城する策であったが、これはスパルタ軍の無血侵入を許して農地を荒させたし、その上不運な疫病も流行して、多数の犠牲者を出したから、市民の間に彼への不満がつのり、それが告訴の形で爆発した。その告訴理由が「公金費消」であったかどうかは、他に確証はないが、ペリクレスは将軍職を解かれ、罰金刑を課せられた(前四三〇年秋)。しかし間もなく彼は再び将軍に選ばれたが、半年を経ないで翌年死んだ。

ソクラテス　それなら、さらにつぎのことにも答えて、ぼくを喜ばせてくれたまえ。どうかね、人間も動物の一種かね、それとも、ちがうのかね。

カリクレス　もちろん、そうだ。

ソクラテス　では、ペリクレスが面倒をみていたのは、人間ではなかったのかね。

カリクレス　そうだ。

ソクラテス　そうすると、どういうことになるのかね。さっきぼくたちが同意していたように、人びとは彼のおかげで、それまでよりも正しい人間になったはずではないかね？　もしもあの人がほんとうに有能な政治家として、人びとの面倒をみていたのならだよ。

C

カリクレス　たしかに。

ソクラテス　では、ホメロスも言っているように、(1)正しい人というものは、その性質は温和ではないかね。しかし、君の意見はどうかしら？　そうではないのかね。

カリクレス　そうだ。

ソクラテス　しかるにあの人は、人びとを、自分の手もとに引きとったときよりも、もっと粗暴な性質の者にしてしまったのだ。しかも、そうなることを一番望まなかったであろう、当の自分自身に対して、そういう粗暴なことをする者にだね。

カリクレス　なんなら、あなたに同意しましょうか？

ソクラテス　そうしてくれ、ぼくの言うことが本当だと思われるなら。

カリクレス　では、そうだとしておこう。

ソクラテス　それでは、より粗暴な性質の者にしたのなら、より不正で、より劣悪な者にしたのではないか。

カリクレス　そうだとしておこう。

D

ソクラテス　してみると、ペリクレスは、いまの議論からすると、政治家としては有能ではなかったということになるね。

カリクレス　いや、それは、あなたが認めないまでのことだよ。

ソクラテス　いやいや、ゼウスに誓って、君だってまた、これまでに同意していたことからすれば、認めはしないのだよ。では今度は、キモンについて言ってもらうことにしよう。彼を陶片追放にしたのは、彼が世話をしてやっていたまさにその人たちが、彼の声を一〇年間聞くまいとして、したことではなかったのか。(2)また、テミ

1　これと言葉どおりに同じものは、現存するホメロスの作品のなかには見当らない。しかしそれと似たような意味のことは、『オデュッセイア』第六巻一二〇行、第九巻一七五行に、こう言われている。「果してあの者どもは暴慢で粗暴、そしてまた正しくない人たちなのか」。

2　親スパルタ主義者として知られていたキモンは、前四六三年、農奴の叛乱に悩むスパルタの援助に出動し、叛乱軍のたてこもるイトメの城砦を攻めたが失敗し、空しく帰国して名声を落した。一方、ペリクレスは、彼の不在中に民主化政策を推し進めていたが、この機会を利用して、民衆の不満に乗じ、政敵キモンを陶片追放にすることに成功したのである(前四六一年)。

「陶片追放」(オストラキスモス)というのは、クレイステネスの政治改革(前五〇八/七年)によって生まれた政治制度の一つで、独裁者の出現を防止するために、投票によって危険人物と思われる者を一〇年間国外に追放する方法であった(財産は没収されず、帰国後は市民権を回復することができた)。陶器の破片に追放すべきであると思われる人間の名前を刻みこんで、これを投票する慣わしだったので、この名前が生まれた。

ストクレスに対しても、人びとはそれと同じことをして、さらにその後では、財産没収を含む追放の刑をそれに加えたのではなかったのか。[1] それからまた、マラトンの英雄ミルティアデスに対しては、竪穴（バラトロン）に投げこむという判決を下したのだ。そしてもし、政務審議会の議長の干渉がなかったとすれば、彼は実際に投げこまれていたであろう。[2] とはいえ、もしこれらの人たちが、君の言うように、すぐれた政治家だったのなら、そういう憂き目にあうことは決してなかっただろう。とにかく、上手な馭者が、初めの間は馬車から落ちないのに、馬の訓練をし、自分自身もいっそう上手な馭者となってから、そのときになって落ちるなどということは、決してありえないことだからだ。そんなことは、馬車を御する場合でも、ほかのどんな仕事の場合でも、ありえないことなのだ。それとも君には、そんなことがあると思われるかね。

E

カリクレス　いや、あるとは思わない。

ソクラテス　そうすると、どうやら、前に言われていたこと[3]は正しかったということになるようだね。つまり、ぼくたちの知るかぎり、このアテナイの国には、政治家としてすぐれた人間はだれ一人いなかったということはだよ。ところが君は、少なくとも現代の人たちの中には、そういう人は一人もいないことを認めたけれども、しかし昔の人たちの中には、幾人かいたと主張して、そして、さっきの人たちを選び出したのだ。しかしその人たちも、現代の人たちと何ら変りのないものであることが明らかにされたわけだ。したがって、もしその人たちが弁論家であったとすれば、彼らは真の弁論術を用いていなかったのだし――なぜなら、もし用いていたなら、失脚することはなかっただろうから――また、迎合としての弁論術も用いていなかったのだ。

517

七三

カリクレス　しかしだよ、ソクラテス、その人たちの中の誰かが——それはあなたの好きな誰でもいいが——なしとげた業績に匹敵するほどの仕事を、現代の政治家たちのうちの誰かが、なしとげるかもしれないなどとは、B とうてい考えられないのだがねえ。

ソクラテス　いや、これは恐れ入ったよ、君。それはぼくだって、あの人たちを国家の召使としてみるかぎり、決して非難するつもりはないのだ。いや、彼らは、少なくとも現代の政治家たちよりも、もっと給仕が上手であったし、そして国家が欲したものを国家に提供することができたという点では、ずっと能力があったとぼくは見ている。けれども、欲望の言うとおりにならずに、それの方向を向けかえて、説得なり強制なりによって、市民

1　テミストクレスは、キモン一派のために陶片追放にされたが(前四七一年頃)、その後彼はペロポンネソス地方においてスパルタへの反乱運動を計画したため、スパルタから売国罪の嫌疑でアテナイに告発された。そこでアテナイ人は欠席裁判で彼に死刑を宣告し、その財産を没収したのである(前四六八年頃)。その後彼は各地を転々として小アジアに逃れ、かつての敵であったペルシア王を頼り、そこの地方官に任命されたが、前四六二年頃に死んだ。

2　ミルティアデスは、マラトンの戦いの翌年(前四八九年)、アテナイ人を説いてパロス島遠征を試みたが失敗し、ペリクレスの父クサンティッポスによって「民衆を欺いた」かどで訴えられた。政敵たちは死刑を要求したが、彼の以前の功労に免じて罰金刑ですまされた。しかしその罰金を支払うことができなかったので、彼は獄に下り、戦場で受けた傷のために間もなく死んだ。

「竪穴」(バラトロン)というのは、アテナイのプニュクス丘の西方にあった岩の竪穴のことで、死刑囚が投げこまれた場所である。

3　503B〜D参照。

たちがよりすぐれた者になるはずのところへ、その欲望を導いて行くという点では、あの人たちは、現代の政治 C 家たちに比べて、言ってみれば、何一つちがうところはなかったのだ。そのことこそまさに、すぐれた政治家のなすべき唯一の仕事なのだけれどもね。しかし、軍船や城壁や船渠や、その他数多くのこれに類するものを国家に提供するという点では、あの人たちのほうが現代の政治家たちよりも手腕があったということは、ぼくも君に同意しているのだ。

さて、こうしてみると、ぼくと君とはこの議論において、おかしなことをしつづけているわけだ。つまり、ぼくたちはこうして話し合っている間じゅう、廻りまわっていつも同じ所へ戻り、お互いに何を話し合っているのか、相変らずよくわからないでいる始末だからね。けれども、とにかくぼくとしては、つぎのような点について D は、君は何度も同意してくれたし、それでよくわかってくれていると思うのだ。すなわち、身体でも魂でも、それらを取り扱うのには上に述べたような二通りのやり方があって、そしてその一方は、召使的なやり方をするものであり、それによってひとは、たとえば、われわれの身体が飢えているなら、食べ物を、渇いているなら、飲み物を、寒がっていれば、着物や寝具や履物や、その他、身体が欲しがっているものを供給してやることができるのだ。――そしてぼくは、君にわかり易いようにと思って、ことさらに同じ例を使って話をしているのだよ。(1)――というのは、それらの品物を供給してやることのできる者だという点では、つまり、小売商人であろうと、E 貿易商であろうと、あるいは、まさにそれらの品物のどれかを生産する人であろうと、すなわち、パン職人であろうと、料理人であろうと、靴屋であろうと、織物工であろうと、なめし皮職人であろうと、とにかく、そのような職業の人だとすれば、その人が、身体の世話人であると自分でも思い、また他人にもそう思われたところで、

少しも不思議ではないからだ。それは、つぎの事実を知らない者には、だれにでもそう思われているからなのだ。すなわち、いまあげたようなすべての技術のほかに、体育術や医術という技術があって、それこそがじつはほんとうの意味で身体の世話をするものであり、そしてまたその技術が、先にあげた技術をすべて支配し、それらの技術が作り出すものを使用してしかるべきものなのである。なぜなら、食べ物や飲み物の中で、どれは身体をよくすることに役立ち、どれは害になるかを、その技術は知っているけれども、それ以外の先にあげた技術はすべて知らないからである。それゆえにまた、それらの技術は、つまり医術や体育術以外の技術は、身体を取り扱うにあたって、奴隷にふさわしい、召使のような、自由市民らしくない態度に出るのであるが、これに反して、体育術と医術とは、当然、それらの技術の主人であってしかるべきものなのである。

518

さて、魂の場合にも、これと同じようなことが言えるということは、ぼくがそのことを話していたときには、君はわかってくれていたようだし、また、ぼくがそれをどういう意味で言っているのかも、君は心得ているつもりで同意していたのだ。ところが、その少し後で君は、この国に政治家として立派なすぐれた人間がいたと言い出したのである。そこでぼくが、それはどんな人たちのことを指すのかと訊ねたら、君が政治の事柄に関してすぐれた人間として持ち出したのは、まるでつぎにあげるような人たちとそっくりだったように思われるのだ。つまりそれは、かりにもしぼくが、体育に関する事柄では、どういう人たちが身体の世話人としてすぐれた人であったか、あるいは現在そうであるかと訊ねた場合に、君はまったく大まじめで、パン屋のテアリオンや、シケリ

B

1　食べ物、飲み物、着物、履物などの例を使った議論は、前に490B～Eでなされた。

C ア料理法の本を書いたミタイコスや、また酒屋のサランボス、その一人は見事なパン菓子を、もう一人はご馳走を、いま一人は酒を提供してくれるのだから、[1]その人たちこそ、身体の世話人としてすばらしい人であったと、こうぼくに答えるようなものだったのだ。

七四

さて、そう言う君に向かって、ぼくがこう言ったとすれば、君はおそらく腹を立てるだろうね。——君、君は体育術については、何もわかってはいないのだよ。君があげているのは召使たちであり、欲望の求めに応じようとする連中であって、そこで扱われている事柄については、何一つ善いことも美しいことも知らないでいる者たちなのだ。その連中ときたら、ただもうむやみやたらに詰め込んで、人びとの身体を肥らせ、それで人びとからは賞賛されているけれども、結局は、人びとが以前から持っていた肉づきまでも、失わせることになるのが落ち

D だろう。ところが、人びとのほうはまた、事情にうといものだから、自分たちを病気にさせ、以前から持っていた肉づきまでも失うようにさせた責任は、そのご馳走をしてくれた人たちにあるとはしないで、むしろ、あの時の飽食が——それは健康によいかどうかを考慮しないでなされたものだから——その後かなり時が経って、彼らに病気をもたらすことにでもなると、その時たまたま彼らの傍にいて、何か忠告する者があるとすれば、誰かれの見さかいなしに、その人たちの責任にして、その人たちを非難し、そして、もしそうすることができるなら、何か害を加えようとさえするだろう。これに反して、あの先の人たち、つまり、この災厄の真の責任者である人たちのほうを、人びとは褒めそやすことだろう。

E そして、君がいましていることも、カリクレスよ、これとそっくりのことなのだ。つまり、人びとが欲しがっていたものでもてなしながら、人びとにご馳走をした連中、その連中を君は褒めそやしているのだ。また、人びとのほうは、この連中が国家を大きくしたのだと言っているが、事実はしかし、あの昔の政治家たちのせいで、

519 国家はむくんで腫れ上り、内部は膿み腐っているのだということに、気がつかないでいるのだ。なぜなら、あの昔の政治家たちは、節制や正義の徳を無視して、港湾だとか船渠だとか、城壁だとか貢租(2)だとか、そういった愚にもつかぬもので国家を腹いっぱいにしてしまったからなのだ。だからあとで、さっき言ったような病気の発作が起こった場合には、人びとはその責任を、ちょうどその時傍にいて忠告する者たちに負わせて、この災厄の真の責任者である、テミストクレスやキモンやペリクレスのほうは、これを褒めそやすであろう。そこで、要心しないと、人びとは君に向かって攻撃してくるかもしれないのだ。それはまた、ぼくの仲間であるアルキビアデスについても言えることだけれどもね。人びとが新たに獲得したものだけではなく、最初から持っていたものまで

B も、その上に失うようなことになった場合にはだよ。君にしても、アルキビアデスにしても、その災厄の真の責

---

1 これらの人物については詳細不明。テアリオンはアテナイの市民で、祭礼用の上等のパン菓子製造人として有名だったようである。ミタイコスはシケリアの人で、料理の分野では彫刻界のペイディアスにも匹敵する有名な料理人だったと言われている。サランボスはプラタイア出身の人で、その町の自慢になるほどに評判のよい酒販売業者であったという。

2 「貢租」とは、デロス同盟諸都市の毎年の醵出金。本来、この同盟の規約では、同盟諸都市は艦船、あるいはその代りに金銭を出すことになっていたが、アテナイのみが艦船を維持し、その他の諸都市は多く貨幣で代納することになったので、アテナイがその醵出金を自由に処分しても、これに反対する力がなくなり、醵出金はあたかもアテナイへの貢租のごとくになっていた。

任者ではなくて、おそらくは、副次的な責任があるだけだろうに。

それだのに、ぼくとしては、理解に苦しむようなことが、今日でも行なわれているのを目にするし、また昔の人たちについても、そういう例を聞いているのだ。というのは、国家が、政治家たちの中の誰かを、不正を行なっている者として扱おうとするとき、そうされる人たちは腹を立てて、何というひどい目にあわせるのかと、不平を鳴らすのをぼくは認めるからだ。その人たちの言い分では、国家のために数々のよいことをしてやったのに、その国家によって、自分たちは不当にも滅ぼされようとしている、というわけなのだ。しかし、これはまったくの嘘である。なぜなら、国家の指導者たる者が、自分の指導しているまさにその国家によって、不当に滅ぼされるというようなことは、どんな人の場合にも決してありうるはずはないからだ。それはおそらく、政治家と称している人たちの場合でも、またソフィスト（教育家）と称している連中の場合でも、事情は同じであるといっていいからだ。というのは、ソフィストたちにしても、その他の点では賢いのかもしれないが、こういうおかしなことをしているからだ。つまり彼らは、徳の教師だと公言しながら、弟子たちが、自分たちによってよくしてもらっているのに、謝礼をとどこおらせたり、その他にも払うべきお礼を払わなかったりして、自分たちに不正を行なうといって、弟子たちを非難することがしばしばあるからなのだ。とはいえ、こういう話ほど理屈に合わないことが、ほかにいったい、あるものだろうか。弟子たちは、教師によって不正を取り払ってもらい、正義の徳を身につけたのだから、立派な正しい人間となっているというのに、彼らがもはや持っているはずのない、その不正という悪徳によって、不正を行なうのだなんてねえ！　君はこれをおかしなことだとは思わないかね、ねえ君。

いや、これはどうもほんとうに、ぼくは大道演説をさせられてしまったよ、カリクレス、君が答えようとして

くれないものだからね。

七五

カリクレス　しかし、あなたという人は、誰かに答えてもらうのでなければ、話をすることのできないような人なのかね？

E

ソクラテス　いや、そうでもなさそうだね。現に今だって、君が答えようとしてくれないので、ぼくはかなり長い話をしているぐらいだから。しかし、それはそれとして、ねえ君、友情の神ゼウスに誓って、言ってくれたまえ。だれかをすぐれた善い人間にしたと主張しながら、その人は自分のおかげで善い人間になり、そして今も善い人間であるのに、それでいて、その人を悪い奴だといって非難するのは、理屈に合わないことだと、君には思われないかね。

カリクレス　それは、そう思われる。

ソクラテス　では、人びとを徳に向かって教育するのだと主張している連中が、それと似たようなことを口にしているのを、君は聞いてはいないのかね。

520

カリクレス　それは聞いている。しかし、何ら取るに足らない連中について、あなたはいったい、何を言いたいのかね。

ソクラテス　それでは、あの先の人たち、つまり、国家の先頭に立って指導し、国家ができるだけよくなるように配慮しているのだと主張しながら、場合によっては向き直って、その国家を一番悪い国だと非難する人たち、

その人たちについては、君はいったい、どう言いたいのかね。この人たちは、前の人たちとは何かちがうところがあるとでも思うのかね。いや、同じだよ、君、ソフィストと弁論家とはね。あるいは、そうでないとしても、ごく近い関係にあって、ほとんど似たり寄ったりのものなのだ。その点は、ぼくがポロスに話しておいたとおりである。(1) ところが君は、そのことを知らないものだから、一方の弁論術のほうは、何かたいへん立派なものだと考え、他方ソフィストの術は、これを軽蔑しているのだ。しかしほんとうは、ソフィストの術のほうが弁論術よりも立派であって、それは、立法の術が司法の術よりも、また体育術が医術よりも立派であるのと、ちょうど同じ程度にそうなのだ。(2)

B ところで、ぼくとしては、これまでこんなふうに考えていたのだ。ほかの人たちのことはいざ知らず、民衆に呼びかけることを仕事とする人たちと、ソフィストたちだけは、彼ら自身が教育してやっている当のそのものを、自分たちに悪いことをするものとして、咎め立てすることは許されないのである。さもなければ、同時にまたその同じ言葉でもって、彼らがよくしてやったと主張している当のその人たちを、じつは少しもよくしてやってはいなかったのだと、自分たち自身をも非難することになるのだから、とね。どうだね、そうではないのかね。

カリクレス たしかに。

C **ソクラテス** そこでまた当然、その人たちだけは、もしも彼らの言っていることが本当だったとすれば、決まった報酬なしで、自発的に親切な行ないをすることもできたはずである。というのは、ひとがほかの種類の親切を受けた場合には、たとえば、体育教師によって速く走れるようにしてもらった場合だと、そのときもしその体育教師が、その人とあらかじめ報酬の額を協定しておき、速く走れるようにしてやったなら、できるだけそれと

同時に、その謝礼金を受けとる、ということにしておかないで、自発的にそうしてやったのだとすると、その人がお礼をしないでしまうということも、おそらく、ありうるだろうからだ。というのは実際、人びとが不正な行ないをするのは、思うに、足が遅いということによってではなく、その人たちが持っている不正のためだからね。D そうだろう？

カリクレス そうだ。

ソクラテス だから、もし誰かが、まさにその不正という悪徳を相手から取り除いてしまうなら、その人にはもう、不正を受けるかもしれぬという心配は、まったくないわけだ。いや、そういった親切だけは、無償で行なっても大丈夫なのだ。もしもほんとうに誰かが、人びとを善い人間にすることができるならばだよ。そうではないかね。

カリクレス それは認めよう。

1 465C参照。

2 ソフィストの術が弁論術よりもどれだけ立派であるかが、体育術と医術、立法の術と司法の術の間の優劣をもとにして論じられている。つまり体育術は、身体の健康を保持し、それを増進させるという積極的な仕事をするが、これに反して医術は、身体が病気になったときに、それを回復させるだけの消極的な役割を果すにすぎないから、その意味で前者が後者よりも立派であるし、また同様な理由で、立法の術のほうが司法・裁判の術よりも立派であると言えるわけだが、すでに465Cで言われた技術と経験(迎合)の分類、およびそれら相互の関係を表わした比例式でみると、立法の技術に対する迎合の術がソフィストの術であり、司法・裁判の技術に対する迎合の術は弁論術であるから、したがって、上に述べられたのと同じ理由で、また同じ程度に、ソフィストの術のほうが弁論術よりも立派であるということになるわけである。

七六

ソクラテス　したがって、そういった事情があるからこそ、思うに、ほかのいろいろなことについて助言してやる場合には、たとえば、家を建てることについてとか、その他ほかの技術に関係のあることなら、お金を取って助言してやるのは、少しも見苦しいことではないのだ。

E

カリクレス　そうらしいね。

ソクラテス　しかしながら、どうしたならひとは、できるだけすぐれた人間になれるか、また、自分の家や国家を最もよく治めることができるか、というそういった事柄については、お金を払うのでなければ助言してやらないというのは、見苦しいことと考えられているのだ。そうだろう？

カリクレス　そうだ。

ソクラテス　というのはむろん、その理由は、こういうところにあるからだ。つまり、いろいろな親切の中でも、いま言われた事柄についての親切だけが、よくしてもらったほうの人に、よくして返そうという気持を起こさせるから、したがって、もしひとが、その親切でもってよくしてやったので、そのお返しとして、よくされているのだとすると、それは、その人の努力が成功したのだということを示す立派な証拠であるように思われるが、そうでない場合には、その逆ということになるわけだ。どうだね、これはこのとおりかね。

521

カリクレス　そのとおりだ。

ソクラテス　さて、それでは、君がぼくに勧めているのは、いったい、どちらのやり方で国家の世話をするこ

となのか、それをどうか、はっきり決めてくれたまえ。つまりそれは、アテナイ人に対して、彼らができるだけすぐれた人間になるようにとあくまでも頑張り抜くという、ちょうど医者がするようなやり方のほうかね、それとも、召使がするようにして、彼らの機嫌をとることを目的につき合おうとするやり方のほうかね。さあ、どうか、嘘偽りのないところを聞かせてくれたまえ、カリクレス。というのも、君はぼくに対して、最初は何事も率直に話してくれたのだが、その調子で最後まで、君は心に思っていることをそのまま言ってくれるべきだからだ。だから、今の場合もいさぎよく、そして生まれのよい人らしく憚らずに、言ってみたまえ。

カリクレス　それなら、言おう、召使がするようなやり方のほうだよ。

B

ソクラテス　そうすると、君は、なんと君ほどの生まれのよい人がだよ、ぼくに迎合家になれと勧めるのだね。

カリクレス　そう、それをミュシア人(1)と呼びかえるほうがあなたの気に入るのなら、それでもいいのだよ、ソクラテス。というのは、あなたがとにかく、ぼくの言うとおりにしないようなら……

ソクラテス　いや、君が何度も言ってきたことを(2)、くり返してくれなくてもいいよ。「その意のある者は、ぼくを死刑にするかもしれない」などとね。それなら、ぼくのほうもまた、「邪悪な者でありながら、よい人間を……」と言うことになるのだから。それにまた、「ぼくが何かを持っているとすれば、それも奪い取るかもしれ

1　ミュシアとは小アジアの北西部、トロイアとリュディアの中間にある地方のこと。ミュシア人は、同じく小アジア南部のカリア人とともに、非常に軽蔑されていた人種で、「ミュシア人の端くれ」(『テアイテトス』209B)とか、「ミュシア人の餌食」(アリストテレス『弁論術』第一巻(1372b33))とかいうような言い方がなされて、それは諺のようになり、人間の屑を言い表わすのに用いられていた。

2　486A～B, 511A～B参照。

ない」とも言わんでくれ。それなら、ぼくのほうはまた、こう言い返すことになるのだから。「しかしだよ、奪い取ったところで、それらをどう使ってよいかわからないだろう。いや、ぼくから不正な仕方で奪い取ったように、そのようにまた、手に入れてからは、不正な使い方をするだろう。しかし、不正な使い方をするなら、醜い使い方をするだろうし、そして、醜い使い方をするなら、害になるように使うだろう」とね。

C

七七

カリクレス いかにもあなたは、ソクラテスよ、そういう目には一つもあうことはあるまいと、信じきっているかのようだね。まるで自分は、そういうことには無関係な局外者であって、法廷へ引っぱり出されることなど――それも、おそらくはじつにつまらない、やくざな人間によってだよ――ありえまいというつもりでだね。

ソクラテス そうすると、カリクレスよ、ぼくはほんとうに馬鹿者だということになるのだね、もしもぼくが、この国では誰にもせよ、いつなんどき、どんな目にあわないものでもないということを、考えていないとすればだよ。だがしかし、この点だけは、ぼくにはよくわかっているのだ。かりにもしぼくが、法廷へ引き出されて、君がいま言っているような、何かそういうことについての危険にあうのだとすれば、ぼくをそんなところへ引き出した者こそ、悪い人間だろうということだ。――なぜなら、誰もよい人間は、罪のない者を、そんなところへ引き出すはずはないのだから。――そしてまた、ぼくが死刑になるとしても、それは少しも意外なことではないということだ。なんなら、なぜぼくがそんなことを予期しているかを、君に話してあげようか。

D

カリクレス ぜひ、話してくれたまえ。

ソクラテス　ぼくの考えでは、アテナイ人の中で、真の意味での政治の技術に手をつけているのは、ぼく一人だけだとはあえて言わないとしても、その数少ない人たちの中の一人であり、しかも現代の人たちの中では、ぼくだけが一人、ほんとうの政治の仕事を行なっているのだと思っている。そこで、いつの場合でもぼくのする話は、人びとの機嫌をとることを目的にしているのではなく、最善のことを目的にしているのだから、つまり、一番快いことが目的になっているのではないから、それにまた、君が勧めてくれているところの、「あの気の利いたこと」(1)をするつもりもないから、法廷ではどう話していいか、ぼくはさぞ困るにちがいないのだ。だから、ポロスに話しておいたとおりのこと(2)が、ぼくにも言われることになるわけだ。つまりぼくは、ちょうど医者が料理人に訴えられて、小さな子供たちの前で裁かれるのと同じように、裁かれることになるだろう。なぜなら、まあ、考えてもごらん。そのような人間が、そういった子供の裁判官たちの前に引きすえられて、そのとき誰かがこう言って彼を訴えるとすれば、それに対して彼は、何と弁明することができるだろうか。――「子供たちよ、ここにいるこの男は、お前たち自身にもいろいろと悪いことをしてきたのだが、お前たちの中の一番小さい者にさえ、切ったり焼いたりの治療をして、身体を駄目にするのだ。それからまた、とてもにがい薬をのませて息をつまらせたり、無理やりにひもじくしたり、渇かせたりしながら、痩せ衰えさせて、お前たちを困らせるのだよ。わたしがお前さんたちに、ありとあらゆるおいしいものを、たくさんにご馳走してあげたのとは、わけがちがうのだ

E

522

1　486Cでカリクレスが引用していた語句を借りて、カリクレスにしっぺい返しをしている。なぜなら、カリクレスはその語句によって哲学のことをさしていたのであるが、ここでは弁論術にぞくする事柄がそれによって示されているからである。

2　464D～E参照。

からね」と、こう言ったとすればだよ。そういう苦境に追い込まれたときに、その医者は何と申し開きをすることができるだろうと思うかね。いや、もし彼が事実ありのままを正直に述べて、「ぼくがそういうことをしたのもみんな、子供たちよ、お前たちの健康のためなのだ」と言ったとすれば、そのような裁判官たちは、まあ、どれほどの叫び声をあげるだろうと思うかね。それは、たいへんなものではないかね。

カリクレス そうだろう。それはたしかに、そう考えなければなるまいね。

B **ソクラテス** では、その医者はすっかり困ってしまって、どう言っていいか、わからないだろうと思わないかね。

カリクレス たしかに。

七八

ソクラテス とはいうものの、ぼくだってやはり、法廷へ出たなら、これと似たような目にあうだろうことは覚悟しているのだ。なぜなら、快楽をぼくは提供してやっているのだと、彼らに向かって告げるわけにはいかないだろうからだ。この人たちが親切や利益と考えているのは、まさにその快楽なのだけれども。だが、ぼくとしては、快楽を提供する人たちをも、またそれを提供してもらう人たちをも、別に羨ましいとは思わないよ。それにまた、誰かがぼくのことを、問答で行きづまらせることによって、青年たちを腐敗堕落させるのだとか、あるいは、彼らの父兄にあたる人たちに対して、公私いずれにおいても、にがい話をして、悪口雑言するのだとか主張するとしても、ぼくはそれに対して本当のことを言うわけにもいかないだろうからだ。――「それらすべてぼ

くの言っていることは、正しいのだ。そして、そういうことをしているのも、じつはほかでもない、君たち自身のためなのだ、裁判官諸君よ」というふうにはだね。そしてまたそれ以外にも、何とも言いようがないだろう。だから、その結果は、おそらく、成り行きしだいにまかせることになるだろうね。

カリクレス　それなら、ソクラテス、ひとがそんな状態におかれていて、そして自分自身を助けることができないでいても、それでもその人は、一国の中で、立派にやっているように思われるのかね。

ソクラテス　それは、カリクレスよ、君が何度も同意していた、[1]あの一つのことさえ、その人が自分の身につけているなら、立派にやっていることになるのだよ。つまり、人々に対しても、神々に対しても、不正なことは何一つ言わなかったし、また行ないもしなかったということで、自分自身を助けてきたのならだね。というのは、そういうふうにして自分自身を助けるのが、最上のものであるということは、これまでに何度もぼくたちによって同意されてきたことなのだから。そこで、もし誰かがぼくを反駁して、ぼくは自分自身にも、また他の人にも、そういう助けをあたえることができない者だということを明らかにするなら、それが大勢の人の前でなされようと、少数の人の前でなされようと、あるいは一人対一人でなされようと、そのことに対しては、ぼくは恥ずかしく思うだろう。そして、その点での無能力のために死刑になるのだとしたら、ぼくは残念に思うだろう。だがしかし、もしこのぼくが、迎合としての弁論術をもち合わせていないがために死ぬのだとすれば、これはうけ合っていいけれども、ぼくが動ずることなく死の運命に耐えるのを、君は見るだろう。というのは、死ぬという、た

C D E

1　509B～C参照。

だそれだけのことなら、まったくの分らず屋で、男らしくない人間でないかぎり、誰ひとりこれを恐れる者はいないからだ。しかし、不正を行なうことのほうは、誰でもが恐れるからだ。なぜなら、魂が数々の悪業で充たされたまま、ハデスの国(冥界)へ赴くのは、ありとあらゆる不幸のうちでも、一番ひどい不幸だからである。で、もしよければ、ぼくは君に、どうしてそれがそのとおりであるかということの、話をしてあげてもいいのだよ。

カリクレス　いや、とにかく、ほかのことも片をつけてもらったのだから、その点も片をつけてもらうことにしよう。

523

七九

ソクラテス　では、聞きたまえ、世にも美しき物語を——とまあ、人びとの言い方をまねて始めることにしよう。君はそれを作り話(ミュートス)と考えるかもしれない、とぼくは思うのだが、しかしぼくとしては、本当の話(ロゴス)のつもりでいるのだ。というのは、これから君に話そうとしていることは、真実のこととして話すつもりだからね。

すなわち、ホメロスが言っているように、[1] ゼウスとポセイドンとプルゥトンは、彼らの父〔クロノス〕から天地の支配権を譲り受けた後で、それをお互いに分け持つことになったのだ。ところで、クロノスの治世の頃には、人間についてこういう掟が定められていたが、それは、その後もひきつづき今日に至るまで、〔ゼウスを中心とする〕神々の間において守られているのである。つまり、その掟によると、人間たちの中でその一生を正しく敬虔に過した者は、死後は幸福者の島[2]に移り住み、そこにおいて、もろもろの災厄から離れた、全き幸福のうちに日

B

を送ることになるが、これに反して、不正で神々をないがしろにする一生を送った者は、償いと裁きの牢獄——それはつまりタルタロス（奈落）[3]と呼ばれているところなのだが——そこへ行かねばならぬというのである。ところで、この人たちの裁判官というのは、クロノスの時代には、そしてなお、ゼウスが支配権を握ることになってからもごく最近までは、まだ生きている間に、生きている者を裁いていたのであり、そしてその裁判は、人びとが息絶えんとするまさにその日に行なわれていたのである。だから、その裁判では、間違った判決が下されることもあったわけだ。

1 『イリアス』第一五巻一八七行以下参照。

2 われわれのいわゆる「極楽」にあたるところであろう。この言葉が文献に現われた一番古い例は、ヘシオドスの『仕事と日々』一七一行だと言われている。その箇所の記述によると、彼の区別する「五世代の種族」のうち、第四の世代にぞくする「英雄」たちの一部は、ゼウスの特別な計らいで、人界遠く離れた地の果て、オケアノスの大洋のほとりにあるこの島に移されて——そこでは一年のうちに三度も蜜のように甘い穀物が実るということであるが——まったく憂いを知らずに、幸福な生活を送ることができたと言われている。ホメロスの詩のなかで、この「幸福者の島」にあたるものは、よく知られている「エリュシオンの野」であろう。しかし後には、ここに見られるように、オルペウス教・ピュタゴラス学派の教義の影響で、一生を正しく、また神々を敬いながら送った者が、死後に移り住む場所というふうに、宗教的ないしは倫理的な基準が、その「極楽」行きの条件に加味されたようである。

3 先の「極楽」に対して、「地獄」にあたるところである。それは地下の世界の最奥にある、底無しの奈落であり、牢獄であった（『イリアス』第八巻一三—一六行参照）。そこに閉じこめられたのは、先ずクロノスの兄弟たちで、陽の目を見るのも憚られた醜悪怪奇なティタネス（巨神）の一族どもであった。その後では、ゼウスや彼を中心とした神々への叛逆者、冒瀆人がその牢獄へつながれた。なかでも代表的なのは、後に（525E）あげられている、タンタロスやシシュポスやティテュオス、そのほかにはイクシオンなどである。しかし後には、これもまた一般的に、すべての悪人が死後に送られて責苦を受ける場所の意味になった。

そこで、〔タルタロスの支配者〕プルゥトンと幸福者の島から来た管理人たちは、ゼウスのところへ出かけて行って、自分たちのところにはどちらにも、本来はくるべきでないような人間が、よく来て困ると訴えたのだ。すると、これを聞いてゼウスは、こう言ったものだ。「よかろう。それなら、わたしのほうで」――と言ったのだ――「そういうことの起こらないようにしてやろう。それは、今の裁判のやり方がまずいからである。なぜなら、衣服をまとったままで」――と彼は言ったのだ――「裁かれる者たちは、裁かれているからである。つまり、まだ生きている間に裁かれているからだ。だから、多くの者たちが」――とゼウスは言葉をつづけたのだ――「邪悪な魂をもちながら、美しい肉体や、家柄や、富で自分をおおってしまっているのであり、そして裁判が行なわれることになると、その者たちは正しい生涯を送ったのだということを証言しようとして、彼らのためにたくさんの証人が乗り込んで来るということになるのだ。そのため、裁判官たちは、それらのものによって心を奪われることになるし、同時にまた、自分たち自身のほうも衣服をつけたままで、つまり、眼や耳や、さらには身体全体でもって、自分たちの魂の前をすっかりふさぎながら、裁いているのだ。かくて、それらすべてのものが、裁判官たちの邪魔になっているわけだ。自分たちが身にまとっているものもそうだし、裁かれる者たちが身にまとっているものもそうなのだ。そこで、まず第一には」――まだゼウスの言葉がつづいているのだよ――「裁きを受ける人間たちが、自分の死ぬ時期をあらかじめ知っているのをやめさせなければならない。なぜなら、いまのところは、その時期をあらかじめ知っているのだから。さて、そのことを人間たちにやめさせるようにということは、ほら、もうすでに、プロメテウスに言いつけてあることなのだよ(1)。それから、そのつぎには、彼ら人間たちは、いま言われたような衣裳をすべて脱ぎすてて、裸になって裁かれるようにしなければならない。つまり、

524

死んでから裁かれるようにすべきなのだ。それにまた、裁く者のほうだって、裸にならなければならない。つまり、死んでいなければならないのだ。そして、ひとりひとりの人間が死んだなら、すぐそのときに、すべての身内縁者から離れ、あの飾りとなるものは全部地上に残してきたところの、その魂だけを、魂だけでもって観察するようにしなければならないのだ。その判決が正しいものとなるためにはね。

さて、わたしには、そういったことは、君たちよりも早くからわかっていたから、わたし自身の息子を裁判官にすることに決めておいたのだ。そのうちの二人はアジアの生まれの者で、ミノスとラダマンテュスであり、もう一人はヨーロッパの生まれの者で、アイアコスだ。(2) そこで、この息子たちは、やがて死んだなら、あの牧場のなかの三叉路のところで、裁判を行なうことになろうが、そこからは二つの道が出ていて、一つは幸福者の島へ通じているし、他はタルタロス(奈落)へ通じているのだ。そして、アジアから来た者は、ラダマンテュスが裁き、

1 アイスキュロスの『縛られたプロメテウス』二四八行、「人間どもが死の運命をあらかじめ知っているのをやめさせてやったのだ」という語句が念頭にあったものと推測される。プロメテウスは、人類に火やその他の技術をもたらした恩人としてよく知られている神。

2 ミノスとラダマンテュスはともに、ゼウスとフェニキアの王女エウロペとの間に生まれた子。海辺で遊んでいたエウロペに見惚れたゼウスは、牡牛に姿を変えて波間から現われ、彼女を誘惑してその背に乗せ、海を渡ってクレタ島に連れて行き、そしてそこで生まれたのがこの二人だと神話には語られている(彼らが「アジアの生まれ」と言われているのは、当時の地理概念では、クレタ島はアジアに属するものと考えられていたからか、それとも、彼らの母の出生地がアジアのフェニキアであったためかであろう)。ミノスはクレタ島の王となり、ラダマンテュスは彼を補佐して法を定め、正しく治めたと言われている。

アイアコスは、ゼウスと河の神アソポスの娘、ニンフのアイギナとの間に生まれた子。彼は母が連れ去られて行き、そして自分が生まれた場所であるアイギナ島の支配者となり、特に敬神の念の厚さで知られた。

ヨーロッパから来た者は、アイアコスが裁くことになろう。しかしミノスには、いまの両人が何か判断に苦しむようなことがあった場合に、最後の断を下す特権を与えておこう。人間たちにとって、死後の旅路についての判定が、できるだけ正しいものとなるためにね。」

八〇

以上が、カリクレスよ、ぼくの聞いていることであって、真実であると信じていることなのだ。そしてこれらの話からは、何かつぎのような結論が生まれてくると、ぼくは考えているわけだ。——すなわち、まず、死ということだが、それは、ぼくの見るところでは、魂と身体という二つのものが、互いに分離するということにほかならない。ところで、ほら、それら二つが互いに分離した場合には、両者のどちらも、その人がまだ生きていたときに持っていたのと、ほとんど変らない自己の状態を、そのまま持ちつづけているのだ。つまり、身体についていえば、それは、自分が生まれつきもっていたものも、養育の結果によるものも、また外部からの偶然な影響によるものも、その全部をそのままはっきりとどめているのだ。たとえば、誰かの身体が、その人の生存中に、生まれつきにせよ、養育の結果にせよ、もしくはその両方によってにせよ、大きかったとすれば、死後もまた、その人の屍体は大きいのだ。また、肥っていたとすれば、死後も肥っているし、その他の点においても同様である。そしてまた、長髪を蓄えるのをならわしとしていたとすれば、その人の屍体も長髪であり、さらにまた、生存中に、鞭打ちにされた無頼漢があって、打擲(ちょうちゃく)された跡をとどめ、それが鞭で打たれた跡であれ、そのほかの傷の跡であれ、瘢痕となって身体に残っていたとすれば、死後もまた、その人の身体が、それらの傷跡をそのまま持っ

ているのを見ることができる。あるいはまた、誰かの手足が、生前に、折れていたとか、ねじ曲っていたとかしたなら、死後もまた、それと同じ状態がはっきり認められるのだ。これを要するに、一口で言えば、ひとが生存中に、身体の面で、自分をそのようなものにしておいたことが、全部であろうと、大部分であろうと、死後もまた一定期間は、そのままはっきり認められるのだ。したがって、それとちょうど同じことが、魂の場合についても言えるようにぼくには思われるのだよ、カリクレス。つまり、魂が身体から離れて裸になったときには、それが生まれつき持っていたものも、また、人がそれぞれの仕事に従事することによって、あとから魂のうちに持つにいたったものも、そのすべてが、はっきりとその魂のなかには認められるわけだ。

D

さて、人びとが死んで、裁判官のところへやって来たなら、つまり、アジア出身の者なら、ラダマンテュスのところへやって来ると、ラダマンテュスは彼らを停止させて、そのひとりひとりの魂を観察するのであるが、その際、それが誰の魂であるかは知らないのである。いな、しばしば、ペルシア大王でも、あるいは他のどんな王や権力者でも、それと知らずに取り押えてみると、その魂には、何一つ健全なところがなく、むしろ偽誓や不正のために、その魂はいたるところ鞭でひっぱたかれていて、その傷跡でいっぱいになっているのを見てとるのだ。つまり、その傷跡というのは、その人の生前における行為の一つ一つが、彼の魂の上に刻印したところのものなのである。また、その魂は、嘘や法螺のためにすっかりひん曲っており、そして真実を無視して育てられたがために、真直ぐなところは一つもないのを見てとるのだ。さらには、何でも思いのままにできる自由と、贅沢と、傲慢さと、そして行為に抑制がなかったこととによって、その魂はつりあいを失い、醜くなっているのを見るのだ。ところで、こういったありさまを見てとると、ラダマンテュスは、その魂を見下げるようにして、真直ぐに

E

525

牢獄の方へ送るのである。そして、その魂のほうは、そこへ着いたなら、その魂にふさわしい責苦を耐え忍ばねばならぬことになっているのである。

八一

B　ところで、すべて罰に処せられる者は、他の者から正当に処罰されるなら、そのことによって、その本人が今後一層よい人間となり、利益を受けることになるか、それとも、その人がどんな処罰を受けるのであれ、それを見るほかの人たちのほうが恐怖感をおぼえて、いっそうよい人間になるようにと、ほかの人たちに対する見せしめとなるか、そのいずれかであるべきものだ。しかし誰でもが、神々や人間たちの課する裁きを受けることによって、利益を受けるわけのものではなく、それは、癒されうる過ちを犯した者だけにかぎられるのだ。とはいってもしかし、彼らにその利益がもたらされるのは、この世においても、ハデスの国においても、苦痛と悲歎を通してである。なぜなら、それ以外には、自分の犯した不正の罪から脱却する途(みち)はないからだ。他方、これに対し

C　て、極端な不正を行なって、そしてそのような不正行為のために不治の者となってしまった人たち、その人たちの中から、いま言われたあの見せしめは生まれてくるのだ。そして、その人たち自身は、不治の者なのだから、もはやぜんぜん利益を受けることはないのだが、しかしほかの人たちのほうが利益を受けるわけだ。すなわち、いまの不治の者となった人たちが、その過ちのゆえに、最も大きな、最も苦しい、また最も恐ろしい刑罰を、いついつまでも受けているのを、いや、何のことはない、文字どおりの見本として、かしこ、ハデスの国の牢獄のなかに吊り下げられ、不正な人たちの中で、つぎつぎにそこへやって来る者たちに対して、見世物となり、警告

D とされているのを見る人たち、その人たちのほうが利益を受けるわけだ。

アルケラオスだって、そのような見せしめの一人になるだろうとぼくは主張するね、もしもポロスの言っていることが本当ならばだよ。(1) それにまた、ほかの誰であろうと、彼と似たような独裁者なら、その人もそうなるにちがいないのだ。しかしさらに、ぼくの思うには、それら見せしめとなる者の大部分は、独裁者や王や権力者たち、つまり国家公共の仕事を行なってきた人たちから生まれてくるのである。なぜなら、これらの人たちは、何でも自由がきくので、最大の、しかも不敬きわまる過ちを犯すからだ。で、その点については、ホメロスもまた

E 証人となってくれている。(2) つまり、あの人の詩によると、ハデスの国で永劫の罰を受けているのは、王や権力者たちであるとされているからだ。すなわち、タンタロスや、(3) シシュポスや、(4) ティテュオスがそれなのだ。(5) これに対して、テルシテスとか、(6) そのほか普通の身分の者で、誰か邪悪な人がいたとしても、そのような人が不治の者

1 471A~C参照。
2 『オデュッセイア』第一一巻五七六―六〇〇行参照。
3 タンタロスは、ゼウスとニンフのプルトの子で、リュディアのシピュロスの王。彼は神々の寵愛を受けていたが、心驕って増長したために、神々の怒りにふれ、死後冥界において、飲み物や食べ物を目の前にしながら、永遠の飢渇に苦しまねばならぬという刑罰を受けた。
4 シシュポスは、コリントスの伝説上の王。彼はゼウスの秘密をあばいたために、冥界において、巨石を丘の頂きまで押し上げる仕事を刑罰として課せられた。その石は丘の頂き近くまで達すると、再び転がり落ちるから、彼はその仕事をいつまでもくり返し行なわざるをえなかった。
5 ティテュオスは、ガイア(大地)の子で巨人。エウボイアの支配者。レトに横恋慕し、乱暴を働いたので、その子のアポロンとアルテミスによって殺された。冥界では、二羽の禿鷹が彼の肝臓をついばみつづけている。
6 テルシテスは、『イリアス』に出てくるギリシア方の兵士で、野卑で醜悪な人間の典型として描かれている。彼はいつも指揮官たちの陰口を言い、悪態をついて、全軍の物笑いとなり、嫌われていた(第二巻二一二行以下参照)。

として重い刑罰に処せられていると、詩に書いている者は誰もいないのだ。というのは、そのような人間には、それだけのひどい過ちを犯す自由がなかったからだと思う。それゆえにまた、その自由があった人たちよりも運がよかったわけだ。いや、じつは、カリクレスよ、極悪非道となる連中というのも、権力者たちの間から生まれてくるからなのだ。とはいってもしかし、その権力者たちの間においても、立派な人物が生まれてくることはいっこうに差支えないし、そしてたしかに、そうして生まれてきた人たちは、大いに感心してもいいのだ。なぜなら、

526 カリクレス、不正を行なう自由が大いにあるなかで育ちながら、一生を正しく送り通すということは、むつかしいことであるし、したがって、それは大いなる賞賛に価するからだ。だが、そのような人間は、ごく少数しか現われてくるものではない。けれども、この町にも、よその土地にも、かつてそのような人間がいたことは事実だし、また将来においても、ひとから委託されたものを正しく管理していくという、そういう徳の点で、立派なす

B ぐれた人物は、きっと出てくるだろうと思う。しかし、そのなかでも一人、大へん評判がよくて、その名声は、遠くほかの国々のギリシア人たちの間にさえも及んでいた人があった。リュシマコスの子のアリステイデス(1)がそれである。しかしながら、権力者たちの大部分は、ねえ君、たいていは、悪い人間となるものだよ。

八二

ところで、さっき話していたことにもどると、あのラダマンテュスは、だれかそのような者をつかまえると、その人について、ほかのことは何一つ知らずに、つまり、それが誰であるかも、またどこの家の子であるかも知らずに、ただ邪悪な者だということだけを見てとる。そして、そのことを見てとると、治る見込みのある者か、

ない者かということを区別するしるしをつけた上で、タルタロスへ送るのである。そしてその者は、そこへ着いたなら、その者にふさわしい刑罰を受けることになるのだ。

C　しかしながら、時にはまた、それとは別に、神を敬い、真理を友として一生を送った魂を見ることもある。それは、普通一般の市民の魂であるか、それとも、誰かほかの人の魂なのだが、とりわけそれは、ぼくに言わせるなら、カリクレスよ、生涯、自己の本分を守って、余計な仕事に手を出さなかった、哲学者の魂なのであるが、そんな魂を見ると、彼は感心に思って、幸福者の島へ送るのである。そして、アイアコスもまた、これと同じようにしているわけだ。――彼らは両人とも〔職務を示す〕杖を手にして裁いているのである。――ところで、ミノ

D　スはというと、ホメロスのなかでオデュッセウスが、彼を見て――

　　黄金の笏を手にして、死者に裁きを宣している

と言っているように(2)、彼だけがひとり黄金の笏を手にして、監督しながらその席についているのだ。

1　前五二〇頃―四六八年頃。「正義の人」と呼ばれ、廉直と愛国心とで聞こえた民主派の政治家。ソクラテスと同郷のアロペケ区の出身で、ソクラテスの父と彼の父とは親交があったと言われる(『ラケス』180E)。ペルシア戦争においても大きな功績があったが、その後、デロス同盟が成立すると、同盟諸都市の醵出金の額を割り当てる仕事を委託された。それは彼の公正と廉潔が遠く海外にまで鳴りひびいていたからだと言われる。彼の晩年は不詳だが、窮乏のうちに死んだと伝えられる。
なお、ここで彼だけがひとり、他の前五世紀の偉大な政治家たちから区別されて、高い評価を受けているのは注目されるが、しかしそれは、彼がソクラテス(プラトン)の言う意味でのすぐれた政治家であったということではあるまい。

2　『オデュッセイア』第一一巻五六九行からの引用。

さて、ぼくとしては、カリクレスよ、これらの話を信じているし、そして、どうしたならその裁判官に、ぼくの魂をできるだけ健全なものとして見せることになるだろうかと、考えているわけだ。だから、世の多くの人たちの評判は気にしないで、ひたすら真理を修めることによって、ぼくの力にかなうかぎり、ほんとうに立派な人間となって、生きるように努めるつもりだし、また死ぬ時にも、そのような人間として死ぬようにしたいと思っ E ているのだ。そして、ほかのすべての人たちに対しても、ぼくの力の許す範囲内で、そうするように勧めているのだが、特にまた君に対しても、君が勧めてくれるのとは反対になるけれども、いま言ったその生活を送り、その競技(1)に参加するよう勧めたいのだ。その競技こそ、ぼくに言わせるなら、この世で行なわれるすべての競技に匹敵する価値をもつものなのだ。そしてまた、前の君の非難(2)に対しては、こう言ってお返しをしておこう。――ぼくがさきほど話していたような裁判を、君が受けることになり、そしてその判決が君に下ることになった場合、 527 君は君自身を助けることができないだろう。いな、君が裁判官であるアイギナの子〔アイアコス〕のところへ行ったときに、彼が君を取り押えて引っぱって行くとすれば、君はかしこで、ぼくがこの地でそうするのに劣らず、ぽかんと口をあけたまま、目を白黒させていることだろう。そしてたぶん、君を殴る者だってあるかもしれないのだ、それも、横っ面を不名誉となるような仕方でね。さらにまた、ありとあらゆる仕方で君に侮辱を加えるかもしれないのだ、とね。

八三

だがしかし、君はおそらく、そんな話は老婆の語る作り話のようなものだと思って、これを軽蔑するのかもしれないね。そしてたしかに、もしぼくたちが何とか探して、いまの話よりももっと立派で、もっと真実に富んだ話を見つけ出すことができているのなら、それを軽蔑するのは何の不思議もないであろう。しかし実際には、君も見るとおりに、君たちは三人もそろっていながら、つまり君に、ポロスに、ゴルギアスさんと、いずれも当代のギリシア人の中では一番の知者がそろっていながら、その君たちは、このぼくのいう生活――それはあの世においても有利であることが明らかになっているのだが――その生活よりも、何かほかの生活を送るべきだということを、証明できないでいるのだ。いや、これほどの長い議論の間に、ほかの説はみな反駁されてしまったのに、ただこの説だけは、反駁にも揺がないでとどまっているのだ。すなわち、ひとは不正を受けることよりも、むしろ不正を行なうことのほうを警戒しなければならない。また、ひとは何よりもまず、公私いずれにおいても、善い人と思われるのではなく、実際に善い人であるように心がけなければならない。(3) しかし、もし誰かが、何らかの点で悪い人間となっているのなら、その人は懲らしめを受けるべきである。そしてこれが、つまり裁きを受けて懲らしめられ、正しい人になるということが、正しい人であるということについで、第二に善いことなのであ

B

1　ギリシア人は各種の競技(アゴーン)を好んでいたし、それが彼らの生活のなかで大きな比重を占めていたことが、ここの発言の前提になっている。

2　486A～D参照。

3　これは、アイスキュロスの『テバイ攻めの七将』の中の有名な語句(五九二行)の引用であろう。なお、この劇が上演されて、その言葉が舞台の上から述べられたとき、観客はアリステイデスこそ、その言葉にふさわしい人間だとして、同じく見物中のアリステイデスの方を一斉にふり返って見た、という話が伝えられている(プルタルコス「アリステイデス伝」三)。

C

る。さらにまた、迎合は、自分に関係のあるものでも、他人に関係のあるものでも、あるいは、少数の人を相手とするものでも、大勢の人を相手とするものでも、どれもすべて遠ざけるべきである。なお、弁論術もそういうふうに、つねに正しいことのために用いるのでなければならない。そしてそれは、他のどんな行為の場合でも同じである、というそういう説だけは揺がずにいるのだ。

だから、ぼくの言うことを聞きいれて、ぼくの目ざすこちらの方へ、君も一緒について来ることにしたまえ。これまでの議論が示しているように、目ざす目標に到達したなら、君は生きているときも、死んでからも、幸福にすごせるだろうから。そして、もし誰かが、君を馬鹿者だとして軽蔑するとしても、また、もしそうしたいのなら、侮辱するとしても、そんなことは放っておきたまえ。いや、それはかりか、あの不名誉な平手打ちをくらわせるとしても、ゼウスに誓っていうが、君は動ずることなく、それを受けておけばいいのだ。君がもし徳を修

D

めて、ほんとうに立派なすぐれた人間となっているのなら、そのような仕打ちによって、君は何一つ恐ろしい目にあうことはないだろうから。かくして、ぼくたちは共に、そのようにして徳を修めたなら、そのときになって初めて、もしそうすべきだと思われるなら、政治の仕事にたずさわることにしよう。あるいは、どのようなことであろうと、それがぼくたちにとってよいことだと思われるなら、そのときになって計画を立てることにしよう。今よりは、計画を立てる上でもっとすぐれた人間になってだね。なぜなら、現在のぼくたちがそうであると見えるような、少なくともそんな状態にありながら、それでいてしかも、何かひとかどの者でもあるかのように思いこんで、血気にはやった行動に出るのは、みっともないことだからだ。そのぼくたちたるや、同じ事柄についいて始終考えが変り、それも些細なことについてならとにかく、一番大切な事柄について、そのありさまだのにね。

E

——ぼくたちの無教養はそれほどのひどい状態にまで達しているのだよ。

さて、それなら、いまここに現われてきたこの説を、ぼくたちの人生のいわば道案内人としようではないかね。その説はぼくたちに、生きるのも、死ぬのも、正義やその他の徳を修めてにするという、この生活態度こそ、最上のものであることを示してくれているのだ。だから、さあ、この説について行こうではないか。そして、ほかの人たちにもそうするように勧めようではないか。君が信じていて、ぼくに勧めてくれているところの、あの説にではなしにね。あの説は何の値打ちもないものなのだから、カリクレス。

メノン

——徳について——

藤沢令夫訳

登場人物

メノン
ソクラテス
メノンの召使
アニュトス

一

70 **メノン**　こういう問題に、あなたは答えられますか、ソクラテス。——人間の徳性というものは、はたしてひとに教えることのできるものであるか。それとも、それは教えられることはできずに、訓練によって身につけられるものであるか。それともまた、訓練しても学んでも得られるものではなくて、人間に徳がそなわるのは、生まれつきの素質、ないしはほかの何らかの仕方によるものなのか……。

ソクラテス　おや、メノン、これまでテッタリア人(1)といえば、馬に乗るのがうまいのと、金持だというのでギB リシア人のあいだに名がきこえ、讃歎されていたものなのに、いまではどうやら、知恵にかけてもそういうことになったらしいね。とくに、君の仲間のアリスティッポスもいるラリサの市民というのが、どうもそうのようだ。そして君たちをそういうふうにしたのは、ゴルギアス(2)だね。なにしろ、彼があの都市にやって行くや、君の愛するアリスティッポスが属しているアレウアス家(3)の主だった人々をはじめ、その他一般のテッタリアの主要人物たちは、すっかりその知恵に魅せられて、恋びとのように彼を慕うようになってしまったのだから。とりわけ、あの人が君たちにうえつけたのは、何かたずねられたときに、いかにも識者らしく、おめず臆せず堂々と答えるC という習慣だ。ほかでもない、そもそも彼自身が、ギリシア人のうちで誰でものぞむ者に、何でも好きなことをたずねさせて、しかもどんな人に対しても答に窮しないという人だからね。

だがね、親愛なるメノン、このアテナイでは、事情はまったく反対なのだよ。まるで知恵の旱魃でも起ったか

71 のようなのだ。たぶん知恵は、ここの土地を去って、君たちのところへ行ってしまったのかもしれない。すくなくとも、君がこの土地の誰かをつかまえて、いまのような問をかけるつもりになってみれば、それがわかるだろう。きっと誰でもわらって、こう答えるだろうから。

「客人、どうやら君には、ぼくが何か特別恵まれた人間にみえるらしいね。徳が教えられうるものか、それともどんな仕方でそなわるものなのか、そんなことを知っていると思ってくれるとは！　だがぼくは、教えられるか教えられないかを知っているどころか、徳それ自体がそもそも何であるかということさえ、知らないのだよ」。

二

B かく言うぼく自身にしても、メノン、同じことだ。この問題に関するぼくの知恵は、同市民たちの御多分にもれず貧困であって、徳についてぜんぜん何も知らないことを、自分自身に対して非難している状態なのだ。そして、あるひとつのものが何であるかを知らないとしたら、それがどのような性質のものかということを、どうし

1　テッタリア(Thettalia または Thessalia——本訳文・解説を通じ、アッティカ語法で書かれたプラトンやクセノポンの原典に従って、「テッタリア」と統一的に表記する)はギリシア北部の地方。平原地帯を主とするから住民は乗馬を得意とし、またこのころはギリシア中で最も富裕であった。

2　シケリア(シシリー)島東岸の植民都市レオンティノイ出身。前五世紀から四世紀にかけて活動したソフィストないしは弁論家の代表的人物。後半生の数年間をテッタリアですごした。彼に関するソクラテスの以下の言葉には皮肉がこめられている。

3　テッタリアの主要都市ラリサにおける古い王家で、アリスティッポスはこの王家から出た支配者(ソクラテスの弟子のキュレネのアリスティッポスとは別人である)。

てぼくは知ることができよう。それとも君には、メノンとは何ものであるかをぜんぜん知らない人が、メノンが美しいか、金持であるか、高貴な人物であるか、あるいはまたそういった性質と反対の人間であるか、というようなことを知ることができると思えるかね。どうだね、できると思うかね？

C

メノン それはたしかにできないでしょう。しかし、ソクラテス、あなたが徳とは何かということさえ知らないというのは、ほんとうなのですか？ くにへ帰って、あなたのことをそのように伝えてもいいですか？

ソクラテス それだけでなく、君、ぼくはまだそれを知っている人に、出会ったことさえないと自分では思っているということも、ついでに伝えてくれたまえ。

メノン なんですって？ あなたはゴルギアスがここに来ていたときに、お会いにならなかったのですか？

ソクラテス むろん会ったとも。

メノン それであなたには、あの人が知っているとは思えなかったのですか？

ソクラテス ぼくはあまり物覚えがよくないのだよ、メノン。だから、そのときぼくにどう思われたか、いますぐには言えないのだ。しかし、たぶんあの人なら知っていることだろうし、君もあの人の言ったことを、知っていることだろう。それならひとつ、彼がどんなふうに言っていたかを、ぼくに思い出させてくれたまえ。なんだったら、君自身の説を聞かせてもらってもいいが。むろん君の意見は、彼と同じだろうからね。

D

メノン ええ、同じ意見をもっています。

ソクラテス それなら、あの人のことは、当人がここにいないことでもあるし、しばらくおくことにして、君自身の説のほうを聞かせてもらおう。神々に誓って、メノン、君は徳とは何であると主張するのかね？ どうか

惜しまずに教えてくれたまえ。これまで誰ひとりとして、それを知っている人に出会ったことがないとぼくが言ったのに、君とゴルギアスが知っているとわかれば、ぼくは非常に幸運な嘘をついたことになるというものだ。

三

E **メノン** いや、ソクラテス、お答するのは別にむずかしいことではありません。まず、男の徳とは何かとおたずねなら、それを言うのはわけないこと、つまり、国事を処理する能力をもち、かつ処理するにあたって、よく友を利して敵を害し、しかも自分は何ひとつそういう目にあわぬように気をつけるだけの能力をもつこと、これが男の徳というものです。さらに、女の徳はと言われるなら、女は所帯をよく保ち夫に服従することによって、家をよく斉(ととの)えるべきであるというふうに、なんなく説明できます。そして子供には、男の児にも女の児にも、別にまた子供の徳があるし、年配の者には別にまた年配の者の徳があって、それもおのぞみとあれば、自由人には

72 自由人の徳、召使には召使の徳があります。こうしてあげて行けば、ほかにもまだたくさんの徳がありますから、したがって、徳が何であるかを言うにこと欠くようなことはありません。つまり、それぞれの働きと年齢に応じて、それぞれがなしとげるべき仕事のために、われわれのひとりひとりには、それぞれに相応した徳があるわけですから。他方また、思うに、ソクラテス、悪徳のほうもやはり同様でしょう。

ソクラテス ずいぶんぼくも運がいいようだね、メノン、徳は一つしかないというつもりでさがしていたのに、徳がまるで蜜蜂のように、わんさと群れをなして君のところにあるのを発見したのだから。しかしだね、メノン、

B ついでにこの蜜蜂の譬(たと)えをつかって言うと、かりにもしぼくが蜜蜂というものの本質について、それはいったい

何であるかとたずね、それに対して君が、蜜蜂にはいろいろとたくさんの種類のものがあると答えたとしよう。その場合、ぼくがもし次のように質問したとしたら、君は何と答えるかね。

「蜜蜂にはいろいろとたくさんの種類があって、それらは互いに異なったものであるというのは、それらが蜜蜂であるという点においてそうなのだと、君は主張するのかね？　それとも、この点では、それらは互いにすこしも異なるものではなくて、何かほかの点、たとえば美しさとか、大きさとか、その他そういった何らかの点で異なっているのかね？」

こうきかれたら、君は何と答えるかね？　言ってみてくれたまえ。

メノン　むろんこう答えるでしょう。——それらの蜜蜂は、蜜蜂であるという点では、どれをとってくらべてみても、互いにすこしも異なるものではないと。

C

ソクラテス　では、次にこうたずねたとしたら？

「それなら、ぼくが君に言ってほしいのは、その肝心のものなのだよ、メノン。つまり、それらの蜜蜂が、その点ではすこしも異ならずに全部同じであるところのもの、それを君は何であると主張するのかね？」

きっと君は、何らかの答をぼくに言うことができるだろうね。

メノン　ええ、できます。

四

ソクラテス　君があげたいろいろの徳についても同じことが言える。たとえその数が多く、いろいろの種類の

ぼくの言おうとすることがわからないかね？ D

に徳であるところのもの」を質問者に対して明らかにするのが、答え手としての正しいやり方というべきだろう。あるからこそ、いずれも徳であるということになるのだ。この相（本質的特性）に注目することによって、「まさものがあるとしても、それらの徳はすべて、ある一つの同じ相（本質的特性）をもっているはずであって、それが

メノン　わかるような気はします。でも、思うようには問の意味がまだつかめません。

ソクラテス　君がさっきのように考えるのは、メノン、つまり、男には男の徳があり、女には別に女の徳があり、その他の者にはまた別の徳があるというふうに考えるのは、ただ徳の場合だけなのだろうか。それとも、健康とか、大きさとか、強さとかいったものについても、同じなのだろうか。君には、男には男の健康があり、女にはまた別に、女の健康というものがあるように思えるかね？　それとも、男の中にあろうと、他の何者の中にあろうと、いやしくも健康であるかぎりは、いずれの場合にもそこには同じ相（本質的特性）があるのだろうか？ E

メノン　健康なら、男の健康も女の健康も同じだと思います。

ソクラテス　大きさや強さも、そうではないかね？　ひとりの女が強いという場合、その女を強くあらしめているのは、〔男のそれと〕同じ本質的特性であり、同じ強さなのではないだろうか。「同じ」というのはつまり、強さというものは、男の中にあろうと、女の中にあろうと、強くあるという点ではすこしも異なるものではないという意味だ。それとも君には、どこか異なるように思えるかね？

メノン　いいえ、そうは思えません。

73 **ソクラテス**　そして徳は、子供の中にあろうと年寄りの中にあろうと、女の中にあろうと男の中にあろうと、

徳であるという点に関して、何かすこしでも異なっているだろうか？

メノン　どうも私には、ソクラテス、なんだかこの場合にはもう、これまでのほかのものと同じようにはいかないように思えるのですが。

ソクラテス　どうして？　君は、男の徳は国をよく治めることにあり、女の徳は家をよく治めることにあると、こう言っていたのではなかったかね？

メノン　たしかにそう言いました。

ソクラテス　では、国にせよ、家にせよ、あるいはほかの何にせよ、節制をもって正しく治めないとしたら、これをよく治めることができるだろうか？

メノン　むろんできません。

B

ソクラテス　節制をもって正しく治めるのだとすれば、節制と正義によって治めることにならないだろうか？

メノン　それに違いありません。

ソクラテス　してみると、女も男も、いやしくもすぐれた有徳の人物たらんとするならば、どちらも同じものを必要とするわけだ。すなわち、正義と節制とを。

メノン　明らかにそうです。

ソクラテス　では、子供や年寄りはどうだろう。よもや、放埒(ほうらつ)であり不正でありながら、すぐれた人になることはできないだろうね？

メノン　むろんできません。

C

ソクラテス　節制をもち、正しくなければならないのだね？

メノン　ええ。

ソクラテス　してみると、人間がすぐれた有徳の者であるのは、誰でも同じ仕方によるということになる。なぜなら、同じものを得てこそ、すぐれた者になるのだから。

メノン　そのようです。

ソクラテス　そして、もしさまざまの人間の徳が同じものでなかったとしたら、同じ仕方ですぐれた者であるということは、ありえなかっただろう。

メノン　たしかに。

五

ソクラテス　それでは、徳というものは、どのような人間のもつべき徳もすべて同じであるということになったのだから、ゴルギアスは——そして彼の説をうけて君は——その徳とは何であると主張するのか、思い出して言ってみてくれたまえ。

D

メノン　人々を支配する能力をもつこと、というよりほかはないでしょう。もしあなたが、あらゆる場合にあてはまるような、何か一つのものを求めているのでしたら。

ソクラテス　いかにも、ぼくの求めているのはそういうものだ。——しかし、はたして、メノン、君の言ったそのことは、同じく子供のもつべき徳でもあり、召使のもつべき徳でもあるだろうか——主人を支配する能力を

(73)

もつということが。君は、人を支配する者が、なお召使でありうると思うかね？

メノン　いいえ、けっしてそうとは思えません、ソクラテス。

ソクラテス　たしかに、それはおよそ考えられぬことだね、よき友よ。というのは、もうひとつ次のことも考えてみてくれたまえ。——支配する能力をもつこと、と君は主張するけれども、われわれはそこに、「正しく、不正にではなく」とつけ加えるべきではないかね？

メノン　たしかにつけ加えるべきでしょうね。正義は、ソクラテス、徳なのですから。

E

ソクラテス　徳、だろうか、メノン、それとも、徳の一種だろうか？

メノン　と言われる意味は？

ソクラテス　ほかの何についても言えるようなことだ。たとえば、円形というものについて考えてみてもよいが、ぼくなら、それを形の一種であると言って、ただたんに形であるとは言わないだろうね。なぜそういうふうに言うかというと、ほかにもいろいろ形があるからだ。

メノン　なるほど、たしかにおっしゃるとおりです。私にしても、ただ正義だけでなく、ほかにもいろいろの徳があると言いますからね。

74

ソクラテス　それは何々だろうか。言ってみてくれたまえ。たとえばぼくでも、君からそうしろと言われたら、ほかの形もいろいろとあげるだろうが、それと同じように、君もほかの徳をぼくに言ってみてくれたまえ。

メノン　それでは、勇気が徳であると私には思われますし、それから節制、知恵、度量の大きさなど、ほかにもずいぶんたくさんあるでしょう。

ソクラテス 再度われわれは、メノン、同じ目にあったわけだね。一つの徳を求めながら、またしてもわれわれはたくさんの徳を見つけ出してしまった。そうなるに至った手順は、さっきとは別だけれども。君のあげたすべての徳目をつらぬいているただ一つの徳を、どうしてもわれわれは見つけ出すことができないのだ。

六

メノン それは、ソクラテス、私がまだあなたの求めていらっしゃるような意味で、あらゆる徳にあてはまる
B ような一つの徳を、ほかのものの場合のようなぐあいには、つかまえることができないでいるからです。

ソクラテス むりもないかもしれない。だがぼくは、もしできれば、われわれを前進させるように努めよう。——ぼくの言うことが、およそ何についてもあてはまるということは、たぶん理解できるだろうね。つまり、誰かが君に向かって、さっきのぼくと同じような問をかけるとする。「形とは何であるか、メノン」とね。で、かりに君がその人に「円形」と答えた場合、もしその人がぼくと同じように、「円形というのは形なのかね、それとも、形の一種なのかね」と言ったとしよう。おそらく君は、形の一種であると答えるだろうね？

メノン ええ、たしかに。

C **ソクラテス** なぜかというと、ほかにもいろいろの形があるからだね？

メノン ええ。

ソクラテス そして、その人がさらに、どのような形があるのかとたずねたとしたら、君はそれをあげるだろうね？

メノン　ええ、そうします。

ソクラテス　同様にして今度は色について、色とは何であるかとその人がたずね、君が「白」と答えると、質問者はそれに対してつぎに、「白というのは色なのか、それとも、色の一種なのか」と言ったとする。君は、色の一種であると答えるだろうね？　ほかにもさまざまの色があるのだから。

メノン　ええ、そう答えます。

D

ソクラテス　そして、もしほかの色をあげてみてくれと言われたら、君はほかのさまざまの色をあげるだろうね？　それらはいずれも、色であることにかけては、白にすこしも劣らないのだから。

メノン　ええ。

ソクラテス　そこで、もしその人がぼくと同じように議論を追求して、次のように言ったとしよう。「いつもわれわれはたくさんのものに行き着いてしまう。どうかそうならないようにしてくれたまえ。問題はこうなのだ。——いやしくも君がそういったたくさんのものを、ある一つの名前で呼んでいる以上、そして、そのどれひとつとして、『形』でないものはない——それも、互いに反対のものでさえあるというのに——と主張する以上、そのように円形をも直線形をも同じように包含しているところのものとは、いったい何であるのか。

E

そのものこそは、まさに君が『形』と名づけている当の対象であり、円形は直線形とまったく同じ程度に形であると主張するときに、君が念頭においているところのものであるはずだが」。——それとも君は、いま君の主張として言われたことをみとめないかね？

メノン　みとめます。

ソクラテス　では、君がそのように言う場合、君の主張するのは、円形はまっすぐであると同じ程度に円く、直線形は円いのと同じ程度にまっすぐであるということなのかね？

メノン　むろんそうではありません、ソクラテス。

ソクラテス　しかし形としては、円形は直線形と同じ程度に形であり、また後者も前者と同じ程度に形であると主張するのだね？

メノン　おっしゃるとおりです。

七

ソクラテス　それなら、この「形」という名前がつけられている当のものは、いったい何であるのか。それを75言うように努めてもらいたいのだ。もしこの場合君が、形についてであれ、色についてであれ、そのようにたずねる人に向かって、

「どうもぼくには、君、君の意図がどこにあるかさっぱり理解できないし、君の言おうとする意味もわからないのだが」

と言ったとしたら、おそらくその人は、あきれてこう言うだろう。

「わからないって？　つまりぼくは、君のあげるようないろいろの事例のすべてに共通する同一のものを求めているのだよ」

とね。それとも、メノン、このような場合にも君は答えられないかね。つまり、誰かが君にこうたずねたと思っ

(75) てもらえばよいのだ――
「円形にも、直線形にも、その他およそ君が形と名づけるようなすべてのものに共通する同一のものは何であるか」
と。さあ、それが何かを言ってみてくれたまえ。君が徳について答えるための練習にもなるだろうからね。

B **メノン**　いや、そうおっしゃらずに、ソクラテス、あなた自身で答えてみてください。

ソクラテス　ひとつ、君に迎合することにしようかね。

メノン　ええ、ぜひ。

ソクラテス　そうすれば君も、徳についてぼくに答える気になってくれるだろうね？

メノン　きっとそうします。

ソクラテス　それでは、がんばってやってみなければ。やりがいがあるわけだから。

メノン　そうですとも。

ソクラテス　さあそれでは、君のために、形とは何であるかを言うように努めよう。それを次のように言えば君は容認できるかどうか、考えてみてくれたまえ。すなわち、形とは、もののなかでただひとつ、つねに色に随伴しているところのものであると、こうわれわれは言っておこう。これでよいかね。それとも君は、もっと何か C ちがった定義を求めるかね？　ぼくとしては、君が徳というものを、こういう仕方で述べてくれれば満足できるわけなのだ。

メノン　しかし、いまの定義は間(ま)がぬけていますね、ソクラテス。

ソクラテス　どうして？

メノン　あなたの説によると、形とは、つねに色に随伴しているものであるというようなことでした。――結構でしょう。しかしですね、もし誰かが、自分は色というものを知らないと主張したら、そして、形についてとまったく同様の疑問を色について持っているとしたら、あなたのあたえた答は、いったいどれだけの意味があると思いますか？

八

ソクラテス　答としてまちがってはいない、とぼくは思う。もし質問者が、論争と討論を得意とするあの賢い（D）人たちのひとりだったとしたら、ぼくはその人に、「ぼくの言うことはこれだけだ。もしこれがまちがっているのなら、説を取り上げて反駁（はんばく）するのが君の役目だ」と言うだろう。――しかしながら、いまのぼくと君の場合のように、互いに友人として問答をとりかわそうとするつもりなら、もっと穏やかに、もっと問答法の約束をまもって答えなければならない。そして問答法においては、ただたんにまちがっていない答をあたえるだけでなく、質問者が知っていると前もって認める(1)ような事柄を使って答えるのが、おそらくその約束によりかなったやり方というべきだろう。だからこのぼくも、君と話すにあたって、そういうやり方に従うように心がけよう。（E）では君にたずねるが、君は、「終り」と呼ぶところのものをみとめるかね？　それは「限界」とか「端」とか

1　75D6, 7 において、ブラックとともに προομολογῇ (Gedike), ἐρωτῶν (E. S. Thompson) を読む。

いってもよいようなものであって、すべてこれらの言葉は、ぼくに言わせれば、同じ意味なのだ。プロディコス(1)なら、おそらくここで異議をとなえるかもしれないが、しかし君はきっと、何かあるものが「限られている」とか、「終っている」とか呼ぶだろうね？　ぼくの言いたいのは要するにそういうことで、何もめんどうなことではないのだ。

メノン　ええ、そう呼びます。あなたの言われることはわかるつもりです。

76 **ソクラテス**　ではどうだろう。君は、「平面」と呼ばれるものをみとめるかね？　そして、別にまた「立体」と呼ばれるものをみとめるかね？　――例の幾何学で用いられているようなものだ。

メノン　ええ、みとめますとも。

ソクラテス　それでは、以上のことから、ぼくが形とは何であると言うか察しがつくだろう。つまり、どんな形にもあてはまることとして、ぼくはこう言うのだ――立体がそこで限られるところのもの、それが形であると。まとめて言えば、形とは立体の限界であるということになるだろう。

九

メノン　で、色とは何であると言われるのですか、ソクラテス。

ソクラテス　なんと君も横柄な人だね、メノン。年寄に答える労をとらせておきながら、自分はいっこうに、

B ゴルギアスが徳を何であると言っているか、思い出して言ってくれようとしないとは。

メノン　いや、あなたがいまのことに答えてくださったら、ソクラテス、私はそれを申しあげましょう。

ソクラテス　君が話しあっているのを聞けば、メノン、たとえ目かくししていても、ひとにはちゃんとわかるだろうね。君が美しくて、君を恋している者がまだいるということが。

メノン　いったい、どうしてですか？

ソクラテス　だって君は、議論のなかでひとに命令ばかりしているではないか。そういうふうにするのは、自分が若くて美しいあいだは専制君主のようにふるまえるために、わがままに甘やかされている人たちのやり方なのだ。おまけに、どうやらぼくは、美しい人たちの前に出ると弱い男だということを、君に見ぬかれてしまったらしいね。……しかたがない、君のきげんをとるために、答えることにしようか。

C

メノン　ええ、ぜひきげんをとっていただきたいものです。

ソクラテス　ではひとつ、ゴルギアス流の答をしてあげようか。それが君には、いちばんついていきやすいだろうからね。

メノン　むろん、そうしていただければ幸いです。

ソクラテス　では、君たちはエンペドクレスの説にしたがって、もろもろの存在物から流出物のようなものが発出されていると言わないかね？

メノン　ええ、たしかにそういうことをみとめます。

1　ゴルギアスと同じ年代にわたって活躍したケオス島出身のソフィスト。名辞の正しい使用や類似語の極端に厳格な区別で有名。『プロタゴラス』(337 A～B, 358 D～E)などを参照。

ソクラテス　また、そうした流出物が中にはいったり通過したりする孔（あな）があるということもみとめるね？

メノン　たしかに。

D

ソクラテス　そして流出物のうちには、そうした孔のうちのあるものに、ぴったり合うのもあるし、小さすぎたり大きすぎたりするのもあるわけだね？

メノン　そのとおりです。

ソクラテス　さらに、君は視覚というものをみとめないかね？

メノン　みとめます。

ソクラテス　では、ピンダロス(1)の文句ではないが、以上のことから「わが言（こと）の葉（は）の意味をさとれ」——。すなわち、色とは、その大きさが視覚に適合して感覚されるところの、形から発出される流出物である。……

メノン　いまのお答は、私にはじつにすばらしいと思われます、ソクラテス。

ソクラテス　たぶん、君の慣れ親しんだ言い方をしたからだろう。同時に、君も気づくだろうと思うが、君は

E

いまの答をもとにして、音とは何であるかということも、さらには臭（にお）いその他、これに類する多くのものを説明することができるだろう。

メノン　たしかにそのとおりです。

ソクラテス　あの答の調子がものものしいので、メノン、形について言われた答よりも、君の気に入っているのだね。

メノン　気に入っています。

ソクラテス　だがね、アレクシデモスの子息よ、ぼくの信じるところでは、さっきの答のほうがすぐれているのだよ。やがて君もそう思うようになることだろう。もし君が、きのう言っていたように、秘儀をさずかる前に行ってしまわなければならないのではなくて、ここにとどまって秘儀をさずかるならばね。(2)

77

メノン　いや、ソクラテス、もしいまのようなことをたくさん話してくださるのなら、私はここにとどまらせていただきましょう。

一〇

ソクラテス　それはむろん、君のためにもぼく自身のためにも、こうした話をして行きたいという熱意だけはこと欠かぬつもりだ。ただ、いまのようなことはあまりたくさん言えないのではないかと、それが心配なのだがね。それはともかくとして、さあ、こんどこそは君も、ぼくに約束を果すようにしてくれたまえ。全体的に見て徳とは何かということを言ってもらいたいのだ。そして、口の悪い連中が、何かものをこわす人たちをいつもからかうときの言いぐさではないが、「一から多を製造する」のはもうやめて、徳を全体として無きずのままのこ

1　前六世紀から五世紀にかけて生きたテバイ出身の抒情詩人。引用はFr. 94 (Bowra)。

2　秘儀（ミュステーリア）というのは、穀神もしくは大地母神デメテルをまつる祭儀で、数々の準備的儀式と精進をつんだ少数の者のみに参加がゆるされ、その最高の段階としての奥儀を伝授された者は、永遠の幸福を約束された。アッティカのエレウシスで行われた秘儀が最も有名である。プラトンはしばしば、哲学や真実の知を、この秘儀にたとえている。

(77) B したうえで、徳とは何であるかを言ってくれたまえ。その手本となる例は、ぼくから聞いてわかったはずだ。

メノン それでは、ソクラテス、私には、徳とはあの詩人の言葉のように、「美しきをよろこびてちからあり」ということにあるように思われます。だから私も、徳とは、立派なものを欲求してこれを獲得する能力があることだと、こう申しましょう。

ソクラテス その場合、立派なものを欲求する者と君が言うのは、善きものを欲求する人という意味なのだろうか？

メノン そのとおりです。

ソクラテス いったいそれは、悪しきものを欲求する人々もあれば、善きものを欲求する人々もまた別にある C という意味なのかね。君には、どうだね、人間は誰でもかならず、善きものを欲求するのだとは思えないのかね？

メノン いいえ、そうは思えません。

ソクラテス 悪しきものを欲求する人々もいるというのだね？

メノン ええ。

ソクラテス そういう人々は、その悪しきものを善きものであると思いこんでそうするのだと、君は言うのかね。それとも、悪を悪と知りながら、しかもなお、それを欲するのだろうか？

メノン それは、どちらの場合もあるように思われます。

ソクラテス つまり君の考えでは、メノン、悪しきものを悪しきものと知りながら、しかもなおそれを欲求す

るような者が誰かいると、こういうわけなのだね？

メノン　そのとおりです。

ソクラテス　悪しきものに関して何を求めるのだと言うのかね？　きっとそれは、その悪しきものが自分のものになることを[1]欲しているのだろうね？

メノン　自分のものになることをです。それに違いありません。

D

ソクラテス　その場合、そういう人は、悪しきものは誰のものになるにしても、その当人の為になると考えているのだろうか。それとも、悪しきものは、誰のところにあっても、その者を害するということを知っていてそうするのだろうか？

メノン　それは、悪しきものが有益であると信じてそれを欲する人もあるし、害をなすと知ってそうする人もあるでしょう。

ソクラテス　いったいその場合、悪しきものが為になると信じている人々は、その悪しきものが悪しきものであるということを知っていると思えるかね？

メノン　その点になるとどうも、そうは思えませんね。

ソクラテス　すると明らかに、その人たちは、悪しきものを欲しているのではないということになりはしない

1　77C8において αὐτῷ(写本)の代りに αὑτῷ(Buttman, Bluck)を読む。この読み方についても語られる内容についても『饗宴』(204D, 205E)を参照。

(77)
E

か。悪しきものであることを知らないのだからね。むしろ、彼らが善であると思って求めていたものが、実際には悪であったというだけのことではないか。したがって、それと知らずに善きものだと思っている人たちは、明らかに善きものを欲しているのだということになる。そうではないかね？

メノン おそらくそうなのかもしれません、そういう人たちは。

ソクラテス では、どうだろう。――君の主張によれば、悪しきものは誰のものになっても、その当人に害をあたえると考えながら、なお悪しきものを欲求する人たちがいるということだが、そういう人たちは、自分がその悪しきものから害をうけるだろうということを、きっと知っているのだろうね？

メノン 知っていなければならないはずです。

78

ソクラテス しかし彼らは、そうして害をうける者が、害をうけているかぎりにおいて、難儀をするのだとは思わないのだろうか？

メノン その点もやはり、そう思わなければならぬはずです。

ソクラテス 難儀をする者というのは、不幸なのではないだろうか？

メノン そう思います、私は。

ソクラテス では、難儀な目にあい、不幸になることをのぞむ者が、誰かいるだろうか？

メノン そんな人がいるとは思えません、ソクラテス。

ソクラテス してみると、メノン、そうなることをのぞむのでないかぎり、誰も悪しきものをのぞむ者はいないことになるね。なぜなら、難儀な目にあうということは、悪を欲してそれを自分のものにすること以外の何で

あろう？

B　**メノン**　おそらく、あなたの言われるのがほんとうなのでしょう、ソクラテス。そして、悪しきものを欲する人は誰もいないのでしょう。

二一

ソクラテス　ところで、君はさっき、徳とは、善きものをのぞんで〔獲得する〕能力があることだと、こう言っていたのではなかったかね？

メノン　たしかに、そう言いました。

ソクラテス　そうすると、言われたことのうち、「〔善きものを〕のぞむ」ということのほうは、これはもう万人にそなわるところであって、この点からみるかぎりは、ある人が他の者よりすぐれた有徳の人だというようなことはないのではないかね？

メノン　そのように思われます。

ソクラテス　むしろ明らかに、もしある人が他の者よりもすぐれているということがあるとすれば、そのような徳の差というものは、「〔獲得する〕能力がある」という点にかかわることになるだろう。

メノン　ええ、たしかに。

C　**ソクラテス**　すると、どうやら、徳とは君の説によると、善きものを獲得する能力ということにしぼられそうだ。

メノン　私も、ソクラテス、まったくいまのあなたの解釈のとおりだと思います。

ソクラテス　では、さらにすすんで、はたしてその点は君の言うとおりかどうかを、しらべることにしよう。たぶん、君の言うことは正しいのかもしれないからね。――君は、徳とは善きものを獲得する能力をもつことだと、こう主張するわけだね？

メノン　そうです。

ソクラテス　善きもの、と君が呼んでいるのは、たとえば健康とか富とかいったようなものではないかね？

メノン　それに、金や銀を手に入れることも、国家において名誉や官職を得ることもそうです。

ソクラテス　君が「善きもの」と言うのは、そういったものにほかならぬと考えてよいのだね？

メノン　そうです。そういったすべてのもののことを私は言っているのです。

D

ソクラテス　よしわかった。徳とは金銀を獲得することであると、父祖以来のペルシア大王の賓客、メノン氏は主張する。――ところで君は、メノン、そのいうところの「獲得」に、正しくかつ敬虔にという一項をつけ加えるつもりはないかね？　それとも、君にとってそれはどちらでもかまわぬことで、たとえ人がそうした善きものを、不正な仕方で獲得するとしても、やはりそれ(1)を徳と名づけるのかね？

メノン　むろんそんなことはありません、ソクラテス。

ソクラテス　悪徳と呼ぶのだね？

メノン　絶対にそうです。

ソクラテス　してみると、どうやら君の言う「獲得」ということには、正義とか節制とか敬虔とか、あるいは

E　その他何らかの徳の部分がつけ加わらなくてはならないようだ。もしそうでなければ、たとえ善きものを獲得しても、それは徳ではないことになるだろう。

メノン　そうです。それらのものを抜きにして、どうして徳となりえましょうか。

ソクラテス　逆に、そうするのが正しくない場合には、自分のためであろうと、他人のためであろうと、けっして金や銀を獲得しないこと――このような不獲得(貧困)もやはり、徳なのではないだろうか？

メノン　そのようです。

ソクラテス　すると、そうした善きものの獲得ということは、それを獲得できないこととくらべて、とくにそれが徳であるとはいえないことになるね。むしろ、どうやら、正義をともなって行われるものは何でも徳であり、

79　すべてそういったものなしに行われるものは、何でも悪徳だということになりそうだね。

メノン　おっしゃるとおりでなければならないように思われます。

一二

ソクラテス　ところで、われわれはすこし前に、それらのひとつひとつのもの――正義や節制やすべてそういったものを、徳の部分であると主張していたのではなかったろうか？

メノン　ええ。

1　78D6において、トンプソン、クロワゼ、ブラックと共に αὐτὸ (Schneider) を読む。

ソクラテス　そうすると、メノン、いったい君は、ぼくをからかっているのかね？

メノン　え？　どうしてですか、ソクラテス。

ソクラテス　どうしてもこうしても、たったいまこのぼくが、徳をばらばらにこわしたり、こまかく切りきざんだりしないようにしてくれとたのんだばかりなのに、しかも、答の手本とすべき例をちゃんとあたえてあげたのに、君はそれを無視して、徳とは善きものを正義をもって獲得できることだなどと、言っているではないか。B その正義とは、君の主張では、徳の部分にほかならないのだろう？

メノン　そうです。

ソクラテス　とすると、君みずからのみとめる事柄から帰結するのは、結局、いかなる行為でも徳の部分をともなえば、それがすなわち徳にほかならないということなのだ。なぜなら、正義をはじめ、そういったひとつひとつのものは、徳の部分であると君は主張するわけだからね。——なぜぼくがこういうことを言うかというと、つまり、全体として徳とは何かを言ってくれというのが、ぼくの要求だったのに、君は徳そのものが何かを言うどころか、どんな行為でも徳の部分をともないさえすれば、それが徳であるなどと主張する。あたかもそれは、C 徳とは全体として何であるかを君がすでに言ってしまっていて、君がそれを部分部分に切り分けても、ぼくにはすぐに理解できるはずだといったような調子だからだ。

だからね、親愛なるメノン、ぼくは思うのだが、君はもういちどふり出しにもどって、徳とは何であるかという同じ問をうける必要があるのだよ——もし徳の部分をともなうすべての行為は徳であるということになるならばね。なぜならこれこそ、すべて正義をともなう行為は徳であるという主張の意味するところなのだから。——

それとも君には、もういちど同じ問が必要だとは思えないかね？　ひとは徳そのものを知らないのに、徳の部分が何であるかがわかると思うかね？

メノン　けっしてそうは思えません。

D

ソクラテス　事実、君がもしおぼえているなら、さっきぼくが形について答えたとき、このように、まだ探求の途中にあって承認をえてないような事柄を使って答えようとするやり方を、たしかわれわれはしりぞけたはずだ。

メノン　ええ。そしてそれをしりぞけたのは正しいことでした、ソクラテス。

ソクラテス　それなら君も、よき友よ、徳が全体として何であるかということが、まだ探求の途中にあるのに、それの部分を使って答えることによって、徳そのものを誰かに明らかにしようなどと思ってはいけない。あるいは、問題が徳以外の何であっても、そういった同じやり方で話すなら同様だが。いや君は、もういちど同じ問が

E

必要だと考えなければならぬ――君が言っているようなことは、徳が何であるとしてのはなしなのかとね。それとも、ぼくの注意は無意味だと思うかね？

メノン　正しい御注意だと思います。

一三

ソクラテス　それでは、もういちど最初から答えてくれたまえ。君も、君の仲間の人も、徳とは何であると主張するのかね？

80

メノン　ソクラテス、お会いする前から、うわさはかねがね耳にしていました――あなたという方は何がなんでも、みずから困難に行きづまっては、ほかの人々も行きづまらせずにはいない人だと。げんにそのとおり、どうやらあなたはいま、私に魔法をかけ、魔薬を用い、まさに呪文でもかけるようにして、あげくのはてにこの私を、すっかり途方にくれさせてしまったようです。もし冗談めいたことをしも言わせていただけるなら、あなたという人は、顔かたちその他、どこからみてもまったく、海にいるあの平べったいシビレエイにそっくりのような気がしますね。なぜなら、あのシビレエイも、近づいて触れる者を誰でもしびれさせるのですが、あなたがいB ま私に対してしたことも、何かそれと同じようなことであるように思われるからです。なにしろ私は、心も口も文字どおりしびれてしまって、何をあなたに答えてよいのやら、さっぱりわからないのですから。

とはいえ、これまで私は徳について、じつに何回となく、いろいろとたくさんのことを、数多くの人々に向かって話してきたものです。それも、自分ではとてもうまかったつもりでした。それがいまでは、そもそも徳とは何かということさえ、ぜんぜん言えない始末なのです。――あなたがこの国を出て海を渡ったり、よそへ行ったりしようとしないのは、賢明な策だと私は思いますね。なぜなら、あなたがほかの国へ行って、よそ者としてこんなことをしてごらんなさい。きっと魔法使いだというので、ひっぱられることでしょう。

ソクラテス　油断のならぬ男だね、君は、メノン。もうすこしでひっかかるところだったよ。

メノン　え？　いったい何のことですか、ソクラテス？

C

ソクラテス　何のために君がぼくを譬えたか、気がついているよ。

メノン　何のためだと思われるのですか？

ソクラテス　ぼくに君のことを譬えかえさせようという魂胆(こんたん)なのだろう。とかく美しい連中は誰でも、「たとえっこ」をするのをよろこぶものだということを、ぼくは知っている。彼らにしてみれば、それは得(とく)になることだからね。だって、思うに、美しい人たちは、やはり美しいものに譬えられるにきまっているではないか。しかしぼくは、君を譬えかえしてはあげないよ。

それから、このぼくのことだが、もしそのシビレエイが、自分自身がしびれているからこそ、他人もしびれさせるというものなら、いかにもぼくはシビレエイに似ているだろう。だがもしそうでなければ、似ていないことになる。なぜならぼくは、自分では疑問からの抜け道を知っていながら、他人を困難に行きづまらせるというのではないからだ。道を見うしなっているのは、まず誰よりもぼく自身であり、そのためにひいては、他人をも困難に行きづまらせる結果となるのだ。いまの場合も例外ではない。徳とは何であるかということは、ぼくにはわからないのだ。君のほうは、おそらくぼくに触れる前までは知っていたのだろう。いまは知らない人と同じような状態になっているけれどもね。だがそれでもなおぼくは、徳とはそもそも何であるかということを、君といっしょに考察し、探求するつもりだ。

D

一四

メノン　おや、ソクラテス、いったいあなたは、それが何であるかがあなたにぜんぜんわかっていないとしたら、どうやってそれを探求するおつもりですか？　というのは、あなたが知らないもののなかで、どのようなものとしてそれを目標に立てたうえで、探求なさろうというのですか？　あるいは、幸いにしてあなたがそれをさ

ぐり当てたとしても、それだということがどうしてあなたにわかるのでしょうか——もともとあなたはそれを知らなかったはずなのに。

E

ソクラテス　わかったよ、メノン、君がどんなことを言おうとしているのかが。君のもち出したその議論が、どのように論争家ごのみの議論であるかということに気づいているかね？　それはこういう議論なのだ。「人間は、自分が知っているものも知らないものも、これを探求することはできない。というのは、まず、知っているものを探求するということはありえないだろう。なぜなら、知っている以上、その人には探求の必要はないわけだから。また、知らないものを探求するということもありえないだろう。なぜならその場合は、何を探求すべきかということも知らないはずだから」——。

81

メノン　あなたには、この議論がよくできているとは思えませんか、ソクラテス。

ソクラテス　ぼくはそうは思わないね。

メノン　どの点がよくないかを指摘できますか？

ソクラテス　できる。というのは、ぼくは、神々の事柄について知恵をもった男や女の人たちから聞いたことがあるからだ……。

メノン　どのような話をですか？

ソクラテス　真実な——とぼくには思えるのだが——そして美しい話だ。

メノン　どんな話でしょうか、それは。また、話した人たちというのは誰ですか？

ソクラテス　それを話してくれたのは、神職にある男の人や女の人たちのなかでも、自分のたずさわる事柄に

B ついて説明をあたえることができるように心がけている人々だ。さらにまた、ピンダロスをはじめ、その他多くの神的な詩人たちもこのことを語っている。彼らの言うのは次のようなことだ。さあ、それが真実を伝えていると君に思えるかどうか、よく考えてみてくれたまえ。

すなわち、彼らの言うところによれば、人間の魂は不死なるものであって、ときには生涯を終えたり――これが普通「死」と呼ばれている――ときにはふたたび生まれてきたりするけれども、しかし滅びてしまうことはけっしてない。このゆえにひとは、できるだけ神意にかなった生を送らなければならぬ。なぜならば――

ふるき歎きへのつぐないを　ペルセポネ(1)に
うけいれられし人びとの魂は　九つたびめの年に
ふたたび　上なる陽(ひ)のかがやく世へと送られ、
C その魂からは　ほまれたかき王たちと
力つよき人びとと　知恵ならびなき人びとが生まれ
のちの世に　人たたえて聖なる英霊とよぶ

一五

こうして、魂は不死なるものであり、すでにいくたびとなく生まれかわってきたものであるから、そして、こ

1　冥界の女王。なお、この引用詩はピンダロスの作品の一部と推定されている(Fr. 127 (Bowra))。

の世のものたるとハデスの国のものたるとを問わず、いっさいのありとあらゆるものを見てきているのであるから、魂がすでに学んでしまっていないようなものは、何ひとつとしてないのである。だから、徳についても、その他いろいろの事柄についても、いやしくも以前にもまた知っていたところのものである以上、魂がそれらのものを想い起すことができるのは、何も不思議なことではない。なぜなら、事物の本性というものは、すべて互い D に親近なつながりをもっていて、しかも魂はあらゆるものをすでに学んでしまっているのだから、もし人が勇気をもち、探求に倦むことがなければ、ある一つのことを想い起したこと――このことを人間たちは「学ぶ」と呼んでいるわけだが――その想起がきっかけとなって、おのずから他のすべてのものを発見するということも、充分にありうるのだ。それはつまり、探求するとか学ぶとかいうことは、じつは全体として、想起することにほかならないからだ。だからわれわれは、さっきの論争家ごのみの議論を信じてはならない。なぜならあの議論は、われわれを怠惰にするだろうし、惰弱な人間の耳にこそ快くひびくものだが、これに対していまの説は、仕事と E 探求への意欲を鼓舞するものだからだ。ぼくはこの説が真実であることを信じて、君といっしょに、徳とは何であるかを探求するつもりだ。

メノン　わかりました、ソクラテス。ただしかし、われわれは学ぶのではなく、「学ぶ」とわれわれが呼んでいることは、想起にほかならないのだと言われるのは、どのような意味なのでしょうか。ほんとうにそのとおりだということを、私に教えることができますか？

ソクラテス　だからさっきもぼくは言ったのだよ、メノン、君は油断のならない男だとね。いまも君は、ぼくが 82 君に教えることができるかどうかなどとたずねてくる――教えるのではなく想起するのだと、ぼくが主張してい

るのに。つまり、ぼくが自分の言葉と矛盾したことを言うのを、たちどころに暴露させようというつもりなのだ。

メノン　いえいえ、ゼウスに誓って、ソクラテス、けっしてそんなつもりで言ったのではありません。つい、くせが出たのです。でも、あなたの説のとおりだということを、もし何らかの仕方で示すことがおできになるなら、ぜひそうしてください。

ソクラテス　なかなかむずかしい注文だが、まあ君のためなら、努力してやってみよう。――では、そこにいるたくさんの君の従者のなかから、これはと思うのを誰かひとり、ぼくのためにここへ呼び出してくれたまえ。その者をつかって君に証明するから。

B

メノン　承知しました。〔召使の一人に〕君、ここへ来たまえ。

ソクラテス　ギリシア人だね？　ギリシア語を話すだろうね？

メノン　ええ、それはもう……。私の家で生まれたのですから。

ソクラテス　さあそれでは、よく注意していてくれたまえ。この子が想起するとわかるか、それともぼくから教えられるとわかるか、という点にね。

メノン　よく注意していましょう。

一六

ソクラテス　〔召使の子に向かって〕では、君、ぼくに答えてくれたまえ、正方形とはこのようなものだということがわかるかね？　〔正方形ＡＢＣＤを地面にえがく〕

(82)

メノンの召使　はい、わかります。

C

ソクラテス　ところで、正方形がもっているこれらの線――四つあるね――は、全部等しいものだね？

メノンの召使　ええ、たしかに。

ソクラテス　こうやってまんなかを通る線〔EG・HF〕をひくと、これらの線もやはり等しいのではないかね？

メノンの召使　はい。

ソクラテス　このような図形には、大きいのも小さいのもあるだろうね？

メノンの召使　ええ、たしかに。

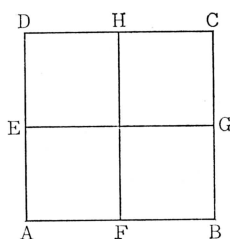
ソクラテス　では、この辺〔AB〕の長さが二プゥスで、この辺〔AD〕が二プゥスだとすれば、全体は幾〔平方〕プゥスあるだろうか。こういうふうに考えてごらん。――もしかりに、ここ〔AB〕が二プゥスで、ここ〔AD〕が一プゥスしかない〔AE〕としたら、この図形は二プゥスの一倍の大きさだ〔ABGE〕ということになるのではないかね？

メノンの召使　はい。

D

ソクラテス　ところが実際には、ここ〔AD〕も二プゥスなのだから、この図形の大きさは二の二倍になるのではないかね？

メノンの召使　そうなります。

ソクラテス　すると、二を二倍しただけのプゥスからできていることになるわけだね？

メノンの召使　はい。

ソクラテス　で、二の二倍のプゥスはいくらになる？　かぞえて言ってごらん。

メノンの召使　四〔平方〕プゥスです、ソクラテス。

ソクラテス　ところで、もうひとつ別に、この図形の二倍の大きさのもので、これと同じ種類の図形ができないだろうか？　つまり、これと同じように、もっている線が全部等しいのだ。

メノンの召使　はい、できます。

ソクラテス　ではその図形は、どれだけのプゥスからできているだろうか？

メノンの召使　八〔平方〕プゥスです。

ソクラテス　さあそれでは、ぼくに言ってみてくれたまえ、――その図形のひとつひとつの線は、どれだけの長さだろうか。いいかね、こちらの図形〔ＡＢＣＤ〕の一つの線は二プゥスだったね。では、もうひとつの二倍の大きさの図形がもっている線は、いくらだろうか？

E

メノンの召使　むろんそれは、ソクラテス、二倍の長さのものです。

ソクラテス　どうだね、メノン、ぼくはこの子に何も教えないで、すべて質問しているだけだろう？　そして、いまのところこの子は、八平方プゥスの正方形をつくる一辺がいかなる線かということを、知っていると思いこんでいるのだ。そう思わないかね？

メノン　たしかに。

ソクラテス　で、実際に知っているのだろうか？

メノン　いいえ、けっして。

ソクラテス　二倍の長さの線からできると思いこんでいるのだね？

メノン　ええ。

一七

ソクラテス　それでは、この子がしかるべき想起の仕方で、つぎつぎと想起して行くのを観察したまえ。

〔召使の子に向かって〕で、君はぼくに言ってくれたまえ。――君の主張によると、二倍の大きさの図形は、二倍

83
の長さの線からできるというのだね。ぼくの言うのは、こういう図形のことなのだよ。つまり、こちらの辺は長く、こちらの辺は短いというのではなく、これ〔ＡＢＣＤ〕と同じように、どの辺もみんな等しくて、ただ大きさがこれの二倍、八〔平方〕プゥスだとするのだよ。さあ考えてみたまえ、やはり君には、それが二倍の長さの線からできるように思えるかね？

メノンの召使　そう思えます。

ソクラテス　では、こちらがわにもうひとつ、これだけの長さの線〔ＢＫ〕をつけ加えると、この線〔ＡＫ〕はこの線〔ＡＢ〕の二倍になるのではないかね？

メノンの召使　ええ、たしかに。

ソクラテス　だから、君の主張によると、この線〔ＡＫ〕から八〔平方〕プゥスの図形ができるはずなのだね――

もしこれと同じ長さの線が四つあつまるならば。

B　**メノンの召使**　はい。

ソクラテス　では、それ〔AK〕を基底にして、等しい長さの線を四つ書いてみよう。君の言う八〔平方〕プゥスの図形とは、これ〔AKLM〕のことだろうね？

メノンの召使　はい、たしかに。

ソクラテス　これ〔AKLM〕の中にはこれら四つの図形〔ABCD、BKPC、CPLQ、DCQM〕があって、そのひとつひとつは、この四〔平方〕プゥスの図形〔ABCD〕と等しいのではないかね？

メノンの召使　はい。

ソクラテス　そうすると、それ〔AKLM〕はいくらになるかね。これだけの大きさ〔ABCD〕の四倍ではないかね？

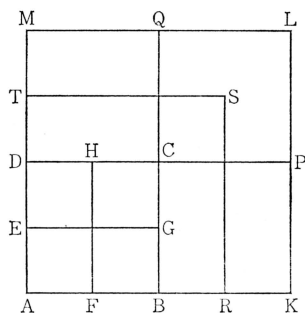
メノンの召使　まちがいありません。

ソクラテス　とすると、これだけの四倍がすなわち二倍だということになるのかね？

メノンの召使　けっしてそんなことはありません。

ソクラテス　では何倍かね？

メノンの召使　四倍です。

(83) C

ソクラテス　してみると、君、二倍の長さの線からは、二倍の大きさのものではなくて、四倍の大きさの図形ができるわけだ。

メノンの召使　おっしゃるとおりです。

ソクラテス　四の四倍なら、つまり一六〔平方〕プゥスになるわけだ。ね？

メノンの召使　はい。

ソクラテス　では八〔平方〕プゥスの図形は、どのような線からできるのだろうか。――この線〔AK〕からは、四倍の大きさのものができるのではないかね？

メノンの召使　そうです。

ソクラテス　そして、その四分の一の大きさのこれ〔ABCD〕は、半分の長さのこの線〔AB〕からできているのだね？(1)

メノンの召使　はい。

ソクラテス　よろしい。そして八〔平方〕プゥスの正方形というのは、これ〔ABCD〕の二倍で、これ〔AKLM〕の半分ではないかね？

メノンの召使　はい。

ソクラテス　その正方形をつくる一辺は、これだけの長さの線〔AB〕よりは長く、これだけの長さの線〔AK〕よりは短いのではないだろうか。それともどうかね？

D

メノンの召使　たしかにそうだと思います。

ソクラテス　そうそう、君がそうだと思ったとおりに答えてくれればいいのだ。――そこできくけれども、この線〔AB〕は二プゥスで、この線〔AK〕は四プゥスだったね？

メノンの召使　はい。

ソクラテス　してみると、八〔平方〕プゥスの一辺となる線は、二プゥスの長さのこの線〔AB〕よりは長く、四プゥスの長さの線よりは短くなければならないということになる。

メノンの召使　そうですね。

E

ソクラテス　では言ってみてくれたまえ――君はそれがどれだけの長さだと主張するかね？

メノンの召使　三プゥスです。

ソクラテス　三プゥスだとすると、この線〔AB〕の半分〔BR〕をつけ加えると三プゥスになるはずだね？　これ〔AB〕が二プゥスで、これ〔BR〕が一プゥスなのだから。そしてこちら側〔AT〕でも同じように、これ〔AD〕が二プゥスで、これ〔DT〕が一プゥス。――こうしてここに、君の言うような図形〔ARST〕ができるわけだ。

メノンの召使　はい。

ソクラテス　そうすると、ここ〔AR〕が三プゥスで、ここ〔AT〕が三プゥスなら、この図形全体は、三の三倍だけのプゥスからできているのではないかね？

メノンの召使　そのようです。

1　83C5 において τέταρτον（すべての写本の読み方）を読む。

ソクラテス　で、三の三倍のプゥスは幾〔平方〕プゥスかね？

メノンの召使　九〔平方〕プゥスです。

ソクラテス　しかるに、二倍の大きさの図形というのは、幾〔平方〕プゥスでなければならなかったのかね？

メノンの召使　八〔平方〕プゥスです。

ソクラテス　してみると、三プゥスの長さの線からもやはり、八〔平方〕プゥスの大きさの図形はまだできないわけだ。

メノンの召使　たしかにできません。

ソクラテス　ではどのような線からできるのだろうか。正確に言ってみてくれたまえ。勘定したくないのなら、

84

それがどのような線か、手で指し示すだけでもいいのだよ。

メノンの召使　いや、ゼウスに誓って、ソクラテス、私にはわかりません。

一八

ソクラテス　こんども気がつくかね、メノン、この子が想起の過程において、すでにどんなところまで前進しているかを。——最初この子は、八平方プゥスの正方形の一辺がどのような線であるかを知らなかった。ちょうど、いまもやはりまだ知らないでいるのと同じように。しかしすくなくとも、あのときには、この子はそれを知っていると思いこんでいたのだ。そして、あたかも実際に知っているかのように確信をもって答え、そこに何ら

B

の困難も感じていなかった。ところがいまでは、この子はすでに自分が困難に行きづまっていることを自覚して、

知らないでいる実情のとおりに、また知っていると思いこむようなこともないのだ。

メノン　おっしゃるとおりです。

ソクラテス　だから、いまこの子は、もともと自分が知っていなかった事柄に関して、前よりも進歩した状態にあるのではないだろうか？

メノン　その点も同感です。

ソクラテス　とすると、われわれはこの子を困難に追いこんで行きづまらせ、シビレエイのようにこの子を痺(しび)れさせることによって、よもや有害な影響をあたえたことにはならないだろうね？

メノン　たしかにそうとは思えません。

ソクラテス　とにかくわれわれのしたことは、どうやら、事柄の真相発見の一助となったらしいのだからね。なぜなら、いまならこの子は、自分が無知な者として、よろこんで探求するつもりにもなるだろうが、前にはし

C

かし、二倍の面積の正方形は二倍の長さの線をもたなければならぬなどということを、いい気になって、たくさんの人に何べんもくりかえしながら、それでうまく語ったつもりになっていたことだろうから。

メノン　そうでしょうね。

ソクラテス　君はどう思うかね——この子は、自分の無知をさとって困難におちいり、それによって知りたいと思う気持になる以前に、知らないのに知っていると思いこんでいた事柄を、探求したり学んだりしようと試みるだろうか？

メノン　そうは思えません、ソクラテス。

ソクラテス　してみると、しびれたことが、この子のためになったわけだね？

メノン　そう思われます。

ソクラテス　それでは、この子がいまの行きづまりの状態から出発して、ぼくといっしょに探求しながら——その場合、ぼくのほうは質問するだけで、教えはしないのだが——そもそも何を発見するだろうか、ひとつ見てくれたまえ。そして、ぼくがこの子自身の思わくをたずねないで、教えたり説明したりするのをみつけるかどうか、よく気をつけていてくれたまえ。

D

一九

〔召使の子に向かって〕では、君、答えてくれたまえ。——ここに四〔平方〕プゥスの大きさの図形〔正方形ＡＢＣＤ〕がある。わかるね？

メノンの召使　ええ。

ソクラテス　ここに、もうひとつ別の等しい図形〔ＢＫＰＣ〕を、これにつけ加えることができるね？

メノンの召使　はい。

ソクラテス　さらに、このどちらとも等しい第三番目のもの〔ＣＰＬＱ〕を、ここにつけ加えることができるね？

メノンの召使　はい。

ソクラテス　この角のあいているところを、これ〔ＤＣＱＭ〕をつけ加えてうずめることができるね？

メノンの召使　たしかに。

ソクラテス　そうすると、ここに四つの等しい図形ができることになるね？

メノンの召使　はい。

E

ソクラテス　で、どうだろう――この全体〔AKLM〕は、これ〔ABCD〕の何倍になるだろうか？

メノンの召使　四倍です。

ソクラテス　しかるにわれわれには、二倍の大きさのものができなければならないのだった。おぼえていないかね？

メノンの召使　たしかにそうでした。

ソクラテス　では、こういうふうに角から角へ線〔BDその他〕をひいて行くと、これらの図形のひとつひとつ

85

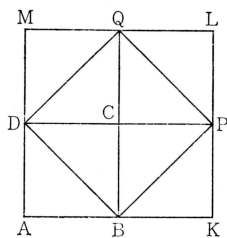
を二分することになるのではないかね？

メノンの召使　はい。

ソクラテス　そうすると、これら四つの等しい線〔DB・BP・PQ・QD〕ができて、この図形〔DBPQ〕をとりかこむことになるね。

メノンの召使　ええ、そういうことになります。

ソクラテス　さあ考えてごらん――この図形〔DBPQ〕の大きさはいくらだろうか？

メノンの召使　わかりません。

ソクラテス　このひとつひとつの線〔DB・BP・PQ・QD〕は、ここに四つの図形があるが、そのおのおのの半分ずつを内側に切りとっているのではないか。ね？

メノンの召使　はい。

ソクラテス　では、半分に切りとられたそれだけの大きさのものが、これ〔DBPQ〕の中にいくつあるかね？

メノンの召使　四つあります。

ソクラテス　これ〔ABCD〕の中にはいくつあるかね？

メノンの召使　二つあります。

ソクラテス　四つは二つの何にあたるかね？

メノンの召使　二倍です。

ソクラテス　そうすると、これ〔DBPQ〕は何〔平方〕プゥスになるかね？

メノンの召使　八〔平方〕プゥスです。

B

ソクラテス　どのような線からできているかね？

メノンの召使　これ〔DB〕です。

ソクラテス　四〔平方〕プゥスの大きさの図形の、角から角へひいた線のことだね？

メノンの召使　はい。

ソクラテス　学者たちはこの線のことを、対角線と呼んでいるのだよ。だから、対角線というのがこれの名前だとすると、メノンに仕える子よ、君の主張は、対角線を一辺として二倍の正方形はできるのだということにな

るだろう。

メノンの召使　たしかにそのとおりです、ソクラテス。

二〇

ソクラテス　どう思う？　メノン。この子が答えたことで、この子自身の思わく(思いなし)ではないようなものが、ひとつでもあっただろうか。

メノン　いいえ、自分でそう思ったことばかりでした。

C

ソクラテス　しかし、われわれがすこし前に言っていたように、もともとこの子は、こうしたことを知ってはいなかったのだ。

メノン　おっしゃるとおりです。

ソクラテス　ただしかし、この子の中には、この子がいま述べたようないろいろの思わくが内在していたということはたしかだ。そうではないだろうか？

メノン　ええ。

ソクラテス　とすると、ものを知らない人の中には、何を知らないにせよ、彼が知らないその当の事柄に関する正しい思わくが内在しているということになるね？

メノン　明らかにそうです。

ソクラテス　そしてこの子にとって、これらいろいろの思わくは、いまでこそ、ちょうど夢のように、よびさ

まされたばかりの状態にあるわけだけれども、しかしもし誰かが、こうした同じ事柄を何度もいろいろのやり方でたずねるならば、最後には、この子はこうした事柄について、誰にも負けないくらい正確な知識をもつように

D

なるだろうということは、うけあってもいいだろう。

メノン　そうでしょうね。

ソクラテス　それは、誰かがこの子に教えたからというわけではなく、ただ質問した結果として、この子は自分で自分の中から知識をふたたび取り出し、それによって知識をもつようになるのではないかね？

メノン　そうです。

ソクラテス　しかるに、自分で自分の中に知識をふたたび把握し直すということは、想起するということにほかならないのではないだろうか？

メノン　ええ、たしかに。

ソクラテス　その場合、この子が現在もっている知識というのは、以前にいつか得たものであるか、もしくは、つねにもちつづけていたものであるか、このどちらかなのではないだろうか？

メノン　ええ。

ソクラテス　で、もしつねにもちつづけていたというほうの前提をとれば、この子はまた、つねに知識をもっている人であったということになるし、他方また、いつか以前に得たのだとしても、すくなくとも現在のこの生

E

においてそれを得たことにはならないだろう。——それとも誰か、この子に幾何のやり方を教えこんだ者がいるのかね？　なぜって、この子はきっと、幾何学のどんな問題についても、何じようにこういったことをするだろ

うからね。さらには、ほかのあらゆる学問についても――。さあ、誰かこの子に、何もかも教えてしまった者がいるのかね？　君は当然知っているはずだ。とくに、この子が君の家で生まれ、君の家で育てられたというのならば。

メノン　いいえ、私はよく知っていますが、これまで誰もこの子に教えた者はいません。

ソクラテス　それなのにこの子は、さっきのようないろいろの思わくをちゃんともっているのだ。そうではないかね？

メノン　それは、ソクラテス、否定できないようです。

二一

ソクラテス　しかるにこの子がそうしたいろいろの思わくを得たのは、現在のこの生においてではないのだとすると、いまやこういうことが明らかではないかね――すなわち、彼はこの生涯以外の他の時において、すでにそれをもっていたのであり、学んでしまっていたのであるということが。

メノン　明らかにそうです。

ソクラテス　そしてそのような、この生涯以外の他の時というのは、この子が人間として生まれていなかったときではないだろうか？

メノン　ええ。

ソクラテス　そこで、もしこの子が人間であったときにも、人間として生まれていなかったときにも、同じよ

うに正しい思わくがこの子の中に内在していて、それが質問によってよびさまされたうえで知識となるというべきならば、この子の魂は、あらゆるときにわたって、つねに学んでしまっている状態にあるのではないだろうか?[1] なぜなら明らかに、この子はあらゆる時を通じて、人間であるか人間でないかの、どちらかなのだから。

メノン 明らかにそういうことになります。

B

ソクラテス そこで、もしわれわれにとって、もろもろの事物に関する真実がつねに魂の中にあるのだとするならば、魂とは不死のものだということになるのではないだろうか。したがって、いままたま君が知識をもっていないような事柄があったとしても——ということはつまり、想い出していないということなのだが——心をはげましてそれを探求し、想起するようにつとめるべきではないだろうか?

メノン あなたのおっしゃることには、ソクラテス、なぜかはしりませんが、たしかになるほどと思わせるものがあるようです。

ソクラテス そう、じつはね、ぼくは自分でもそんな気がするのだよ、メノン。ぼくは、ほかのいろいろの点については、この説のためにそれほど確信をもって断言しようとは思わない。ただしかし、ひとが何かを知らない場合に、それを探求しなければならないと思うほうが、知らないものは発見することもできなければ、探求す

C

べきでもないと思うよりも、われわれはよりすぐれた者になり、より勇気づけられて、なまけごころが少なくなるだろうということ、この点については、もしぼくにできるなら、言葉のうえでも実際のうえでも、大いに強硬に主張したいのだ。

メノン その点でもやはり、おっしゃることは正しいように思われます、ソクラテス。

二三

ソクラテス それでは、ひとは自分の知らないものがあれば、それを探求しなければならないということに[1]、われわれの意見が一致しているのだから、われわれは力を合わせて、徳とはそもそも何であるかということを探求することにしようか。

メノン ええ、ぜひそうしましょう。ただし、ソクラテス、私としては、最初におたずねしていたあの問題について、自分でも考察し、あなたの意見もきかせていただくことができれば、いちばんうれしいのですが。つまり、D 私たちが徳を心がける場合に、それを教えられうるものと考えたらよいのか、それとも、徳とは生まれつきによるものと考えるべきか、それとも、いかなる仕方で人間にそなわるようになるものと考えるべきか、という問題です。

ソクラテス いや、メノン、もしこのぼくが、ぼく自身だけでなく、君をも支配できる立場にあったとしたら、ぼくたちは、まず第一に徳それ自体が何であるかを探求しないさきに、それが教えられうるかどうかを考察するというようなことは、けっしてしなかっただろう。けれども、君という人が、自分自身を支配しようとはすこしもしないくせに――自由でありたいというわけなのだろうね――ぼくに対しては支配権をにぎろうとこころみて、また実際にぼくを意のままに動かしている現状にあっては、ぼくのほうで君に譲歩しないわけにはいかないだろ

---

1 トンプソンやブラックとともに 86A8 において ἄρ' οὐ (F写本およびシュタルバウム) を読む。

(86) E

う。だって、ほかにどうしようがあろうか？　そういうわけで、どうやらわれわれは、何であるかがまだわかっていないようなものについて、それがどのような性質のものであるかということを、考察しなければならないらしい。

そこで、ひとつだけ君にたのみたいことがあるのだが、ねがわくはぼくのために、君のその支配権をほんのすこしゆるめて、徳が教えられうるものか、それとも他の何らかの仕方で得られるものかというこの問題を、仮設（前提）を立ててしらべることをゆるしてもらいたいのだ。仮設を立ててというのはどういう意味かというと、ちょうど幾何学者たちが問題をあたえられたときにしばしば用いる、あれと同じようなやり方なのだ。たとえば、

87

ある図形についてこういう問題をたずねられたとしよう——「この図形を〔等面積の〕三角形としてこの円に内接させることは可能であるか」と。これに対して、ひとは次のように言うことができるだろう。

「この図形が求められている条件を充すようなものかどうかは、私にはまだわからないが、ただ私は次のようなことを、いわばひとつの仮設としてもっているのであって、それは問題となっている事柄に対して役に立つだろうと思う。すなわち、もしこの図形が、それの与えられた線上にこれを置く場合、その置かれた図形そのものと同じようなものである図形ぶんだけ不足する（余地を残す）という条件を充すようならば、あるひとつの帰結が生じるように思われるし、もしこの条件をみたしえないならば、また別の帰結が生じるように思われる。[1] だから

B

私は、その図形の円への内接について、それが可能であるか否かの帰結を、仮設を立てることによって君に答えたい」。

二三

さて、徳についても同様にして、われわれはそれが何であるかも、どのような性質のものかもわかっていないのだから、仮設を立ててみて、それによって徳が教えられうるものであるかどうかを、考察することにしようではないか。つまり、こういうふうに論をすすめるのだ。――「徳というものが、魂にかかわるいろいろのもののなかでも、とくにどのような性格をもったものであるならば、それは教えられうるものだということになり、もしくは教えられえないものだということになるか」とね。

そこで、まず最初に、もし徳というものが、知識とは異なった性格のものだとしたら、それは教えられうるだろうか、教えられえないだろうか？　あるいは、われわれのさっきの説にしたがって、想起されうるものだろうか、と言ってもよいが、まあどちらの言い方をつかっても、さしあたってわれわれには少しも違いはないという

C

ことにして、教えられうるだろうか、と問うことにしよう。――それとも、この点はわざわざ問うまでもないことであって、人間が教わるものといえば、それは知識以外のものでないということは、何びとにも明らかなこと

1　原文の簡単でしかも曖昧な言葉に対しては、幾通りものにおける使用の実際に照らしても、比較的簡単で明瞭であ問題をあてはめることができて、プラトンがここでどのよ るから、この幾何の例題がどのような問題かを決定するこうな特定の問題を念頭に置いていたかを完全に明確にする とは、この箇所全体の内容の理解にとってあまり関係がなことは、不可能であるといってよい。しかし幸いにして、 い。これまでに提出されてきたさまざまの解釈については、ここで提案されている仮設の方法そのものの性格は、以下 ↓補注(三三三―三三八ページ)参照。

だろうか？

メノン　私にはそう思えます。

ソクラテス　そして、もし徳が一種の知識であるとするならば、明らかに、徳は教えられうるものだということになるだろう。

メノン　むろん、そういうことになります。

ソクラテス　してみると、われわれは、この第一の段階――「これこれのものであれば教えることができるし、これこれのものであれば教えることができない」という問題は、さっそく片づけてしまったわけだ。

メノン　ええ、たしかに。

ソクラテス　そこで、つぎに考えなければならないのは、思うに、徳は知識であるか、それとも知識とは別の性格のものかということだろう。

メノン　たしかに、つぎに考察すべきことはその点であると思います。

D

ソクラテス　では、どんなものだろう。――われわれは、問題の徳というものを、善きものであると主張すべきではないだろうか？　そしてこのことは、われわれにとって、確かな仮設となるのではないだろうか――すなわち、徳は善であるということ。

メノン　たしかにそのとおりです。

ソクラテス　そうすると、知識とは別箇に切りはなされてもなお善であるようなものが、もし何かあるとするならば、徳は知識の一種ではないかもしれない。これに対して、もし知識が包括しないような善はひとつもない

とするならば、徳は知識の一種であると正当に推定できるわけだ。

メノン そのとおりです。

ソクラテス ところで、われわれが善き(すぐれた)人間であるのは、徳によるのだね?

メノン ええ。

ソクラテス 善き人間であるならば、有益な人間であるわけだね。すべて善きものは有益なのだから。そうではないかね?

E

メノン そうです。

ソクラテス したがって、徳もまた有益なものだね?

メノン 同意されたことから、必然にそうなります。

二四

ソクラテス では、どのようなものがわれわれに対して有益であるかということを、ひとつひとつの例をとりあげながら考えてみることにしよう。いわく、健康、強さ、美しさ、それに富——これらのものやこれに類したものを、われわれは有益なものであると言っている。そうではないかね?

88

メノン ええ。

ソクラテス しかしわれわれは、同じこれらのものが、ときによっては害をあたえることもあると主張する。それとも、君は違った主張をもっているかね?

メノン　いいえ、おっしゃるとおりだと思います。

ソクラテス　では、考えてみてくれたまえ。そうしたひとつひとつのものについて何が導く場合には、われわれを益し、何が導く場合には有害なものとなるのだろうか？――こうは言えないだろうか。導くものが正しい使用である場合には有益となり、そうでない場合には有害なものとなる、と。

メノン　ええ、たしかに。

ソクラテス　ではさらに、魂に属するものについても考えてみよう。――節制、正義、勇気、ものわかりのよさ、記憶力、度量の大きさ、そしてすべてこういったものを君はみとめるだろうね？

B

メノン　たしかに。

ソクラテス　では考えてみてくれたまえ。――いまあげたもののなかで、知識ではないと君に思えるもの、知識とは別のものであると思えるものが何かあるならば、そのようなものは、ときによって有害であったり有益であったりするのではないかね。たとえば勇気だが、もし勇気が知ではなく、一種の空元気のようなものだとしたら、どうだろう。人間は、ただ元気を出すだけで知性がそこに伴わなければ害を受け、知性が伴う場合には益されるというのが、事実ではないだろうか？

メノン　ええ。

ソクラテス　節制にしても、ものわかりのよさということにしても、これと同様ではないだろうか。つまり、これらが学ばれる場合にも、しつけられる場合にも、知性を伴ってこそ有益となり、知性を伴わなければ有害なものとなるのではないだろうか？

C

メノン　まったくそのとおりです。

ソクラテス　これを総括すると、魂が積極的に心がけたり、受動的に耐えたりして獲得するすべての資質は、知が導くとき幸福を結果し、無知が導くときは反対の結果になるのではないだろうか？

メノン　そのように思えます。

ソクラテス　とすると、もし徳というものが、魂にそなわる資質のひとつに数えられるようなものであり、また、かならず有益なものでなければならないとするならば、徳とは知でなければならないことになる。なぜなら、いやしくもすべて魂の資質というものは、それ自体単独では有益なものでも有害なものでもなく、そこに知もしくは無知がはたらくことによってはじめて、有害なものとなったり有益なものとなったりするのだから。こうしてこの議論にしたがえば、徳が有益なものである以上、それはひとつの知でなければならないのだ。

D

メノン　たしかにそのように思われます。

二五

ソクラテス　さらにそのほか、さっきわれわれがあげた富ならびにそれに類するものについてはどうだろう。われわれはそういったものが、ある場合には為になり、ある場合にはかえって害になると言っていたわけだが、それはちょうど、魂の他の部分に対して知が導き手となるときに、魂の資質はそれによって有益なものとなり、逆に無知はそれらの資質をかえって有害なものたらしめるのであったのと、同様の事情によるのではないだろうか？　つまり、これら富その他の場合にもやはり、魂が正しい仕方でこれを用い、導き手となるときには、それ

E

らは有益なものとなり、正しくない仕方でそうするときは、かえって有害なものと化するのではないだろうか？

メノン　ええ、たしかに。

ソクラテス　しかるに、正しく導くのは知恵のある魂であり、導き方を誤るというのは、無知な魂のすることだね？

メノン　そうです。

ソクラテス　かくして、全般的につぎのようなことが言えるのではないだろうか――すなわち、人間にとって、他のいっさいのものは魂に依存し、そして魂そのものがもつ資質は知に依存する、もしそれらが為になるものであるべきならば、とね。このように論じてくると、有益なものというのは、結局知恵であるということになるだろう。ところで、われわれの主張では、徳とは有益なものなのだね？

89

メノン　たしかに。

ソクラテス　すると結局、われわれの主張は、徳は知であるということになるわけだね――知の全体であるか、またはその一部であるかは問わないとしても。

メノン　たしかにそれは正しい所論であるように思われます、ソクラテス。

ソクラテス　したがって、もしこれがこのとおりだとすれば、すぐれた人物というものは、けっして生まれつきによるものではないということになるだろう。

メノン　ええ、そうとは思えません。

B

ソクラテス　じっさい、もしそうだとしたら、きっとこんなことも行われていただろう、――つまり、もしす

ぐれた人たちが生まれつきによるとしたら、おそらくわれわれのところには、若者たちのなかから生まれつきのすぐれた者を見分ける人々がいて、われわれはその指示により、そういう若者たちをひきとってアクロポリスの中にとじこめ、それこそ黄金に封印するのよりも、もっともっと厳重に封印をしたうえで、保護警戒したことだろう。誰もこの若者たちを堕落させることのないように、そして、彼らが成年に達したあかつきには、国のために役立つ人間になってもらうためにね。

メノン　ほんとうに、そういうことが考えられますね、ソクラテス。

二六

ソクラテス　そうすると、すぐれた人物たちの徳性は生まれつきによるものではない以上、はたしてそれは、学ぶことによって得られるものなのだろうか？

C

メノン　その帰結はもう動かないように思えます。そして仮設にしたがって徳が知識であるとするならば、ソクラテス、それが教えられうるものであることは明らかでしょう。

ソクラテス　ゼウスに誓って、たぶんね。――しかしひょっとして、われわれがそのことに同意したのは正しくなかったのではあるまいか。

メノン　でもたったいま、たしかに正しいと思われたのですよ。

ソクラテス　いや、少しでもそれに確かなところがあるべきだとするなら、たったいまそう思われたというだけでなく、いまこの現在においても、将来においても、やはり正しいと思われるのでなければならないだろう。

(89) D

メノン　どうしたのですか、いったい。何のつもりであなたはこの結論に難色を示し、徳が知識であるということを疑うのですか？

ソクラテス　話してあげよう、メノン。――つまりだね、もし徳が知識であるならば、それは人に教えることのできるものだという、この点については、ぼくはそれが正しくないかもしれないと言って取り消すようなことはしない。問題は、そもそも徳が知識であるかどうかということであって、君にもぼくがこの点を疑うのはもっともだと思えるかもしれないから、ひとつ考えてみてもらいたいのだ。そのためにまず、次のことに答えてくれたまえ。――いったい、徳にかぎらず、どんな事柄にせよ、もしそれが教えられうるものだとしたら、かならずその事柄を教える教師たちと、それを学ぶ弟子たちがいなければならないはずではないかね？

メノン　たしかにそうだと思います。

E

ソクラテス　逆に、教える者も学ぶ者もいないようなものならば、その事柄は教えられえないものだと推測しても、まちがいないといえるのではなかろうか？

メノン　そのとおりでしょう。しかしあなたには、徳を教える教師たちがいるとは思えないのですか？

ソクラテス　とにかく、誰か徳の教師がいないかと何度もたずねて、あらゆる努力をつくしてみたにもかかわらず、見つけ出すことができないでいることはたしかなのだ。とはいえ、ぼくがそうして探すにあたっては、ずいぶん多くの人々の力をかりたし、とくに、誰よりもこの道の精通者にちがいないとぼくが思っているような人たちに、力をかしてもらっているのだがねえ。

そしていまも、ほら、メノン、われわれにとってちょうど都合のよいことには、ここにアニュトスが来て坐って

90

くれた。この人に探求の仲間にはいってもらおうではないか。まったくそれはふさわしいことだろう。なぜって、このアニュトスという人はね、まずその父君というのが、アンテミオンという富も才知も兼ねそなえた人物で、その富も、偶然手にはいったとか、誰かからもらったとか——最近ポリュクラテス(1)の金を手に入れた例のテバイのイスメニアス(2)のようにね——いうのではなく、もっぱら自分自身の才知と配慮によって獲得したものなのだ。それに彼アンテミオンは、一般にほかの点でも、ひとりの市民として、人を見下すことなく、尊大で厭味(いやみ)なところもなく、慎みぶかく礼儀正しい人物だという評判をえている。さらに彼は、このアニュトスを立派に育てて教

B

育した。この点は、アテナイにおいて衆目の一致してみるところだ。すくなくともアテナイ人たちは、最も重要な官職にアニュトスを選んでつけているのだからね。だからわれわれは、当然こういう人たちにこそ、徳の教師たちがいるかいないか、いるとすればどのような人々かを探求するにあたって、力をかしてもらうべきだろう。

二七

さあ、アニュトス、あなたは、われわれの探求をたすけてくれないだろうか。このぼくと、ここにいるあなた

---

1 前六世紀のころのサモス島の王の名前として有名であるが、ここで言及されているポリュクラテスは、前五世紀末から四世紀にかけて活動したアテナイのポリュクラテス(『ソクラテスの告発』その他の作者)であると思われる。

2 テバイにおける民主派、反スパルタ派の指導者。前四〇四—四〇三年のアテナイにおける三〇人政権支配のとき、テバイへ逃れたアテナイの民主派の人々の保護などに関連して、前記ポリュクラテスからかなりの額の金を受けとったと推定される。——ブラックが採っているモリスン(J. S. Morrison)の解釈による。

自身の賓客メノンのためにね。問題は、この徳という事柄について、その教師となりうるのはどんな人々かということだ。つぎのようにして考えてもらいたい。——かりにわれわれが、このメノンがすぐれた医者になることをのぞむとしたら、その先生として、どんな人々のところへ彼をやるだろうか。医者たちのところへやるのではないだろうか？

C

アニュトス たしかに。

ソクラテス では、すぐれた靴造りにするつもりならどうだろう。靴造りの職人たちのところへやるのではないだろうか？

アニュトス そう。

ソクラテス ほかのいろいろの場合にも、同様だろうね？

アニュトス たしかに。

ソクラテス では、もういちど同じことについて、次のことに答えてもらいたい。この人を医者にするつもりなら、医者たちのところへやるのが当をえたやり方だろうと、こうわれわれは主張している。いったい、そのようにわれわれが言う場合、意味するところはこうなのだろうか。つまり、われわれが賢明な処置として、彼をそのもとへやってしかるべき人々というのは、自分が問題の技術の専門家であると主張していない人々より、むしろそのように主張している人々であり、また、誰でもそのもとにおもむいて学びたいと思う者があれば、自分がそういう希望者の教師であることを公表したうえで、まさにその仕事のために報酬を取りたてるような人々のことなのである、と。——われわれが彼をつかわすのが当をえたやり方だということになるのは、こういったこととなのである、と。

D

を考慮に入れているからなのではないだろうか？

アニュトス そう。

E

ソクラテス 同じことは、笛吹きの技術についても、そのほかのいろいろのことについても言えるのではないだろうか？ われわれが誰かある者を笛吹きに仕立てようと思う場合、その技術を教えることを約束し、報酬を求めるような人々のところへ彼をやろうとはせずに、誰かほかの人たちに――その人たちは自分が教師であると言っているわけでもなく、また、われわれが人をやって学んでこいと要求しているその肝心の事柄について、誰ひとり弟子がいるわけでもないのに――そういう人たちに厄介をかけるというのは[1]、ずいぶんばかげた話と言わねばならない。あなたにはそういうことが、ずいぶん不合理だとは思えないかね？

アニュトス むろんそう思うとも。不合理に加えて、それは無知というものだ。

二八

91

ソクラテス まったくそのとおりだ。では、いまこそあなたに、ここにいる客人メノンのことについて、ぼくの相談相手になってもらえるわけだ。というのはね、アニュトス、この人はさっきからぼくに向かって、こういうことを言っているのだ。つまりこの人は、人々がよく家を斉え国を治め、自分の親に仕え、立派な人物にふさわしく内外の客人を送迎できるために必要な知徳を身につけたいと、こう言うわけなのだ。で、ひとつ考えても

1　90E4：ζητοῦντα.... τούτων を削除 (Naber, Schanz, Thompson, Bluck)。

B らいたいのだが、彼がそういう徳を学ぶためには、われわれは彼をどんな人たちのところへやるのが当をえたやり方だろうか？ それとも、あらためて問うまでもなく、たったいまの議論にしたがえば、みずから徳の教師たることを標榜（ひょうぼう）し、学びたいと思うギリシア人の誰にでも門を開くことを宣言して、そのための報酬をきめてとりたてるところの、例の人たちのところへやるべきだろうか？

アニュトス いったいそれは、何者のことを言っているのだね、ソクラテス？

ソクラテス あなたも知っているだろうが、それは世間でソフィストと呼ばれている人たちだ。

C **アニュトス** 冗談じゃない、言葉をつつしみなさい、ソクラテス。いやしくもこの私にかかわりのある者なら、身内の者であれ、友人であれ、この都市の者であるとよそ者であるとを問わず、あんな連中のところへ行って害毒を受けるような気違いざたは、絶対に誰にもさせたくない。じつに彼らこそはまぎれもなく、ともに交わる者たちに害毒をあたえ、堕落させる連中なのだから。

二九

ソクラテス これはしたり、アニュトス。してみると、ひとの役に立つことを何か心得ているとみずから主張する者は数多くいるが、そのなかで彼らソフィストだけは、特別ほかの人たちと異なっていて、自分にゆだねられたものに対して為になるようにはからうのが普通なのに、彼らはそれをしないばかりか、かえって、委託され

D たものをだめにしてしまうというわけなのだね。しかもそれに対して、公然と謝金の支払いを要求するというのだね？ どうもぼくには、そんなことは信じられないがねえ。なぜって、ぼくの知るところでは、プロタゴラス

がこの知恵をもとにして一人でかせいだ金額は、名作をのこしてあれほど有名なペイディアスをはじめ、そのほかの十大彫刻家をしのいでいるくらいなのだから。

まったく、あなたの言うようなことは、奇怪なはなしではないか――一方で、古い履物（はきもの）を修繕したり着物をつ E くろったりする人たちは、着物や履物を引き受けたときよりも悪くして持ち主に返すようなことをすれば、三〇日間もそれがばれずにいることはできないだろうし、もしそんなことをすれば、たちまち餓死してしまうことだろうに、プロタゴラスのほうはどうかといえば、自分と交わる者たちを堕落させ、引き受けたときよりも悪い人間にして返すということを四〇年以上もつづけながら、全ギリシアがそれに気づかなかったとは！　事実、ぼくのまちがいでなければ、彼の死んだのは七〇歳近くにもなってからで、その間四〇年の歳月を、この技術に従事していたのだからね。しかもその全期間中、なお今日にいたるまで、彼の名声はすこしも消えることがないのだ。

そしてこれは、ひとりプロタゴラスだけではなく、まだまだほかにも、彼より先の時代に生きた者や、現在ま 92 だ生きている者で、そういう人たちがずいぶんたくさんいるのだよ。とすれば、いったいわれわれは、彼らがあなたの言うように、みずからそれと知りつつ青年たちを欺き、害毒をあたえているのだと主張すべきなのだろうか。それとも、そうした実態は彼ら自身にも、気づかれずにいるのだと言うべきだろうか？　そして、しばしば人間のうちで最高の知者と呼ばれる彼らのことを、それほどまでに気が狂っていると考えるべきなのだろうか？

三〇

アニュトス　なんで彼らが気が狂ってなどいるものか、ソクラテス。気が狂っているのはずっと、あの連中に

(92)
B 金を払うような青年たちのほうだし、そのまた上を行くのが、そうすることをその青年たちに許しておく身内の者、そして中でもいちばんひどいのは、彼らのやってくるのを放置して、そういうことをしようとするのがよその者であれ、自国の者であれ、すべてこれを追い出してしまおうとしない国家なのだ。

ソクラテス いったい、アニュトス、誰かソフィストたちのなかに、あなたに対して悪事をはたらいた者でもいるのかね？ そうでなければ、何をそんなに彼らに腹を立てているのだね？

アニュトス ゼウスに誓って、私はこれまで彼らの誰ひとりとも、つきあったことさえないし、また、私に関係のあるほかの誰にも、そんなことをゆるしはしないだろう。

ソクラテス するとあなたは、あの連中を実際にはぜんぜん知らないわけだね？

アニュトス これからもそうありたいものだ。

C **ソクラテス** おどろいた人だね、それならいったい、この問題の事柄について、それが善いものをもっているか悪いものをもっているかということが、どうしてわかるのだろうか――あなたがまったくそのことに経験がないとしたら。

アニュトス わけのないこと。つきあった経験があろうがなかろうが、とにかく彼らがどんな人間かということは、私はちゃんと知っているのだ。

ソクラテス きっとあなたは、占いができるのだろうね、アニュトス。そうでもなければ、どうして彼らのことがあなたにわかるのか、あなた自身の言うところから考えて、ぼくは了解に苦しむ。――しかしまあ、それは

D どうでもよいことだ。われわれは別に、メノンがそこへ行けば悪い人間になるというような、そんな人たちをさ

がしているわけではないのだから。おのぞみなら、ソフィストたちこそそういう人々だということにしておこう。だがそれよりも、さっきからたずねている肝心の人たちを、われわれに言ってほしいのだ。そして、これだけの大きな国の中で、誰のところへ行けば、さっきぼくが話したような徳にかけてひとかどの人物になれるかを教えてやって、ここにいる父祖以来の友に親切をつくしてあげてもらいたいのだ。

アニュトス　どうして自分で教えてあげないのだね？

ソクラテス　いや、そうした事柄の教師だとぼくが思っていた人たちのことなら、ちゃんと言ったよ。ただあなたの主張によると、ぼくの説はまったくまちがっているというわけだ。そしておそらく、あなたがそう言うのは一理あるだろう。（E）さあこんどは、彼がアテナイ人のなかの誰のところへ行けばよいのかを、あなたが言う番だ。誰でも、これはと思う人の名をあげてもらえないだろうか。

アニュトス　しかし、どうしてとくにひとりの人の名をあげなければならないのだね。アテナイ人でひとかどの立派な人物なら、そのなかの誰と出会っても、ソフィストたちよりは彼をすぐれた人間にすることはまちがいないだろう。彼がその言葉にしたがう気になるならね。

三一

ソクラテス　いったい、そのひとかどの立派な人物たちというのは、ひとりでにそういう人物になったのだろ（93）うか――誰からも学ばないのに。しかも、自分が学びもしなかった事柄を、他人に教えることができるのだろうか？

アニュトス　彼らもまた当然、私の考えでは、やはりひとかどの立派な人物であった先人たちから学んだのだ。それともあなたには、この国にはすぐれた人物がたくさんいたとは思えないのかね。

ソクラテス　それはむろん、アニュトス、この国には、現在においても、また現在におとらずすでに過去においても、国事に関してすぐれた能力をもつ人たちがいたと思うよ。しかし彼らは、そうした自分の徳性を他に教えることにかけても、はたしてすぐれた人であっただろうか？　われわれにとって、問題はまさにこの点にあるのだからね。この国にすぐれた人物がいるかどうかということではなく、また過去においていたかどうかということでもなく、徳が教えられるものであるかどうかということを、われわれはずっと前から考察しているのだ。B　そしてこの考察は、つぎの点の考察をわれわれに要求しているわけだ。すなわち、いまの人であるとむかしの人であるとを問わず、いったいすぐれた人物たちは、自分が卓越していた点であるところのその当の徳性を、他人にも授けるすべを知っていたのだろうか、それとも、もともとこの徳というものは、人間が他に授けることも授けられることもできないものなのだろうか。――これがつまり、ぼくとメノンがさっきからたずねている問題にほかならないのだ。

三二

さあそれでは、あなた自身の言うところを手がかりとして、次のようにして考えてもらおう。――テミストクレス(1)がすぐれた人物であったことを、あなたはみとめないかね？　C

アニュトス　みとめるとも。誰よりもまっさきに。

ソクラテス では、教える人としても、いやしくも自分の徳を他に教える者が誰かほかにいたとすれば、彼もまたそのすぐれた教師であったということもみとめるかね？

アニュトス そうだと私は思う。

ソクラテス しかしあなたには、彼がほかの者を——とくに自分の息子を、ひとかどのすぐれた人物にする気にならなかったというようなことが、考えられるかね？ 彼が自分の息子に対して、もの惜しみ根性から、みずからのすぐれた点であるその徳を、わざと授けようとしなかったとでも思うのかね？

D

それともあなたは、テミストクレスが息子のクレオパントスに、すぐれた騎士になるような教育をあたえたということを、聞いたことがないだろうか。すくなくとも、クレオパントスは、馬上で直立の姿勢をつづけたり、直立のまま馬上から槍を投げたり、そのほかいろいろと多くの驚歎に値することをやってのけていたのだから、それはたしかだろう。つまり、そういったことはいずれも、テミストクレスが彼に習わせたところであり、すぐれた教師につくことができる範囲のことでは、彼を才能ある者たらしめた結果なのだ。——それともあなたは、こういったことを年上の人々から聞いたことがないかね？

アニュトス 聞いている。

ソクラテス してみれば、彼の息子の素質が悪かったのだと申し立てることはできないわけだ。

E

アニュトス おそらくできないだろう。

---

1 アテナイの有名な政治家（前五二八—四六二年）。

(93)

ソクラテス　では、この点はどうだろう――テミストクレスの子クレオパントスが、父親がそうであったのと同じ事柄に関して知徳の持ち主になったということを、あなたはこれまで、若い人からでも年長の人からでもいいが、聞いたことがあるかね？

アニュトス　ない。

ソクラテス　するといったい、われわれとしては、この父親が自分の息子に対して、先に言ったようなことについては教育をあたえる気になりながら、自分がもっていた肝心の知恵に関しては、そこらにいる隣近所の連中よりも何らすぐれた人間にしようとは思わなかったというようなことが、はたして考えられるだろうか――もしいやしくも、徳というものが教えられうるものだったとしたら。

アニュトス　ゼウスに誓って、おそらくそんなことは考えられないだろう。

三三

94

ソクラテス　こうして、先人たちのうちでも最もすぐれた人とあなた自身もみとめる人物は、徳を教える教師としてみるとき、かくのごときありさまなのだ。ではさらに、ほかの人について考えてみよう。リュシマコスの子アリステイデス[1]。――この人がすぐれた人物であったことをみとめないかね？

アニュトス　みとめる。むろんのことだ。

ソクラテス　この人もまた、自分の息子のリュシマコス[2]に対して、教師たちにつくことができる範囲のことについては、アテナイ人のなかでも最上の教育をあたえたのではないだろうか。けれども、すぐれた人物にすると

いう点になると、どうだね、リュシマコスがそのおかげで、ほかの誰かよりもすぐれた人物になったと思えるかね？　彼とは、あなたはたしかつきあってもいるはずだし、リュシマコスがどんな人間か、直接その目で見ているわけだからね。――さらにおのぞみなら、あれほどにも偉大な知者であったペリクレス(3)のことだが、彼がパラロスとクサンティッポスという二人の息子を育てたことは、知っているだろうね？　B

アニュトス　たしかに。

ソクラテス　彼は、この息子たちに対して、あなたも知っているように、アテナイ人の誰にも負けないくらいの騎士になるような教育をあたえ、また音楽や体育競技や、その他ひとつの技術に依存するかぎりの事柄については、ちゃんと教育をほどこして、誰にも劣らぬ者に仕立てたのだ。それなのに、彼らを人間としてすぐれた者にするということは、のぞまなかったのだろうか？　いや、たしかにのぞんだ、とぼくは思う。だがそれはおそらく、ひとに教えることのできないものなのではないだろうか。――しかし、このことに失敗したのはアテナイ人のうちで、少数のつまらぬ人たちだとあなたが思うといけないから、さらに次の例について考えてもらいたい。　C
――トゥキュディデス(4)もまた、メレシアスとステパノスという二人の息子を育てた。彼はこの息子たちに、ほか

1　アテナイの有名な政治家、将軍（前五二〇―四六八年）。マラトン、サラミスの両戦に重要な役割をはたし、正義の士として人望があった。テミストクレスとは政敵の間柄にあった。

2　『ラケス』の登場人物。

3　ペリクレス時代（前四六一―四二九年）と呼ばれるアテナイの黄金時代をつくった有名な政治家（前四九五―四二九年）。

4　アテナイの有名な政治家（前五〇五年ころの生まれ）。ペリクレスとは終始はげしい政敵の関係にあった。息子のメレシアスは前記リュシマコスと共に『ラケス』の登場人物。（なお、歴史家のトゥキュディデスとは別人である。）

にもいろいろと立派な教育をあたえたが、なかんずく彼らを、アテナイ随一の相撲の名手に仕立てたわけだ。一人をクサンティアスに、一人をエウドロスの手に託したのだからね。これらの人たちはたしか、相撲にかけては、当時並ぶ者のない名人という評判だった。――おぼえていないかね?

アニュトス　たしかに、うわさに聞いて知っている。

三四

ソクラテス　だから明らかに、もし徳が教えられうるものだったとしたら、トゥキュディデスは、自分の子供D たちに金のかかる教育をあたえておきながら、人間としてすぐれた者にするためにすこしも金の要らないような事柄を、教えなかったというはずはないのではなかろうか? いや、もしかしたらトゥキュディデスはとるに足らぬ男であって、アテナイ人の中にも、彼と結ぶほかの国の人々の中にも、あまり多くの友人がいなかったのだろうか? そんなことはない、彼は大きな家柄の出であって、この国をはじめ、ほかのギリシア人のあいだでも大きな勢力をもっていたのだ。したがって、もし徳が教えられうるものでさえあったなら、自分の息子をすぐれた人物にしてくれるはずの者を、同市民の中からなり、よその国の人々の中からなり、誰か見つけ出すことがでE きたはずだ――もし彼自身が、国務に気をつかわなければならないために、それだけの暇がなかったとした場合にはだよ。だがおそらくは、わが友アニュトスよ、徳は教えられることのできないものだというのが事実なのではないだろうか。

アニュトス　ソクラテス、どうもあなたは、軽々しく人々のことを悪く言うようだ。もし私の言うことをきく

95 気があなたにあるなら、私はあなたに忠告しておきたい、気をつけたほうがいいとね。ほかでもない、たぶんほかの国でも、ひとによくしてやるよりは害を加えるほうが容易だろうけれども、この国ではとくにそうなのだから。そのへんのことは、あなた自身も承知していることとは思うがね。

三五

ソクラテス　メノン、どうやらアニュトスは怒ってしまったようだ。それも別に不思議ではないだろう。まず第一に彼は、ぼくがあの人々の悪口を言ったのだと思いこんでいるのだし、それに、自分もまたそうした人々の中の一人だと考えているのだから。まあしかし、彼は、「悪く言う」とはどういう意味かということを、いつかさとるときがあれば、怒るのをやめるだろう。いまのところ、彼はそれを知らないのだ。さあこんどは、君がかわって答えてくれたまえ。――君たちのところにも、ひとかどの立派な人物たちがいないかね？

メノン　いますとも。

B **ソクラテス**　では、どうだね、その人たちは、青年たちに教える仕事をひきうけるかね。そして、自分が教師であること、徳が教えられるものであることに、同意しようとするかね？

メノン　いや、なかなかどうして、ソクラテス。――むしろ、あなたは彼らが、あるときには徳が教えられうるものだと言い、あるときはそうでないと言うのを聞かれることでしょう。

ソクラテス　そうすると、われわれとしては、そんな肝心の点ですら彼らの意見が一致していないとすれば、その人たちを問題の事柄の教師であるとみとめてよいものだろうか？

メノン　いいえ、そうは思えません、ソクラテス。

ソクラテス　さて、それでは問題のソフィストたちはどうだろう。自分が徳の教師だと宣言しているのは彼らだけだが、君には、ほんとうにそうだと思えるかね？

C

メノン　私がゴルギアスに感心するのはとくにその点なのですが、ソクラテス、あなたはそんな約束を彼の口から聞くことはけっしてないでしょう。のみならず、あの人は、ほかのソフィストたちがそんなことを約束するのを聞くと、笑っています。彼が自分の仕事として考えているのは、ただ、ひとを弁論に秀(ひい)でた者にするということだけなのです。

ソクラテス　では君にも、ソフィストたちがほんとうに徳の教師であるとは思えないのだね？

メノン　なんとも申せません、ソクラテス。私自身もやはり、多くの人々と同じように、ときにはそうであるように思えたり、ときにはそうでないように思えたりするのですから。

ソクラテス　ところで、この徳というものが教えられうるものであるように思えたり、思えなかったりするのは、君やそのほかの政治家たちばかりでなく、詩人のテオグニス(1)もやはり同じように、そういうことを言っているのだが、君は知っているだろうか？

D

メノン　どんな詩句の中で言っているのですか？

三六

ソクラテス　エレゲイア詩の中だ。そこで彼はこう言っている——

かのひとびとと飲みくらい
かのひとびとと共に坐り
かのひとびとをよろこばせよ——
大いなる力もてるひとびとを。
善きひとびとは善きことを教え
悪しきひとびととまじわるときは
もてる知恵をもうしなうもの。(2)

E

ほらね、ここでは、徳が教えられうるものであるかのように言っているだろう？

メノン　たしかにそのようですね。

ソクラテス　ところがほかの箇所では、それがすこし変って、こんなふうのことを言っているのだ。

もしも英知をかたちづくり　人のこころに植えつけえなば
そういうことのできる人々は——
大いなる褒賞(むくい)のあまたをかちえたであろう。

1　前六世紀、メガラのエレゲイア詩人。エレゲイア詩は、ヘクサメトロン（長短々六脚韻、—◡◡|—◡◡|—◡◡|—◡◡|—◡◡|—◡）のつぎにペンタメトロン（—◡◡|—◡◡|—||—◡◡|—◡◡|—）がつづく連行の一組がくり返される詩形。本来は主題・内容よりも、韻律だけに関係する名称である。

2　テオグニス、三三—三六行(Diehl)。

というようなことを彼は言っているし、そして――

善き父の子は　かしこき言葉のさとしのちからで

悪しき人とはならぬであろう。

されど汝は教えによって　悪しきこころの性(さが)を変え

善き人となすことはできぬのだ。(1)

どうだね、作者が同じ事柄について、こんどは前の自分の言葉と逆のことを言っているのに気がつくかね？

メノン　明らかにそうですね。

ソクラテス　いったい君は、このようなものをほかに何かあげることができるかね――自分がそれを教える教師であると称している人々は、いっこうにそうとみとめられていない。むしろ、他人に教えるどころか、本人自身が知識をもたず、自分が教師であると主張するその当の事柄に関して、劣悪な人間であるように言われている。B
そして他方、当人自身はすぐれて立派な人間であるとみとめられているような人々はといえば、それを教えられうるものだと言ったり、そうでないと主張したりしている。――およそ何についてであれ、そんなふうに意見が混乱しているような人たちを、君は、ほんとうの意味で教師であると肯定することができるかね？

メノン　いいえ、けっして。

三七

ソクラテス　それでは、ソフィストたちも、本人がひとかどのすぐれた人物であるような人たちも、どちらも

この事柄を教える教師であるとはいえないとすれば、明らかに、それを教えることのできる者は、ほかにはいないことになるだろうね？

メノン　いるとは思えません。

C

ソクラテス　教える人がいないとすれば、また習う者もいないわけだね？

メノン　おっしゃるとおりだと思います。

ソクラテス　しかるに、教える人も習う人もいないとすれば、そのような事柄は、もともと教えられる可能性も持っていないのだということに、われわれはすでに同意しているのだ。

メノン　たしかに同意しました。

ソクラテス　ところで徳を教える人は、どこにもみつからなかったね？

メノン　そうです。

ソクラテス　教える人がいないとすれば、習う者もいないわけだね？

メノン　明らかにそうです。

ソクラテス　してみると、徳というものは、教えられうるものではないということになるね？

D

メノン　私たちの考察がまちがっていなかったとすれば、どうもそういうことになるようですね。――こうなると、ソクラテス、私はもうさっぱりわけがわからなくなります。いったい、すぐれた人物の存在さえも否定さ

1　テオグニス、四三五、四三四、四三六―四三八行（Diehl）。

れることになるのでしょうか？　それとも、もしいるとしたら、彼らはいかにして、そのすぐれた徳性をそなえるようになるのでしょうか？

ソクラテス　きっと、メノン、ぼくと君はつまらぬ人間なのだろう。君はゴルギアスから、ぼくはプロディコス(1)から、あまり充分に教育されなかったのだろう。だから、われわれはまず何よりも、われわれ自身に注意を向けて、われわれをとにかく何らかの仕方で、よりすぐれた人間にしてくれるような人を探し求めなければならない。E ぼくがこういうことを言うのはほかでもない、われわれのさっきの探求を反省したうえでのことなのだ。つまり、われわれは笑止にも、人間の行為が正しく立派になされるのは、ただ知識によって導かれる場合だけではないということに、気がつかなかったのだ。いかにしてすぐれた人物はできるかということをわれわれが知りえないでいるのも、おそらくはここに抜け道があってのことだろう。

メノン　どういう意味でそのように言われるのですか、ソクラテス？

三八

ソクラテス　説明しよう。――われわれは、すぐれた人物たちは有益な人間であるべきだ、これはどうしても97 そうでなければならぬということに同意したわけだが、この点はまちがっていなかったはずだ。そうだろう？

メノン　ええ。

ソクラテス　さらに、彼らを有益な人間たらしめている条件は、われわれの行為を正しく導くということにあるという点、この点もまず、当然同意してよかったことだろうね？

メノン ええ。

ソクラテス しかし、正しく導くということは、「知」がなければできないということ、これにわれわれが同意したのは、どうやら正しくなかったようだ。

メノン いったい、どうしてですか？

ソクラテス それをこれから説明してみよう。——もし誰かが、ラリサでもほかのどこでもよいが、そこへ行く道をちゃんと知っていて歩きながら、ほかの人々を導いて行くとするならば、むろんその人は正しく、よく導くことになるだろうね？

メノン たしかに。

B

ソクラテス では、こういう場合はどうだろう。ある人が、その道を実際に通ったことがなく、ちゃんとした知識をもっているわけでもないが、しかしどの道を行けばよいか見当をつけて、その思わく（思いなし）が正しかったような場合は？ そういう人もやはり、正しく導くのではないだろうか？

メノン たしかに。

ソクラテス そして、おそらくそのような人は、他方の者が知識のかたちで把握（はあく）している事柄について正しい思わくをもっているかぎりは、知ってはいないが思うところが真実をついているというその状態のままで、導き

---

1 75E（およびその箇所の注）を参照。ソクラテスは（おそらくは半ばたわむれに）自分をプロディコスの弟子と称するのが常であった（『プロタゴラス』341A、『クラテュロス』384Bなど）。

手としてはすこしも劣るところがないのだ――それをちゃんと知っている人とくらべてもね。

メノン たしかに、すこしも劣らないわけですね。

ソクラテス してみると、行為の正しさということに観点をおくなら、正しい思わくは、導き手として「知」に何ら劣るものではないことになる。そしてこの点こそ、われわれがさっき、徳とはいかなるものかを考察するにあたって、見のがしていたことなのだ。われわれは、正しい行為を導くのはただ「知」だけだと言っていたのだから。実際にはしかし、正しい思わくもまたそうだったのだ。

C

メノン たしかにそのようですね。

ソクラテス とすると、有益であるという点にかけて、正しい思わくは、知識に何ら劣らないわけなのだ。

メノン しかし、ソクラテス、これだけの差はあるでしょう。つまり、知識をもっている者はつねに成功するけれども、正しい思わくをもつ者のほうは、うまくいくときとそうでないときがあるという点です。

三九

ソクラテス どうして？ つねに正しい思わくをもっている者は、いやしくもその思うところが正しいあいだは、つねにうまくいくのではないかね。

メノン そうでなければならないようですね。すると、どうも私には不思議になるのですが、ソクラテス、もしそうなら、いったいぜんたいなぜ知識は、正しい思わくよりもずっと高く評価されるのでしょう？ またこの二つが、それぞれ別のものとして区別される理由は、どこにあるのでしょう？

D

ソクラテス　どうしてそれが君に不思議に思えるかわかるかね。それとも、ぼくが言ってあげようか？

メノン　ぜひ教えてください。

ソクラテス　それはね、君がダイダロス[1]のつくった彫像に注意したことがないからだよ。もっとも、君たちの国にはもともとないのかもしれないが。

メノン　いったい何を考えて、そんなことを言われるのですか？

ソクラテス　あの彫像もやはり、しっかりと縛りつけておかないと、逃げて走り去ってしまうが、縛っておけば、じっとしているということさ。

E

メノン　それで？

ソクラテス　ダイダロスの作品を所有していても、それが縛りつけられていないならば、ちょうどすぐに逃亡する召使と同じことで、あまりたいした値うちはない。じっとしていないのだからね。しかし、縛りつけられている場合は、たいした値うちものだ。なにしろ、たいへん立派な作品だから。――ところで、何のつもりでこういうことを言うかというと、ぼくは正しい思わくのことを考えているのだ。つまり、正しい思わくというものも、

98

やはり、われわれの中にとどまっているあいだは価値があり、あらゆるよいことを成就させてくれる。だがそれは、長い間じっとしていようとはせず、人間の魂の中から逃げ出してしまうものであるから、それほどたいした価値があるとは言えない――ひとがそうした思わくを原因（根拠）の思考によって縛りつけてしまわないうちはね。

1　アテナイの伝説的名匠。

しかるにこのことこそ、親愛なるメノン、先にわれわれが同意したように、想起にほかならないのだ。そして、こうして縛りつけられると、それまで思わくだったものは、まず第一に知識となり、さらには、永続的なものとなる。ここにこそ、知識が正しい思わくよりも高く評価されるゆえんがあり、知識は、縛りつけられているという点において、正しい思わくとは異なるわけなのだ。

メノン　ほんとうに、ソクラテス、何かそういった事情にあるもののごとくですね。

四〇

B

ソクラテス　しかしぼくの言っていることにしても、たしかな知識にもとづくものではなく、ただ比喩を使って推量しているだけなのだよ。けれども、正しい思わくと知識とは別のものだということ自体は、けっしてたんなる推量ではないつもりだ。いや、もしもこのぼくに、自分が知っていると主張できるようなことが何かほかにあるとしたら——そんなものはわずかしかないだろうが——、とにかくこのこともまた、ぼくは知っていることの一つに数えるだろう。

メノン　たしかに、ソクラテス、おっしゃることは正しいでしょう。

ソクラテス　ではどうだろう。こう言うのは正しいだろうか——正しい思わくに導かれて成就するひとつひとつの行為の成果は、知識に導かれる場合とくらべて、すこしも劣るものではない、と。

メノン　その点も、あなたの言われるとおりだと思います。

C

ソクラテス　してみると、実際の行為に関するかぎり、正しい思わくは、知識とくらべて何ひとつ劣るところ

はなく、また有益であるという点でも、けっしてひけをとらないわけだね。同じことは、正しい思わくをもっている人と、知識をもっている人とをくらべた場合にも言えるだろう。

メノン　そのとおりです。

ソクラテス　ところで、すぐれた人物は有益な人間であるということに、われわれはすでに同意した。

メノン　ええ。

ソクラテス　それでは、すぐれた人物たち、国家に役立つ人物たちがいるとした場合、彼らをそのような人物たらしめるものは、ただ知識だけではなく、正しい思わくもまたそうだということになると、そして、この両者

D

のいずれも、すなわち知識のほうも正しい思わくのほうも、生まれながらにして人間にそなわるものではないということになると(1)……それとも君には、この両者のどちらでも、生まれながらにそなわるものであるように思えるかね？

メノン　いいえ、そうは思えません。

ソクラテス　では、それらのどちらも生まれつきのものでない以上、すぐれた人物たちもまたやはり、生まれつきすぐれているというわけのものではないだろう。

メノン　たしかにそうではありません。

ソクラテス　ところでわれわれは先に、すぐれた人物が生まれつきすぐれているのではないということになっ

1　トンプソンやブラックとともに98D1の οὔτ' ἐπίκτητα を削除。

たので、それならそういう徳性は、はたして教えられうるものかどうかを、つぎに考えてみたのだった。

メノン　ええ。

ソクラテス　その場合、もし徳が知であるならば、教えられうるものであるはずだというのが、われわれの考えだったね？

メノン　ええ。

ソクラテス　また、もし教えられうるものだとしたら、それはひとつの知であるはずだ、とも考えたね？

メノン　たしかに。

E

ソクラテス　そして、もしそれを教える教師たちがいるとしたら、きっとそれは教えられうるものだろうし、もしいなければ、教えられうるものではないだろう、と。

メノン　そうです。

ソクラテス　しかるにわれわれは、徳を教える教師はいないということに、意見が一致したのだったね？

メノン　そのとおりです。

ソクラテス　したがってわれわれは、徳とは、教えられうるものでもなければ、知でもないということに同意したことになるわけだね？

メノン　たしかに。

ソクラテス　しかし、すくなくともそれが善きものであるということには、われわれは同意するだろうね？

メノン　ええ。

ソクラテス　そして、正しく導くものは有益なものであり、善きものである、と。

メノン　たしかに。

99

ソクラテス　しかるに、正しく導くといえば、それをなしうるのは、正しい思わくと知識の二つだけであって、人間はこれらをもつことによって正しく導くのだ。何かの偶然のおかげで正しく行われるというようなものは、これは人間の導きによるものではないからね。人間が正しい方向への導き手となるようなものの場合には、この二つ──正しい思わくと知識が導くのだ。

メノン　そのように思われます。

四一

ソクラテス　ところで、徳は教えられうるものではない以上、もはや知識であるともいえないわけだね？

メノン　知識でないことは明らかです。

ソクラテス　そうすると、善きもの、有益なものが二つあるうちで、一方は放免されてしまったわけだ。そして知識は、政治的活動を導く力ではないということになる。

B

メノン　そう思われます。

ソクラテス　してみると、そういう人たち──テミストクレスらをはじめ、さっきこのアニュトスがあげていた人々──は、何かある知によって国を導いていたわけではなく、またそれは、彼らが知者だったからというわけのものでもないのだ。だからこそまた、彼らはほかの人々に、自分と同じ能力を授けることができなかったの

だ。つまり、彼らの能力のよってきたるところは、知識にあったわけではないのだからね。

メノン　どうもおっしゃるとおりのようですね、ソクラテス。

C

ソクラテス　そこで、もし知識によるのではないとすると、のこるところは、思わくの正しさによるということしかないことになる。政治家たちはこれを用いることによって、国を正しく導いているわけであって、結局彼らは、知という点にかけては、例の神託を伝えたり、神の意をとりついだりする人たちと、なんら異なるところはないのだ。なぜなら、この人たちも、神がかりにかかることによって、真実のことをいろいろたくさん口で言うけれども、その言っていることの意味を何も知ってはいないのだから。

メノン　おそらくはそうなのでしょう。

ソクラテス　ところで、メノン、知性なくしてその言行に多くの偉大な成功をおさめるような者がいるとしたら、そのような人たちを神のようなと呼ぶのは、まことにふさわしいのではないだろうか？

メノン　たしかに。

D

ソクラテス　そうしてみると、いま話に出た神託を伝える人々や、神の意をとりつぐ人々、それにすべての詩人のことを称して、われわれが神のようなと呼ぶのは正しいことになるだろう。そして、そうした人々のうちでもとくに政治家たちは、まさに神のような人たちであり、神がかりにかかっているのだと主張してしかるべきだろう。彼らが、自分の言っていることの意味を何も知らずに、偉大な事柄をいろいろとたくさん言うことに成功する場合、それは神から霊感を吹きこまれ、神にのりうつられているわけなのだからね。

メノン　たしかに。

ソクラテス　そういえば、メノン、女たちもたしか、すぐれた人物たちを神のような人々と呼ぶようだし、またスパルタ人も、誰かすぐれた人物をたたえるときに、「これは神にも似た人物」という言い方をするね。

E

メノン　たしかに、ソクラテス、そういう言い方は正しいように見うけられます。しかし、そこにいるアニュトスが、あなたがそんなことをおっしゃるのに腹を立てているかもしれませんよ。

四二

ソクラテス　ちっともかまわないよ、ぼくは。彼とは、メノン、またあらためて話しあう機会もあることだろう。目下のわれわれの議論だが、もしこれまでの探求と議論の進め方がすべてまちがっていなかったとすれば、徳とは、生まれつきのものでもなければ、教えられることのできるものでもなく、むしろ、徳のそなわるような人々がいるとすれば、それは知性とは無関係に、神の恵みによってそなわるものだということになるだろう——

100

すくなくとも、誰か政治的能力のある人物たちのなかに、ほかの者にもその能力をさずけることのできるような人が出てくるのでないかぎりはね。もしそういう人が出てくるとしたら、その人はまさしく、生ける人々の中にあって、ちょうどホメロスが死者の中にいるテイレシアス[1]を形容したのと同じような人と言われてしかるべきだろう。すなわちホメロスは、テイレシアスについてこう言っているのだ。「ハデスにある者たちのうち、ひとり彼のみが知力をそなえ、他は影のごとくさまようのみ[2]」と。同じようにこの世においても、いま言ったような人

1　幾世代にもわたって生きた盲目の予言者。

2　『オデュッセイア』第一〇巻四九四—四九五行。

は、徳にかけては、影とならんだ真実の物にくらべることができるだろう。

B **メノン** ほんとうに、あなたの言われるとおりだと思います、ソクラテス。

ソクラテス それでは、メノン、これまでの推論にしたがうかぎり、徳というものは、もし徳が誰かにそなわるとすれば、それは明らかに、神の恵みによってそなわるのだということになる。しかしながら、これについてほんとうに確かな事柄は、いかにして徳が人間にそなわるようになるかということよりも先に、徳それ自体はそもそも何であるかという問を手がけてこそ、はじめてわれわれは知ることができるだろう。だがいまはもう、そろそろぼくは行かなければならない。君のほうは、自分で納得のいったことをそのまま、君の客友であるこのア

C ニュトスにもよく説得して、彼が気をやわらげるようにしてくれたまえ。もし君がこの人を説得してくれたら、君はアテナイ人たちのためにひとつの功績をつくすことになるだろうからね。

『メノン』補注

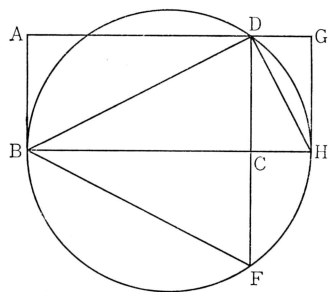
「仮設」説明のための幾何学の例題(86E〜87B)

ここで言及されている幾何学の問題がどのような問題であり、その仮設の内容をどのように解するかについては、おびただしい数の解釈が提出されてきた。ヒースの『ギリシア数学史』(Sir Thomas Heath, *History of Greek Mathematics*, 1921, vol. I, p. 298)によれば、すでにC・ブラスのころ(一八六一年)に三〇もの違った解釈が知られていて、さらに数多くの解釈がヒースの時代までに提出されたということであるが、その後もますますふえるばかりである。A. Heijboer, 'Plato, Meno 86E–87A' *Mnemosyne*, 4th series, VIII(1955), pp. 89 sqq. という論文(後で取り上げる)に、役に立つ文献表がついている(なおさらに、*Lustrum* 1959, Bd. 4(1960): Plato 1950–1957 (by H. Cherniss), p. 117 を参照)。

訳文のなかの注でも述べたように、事柄はソクラテスの以下の議論全体の内容理解にとってはあまり重要ではないけれども、数学好きのプラトンがここで特定の具体的な問題を念頭に置いていたということは充分考えられるので、まったく無視することもできないであろう。そこで以下において、この幾何の例題がこれまで大体どのような内容のものと推定されてきたかを見るために、ブラックの注釈書(Appendix, pp. 441 sqq.)に準拠しながら、ブラックが取り上げている若干の主要な解釈を要点的に紹介することにする。

S. H. Butcher

(*Journal of Philology*, XVII, 1888, pp. 219 sqq.)

本文中に述べられている問題を、「この矩形を等面積の三角形に直して、この円に内接させることは可能であるか」というふうに解釈し、そして仮設の内容を、「もしこの図形(=矩形ＡＢＣＤ)が、それの与えられた線(=その円の直径ＢＨ)の上にこれを置く場合、そこに不足する図形(=矩形ＤＣＨＧ)が、もとの図形そのもの(=ＡＢＣＤ)と同じようなものである(=相似である)ならば(求められた内接は可能である)」という意味に解する。

ＡＢＣＤとＤＣＨＧが相似であれば、BC:CD=CD:CH(∴CD^2=BC·CH)であるから、Ｄは円周上にある。DC=CFと

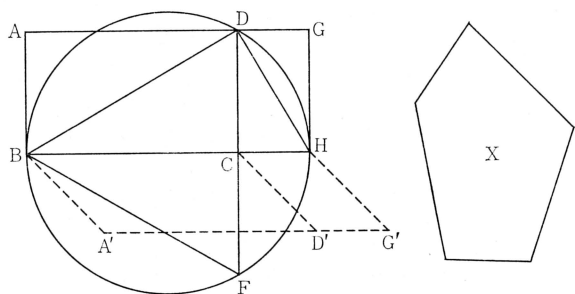
なるようにＤＣを延長すれば、Ｆもまた円周上にある。かくて三角形ＢＤＦはこの円に内接し、そしてその面積は与えられた矩形ＡＢＣＤと等しい。

（E. S. Thompson の注釈（*ad loc.*, pp. 148-9）はこの Butcher の解釈に従っている。）

J. Cook Wilson

（*Journal of Philology*, XXVIII, 1903, pp. 222 sqq.）

右の Butcher のように仮設の内容を解釈すると、この条件が充される場合にはたしかに、求められた内接は可能であるが、しかし充されない場合には、問題の内接は可能であるかもしれないし不可能であるかもしれない（与えられた矩形が、その円に内接可能な最大の三角形の面積よりも大きくさえなければ、右の条件が充されなくても求められた内接は可能である）。しかしそれでは、仮設を立てることの意味があまりないことになるから、この点は重大な難点であるといわなければならない（Butcher 自身もこれは認める）。それに、単独では「ある面積をもつ図形」という意味しかもちえない本文中の用語（χωρίον）を、初めから「矩形」と決めてかかるところにも、やや無理がある。

そこで Cook Wilson は、これらの難点を是正するために、大綱は Butcher の解釈の線に沿いながら、本文中の問題のなかの「この図形」という言葉を、直接に直径ＢＨの上に置かれる矩形ＡＢＣＤではなく、一定の面積をもって与えられた任意の直線図形（Ｘ）と解し、そのＸをいちど等面積の矩形ＡＢＣＤの形に直して直径上に置くというふうに、仮設の中身を解釈する。

いま、Ｂを頂点とする二等辺三角形ＢＤＦがＸと等面積であり、与えられた円に内接するとして、ＢＨはＤＦをＣにおいて直角に二等分する直径であるとする。矩形ＡＢＣＤの面積は三角形ＢＤＦと、したがってまたＸと等しく、また $BC \cdot CH = CD^2$ ($\because BC : CD = CD : CH$) であるから、ＡＢＣＤはＤＣＨＧと相似である。

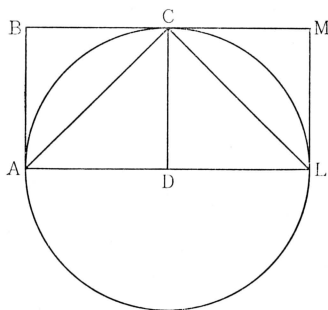
かくして、与えられた図形Ｘと等面積の二等辺三角形ＢＤＦが、与えられた円に内接可能であるならば、Ｘと等面積の矩形ＡＢＣＤを直径ＢＨの上に置いた場合、そこに「不足する」矩形ＤＣＨＧは必ずそのＡＢＣＤと相似でなければならないが、しかしＸと等面積の矩形がこのような条件を充さないならば、求められている三角形の内接は必ず不可能である。

(いうまでもなく、不等辺三角形が円に内接する場合それと等面積の二等辺三角形を同じ円に内接させることは可能であるから、もしXと等面積の二等辺三角形が与えられた円に内接不可能なら、Xと等面積のいかなる種類の三角形もその円に内接することは不可能である。)

Cook Wilson はさらに、直径の上に置かれる図形を矩形と考える必要さえもなく、いかなる種類の平行四辺形(例えばA′BCD′)であってもよいことを主張する(詳細略)。(なお、Thomas Heath (*op. cit.*, pp. 298–303) は Cook Wilson と独立別箇に同じ解釈を提出している。この解釈は K. von Fritz (*R. E.* Suppl. VII, p. 371, s. v. Leodamas) によって採用された。)

A. Benecke
(*Über die geometrische Hypothesis in Platos Menon*, Elbing, 1867)

基本的には Butcher や Cook Wilson と同じ線であるが、問題のなかの「この図形」というのを、それまでに(82Csqq.)ソクラテスがメノンの召使のために画いた四平方プゥスの正方形(ABCD)と解する。そして、このABCDを与えられた円の直径(AL)の上に置く場合に充されなければならぬ仮設の条件は前と同様であるが、ただ、「不足する」図形(CDLM)とABCDとは事実上、相似であるよりは全等であることになる(実際にはそのほうが、本文中の「もとの図形そのものと同じようなものであるならば」という言い方が生かされることになる)。いずれにせよ、この条件が充される場合、三角形ACLはもとの図形ABCDと等面積であり、与えられた円に内接することになる。

この解釈は、すでに画かれた図形を生かしながら、内容も簡単で分りやすい点が利点である(例題は、相手が聞いてすぐ分るような、あまり複雑でないものであるのが自然である)。しかし、この解釈に従えば、求められた内接が可能であるための実際の条件は、要するに、与えられた正方形の一辺が円の半径と等しい長さであることなのであるから、ソクラテスはそれをそのまま仮設の内容として述べればよいわけであって、わざわざ本文中のようなまわりくどい言い方をしなければならぬ理由はないといわなければならぬ(Heath と Heijboer の指摘)。

そして、この Benecke の解釈もまた、仮設の条件が充されなくても問題の内接が可能であるかもしれないところに、先の Butcher と同じ根本的な難点を有する。

(なおこの解釈は Tannery (*Arch. f. Geschichte d. Philosophie*, II, 1889, pp. 509–514)

によって受けいれられている。）

A. Heijboer

(*loc. cit.*)

これまでに見た三人の解釈は、本文中の「それの与えられた線」(τὴν δοθεῖσαν αὐτοῦ γραμμὴν)という言葉を、「その円の直径」と解する点で共通している。これはしかし、原文解釈上の重大な困難を含んでいる。「それの」(αὐτοῦ)という代名詞はこの文章では当然、「この図形」を受けなければならない。かりに無理をおかして「その円の」と解することができたとしても、「線」(γραμμή)という言葉がそれだけで、「直径」の意味に使われる用語例上の保証はまったくない。さらにゆずって、「直径」の意味がかりに可能としても、特定の円そのものがすでに与えられているのに、与えられたその円の直径のことをわざわざまた「与えられた(線)」と言うのも不自然である、等々。

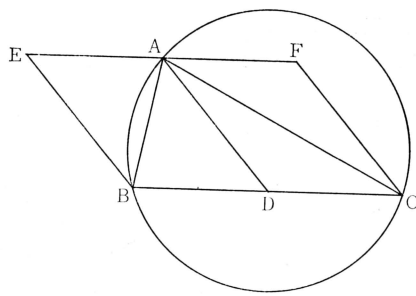
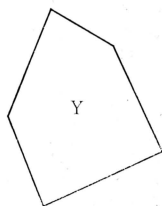
Heijboer はこの箇所の問題を全体として、与えられた円の内に、与えられた図形(矩形ＡＢＣＤと解する)の一辺(ＡＢ)を弦としながら、その弦を底辺としてもとの図形(ＡＢＣＤ)と等面積の三角形を内接させることが可能であるか、という内容に解する。

ＡＢを底辺とする内接可能な最大限の三角形はその底辺上の二等辺三角形(ＡＧＢ)であるから、求められた内接が可能であるためには、矩形ＡＢＣＤの高さ(ＡＤまたはＢＣ)を二倍した高さ(ＡＥまたはＢＦ)がＧを超えないことが条件であり、その場合、ＥＦまたはその延長が円周と交わる点(Ｘ)を頂点とする三角形ＡＸＢが、ＡＢＣＤと等面積の、求められた内接三角形となる。本文中の仮設の内容は、「その円のなかでその図形(ＡＢＣＤ)を与えられた線(ＡＢ)の上に置く場合、

その図形と同じ図形(ＤＣＦＥ)ぶんだけの余地が(高さにおいて)円内に残される(エレイペイン＝不足する)ようであるならば、求める三角形の内接は可能であり、そうでなければ不可能である」という意味になるであろう。

この解釈は、問題の解法が比較的簡単であること、仮設の条件が解の可能と不可能をはっきり二分すること、「それの与えられた線」の解釈が先述のような原文解釈上の困難を含まぬこと、などを長所とする。しかしまた、「この図形」をはじめから矩形とする点(Butcher と同じ)、矩形の長いほうの辺を円の弦としなければならぬ点に、やや恣意性がある。そして最も大きな難点は、「不足する」「余地を残す」という言葉(エレイペイン)に対して、それ自体としてもすこし無理な(Heijboer はソクラテスがここで円内の高さを示す動作を補足すると想定する)、そして幾何学における術語として保

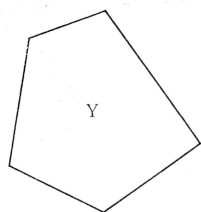
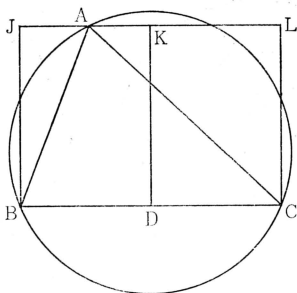
証された意味(=これまで見られた解釈のそれ)からも大きくずれる解釈を与えなければならぬ点である。

A. S. L. Farquharson (*Classical Quarterly*, XVII, 1923, pp. 21 sqq.)

いま、与えられた任意の図形Yと等面積の三角形ABCが、与えられた円に内接されえたとする。その任意の一辺(例えばBC)を二等分する点Dと頂点Aを結び、図のごとく平行四辺形EBDAおよびADCFを作ると、そのそれぞれは三角形ABCと等面積であり、したがってYと等面積である。

かくして、Yを与えられた円に三角形として内接させるというこの問題の解は、つぎのような条件を充すその円の弦(BC)を見出すことによって得られる——すなわち、その弦の半分ずつの上に、それぞれがYと等面積の二つの相似平行四辺形(BDAEとDCFA)を並置した場合、それぞれの一つの対角線(ABとAC)がちょうどその円の弦でもあること。どちらの平行四辺形も、BCに対して、自分と同じ平行四辺形を「不足する」ことになる。

この解釈は、本文中の「この図形」「それの(与えられた線)」「不足する」等の言葉の解釈についてそれぞれこれまで見られたような困難を免れているが、重大な難点は、幾何学者が特定の与えられたケースにおいて、いったいどのようにして右に言われたような条件を充す弦を見出すかということが、不問にされている点である。これはFarquharsonが、「与えられた(線)」という言葉を、「許された」=「可能であるとした場合の」「(条件を充す弦が)見出されたとした場合の」という意味にとるからである。しかしそれでは事実上、質問者の問に答えたことにならないであろう。

Bluckの結論

Bluckは以上の検討により、「(与えられた)線」とはほとんど確実に「弦」であって(必ずしも)「直径」ではない、としたうえで、右のFarquharsonの解釈の最後の点を是正して、「それの与えられた線」=「その図形のために与えられた線(弦)」と解し、特定の図形と円だけでなく特定の弦もまた問題として与えられているとみなす。

問題は、「与えられた図形(Y)をその円の内に、与えられた弦(BC)を底辺とする等面積の三角形として内接させることは可能であるか」ということである。そして、求められた内接が可能であるためには、BCの半分を底辺としてYと等面積の矩形(例えばJBDK)を作った場合、BCと相対する辺JKが円周と交わるか接するかしなければならない。もしBCの両側(上下)に作ったそのような矩形の、BCと相対する辺がどちらも円周と交わるか接するかしないのであれば、求められた内接は不可能であるし、どちらかが交われば(または接すれば)可能であり、交わる(接する)点(A)がその三角形の頂点となる。JBDKはBCに対して、自分と同じ図形(KDCL)ぶんだけ「不足する(余地を残す)」。

この解釈はこれまで見られたほとんどの難点を免れているが、決定的な条件ともいうべき、BCと相対する辺(JK)が円周と交わるか接するかしなければならぬということが、テクスト中にそれとして何も語られていない点が(Bluck自身も認めるように)重大な難点となる。Bluckはこの欠陥を補うために、「不足する」「余地を残す」という言葉のなかには、(先に見たHeijboerが言うような)円内における高さの観点もまた含まれているとみなし、ただこの問題のなかではその点は同時代の人々に充分自明の事柄であるから、それとして正確な条件の形では表明されていないのだと解する。

――くり返し言うように、この問題についてのテクストの言葉はきわめて簡単でしかも曖昧であるから、あらゆる難点から自由な完全無欠の解釈というものはおそらくありえないであろう。

『ゴルギアス』解説

加来彰俊

一　はじめに

その当時、この『ゴルギアス』を読んだ一人の農夫は、深い感銘を受けて、「すぐに農地とぶどうの木を見捨てて、プラトンに彼の魂をあずけ、そして自分の魂にプラトンの教えを種子として蒔き、また植えつけた」という話が、アリストテレスの今は失われた作品のなかに記されていたと言われている。(1) また、後に古代末期の新プラトン学派の学園で、プラトンの対話篇のいくつかが定期的に講義されたとき、プラトン哲学への入門書の役割を果すものとして、この『ゴルギアス』が、『アルキビアデスⅠ』に次いで、とり上げられたと伝えられている。(2) さらにまた、近年、この対話篇のすぐれた注釈書を著わした一人の古典学者は、その書物のなかで、「この『ゴルギアス』はプラトンの対話篇のなかで最も現代的(modern)な作品であり、それが提起している一対の問題——民主主義社会における宣伝の力をいかにして制御するか、伝統的な規範が崩壊してしまった世の中で、道徳的規範をいかにして再建するか、というこれら一対の問題は、今日、二〇世紀の中心問題でもある」と記し、そしてそういった現代にも共通する問題を含むこの対話篇の内容が、その著者の心に強く訴えかけて、注釈の仕事を思い立たせる動機の一つになった、という意味のことを述べている。(3)

では、いったい、この対話篇のなかのどのような教えが、一介の農夫にさえも耕作地を捨てさせて、プラトン哲

学に専心させるようにしたのだろうか。また、この対話篇が、たんに古代末期の新プラトン学派に固有の見地からだけではなく、われわれにも一般にプラトン哲学へのよき案内書になるのだとしたら、それはどのような意味においてであろうか。さらに、この作品が「プラトンの対話篇のなかで最も現代的なもの」だとされ、そして現代の政治や道徳の中心問題を考察する上でも指針となると言われる理由は、いったい、どこにあるのだろうか。

これらの問いに対する答は、むろん、読者がこの対話篇を熟読することによって、各人がそれぞれに自分で見出すべきものであろう。この解説においては、訳者は、一般の読者の理解をいくらかでも助けることになるような予備的な知識を与えることと、訳者の解釈を少しばかりつけ加えることにとどめたい。そこで以下、この対話篇の登場人物、対話設定年代、対話内容の梗概、主題と構成、執筆の意図と年代という順序で、この対話篇全体についての大略の説明をしてみることにする。

(付記) この対話篇については、訳者はすでに、『プラトン著作集 ゴルギアス』(岩波書店)、『ゴルギアス』(岩波文庫)、『西洋古典学研究 Ⅷ』のなかに何度も解説を書いたので、以下の叙述もそれらと重複するところが多い点は、あらかじめ了承されたい。

(1) W. D. Ross, *Aristotelis Fragmenta Selecta*, Nerinthus (p. 23); Rose^3, fr. 64.

(2) Anonymus, *Prolegomena in Platonis Philosophiam* (Hermann, *Platonis Dialogi*, VI, pp. 219–220); Olympiodorus, *In Platonis Gorgiam Commentaria*, prooim. 6 (Norvin, pp. 4–5).

(3) E. R. Dodds, *Plato Gorgias*, Preface (p. v), Appendix (p. 387).

二 登場人物

この対話篇に登場する人物は、一方にソクラテスとその忠実な仲間のカイレポン、他方に弁論術の大家ゴルギア

スとその若い弟子ポロス、そしてゴルギアスを自分の家に逗留させてその保護者の役をつとめている新進政治家カリクレスである。まず、これらの登場人物の一人一人について、簡単に紹介しておこう。

ゴルギアス(Gorgias)　シシリー(シケリア)島の東海岸に近いレオンティノイ市の出身。その島で発達した弁論術を修めて、その道の第一人者となる。彼の名前が広く知られるようになったのは、ペロポンネソス戦争の初期(前四二七年)に、祖国が隣国のシュラクサイに圧迫されて存亡の危機に立ったとき、救援依頼の外交使節団の首席代表として同盟国アテナイへ行き、得意の雄弁によってアテナイ市民を説得し、見事に大任を果した活躍による(『ヒッピアス(大)』282B)。しかしその後間もなく祖国には政変が起こり、彼は亡命を余儀なくされたらしい(前四二三年頃)。以後彼は弁論術の教師として、ギリシアの各地を遍歴したが、なかでも特にギリシア北部のテッタリアの地における彼の影響が伝えられている(『メノン』70B)。アテナイにも時折姿を見せたらしく、本篇の対話もそのような一つの機会に行なわれたものとして設定されている。

一般の哲学史においては、彼はプロタゴラス、ヒッピアス、プロディコスなどと並んで、いわゆる「ソフィスト」の一人に数えられているが、少なくともプラトンによれば、彼は「ソフィスト」と呼ばれることを拒否して、他のソフィストたちが「徳の教師」と自称しているのをあざ笑い、自分は「弁論家」、「弁論術の教師」にすぎないと主張していたようである(449A、『メノン』95C)。事実、『プロタゴラス』に描かれている、当時のソフィストたちのオンパレードとも言うべきカリアス邸の会合にも、彼の姿は見えないし、また彼の不在も問題になっていない。

なお、一部の哲学史家の間では、後世に伝えられた彼の著作『ものの本性について、あるいは非存在について』の内容から推測して、彼をエレア派の学説に対抗して、いわゆる「哲学的ニヒリズム」を唱導した独創的な思想家とみなす解釈が行なわれているが、しかしこの解釈はたぶん行きすぎであるように思われる。彼がエレア派の論理にも、またエンペドクレスの学説にも通じていたであろうことは間違いないとしても、彼が本格的な哲学者であったとは、プラトンもアリストテレスも証言していないからである。おそらく、彼の他の残存著作『ヘレネ讃』や『パラメデス弁護』などが示すように、先の著作も、自分の弁論の力量を示すためのいわば余技であり、一種の「戯れ」(パイグニオン)であったとみるのが適当だろう。

事実彼は、並みいる群衆を前にして、「何でも問うてみよ。何にでも答えてみせる」と豪語していたのである（447C、『メノン』70C）。だから、彼の本領は、あくまでも弁論家として、「弁論に秀でた者」（『饗宴』198C）、「言論の力によって事物の見えかたを変えることのできる人間」（『パイドロス』267A～B）ということにあり、そして他の人たちをも自分と同じように弁論に秀でた者にすることを職業としていた人間であったとみるべきであろう。ただしかし、彼が弁論術の目的を、言論によって説得して「他の人々を支配すること」にありとし（452D）、そしてその「他の人々を支配することができる」というところに、人間の卓越性（徳）を認めていたとするなら（『メノン』73C）、彼の拒否にもかかわらず、実質的には、彼も「徳の教師」であったと言われても仕方なかったであろう。

それはとにかく、彼の弁論は、あたかも魔法や呪文のごとくに、聴衆の心を魅了する力をもっていたと言われているが、しかしそのために彼は、用語の選択や配列、また対句法や頭韻法、脚韻法など、表現の形式に人一倍腐心し、技巧工夫をこらしたのであって、それは「ゴルギアス風の文体」と呼ばれるものを生み出し、同時代の作家たちにも大きな影響を与えたのである（448Cのポロスの答弁、および『饗宴』のなかのアガトンの演説などを参照）。ただしかし、彼を一介の弁論修辞の教師とみなすだけでは、あるいは公正な評価にはならないかもしれない。彼が行なったいくつかの演説の断片が残っているが、その一つでは、彼はギリシア諸国民の間の和平を説いて、一致団結して仇敵ペルシアにあたるべきことを勧めたと言われている。もしそれが事実なら、彼は政論家でもあり、そしてその志は彼の弟子のイソクラテスによって受けつがれたと考えられるだろう。

さて、本篇に登場するゴルギアスは、おそらく七〇代の半ばも過ぎた高齢であり、[1] その道の大家らしい貫禄と品位をそなえた老紳士として描かれている。彼は自分の技術に絶大な自信をもち、世間からも高い尊敬と広い名声を与えられているために、時には尊大になったり、また時には無用な虚栄心を示したりするが、善良で誠実な人柄であることは疑えない。ただ、職業上の成功が彼の目をくもらせて、その技術の本質に対する反省を怠らせているようである。そこで、その点をソクラテスからきびしく追求されて、最後には自分の主張に矛盾があることを認めさせられることになるが、しかしその間も、ソクラテスの質問には終始冷静な態度で受け答えしており、また自分の役割が終った後でも、この対談が最後までつづけられる

ように希望して、ポロスやカリクレスがソクラテスに不平や不満を並べるときには、その者たちをなだめて調停者の役をつとめながら、ソクラテスの批判に耳を傾けるだけの雅量を示している。

(1) ゴルギアスの年代については、古来から二説ある。いま、史料をあげずに、結論だけをいえば、一説では、彼の生涯は前五〇〇／四九七—三九一／三八八年であり、他の説では、前四八四／四八一—三七五／三七二年である。そして、これも証拠を省略していえば、訳者としては後者の説を採用し、ゴルギアスの生年を大体前四八五年頃から四八〇年頃の間におき、ソクラテスとの年齢差を一五歳から一〇歳ぐらいと考えておきたい。ただし、後に述べるように、本篇の対話設定年代も不定なので、このときのゴルギアスの年齢を七〇代の後半とするのは一つの推測にすぎない。

ポロス(Polos)　シシリー島の南岸アクラガスの出身で、早くからゴルギアスの門に学び、後には弁論術の職業教師になった人。彼については、この対話篇以外からはほとんど知られないが、ソクラテスも読んだと言われている弁論術の書物を著わしたこと(462B)、また語彙や文体の上で新機軸を出そうといろいろと腐心していたこと(『パイドロス』267C)などが伝えられている。

本篇では、彼はまだ若い青年——ゴルギアスやソクラテスの息子にあたるほどの年齢の者(461C)——であり、弁論術の熱烈な信奉者として登場している。彼は弁論術の修業はかなり積んでいるけれども、一問一答による議論はまったく苦手と見えて、ソクラテスとの対談では、すぐに演説口調になったり、また性急でそそっかしいところがあるために、しばしば早合点してとんまな答をしたり、あるいは議論に敗れそうになると、世間の通念に訴えたり、子供だましの脅し文句を並べたり、または話の途中で軽蔑の笑い声を立てたりして、知的にも鈍く、品性上もいささか無作法で粗野な人物として描かれている。

カリクレス(Callicles)　この人物は、上述のゴルギアスとポロスが外国からきた弁論術の職業教師であるのとは異なり、アテナイの良家に生まれた富裕な市民で、文学や哲学にもひととおりの素養があり、また弁論術の修業もつんで、最近政界に乗り出したばかりの新進政治家(515A)として描かれている。しかしこの人については、この対話篇以外からはまったく知られないので、多くの学者によって、彼はだれかほかの実在の人物の仮名とみなされたり、あるいは、プラトンが自由に

創作した架空の人物と考えられたりしている。しかし一般的に言って、プラトンの対話篇のなかに純粋に架空の人物が現われたり、あるいは実在の人物が仮名で登場したりする例は、ほかにはほとんど見られないと言ってよいし、それにこのカリクレスの場合には、彼がアテナイ市のアカルナイ区に属する市民であることや(495D)、彼の愛人と言われる(481D)美少年デモスは実在の人物であって、プラトンの身内にあたる者でもあること、また彼の親密な同志とされている三人の人物のうち(487C)、少なくともその二人までは他の資料からその実在性が保証されることなどの点から判断して、彼もやはり実在実名の人物であったと考える方がより自然な解釈であるように思われる。

たしかに、これほどの興味ある人物が他の記録のどこにも現われないのは、不思議といえば不思議だけれども、前五世紀末の戦争と革命の混乱期に、大なり小なり、彼に似たような考えをもった人物が存在していたであろうと想像することは容易だからである。もしかしたら彼は、そのあまりにも大胆率直で、かつ無法で背徳的な思想のゆえに、若くして命をちぢめ、わずかにこのプラトンの作品のなかにだけ記録されることになったのかもしれない。とはいってもしかし、歴史上実在のカリクレスが、この対話篇のなかで述べられている通りの人物であったと考える必要はないのであって、後にも述べるように――それは上述のゴルギアスやポロスの場合も同様であるが――このカリクレスの人間像にも多くの修正が加えられて、それはこの時代の一つの風潮ないしは生き方を具象化した、典型的な「時代の子」にまで仕上げられていると見るべきであろう。

なおさらに、心理的な推測をつけ加えるなら、このカリクレスの人物像を描くプラトンの筆づかいには、『国家』Ⅰに登場するトラシュマコスの場合などとは比較にならぬほどに、生彩さや温かさが見られるし、その上プラトンの一種遺恨めいた気持さえ感じられないでもない。特に、ソクラテスへの忠告の形で語られる彼の雄弁には――それは若きニイチェを感激させたものであり、他方、それに対するソクラテスの冷やかな論理には、ニイチェはひどく反撥したのであるが――プラトン自身の個人的な感情さえ投入されているように思われるから、このカリクレスは、プラトン自身のなかにあった一つの可能性、もしソクラテスが存在しなかったなら、あるいはそうなったかもしれないような一つの可能性、「実現されなかったプラトン」を表現しているのだ、というふうな解釈をする人たちもいるわけである。しかし他方また、このカリクレス像の

なかに「プラトンの抑圧された自我」を見たり、あるいはプラトンは彼に「ひそかな共感」を寄せているなどと考えたりするのは、実は、プラトン自身が晩年に至るまで終生激しく敵対しなければならなかったものは、まさしくこの作品に述べられているようなカリクレス的な人生観であったことを思えば、まことに奇妙な解釈だとも評されるだろう。このカリクレスなる人物は、口先だけは大衆に媚を売っている民主派の政治家だけれども、心底では、いやむしろ公然と、大衆を弱者ときめつけたり、「何の取柄もない種々雑多な連中の掃きだめ」のようなものだと軽蔑しているのであるから、後に『国家』IXのなかで述べられるように、民主主義社会のなかで育ちながら、やがてはそれの恐るべき敵となるところの、プラトンが最も憎悪した「独裁者的人間」であったとも言えるだろう。実際、動物的な快楽を露骨に謳歌したり、反哲学の大演説をぶったり、かと思えば、自分に都合が悪くなると、無定見に主張を変えたり、ふてくされたり、居直ったりするような人物のなかに、プラトン自身の姿を読みとろうとするような解釈は、やはり変だと言わなければならないからである。

しかしそれはとにかく、カリクレスが一種謎の人物であるだけに、いろいろの解釈の余地はある。そしてそのように多くの解釈の余地を与えているということこそ、むしろプラトンの劇作家としてのすぐれた才能を示しているとみることができるだろう。プラトンの対話篇の読者にとって、このカリクレスなる人物が忘れがたい存在であることだけは事実である。

ソクラテス(Socrates)　六〇歳前後の年齢か。(後に述べるように、本篇の対話設定年代は不定なので、彼の年齢を正確に決めることはできないが、461C の彼の発言から、彼は老人であることが知られる。)なお、歴史上のソクラテスについては、ここで述べる必要はないが、本篇に登場するソクラテスには、他の初期対話篇に現われる彼と比べて、かなりの相違があるという点については、後で述べる。

カイレポン(Chairephon)　ソクラテスの熱烈な信奉者で、忠実な従者。彼は何ごとにも熱中する性質の人だったと言われるが、「ソクラテスより賢い人はいるか」という、例のデルポイの神託を伺った人間としてよく知られている(『ソクラテスの弁明』21A)。本篇では、最初にソクラテスの代役の形で少しばかり問答するが、あとは二回(458C, 481B)言葉をはさむだけの役割にとどまる。彼は、プラトンの対話篇では、他に『カルミデス』の初めで同様に小さな役割を演じているだけであるが、アリストパネスを始め当時の喜劇作家たちはしばしば彼に言及して、嘲笑の的にしている。

三　対話設定年代

次に、本篇の対話が行なわれたと想定されている年代（対話設定年代）の問題について一言しておこう。本篇のなかに散在する当時の歴史的事件や人物への言及から、その対話設定年代を推測させる箇所を拾い上げてみると、それには次のようなものがある。（まず推定される対話設定年代をあげ、次にそれを根拠づける箇所を記す。）

(1)　前四二九年以後それに近い年代——503C の「近年亡くなった、あのペリクレス云々」の語句。ペリクレスが死んだのは前四二九年であるから。（ただし、すでに述べたように、ゴルギアスが祖国の外交使節として最初にアテナイへ来たのは前四二七年であるから、対話設定年代もその年以後、それに近い頃とする方が正しいかもしれない。あるいはもっと正確には、ゴルギアスが弁論術の教師として活躍したのは、彼の祖国亡命後であったとすれば、前四二三年以後ということになるだろう。）

(2)　前四二二年頃——481D にカリクレスの愛人の「美しい」デモスのことが語られているが、彼が当時評判の美少年としてアテナイ人の間に人気があったことは、アリストパネスの『蜂』（九八行）にも語られており、そしてその作品の上演年代は前四二二年であるから。

(3)　前四一五年（あるいは少なくとも前四一三年）以前——519A においてソクラテスがアルキビアデスの将来を暗示する警告的な発言をしていること。このソクラテスの警告は、アルキビアデスの政治経歴全体からみて、彼が祖国へ帰ることを許された前四〇七年以後になされたものとみるよりも、彼がシシリー島遠征を主張して、その指揮官として出陣しながら、敵側に走った前四一五年以前になされたものと考える方がより妥当であるから。それに、ソクラテスが彼を自分の愛人であると言うことができた（481D, 482A）のも、おそらくその年代までのことであったと思われるから。

なお、472A でポロス側の証人に立たされているニキアスは、そのとき生存していて、彼の政治生活の絶頂にあったと思われるが、この人物は、前四一五年にシシリー島に遠征し、前四一三年にその地で死んだのであるから、この点も、その対

話設定年代を前四一五年以前、あるいは少なくとも前四一三年以前におくことの一つの根拠となる。
(4) 前四一三年頃——470Dには、アルケラオスがマケドニアの支配者になったことが、「きのう、おとといの出来事」として語られているが、それは前四一三年のことであるから、したがって、この対話設定年代もそれに近い頃ということになる。
(5) 前四〇八年以後——485E～486Cには、エウリピデスの劇『アンティオペ』から数多くの語句が引用されているが、この作品の上演年代は前四〇八年であったろうというのが諸家の大体一致した意見である。
(6) 前四〇五年——473Eの「現に昨年も、ぼくは抽籤で政務審議会の一員に選ばれて云々」というソクラテスの言葉。そこで言われていることを、通説に従って、例のアルギヌゥサイ島沖海戦に関連する裁判において、ソクラテスがとった行動のことを指すものと解釈するなら、それは前四〇六年の出来事であるから、したがって、この対話設定年代はその翌年の前四〇五年ということになる。

以上見られたように、この対話篇のなかで言及されている諸事実から推測される対話設定年代は、前四二九年(正確には四二七年)以後、前四〇五年までの間のいつかということになるけれども、しかし、それらの資料を整合的に解釈して、そこから正確な対話設定年代を引き出すことは困難、いやむしろ不可能であるように見える。多くの学者の意見は、前四二七年頃説を採るものと、前四〇五年説を採るものとに分かれて、それぞれ自説に有利な解釈を試みているが、しかしおそらくプラトンは、意識的にその対話設定年代を「不定」にすることによって、創作上の自由——議論の効果をあげるために種々の事件や人物などを引用する場合、一定の年代に制約されないようにしようとする自由——を確保しているのだと考えるべきではないかと思われる。

四　内容の梗概

さて次に、本篇の内容の概略を述べておこう。本篇は三部から成り、第一部はソクラテスとゴルギアスの対話、

第二部はソクラテスとポロスの対話、第三部はソクラテスとカリクレスの対話である。そしてその前後にプロローグとエピローグがつけ加えられている。

プロローグ(447A~449C)

アテナイを訪問中の高名な弁論家ゴルギアスが或る公共の建物のなかで講義(または講演)をしていると伝え聞いたソクラテスは、カイレポンとともに駆けつけるが、その建物の外か路上でカリクレスに出会い、その講義は今しがた終ったところであることを知らされる。カリクレスは、もしソクラテスが望むなら、自分の家でゴルギアスに弁論の技倆を披露してもらう機会をつくってもよいと申出るが、先ほどのゴルギアスの講義がちょうど聴衆からの質問を求めているところだと知ったソクラテスは、一同とともにその建物のなかに入り、直接にゴルギアスと問答を交すことを望む。——ソクラテスはまず、仲間のカイレポンを代理に立てて、彼にゴルギアスが「何者であるか」を問わせようとする。しかし、それに答える役割の方も、ゴルギアスの弟子のポロスによって引き取られて、ポロスが演説口調で答える。だが、それは答になっていないことをソクラテスは指摘し、ゴルギアス自身に質問に応ずるように頼み、ゴルギアスもそれに同意して、以後ソクラテスとゴルギアスの間で対話は進行することになる。

第一部　ソクラテスとゴルギアスの対話(449C~461B)

ソクラテスはまず、ゴルギアスが弁論家であり、また弁論術の教師でもあることを確認した上で、その弁論術とは何かということを、それは「何に関する」技術なのかという形で質問を始める。この問いに対してゴルギアスは、当時一般に弁論術教科書の表題に用いられていた「言論に関する」技術という答で応ずるが、この規定が広すぎることを注意されると、次には、その「言論に関する」という規定は、その技術の働きが、手仕事などの行為によるのではなくて、「もっぱら言論を通してなされる」という意味であると訂正する。しかしこの規定もまだ広すぎるから、弁論術の対象をもっと限定するように要求されると、今度は、「人間にかかわりのある事柄のなかでも、一番重要で、一番善いもの」を扱うのが弁論術であると答える。だが、「一番善いもの」といっても、人それぞれによって別々のものが考えられているから、その内容をもっと明確にするようにソクラテスが要求すると、ゴルギアスはそれに答えて、「言論によって人びとを説得する能力があるとい

うことだ」とその意味を説明し、そして弁論術とは要するところ、「説得をつくり出すもの」だという定義を採用する。しかしソクラテスとしては、この定義にもまだ満足せず、弁論術のもたらす説得が、「何についての説得」であり、また「どのような性質の説得」であるかをさらに追求すると、これに対してゴルギアスは、それは、「法廷やその他の集会において、正しいことや不正なことについて」なされる説得であると述べ、他方、その説得の性質については、ソクラテスの意見を受け入れて、それは知識をもたらすような説得ではなくて、「ただ信じこむということだけが生ずるような説得」だということに同意する。

かくて、弁論術の定義は一応得られたのであるが、ソクラテスはその定義の意味するところにもとづいて、箇々の問題にはそれぞれ専門的な知識が必要であるという理由から、弁論家の活動領域を制限しようとするが、ゴルギアスはそのような制限に反対し、弁論家のもつ説得力は公私あらゆる分野において発揮されること、なかんずく、国政の大事はすべて弁論家の説得力によって決定されてきたことを実例をあげて示す。ただし、それだけにまた、その術の使用には慎重であるべきことを注意し、かりにもし誰かが弁論術を不正に使用することがあるとしても、それは弁論術そのものが悪いのでもなければ、またそれを教えた教師の責任でもないとして、自己の立場を用心深く守ろうとする。ところで、このようなゴルギアスの主張には首尾一貫しない点があることにソクラテスは気づくが、そのことを指摘する前に、対話者の心構えについて一言し、そこで一時、両者の対話は中断する。そして対話が再開されたあと、ソクラテスは、弁論家の説得力が効果をあげるのは、「大衆の前において」であるという限定をとりあげ、そしてこの「大衆の前で」ということは、「ものごとを知らない人たちの前で」ということであるから、弁論家の方が他の専門家よりも説得力があるというゴルギアスの主張は、「知識のない者の方が知識のある者よりも、ものごとを知らない人たちの前でなら、もっと説得力がある」という意味になるだろうと論ずる。だから結局、弁論術なるものは、「事柄そのものが実際にどうであるかを、少しも知る必要はないのであって、ただ、何らかの説得の工夫を見つけ出して、ものごとを知らない人たちには、知っている者よりも、もっと知っているのだと見えるようにするだけのものなのだ」ときめつける。ゴルギアスはこれに対して、「それなら、弁論術というものは大へん重宝なものではないか」と応酬するけれども、ソクラテスはその点は保留して、さらに議論を進め、弁論家が取り扱う対象につい

ての知識を必要としないという原則は、はたして正や不正などの対象についてもあてはまるかどうかを訊ねる。これに対してゴルギアスは、もし入門者のなかにそれらのことについての知識を前もって持っていない者があるなら、自分のところからそのことも学ぶことになるだろうと言明する。しかしこの言明は、ゴルギアスの主張を自己矛盾におとし入れることになる。というのは、ソクラテスによれば、正しいことを学んだ者は正しい人になるし、そして正しい人は決して不正を行なおうとはしないはずであるのに、先ほどのゴルギアスの話では、正しいことについて学び、それゆえに、正しい人になっているはずの弁論家が、弁論術を不正に使用する場合もあると言われていたからである。かくして、「弁論術とは何か」をめぐっての第一部のソクラテスとゴルギアスの問答は、初期対話篇の多くに見られるように、アポリアーで終っている。

第二部　ソクラテスとポロスの対話（461B～481B）

さて、ゴルギアスのこの窮状を見かねた弟子のポロスが、勢いこんで話の中に割りこみ、ソクラテスに問答を挑むところから、第二部は始まる。ポロスは問い手の役を選び、ソクラテスに、それでは、あなた自身は弁論術を何であると主張するのか、言ってくれと迫る。これに対してソクラテスは、弁論術が「技術」であることをあっさり否定し、それは「一種の経験――ある種の喜びや快楽をつくり出す経験」にすぎないと答える。ただし、この定義は料理法にも同じようにあてはまり、弁論術も料理法も「迎合」(経験)の一種であること、したがって、弁論術をより正確に定義すれば、それは迎合のなかで、「政治術の一部門の映像」にあたるものだと説明する。性急なポロスは、これで定義は終ったものとみて、弁論術は価値あるものか、どうかという次の問題に移るが、ゴルギアスが口をはさんで、ソクラテスにもっと詳しい説明を求める。そこでソクラテスは、精神と身体の二つの対象のために、それらの最善をはかっている四つの技術と、他方、この四つの技術のそれぞれに対応しながら、もっぱら快楽を提供することを仕事にしている四つの迎合(経験)とを分類し、そしてそれらの相互関係を述べた上で、弁論術とは要するに、身体の領域において料理法がなすのと同じことを、精神の領域においてなすものだと結論する。

しかし、このような説明において、弁論家が迎合家並みに扱われているのに憤激したポロスは、弁論家こそ事実、国家における一番の実力者ではないかと切り返す。弁論家は、独裁者同様に、死刑、財産没収、追放、何でも自分の思いどおりに

することのできる人間なのだからと。ソクラテスはしかし、人は「自分の思いどおりのこと(自分に一番よいと思われること)」をしても、必ずしも「自分の望んでいること」をすることにはならないと指摘して、そのように何でも自分の思いどおりにする弁論家は、一番の実力者であるどころか、逆に、一番微力な者でさえあると言う。この一見奇妙な説にポロスは当惑するが、ソクラテスは問い手の役に廻って、その意味を説明してやる。——人はつねに善(益)を望んで行為しているのだが、自分に一番よいと思われることが、事実善であるとはかぎらず、悪(害)になることもあるから、したがって、人は自分の思いどおりのことをしていても、必ずしも望んでいることをしていることにはならないのである。だから、よし弁論家が死刑、追放、財産没収など何でも自分の思いどおりにすることのできる人だとしても、もしそうすることが本当は害になるのだとしたら、弁論家は決して大きな実力者だとは言えないわけである。実力があるということは、むろん、その当人にとってはためになる善いことでなければならぬから。

ポロスは問答に敗れて、「人に訴える議論」に切りかえる。とにかく、何でも思いのままにすることのできる弁論家を、「あなたは羨ましいとは思わないのか」と。彼は、そのやり方の正、不正を問おうとはしない。しかしソクラテスは、そのやり方が正義にかなっている場合でも、羨ましくはないが、もし不正な仕方で行なうのなら、哀れで惨めな者だと答える。なぜなら、人に不正を行なうことは害悪のなかでも最大の害悪であり、それに比べれば、自分が不正を受ける方がまだしもましだからと。このソクラテスの主張——行為はそれが正しいときには有益であり、不正になされるならば害になるという主張、言いかえれば、立派な善き人が幸福であり、不正で邪悪な者は不幸であるという主張に、ポロスは苛立って、マケドニアの王アルケラオスの例を持ち出しながら、不正な人こそむしろ幸福ではないかと反駁する。

さて、「誰が幸福であり、誰が幸福でないか」というこの重要な問題を討議するにあたって、ソクラテスはまず、ポロスの用いている法廷弁論のやり方と、自分の問答法のやり方とを対比した上で、自分たちの主張の相違を次の二点にしぼる。すなわち、その一つは、人は不正を行ない、不正な人間であっても、幸福でありうるとポロスは主張しているのに対して、それは不可能であるというのが自分の主張であること。次に、不正を行なっている者が、裁きを受けて処罰されるということがなければ、幸福であるというのがポロスの主張であるのに対して、その者が裁きも受けず、罰にも処せられないなら、も

っと不幸であるというのが自分の主張であること、という二点である。ポロスは、世の現実にも人びとの通念にも反したソクラテスの主張を、手をかえ品をかえて反駁しようとするが、結局は、ソクラテスの問答法による議論に屈して、ソクラテスの説の真実性を承認させられてしまうのである。そして最後にソクラテスは、いままでの議論の結論を、弁論術の効用という初めの問題に適用しながら、弁論術というものは、自分でも自分の仲間でも、不正を行なった場合には、罰を免れようとするためにではなく、むしろ、罰を受けるようにするためにこそ役立つものであること、逆にまた、自分の敵に対しては、もし害を加えようと望むのであれば、彼らが罰を受けるようにするためではなく、罰を免れるようにするためにこそ役立つものであること、という皮肉な結論でもって、この第二部の対話を終えるのである。

第三部　ソクラテスとカリクレスの対話（481 B ～ 522 E）

ソクラテスの主張があまりにも非現実的であるのにあきれて、カリクレスは沈黙を守りきれずに発言する。もしソクラテスが本気であって、彼の言うことが真実だとするなら、われわれ人間の生活はまったくあべこべになっているだろうと。ソクラテスは、恋人の心理に仮託して、先ほどの話は自分の愛人である哲学が話してくれたことであり、愛人の意向や言葉には逆らえないから、反駁するなら、哲学を反駁してくれと答える。この言葉に刺戟されて、カリクレスは大演説をぶつ。――ポロスが議論に敗れたのは、先のゴルギアスの場合と同様、無用な羞恥心の虜になって、不正を行なうことの方が、不正を受けることよりも醜いということに彼が同意したからである。しかし、「自然本来において」醜いことと、「法律習慣の上での」醜いこととは、はっきり区別しなければならぬ。自然の本来においては、より醜くてより害になるのは、不正を受けることの方であるが、世の大多数を占める弱者は、自分たちの利益を強者から守るために、法律や習慣を定めて、不正を行なう方がより醜くてより悪いことだとしているのだ。カリクレスはこのように論じ、弱肉強食、優勝劣敗の法則が、動物界のみならず、人間社会全体にも通用していることを明らかにした上で、その法則を「自然の正義」の名のもとに公然と主張する。そして、ソクラテスがこの事実に疎いのは、哲学に打ちこみすぎて、実生活の経験が不足しているからだとし、哲学はなるほど青年期の教養としては大切だけれども、一人前の大人になってもまだ哲学をつづけていたのでは、人生を台無しにすると説いて、哲学から足を洗うように勧める。そして、もしソクラテスがこのままの生活をつづけるようなら、いつ

か無実の罪に問われて裁かれるようなときがきても、自分自身を助けることができないだろうと警告する。ソクラテスは、カリクレスのこの率直な発言のなかに自分の考えの真実性をためすべき試金石を見出すことができたと喜び、以下、カリクレスを相手に、「人生いかに生きるべきか」という問題について論ずることになる。

ソクラテスはまず、「自然の正義」説の真意を把えるべく、カリクレスのいう「強者」や「優者」の意味を問う。カリクレスは最初、その意味を肉体的に「より力がある者」のことだとするが、これは直ちに反駁されてしまう。そこで次に、「より思慮のある者」のことだと言い直すが、すると、それは「何に関して」より思慮のある者のことかとソクラテスから問い返される。そして両者の間にしばらく皮肉な問答の応酬があった後に、カリクレスは、それは「国家公共の事柄に関して」より思慮のある者のことだと答え、しかも、たんに思慮があるだけではなく、「勇気もある人」のことだとつけ加える。カリクレスの概念規定は曖昧であるが、この点は、それでともかく片がつく。

ところで、カリクレスの主張の要点は、そのような人こそ国家を支配するのがふさわしく、また支配する人は支配される人たちよりも多く持つということにあったから、ソクラテスは論点を移して、次に、その支配者となるべき人は、他の人を支配するだけではなく、自分自身をも支配するのか、つまり節度節制のある人なのかと問う。この問いが誘い水になって、カリクレスはまたも一つの演説をぶつ。——彼によれば、正義や節制などの世の道徳なるものは、欲望を充分に満足させることのできない人たちが、その無能を恥じて、これを蔽い隠すために言い出した、体裁のよい美名にすぎないのである。しかし、自然本来における正しいこと、美しいことというのは、どんな欲望であろうと、これを抑制することなく、欲望はできるだけ大きくなるがままに放置しておいて、いつでも、また何をもってでも、勇気と思慮とを用いて、これの充足をはかることにあるのであり、そしてそれのできるというところに、真の意味での人間の卓越性(徳)はあるのだとする。

このカリクレスの率直な発言に、ソクラテスはもう一度お世辞を述べた後で、ある賢者から聞いた話を紹介したり、たとえ話を使ったりして、カリクレスの言う「放埒な生活」よりも、「節度のある生活」の方が幸福であることを説得しようとするが、カリクレスはその説得には応じようとしない。そこでソクラテスはさらに、疥癬にかかっている人や放蕩者の例をあげて、快適な生活がそのまま幸福な生活ではありえないことを指摘してみるが、カリクレスは、心には動揺を感じながら

も、自説の首尾一貫性を守るために、なお頑として快と善の同一性を主張しつづける。そこで最後に、ソクラテスはカリクレスを問答法の議論に引きこみ、快と善とが同じものではないことを論証することになる。

論理の必然性に抗しきれなくなったカリクレスは、一転して、快楽には善いものもあれば悪いものもあるのは自明のことだと言い出す。ソクラテスはその豹変ぶりに驚くが、快と善とは別のものだという同意を取りつけたのち、前に述べた技術と経験(迎合)の区別を再確認しながら、詩、音楽、劇などの術が快楽の提供を目ざす迎合の仕事にぞくすることを明らかにした上で、弁論術もまたそのような迎合の一種ではないかと訊ねる。カリクレスはこれに異議を唱え、弁論家のなかには、市民大衆に迎合するのではなく、市民たちのためを思って話をする人もあると言う。そしてそのような弁論家の例として、前五世紀の偉大な政治家たち、テミストクレス、キモン、ミルティアデス、ペリクレスの名前をあげる。ソクラテスはこれを認めないが、その前にまず、真の弁論家(政治家)ならば、およそ何をなすべきかを明らかにする。すなわちそれは、同胞の市民たちの心のなかに規律と秩序をもたらして、正義や節制の徳をそなえさせるという仕事であること、そしてこれらの徳こそが幸福な(よき)生の基礎であることを証明する。かくして、カリクレスの賛美していた放埒な生活は再び否定されることになったから、カリクレスはすねて対話をつづけることを拒み、しばらくの間、ソクラテスは一人で自問自答の形で、これまでの自分の主張を要約することになる。そしてその後で、カリクレスから警告されていた点、つまり、そのような生き方をしていたのでは、他からの不当な仕打ちに対して自分の身を守ることができないのではないか、という点に議論を移す。

この点についてのソクラテスの最終的な答は、自分を守るための最上の助けは、他人から不正を受けないようにすることではなくて、自分自身が不正を行なわないようにすることだということにあるが、その前に、不正を受けないための方策と、不正を行なわないための方策とが論じられる。そして、不正を受けないための方策として語られることは、カリクレスを喜ばせるけれども、しかしそれはまた不正を行なうための方策にもなることが指摘されると、カリクレスはまたもや不機嫌になり、ソクラテスに身の安全に注意するようにと警告する。ソクラテスはこれに対して、たんに自己と自己の持物とを安全に保つことが大切なのではなくて、残された人生を「どのようにしたら最もよく生きることができるか」ということの方を

考えてみるべきだと答える。そして、政治家としての道を歩もうとしているカリクレスの生き方に議論を移して、彼がはたして真の政治家のなすべき仕事、市民をできるだけすぐれた者にするという仕事について、ほんとうに自覚しているかどうか、またそれだけの資格のある者なのかどうかを調べる。そしてそのことに関連して、カリクレスが先ほどすぐれた政治家の実例としてあげていたペリクレスたちは、実は、政治家としては無能であり落第であったときびしく批判する。他方、これに対して、ソクラテスは、自分こそ「現代の人たちのなかではただ一人、ほんとうの政治の仕事を行なっているのだと思っている」と述べる。ただしかし、自分のする話は、人びとの気に入ることや快いことではなく、最善を目標にしているものであるから、それにまた、カリクレスが勧めるような法廷技術にも関心がないから、無実の罪で法廷に引っぱり出されて危険な目にあうとしても、その点は成り行き次第にまかせるよりほかはないだろうとする。しかし、神々に対しても人びとに対しても、不正なことは何一つ言わなかったし、また行ないもしなかったということで、自分自身を助けてきたのだから、心安んじてあの世への旅立ちを待つことができると語って、第三部の対話を終えるのである。

エピローグ(523 A ~ 527 E)

ソクラテスは最後に、正しい人は死後「幸福者の島」に移り住んで浄福の生を送るが、不正な人は「タルタロス(奈落)」に送られて責苦を受けるという、あの世での神の裁きについてのミュートス(物語)をつけ加える。そしてその物語の意味するところを補足説明した上で、自分の勧める生き方のほうが、この世においてばかりか、あの世においても有利であることを明らかにし、カリクレスにもその生き方に従うように勧告して、言葉を結ぶ。

五　主題と構成、登場人物の扱い方

さて、以上の梗概から知られるように、本篇の第一部では、弁論術とは何かが対話の主題であるが、第二部に入ると、弁論術の効用や価値の問題に移り、次いで道徳や幸福の問題へと話題は拡がっている。そして第三部ではさらに、人生の生き方や政治のあり方全般にまで議論は展開し、弁論術のことは時折言及されているにすぎない。そ

うすると、この対話篇には古くから「弁論術について」という副題がつけられているけれども、はたして弁論術を本篇のテーマと考えてよいのかどうか、それよりはむしろ、道徳や政治、あるいは幸福や人生の生き方こそ真のテーマとみなすべきではないか、という疑問が当然生じてくるし、そして事実その点は、古代末期の新プラトン学派以来、現在にいたるまで学者の間で種々と論議されていることなのである。

しかし実は、弁論術の本性について論ずることと、政治や道徳、あるいは人生の生き方や幸福について論ずることとは、一見そう見えるほどに、決して無縁のことではなかったのである。なるほど、弁論術というものを、いわゆるレトリック（雄弁や修辞）の術の意味に解して、そしてちょうど『パイドロス』の第二部で取り扱われているように、「どのようにすれば上手に話をしたり、また上手に文章を作ったりすることができるか」（259E）というような問題が、この対話篇でも論じられているのだとすれば、そのことと、政治や道徳などについて論ずることとは、直接には関係がないと言われるかもしれない。しかしながら、本篇で問題にされている弁論術は、そのような単なる言論文章の技術としての、弁論術それ自体ではなくて、むしろ、広く法廷や議会の場に応用されて、実は一種の政治の術として受けとられていた弁論術なのである。そのことは、第一部のソクラテスとゴルギアスの問答において、すでに明らかにされていることである。というのは、弁論術とは何かと問われたゴルギアスは、幾度かその答を修正したのちに、結局、それは法廷や議会などで人びとを説得する技術であること（452E）、したがって、それが取り扱う言論の対象は、何よりも特に法廷で論議される正しいことや不正なことであるが（454E）、また国家の政策全般でもあること（455Bsqq.）を明らかにしているからである。そしてさらに第二部に入って、ポロスが問答相手として登場すると、ソクラテスは弁論術についての自分の考えを率直に述べて、これをはっきりと「政治術の一部門の映像」（463D）、つまり、にせの政治術の一つであるときめつけているからである。弁論術が政治術のにせものとされた理由については今はおくとしても、とにかく、以上見られたところからも、本篇で取り扱われている弁

論術が、いわゆるレトリックとしての弁論術そのものではなくて、政治の術として応用され利用されていた弁論術であることは明らかであろう。

ところで、本来は「言論の技術」にすぎない弁論術が、広く政治の術として利用されるにいたったのには、その背景に、古代ギリシアに独得の民主主義の政治体制があったからであり、したがって、弁論術のもつ意味を充分に理解するためには、当時の民主政治の実態についての歴史的知識を欠くことができないのであるが、ここではそれに触れる余裕はないので、結論だけを簡単に述べておこう。すなわち、家柄や財産が何らの政治的な特権をも保証するものではなくなって、すべての人間が市民であるという資格だけで平等な政治権利をもつことになった民主主義社会においては、人が頭角を現わし立身栄達するためには、新しい資格、つまり弁論に秀でるということが不可欠の条件となっていたのである。実際、ゴルギアスが言っているように、民会やその他の政治的集会において、数百数千の市民大衆を前にしながら、国家の諸政策について「提案し、そして自分の意見を通すのは、弁論の心得ある者」でなければできないことであったし(456A)、他方また、一種の民衆裁判ともいうべき当時の司法制度においては、カリクレスも注意しているとおり、弁論の能力だけが、自分の生命や財産を守ることのできる唯一の手段だったのである(511C)。

だからまた、かのソフィスト(徳の教師)と呼ばれた人たちも、徳を教えるための具体的な手段としては、「ひとを弁論に秀でた者にする」ことより他はなかったのであり(『プロタゴラス』312D)、そしてその限りにおいては、ソフィストというのも、その正体は弁論家であったにすぎず、事実また、両者はしばしば混同されていたのである(465C)。だとすれば、ソフィストの術が政治の術であると言われていた(『プロタゴラス』319A)のと同じような意味で、弁論術もまた政治の術であったわけである。

したがって、本篇で扱われている弁論術とは、まさに以上言われたような性格のものであるかぎり、本篇の副題

に「弁論術について」という言葉が選ばれたのは適切であり、そしてそのテーマは本篇全体を通じて首尾一貫しているとみることができるだろう。というのは、第二部以下における権力に関する議論も、また、それに関連しての正、不正と幸福の関係についての討議も、さらには、政治のあり方や人生の生き方全般についての考察も、これらはすべて、いま言われたような意味での弁論術をテーマにしながら、それのヴァリエーションであるとみなすことができるからである。そしてそれゆえにまた、この対話篇の題名は、「カリクレス」ではなくて、「ゴルギアス」になっているのだとも考えられるのである。

ところで、この対話篇全体の構成は、いま言われたような意味での弁論術をテーマにしながら、これを擁護する側の人物として、弁論術の大家ゴルギアス、その若い弟子ポロス、そして現実政治家カリクレスの三人が次々に登場して、順番にソクラテスと対話を交すことにより、これら三つの対話がいわば三幕の劇をなすようになっているのであるが、幕が変るにつれて、話題はいよいよ核心に迫るとともに、議論もますます白熱化している。この点を、プラトンは全篇の構想をどのように立てたか、また、そのために登場人物をどのように扱っているかという観点から、少しばかり説明しておこう。

プラトンは、弁論術を批判的にとり上げるにあたって、まず第一幕において、当時の最も高名な弁論家ゴルギアスを舞台に登場させ、彼の口から直接に弁論術のもつ一般的な性格、特に先ほど指摘されたようなそれの政治的な性格を明らかにすることから始めている。(これは、徳を主題とする『プロタゴラス』において、「徳の教師」の第一人者プロタゴラスを登場させて、彼が「何者であるか」を問うところから議論を始めているのと、似たやり方である。) 次いで第二幕では、そのような弁論術が当時の社会において、特に若い世代の間で、どんなに熱烈に歓迎されていたか、しかしそれを歓迎する若者たちの道徳意識はどのようなものであったかを、ゴルギアスの若い弟子ポロスを使って代弁させる。かくしてプラトンは、弁論術が現実には政治の術として受けとられていたこと、そして

そのようなものとしての弁論術が、当時の青年たちに立身栄達や処世の手段として、何らの道徳的反省もなしに無条件で賛美され、歓迎されていた実態を明らかにした上で、いよいよ最後の第三幕において、その弁論術を身につけ、しかも実際の政治活動に乗り出している人物カリクレスを登場させて、彼をソクラテスと嚙み合わせることにより、本篇のクライマクスである現実政治と哲学の対決、あるいは、弁論家ないしはソフィストの生活理念とソクラテスの生活理念の対決へと、劇の筋を運んで行くわけである。(このような三部構成は『国家』Ⅰにもみられる。そして両者における第三の登場人物、カリクレスとトラシュマコスの人間像や見解の類似点と相違点を明らかにすることは、一つの興味ある仕事となるだろう。)

ところで、このような全篇の構想のもとに、プラトンはおそらく、登場人物の人間像や考え方を、歴史上実際のものよりも、この対話篇におけるそれぞれの役割にふさわしいように、かなり修正したのではなかろうかと想像されるのである。というのは、まず、ゴルギアスについていえば、すでに述べたとおり、彼の著作の現存断片や後代の人の証言によってみる限りでは、彼は「ゴルギアス風の文体」で知られるような文章家、修辞家として名の通った人であって、当時の弁論の種類別でいえば、いわゆる「演技用弁論」を得意としていて、「法廷弁論」や「議会弁論」の方はむしろ軽蔑していたと言われているのに、この対話篇では逆に、法廷弁論や議会弁論を格別に重視する人として描かれているからである。しかしこれは、プラトンの意向が、ゴルギアスを歴史上ありのままの人物として描くことよりも、むしろ、その時代の弁論家たちの代表的存在として、彼らの見解を代弁させることにあったからだと思われるのである。

次に、ゴルギアスの弟子ポロスは、性急で早呑込みするところがあるだけでなく、知的にも鈍くて品性も粗野な人物として描かれているが、これには多分にプラトンの意地の悪い戯画化の作用が働いているように見えるし、それに、彼が弁論術のもたらす権力を無条件に賛美したり、また不義不正にして富み栄えている者を幸福な人として

単純に羨望したりしている点などは、弁論術の教師であり、またはあろうとして、師ゴルギアスの文体を模倣し、語句の配列や選択に人一倍腐心していたはずの、歴史上のポロス個人の考え方というよりも、もっと一般的に、前五世紀末の戦争と革命の時代に生まれて、法律はたびたび改廃され、道義もすたれた世相の中で生長したところの、若い世代全般に共通する考え方であって、ポロスはただ、このような時代の風潮を無批判、無反省に受け入れている若者たちの代弁者の役割で、ここに登場させられているにすぎないように見えるのである。

さらに、カリクレスについては、前にも言われたとおり、歴史的な事実は不明であるけれども、先のゴルギアスやポロスの場合と同様に、プラトンはこの人物にも多くの潤色を加えて、これを当時の現実政治家の一つの極端なタイプにまで仕上げているのではないかと推測されるのである。プラトンはおそらく、当時の社会のなかに、道徳的羞恥心をすっかり捨て去って、「権力への意志」をむき出しに表明している政治家たち、そして「ピュシス」(自然)と「ノモス」(法律習慣)を対立させる当時流行のソフィストの理論を借りながら、「力は正義」という強者の倫理を臆面もなく主張している政治家たち、また、「他人を支配するだけで充分で、自分自身を支配する必要は少しもない」と考え、放埓無抑制の生活を送り、快楽を生活の最高原理としているような政治家たち、さらには、権力の獲得と維持のために、そのときどきにおいて国民大衆の気に入ることを話したり行なったりして、これに迎合し、何が本当に国家国民のためになるかを考えてみようともしなければ、考える能力もないような政治家たち——そういった政治家たちを数多く見出したであろう。そしてそのような当時の政治家たちの姿を、プラトンはこのカリクレスという人物のなかに、一つに重ね合わせたのだ、と言ってよいのではないかと考えられるのである。

他方また、これら三人の人物を相手にするソクラテスについても、その人物像は、歴史上のソクラテス、あるいは少なくとも、初期のいわゆる「ソクラテス的対話篇」のなかに現われるソクラテスとは、かなりの相違があることが知られるだろう。周知のように、われわれが初期対話篇でなじみになっているソクラテスは、問答においては

つねに問い手の立場に立ち、話題になっている事柄の正確な定義を要求して、しつこく訊ねながら、答え手をアポリアー(行き詰り)に追い込むだけで終るのが、いつもの彼のやり方であり、そしてこの対話篇でも、最初のゴルギアスを相手とする問答においては、まさにその通りのやり方をしているのであるが、しかしその後、ポロスやカリクレスを相手にして語る段になると、彼はもはや単なる問い手の立場にとどまることなく、自分からすすんで答え手の役割を引き受けて、確信に充ちた断乎たる口調で、自分の考えを積極的に述べている。しかも、そのような場合のソクラテスは、彼がこの対話を始めるにあたって、相手方の得意とする長広舌を封じるために、一問一答による短い話し方を提案していたことを忘れたかのように、自分の方から再三にわたって長談義に耽り、そのために彼は大道演説家であるとさえ皮肉られているほどである。しかしこのようなことは、初期のいわゆる「ソクラテス的対話篇」においては見られなかったことなのである。

なお、話の仕方においてだけではなく、話の内容にも、歴史上のソクラテスの考えというよりは、むしろプラトン自身の思想の発展を示すと思われるものがいろいろと含まれていて、その点でも、ソクラテス像の変化が注目されるだろう。たとえば、技術と経験の区別や分類(464B〜465C, 501A〜B)とか、美醜と正邪と善悪の概念の相互関係の分析(475C〜479E)とか、善と快とが同じものでないことの論証(495C〜499B)とか、徳を魂のなかの規律や秩序として把える考え方(503E〜504D, 506D〜507C)とか、あるいは、いわゆる「哲人王」の思想に近い考え方(521D)などがそれである。そのほかにも、中期作品のなかで重要な役割を果すことになる、オルペウス教・ピュタゴラス主義の教義がこの作品で初めて紹介されているし、本篇の結びとなっている、あの世の裁判と賞罰の物語(ミュートス)は、『パイドン』や『国家』の巻末に語られている同種の物語の先駆けとなるものである。ただしかし、純粋に形而上学的な理論はまだ何一つ語られておらず、議論の内容はもっぱら広い意味での「エティカ」(倫理道徳)の問題に限られているから、その点では、歴史上のソクラテスに忠実であろうとしているわけである。けれ

ども、全体としてみるなら、この対話篇におけるソクラテスは、歴史上のソクラテスを越えて、「プラトンのソクラテス」になりつつある、あるいは、一部はすでになっている、と言って過言ではないだろうと思われる。

六　執筆の意図と年代

さて、本篇全体の構成と登場人物の扱い方についての以上の解釈が、もし認められるとすれば、それにもとづいてわれわれは、プラトンがこの作品を書くにいたった動機や意図についても、ある程度の推測をすることができるのではないかと思われる。すなわち、プラトンの意図は、直接的には、あるいは第一義的には、先に見たようなポロスやカリクレスによって代弁されているその時代一般の思潮を、ソクラテスの哲学と対決させることによって、これを批判吟味し、ソクラテスの説の正しさを確認することにあったであろう。ただしかし、そのような時代思潮との対決は、プラトンがこれを自己自身の課題として、行なわなければならぬと考えたものでもあったであろう。というのは、民主主義の名のもとに、各人の意見がすべて平等に扱われ、その真偽や優劣を測るべき客観的な尺度が否定されている世のなかで、弁論家たちは、真実よりも真実らしく見えることや人びとの気に入ることを語って、強力な説得力によって大衆の意見を支配し、時には国政を左右しているのだが、この現状を黙認してよいものだろうか。また、不正な人こそ幸福であるように見えるのが世の現実の姿であるが、いったい、正義と幸福との関係はどう考えたらよいのか。さらに、敗戦や革命などの影響で、法律や道徳の権威は墜ち、それらは仮りの約束事や上べを飾るだけの綺麗事にすぎないとされて、人びとはただ肉体的な欲望の満足に耽り、そしてその能力のあることこそが人間の卓越性だとみなされているような風潮があるが、これにはどう対処したらよいだろうか。——本篇の対話内容から推測されるような、たとえば、そういった問題を、プラトンは自分自身のためにも何らかの形で解決しなければならなかっただろうからである。したがって、そのような問題に対するソクラテスの説の正しさを確認

したということは、とりもなおさず、プラトン自身が、そのソクラテスの説を「人生のいわば道案内人」(527E)としながら、それに従って生きることを選んだということをも意味しているだろう。

ところで、そういった問題のなかでも特に、本篇の第三部において、カリクレスとソクラテスとの間で争われている現実政治と哲学の対決は、ある意味では、その当時のプラトン自身の心のなかで争われた対決でもあったと想像されるのである。というのは、第三部の初めにおいて、ソクラテスがカリクレスに問いかけて、

「それこそ立派な大の男のすることだという、弁論術を修めて民衆の前で話をするとか、また、君たちが現在やっているような仕方で政治活動をするとかして、そういうふうにして生きるべきか、それとも、このぼくが行なっているような、知恵を愛し求める哲学の中での生活を送るべきか、そのどちらにすべきであるか」(500C)と訊ねている、その「人生いかに生きるべきか」という問題は、つまり、現実政治の道か、それとも哲学の道かという選択は、歴史上のソクラテスにはかかわりのないことであったとすれば、まさにその当時のプラトン自身の問題だったからである。そして、第三部の終り近くで、プラトンは対話人物のソクラテスに、前五世紀のアテナイの偉大な政治家たちのほとんどすべてを、国家の給仕人としては有能だったかも知れないけれども、政治家としては無能であり、失格であったと痛罵させながら、他方これに対して、ソクラテスその人には、「現代の人たちの中では、ぼくだけが一人、ほんとうの政治の仕事を行なっているのだと思っている」(521D)と言わせているのである。しかし、ダイモーンの禁止に従って、一生涯私人として行動し、市民の義務として止むをえない場合以外は、できるだけ公生活に入ることを拒否していたはずの歴史上のソクラテスを、当時の人のなかではただ一人、真の政治家だと称揚しているこの逆説は、おそらく、プラトン自身が現実政治の体験と観察を通して、ソクラテスの言行をふり返ってみたときに、『ソクラテスの弁明』(30A〜B)に語られているようなソクラテスの生き方こそが、つまり、市民一人ひとりの精神ができるだけすぐれたものとなるようにと勧告して廻ったという、あのソクラテスの哲学的行動

こそが、真に国家公共のために働く人の姿であることを、プラトンは確信するにいたったということを意味しているのであろう。事実、この『ゴルギアス』のなかでも、「政治にたずさわる人間のなすべき唯一の仕事は、市民の一人ひとりができるだけすぐれた者となるようにすることだ」(515C)という意味のことが再三語られているのであり、そしてその点では、この『ゴルギアス』のなかの政治論も、『ソクラテスの弁明』のなかで述べられていること以上に出るものではないのであるが、ただ、『ゴルギアス』においては、そのソクラテスの言行の正しさが、プラトンの体験と反省を通して、より広い視野から、またより深い根拠に立って証明され、確認されているわけである。そしてまた、ソクラテスこそ真の政治家であるというこのプラトンの確信が、後に『国家』(V. 473D)や『第七書簡』(326A～B)のなかで述べられることになる、あの有名な「哲人政治」の考え方へと発展して行ったであろうことは、容易に推測されることである。したがってまた、そのような観点から見るときには、この作品は、よく言われているように、「アテナイの現実政治に対するプラトンの訣別の辞」であるとか、「現実政治への参加を勧めた友人や知人たちへのプラトンの最終的な回答」であるとかいうことにもなるわけである。

ところで、現実政治への断念は、しばしばその反面に、現実政治に対する激しい非難と攻撃を伴うものである。プラトンが祖国アテナイの政治のあり方に直接言及して、これに鋭い批判を加えているのは、数多くの対話篇のなかでも、この『ゴルギアス』以外にはほとんど見られないことであるが、ことにこの作品では、先ほども触れたように、前五世紀の偉大な政治指導者たち――アテナイの自由と独立を守るために戦ったミルティアデスやテミストクレス、またアテナイをギリシア世界のいわゆる「帝国」にまで仕上げたキモンやペリクレス――に対して、彼らはすべて政治家としては落第であったというきびしい批判が下されている。このような批判は、他の対話篇では彼らがすぐれた政治家であったことは一応認められているだけに、それだけ一層注目すべきものであるが、しかしこれは、たんに一つの哲学的な原理原則に立って、過去の政治家たちが断罪されているということだけを意味するも

のではないだろう。プラトンはむしろ、彼が目の前に見ていた祖国の現状を憂慮しながら、時の政治指導者たちに対する警告として、あのようなきびしい批判を下したのではないかと推測されるのである。というのは、当時のアテナイは、敗戦後十数年を経て、経済は復興し、城壁は再建され、港の要塞化もなり、軍艦も建造されて、人びとは再び過去の栄光を夢みながら、軍備の拡張に狂奔していたのであるが、しかしこのような戦後の祖国の歩みは、ちょうど「あの昔の政治家たちが、節制や正義の徳を無視して、港湾だとか船渠だとか、城壁だとか貢租だとか、そういった愚にもつかぬもので国家を腹いっぱいにしてしまった」ために、「国家はむくんで腫れ上り、内部は膿み腐っている」ようにしたのと(519A)、同じような過ちをくり返させることになりはしないかと、プラトンは憂慮したように思えるからである。そしてこのような祖国の現状に対するプラトンの危惧と不安の念が、彼にアテナイの黄金時代と呼ばれた前五世紀の政治のあり方を回顧させ、過去の失敗を歴史の教訓とするために、その指導者たちに対するあの痛烈な批判となったのではなかろうかと推測されるわけである。

かくて要するに、プラトンはこの作品のなかで、ソクラテスの生き方や考え方を、その時代一般の思潮、特に現実政治家のそれとするどく対決させながら、これをもう一度再検討して、その正しさを確認し、その真実性を証明することによって、あらためてソクラテスのために弁明を行なっているのであるが、それは同時にまた、現実政治の道を捨てて、ソクラテスの教える哲学の道を選んだ、プラトン自身のための弁明でもあったと考えられるのである。しかしまた、これはたんにプラトン個人の生き方についての弁明の書であったにとどまらず、前四世紀初頭の祖国の政治の動向に対する警告の書でもあったと見るべきであろう。

さて、本篇の執筆意図についての以上の推測に、もし大きな誤りがないとすれば、われわれはこれにもとづいて、この作品が書かれたおよその時期を推定することができるだろう。しかしこの点については幸いにして、文体統計学による研究成果など、他のいろいろな観点からも検討された結果、大方の学者の意見はほぼ一致しているよう

に見えるので、ここでは簡単にその結論だけを述べるにとどめておこう。すなわち、プラトンの全作品を彼の生涯の主要な区分(遍歴時代、アカデメイア時代、晩年)に応じて、大まかに初期と中期と後期の三つの群に分けるとき、この『ゴルギアス』は初期の作品群にぞくし、しかもそのなかでも比較的あとの方に位置するものである。もう少し詳しく言えば、『ソクラテスの弁明』や『クリトン』をはじめ、『エウテュプロン』、『ラケス』、『カルミデス』、『プロタゴラス』などの、いわゆる「ソクラテス的対話篇」より後に書かれたものであるが、『パイドン』や『饗宴』よりはむろん、『メノン』よりも前に書かれたものであることは、今日一般に承認されているところである。

ただし、この作品が何年頃に書かれたかという、いわゆる絶対年代に関しては、これをはっきり決めるべき客観的証拠がないから、学者の主観によって、それぞれその推定された年代の間には、多少の開きがある。すなわち、この作品の執筆年代を、プラトンが最初にシシリー(シケリア)島旅行に出かけた年(前三八七年ころ)の近くにおくという点では、多くの学者の意見は一致しているけれども、その旅行の前にするか、後にするかという点で、いろいろと異論があるわけである。たしかに、この作品のなかには、イタリアやシシリー島への旅行の影響と見られるべきもの——たとえば、エピカルモスの詩句の引用(505E)、ミタイコスの書物『シケリア料理法』への言及(518B)、ピュタゴラス学派の思想(507E～508A)や寓話(492D～493D)の紹介など——があるけれども、それはまた他の仕方でも説明がつくことであるから、訳者としては一応、『第七書簡』のなかで語られている、「私がイタリアとシケリアへ最初に赴いたときには、実にこのような考え(「哲人政治」の考え)を抱いて行ったのでした」(326B)という言葉を一つの証拠にして(というのは、前に述べたように、『ゴルギアス』には哲人政治を暗示する考えはあるが、それはまだ明確には主張されていないから)、そしてその他のいろいろな事情をも勘案した上で、[1] この作品の執筆時期は前三九〇年頃、つまりプラトンの三〇歳代の終り頃であるとしておきたい。

(1) 絶対年代を推測させる資料と、それに関する学者の種々な意見については、『プラトン著作集 ゴルギアス』四三―四五頁

を参照されたい。

この訳、注、解説において参考にした主要な注釈書はつぎの通りである。

L. F. Heindorf, *Platonis Dialogi Selecti*, vol. II, 1805.
I. Bekker, *Platonis Scripta Graece Omnia*, vol. III, 1826.
G. Stallbaum, *Platonis Opera Omnia*, vol. II. Sect. 1, 1861.
W. H. Thompson, *The Gorgias of Plato*, 1871.
G. Lodge, *Plato Gorgias*, 1890.
E. R. Dodds, *Plato Gorgias*, 1959.

『メノン』解説

藤沢令夫

一　総説、登場人物、対話設定年代、梗概

『メノン』という対話篇は、その書名がアリストテレスによって二回も名指しで言及され(『分析論前書』第二巻(67a21)、『分析論後書』第一巻(71a29))、プラトン自身も『パイドン』(73A〜B)のなかで、本篇における想起説の証明を要約的にふり返っている事実もあって、これまでに——一九世紀ドイツ学界の極端な懐疑的風潮の中にあったアスト(Ast)とシャルシュミット(Schaarschmidt)を特殊な例外として——プラトンの真作であることを疑われたことはない。のみならず、この比較的短い対話篇は、いわゆる珠玉の短篇(e. g. 'a gem', J. S. Mill)としての評価がたかく、またしばしばプラトン哲学を学ぶための最良のイントロダクションとみなされてきた。そしてわれわれもまた、以下において、この対話篇の構造がもつきわめて興味ぶかい性格と、プラトン哲学の発展と関連したその独得の思想的状況とを、確認することになるであろう。

われわれはさしあたって、この対話篇の登場人物と対話設定年代と対話展開のあらすじとを一通り見たうえで(一)、その思想内容を主要な問題点について検討し(二)、最後にそれにもとづいて、プラトンの著作のなかで『メノン』が占める位置と執筆時期を確かめる(三)ことにしたい。

メノン(Menon)　アテナイ訪問中のテッタリアの青年(二〇歳くらい)。テッタリアの都市パルサロス(Pharsalos)の有力な貴族の家柄に属し、おそらくは彼の祖父であるところの同名のメノンがアテナイのキオンによるエイオン遠征軍(前四七七／六年)に尽力して以来、彼の家はアテナイと特別親しい関係にあった(デモステネス(二三の一九九))。またペルシアとも同様の関係にあったことは、メノンが本篇で「父祖以来のペルシア大王の賓客」(78D)と呼ばれていることからも推察できる。

メノンはまた本篇のなかで、アテナイ民主派の有力者アニュトスの客と呼ばれ(90B)、その家に滞在しているように言われているが、このことは、メノンのアテナイ訪問がなんらかの政治的目的によるものであるという推測をうながす。前四〇四年、テッタリアのペライ(Pherai)に僭主制を樹立したリュコプロン(Lycophron)は、全テッタリアの支配をもくろんで、ラリサその他の都市に対して戦争をしかけた(クセノポン『ギリシア史』第二巻(三の四))。これは、ラリサを支配するアレウアス家の危機であったとともに、パルサロスのメノンの家にとっても脅威であり、強い友好関係にあったアテナイへメノンを送って援助を求めたのではないかと推定されている(J. S. Morrison, Bluck)。

しかし、メノンが歴史に名を残すことになったのは、何といっても、前四〇一年にペルシア王アルタクセルクセス二世に対して弟キュロスが起した攻撃遠征軍に、将として参加したことによる。この遠征軍のことは、クセノポンの『アナバシス』によって有名である。運命を決したキュナクサの戦いにおいて、メノンは軍の左翼を指揮し、クレアルコスが右翼を指揮したが、キュロスがこの戦いで死んだのち、他の将とともに捕えられて大王のもとに送られ、一年後に死んだ(『アナバシス』第二巻(六の二九))。

同じキュロスの配下にありながら、メノンは右のクレアルコスとはげしい敵対関係にあった。そして『アナバシス』の著者クセノポンは、そのクレアルコスと特別に親しい間柄にあった人である。このことはメノンにとって、不運であったかもしれない。メノンはこの軍記のなかで(とくに、第二巻(六の二一―二九))、貪欲、不実、不正、悪辣な野心家、要するにありとあらゆる悪徳の権化のような人物として語られている。

クセノポンのこのような記述には、個人的な悪意にもとづくかなりの誇張があることは疑えない。プラトンの『メノン』では、彼はゴルギアスの教えを受け、エンペドクレスの学説や幾何学や詩のことも一応理解できるだけの教養を身につけているとともに、自分の無知とアポリアーを自覚するだけの謙虚さもあり、全般的にむしろ好青年という印象を与える。しかしそのプラトンも、メノンが「善きもの」とは何かと問われてすぐに「金銀を手に入れること、国家において名誉や官職を得ること」(78C)を思い浮べる人であり、あるいは「自分自身を支配しようとは少しもしないくせに、相手に対しては支配権をにぎろうとする」(86D)ような人間であると述べるのを忘れていないのであって、クセノポンによる彼の性格記述はけっして事実無根のものではなく、誇張の中にも芯として真実がふくまれていると考えられる。いずれにせよ、『メノン』の読者である前四世紀前半の人々にとって、「アナバシス」に参加したメノンが、かなりの悪名をになった人物としてよく知られていたことはまちがいない。そうとすれば、プラトンが本篇において、ほかならぬ「徳」についての対話におけるソクラテスの相手としてメノンを選んだことは、一種皮肉な効果をもつことになるであろう。ソクラテスとメノン——この組合せは、家柄や富や美しさなどの外的条件のすべてにおいて対照的であるが、その対照は根本において、真実の徳の所有と欠如という差異に支えられていることによって、さらに際立つからである。

ソクラテス(Socrates)　後に述べるような本篇の対話設定年代によって、六七歳ころと想定することができる。

メノンの召使

アニュトス(Anytos)　富裕な製革業者アンテミオン(Anthemion—cf. 90A)の子。ペロポンネソス戦中、前四〇九年、将としてペロポンネソス西部におけるアテナイの拠点ピュロスを失った責を問われて告発され、贈賄によって罰をのがれたといわれる(ディオドロス(一三の六四))。前四〇四年の敗戦後、三〇人政権の成立によって国外にのがれ、のちトラシュブロスを助けてこの独裁政権の打倒と民主制の回復につくして、民主制下のアテナイにおける最有力者の一人となった。前三九九年、メレトスの後楯となってソクラテスを告発し、刑死に至らしめた主動者である。思想的には頑固な保守派、徹底的なソフィスト嫌い。そしてまさにそのような人物としての反応をソクラテスに示すべく、この対話篇の後半に中途から登場し、また退場する。

対話設定年代

あらゆる条件は、本篇の対話が行なわれている時が前四〇二年の初めころであることを指し示している。そして『メノン』に関するかぎり、それらの条件による時代の設定は、プラトン自身によって意識的に、入念になされているように思われる。

(i) メノンは前四〇一年の春には、キュロスの遠征軍に参加するために、すでに小アジアのコロッサイにいて(『アナバシス』第一巻(二の六))、そして以後、二度とギリシア本土の土をふむことはなかった。

(ii) アニュトスはアテナイにおいて、「最も重要な官職」についている(90B)。これは、前四〇三年における三〇人政権の崩壊と民主制回復の後のことであると考えられる。

(iii) 事実また、メノンはクセノポン(『アナバシス』第二巻(六の二八))によれば、前四〇一年に「まだ若盛りであった」(ἔτι ὡραῖος ὢν——二〇歳前後)から、前四〇四年の三〇人政権成立の以前と考えるならば、本篇におけるメノンの年齢があまりにも若すぎることになろう。

(iv) アニュトスが退場の前にソクラテスに向かって言う警告の言葉(94E)は、明らかにソクラテス裁判(前三九九年)との関連を意識して書かれているから、対話設定年代はできるだけ前三九九年に近いと考えるのが自然である。

以上により、この対話篇のために設定された年代が((i)によって)前四〇一年より前であり、そして((ii)(iii)(iv)によって)前四〇三年より後であることは、ほとんど確実である。そしてさらに——

(v) メノンのアテナイ訪問が登場人物の説明の中で触れたような政治的事情によるものとすれば、メノンは、前四〇三年におけるアテナイの民主制回復の報知を受けてから後にテッタリアを出発したのでなければならぬから、アテナイへ着くのは、その年の終りより前ではありえない。

(vi) ソクラテスはメノンに、「もし君が、きのう言っていたように、秘儀をさずかる前に行ってしまわなければならないのではなくて、ここにとどまって秘儀をさずかるならばね」(76E)と言う。年に二回あった秘儀のうち、二月の小秘儀に

参加しなければ、九月の大秘儀に参加できないことになっていたから、ソクラテスがここで言う「秘儀」は、二月のそれのことでなければならない。対話の時は、その少し前ということになる。

先の諸条件にこの(v)と(vi)を加えて考慮すれば、『メノン』の対話設定年代は、前四〇二年の一月または二月のはじめころであることになろう。

『メノン』における対話展開のあらすじは、つぎのとおりである。

「徳は教えられうるか」というメノンの問は、ソクラテスによって、その前に把握されるべき「徳とはそもそも何であるか」という問に置きかえられ、「徳」の定義への試みがはじめられる。メノンが提出する答はつぎつぎとソクラテスの吟味によって拒けられ、メノンは行詰り(アポリアー)におちいる(80Dまで)。

「人は自分の知らないものをどうして探求できるのか」というメノンの問に答えて、ソクラテスは、「探求し学ぶということは、魂が生前に得た知識を想起することである」という想起説の思想を提示する。そしてメノンの召使に幾何学の問題を解かせるというひとつの実験を通じて、この思想の真実性を説明し、「徳とは何か」の探求の再出発をうながす(80D～86C)。

しかしメノンは、いちど拒けられた「徳は教えられうるか」という最初の問を取り上げることを主張し、ソクラテスはやむなく、「仮設(前提)」の方法によってこれに答えることを提案する。もし徳が知識であるならば、それは教えられうるものであるし、知識でないならば、教えられえないことになるであろう。そしてさらに、もし徳が善き(有益な)ものであるならば、それは知識であることになるであろう。しかるに、徳は善き(有益な)ものである。したがって、徳は知識である。したがってまた、徳は教えられうるものである(86C～89C)。

しかし、もし徳が教えられうるものとすれば、それを教える人びとが実際にいるはずである。(ここでアニュト

スがしばらく対話に加わる。）だが、有徳の士といわれるアテナイの政治家たちは、その息子にさえ自分のもつ徳を授けることができなかったし、徳の教師を名のるソフィストたちも、ほんとうに徳を教える人であるとはいえない。こうして、徳を教える教師というものは実際にどこにも存在しない以上、徳は教えられうるものではないことになる(89C～96C)。

先には、知識だけが善き(有益な)ものであるように考えられた。しかし、正しい思わくは――「原因(根拠)の思考」を欠くがゆえに永続的でないという点で知識と区別されなければならないけれども――実際の行為に関するかぎりでは、導き手として、知識にすこしも劣らず有益である。徳が知識として教えられうるものでなく、しかも有益なものでなければならぬとすれば、徳とはこの正しい思わくにほかならないことになる。徳は生まれつきによるものでもなく、正しい思わくとして、知とは無関係に「神の恵み」によって人に与えられるものである(96C～100B)。

しかしながら、ほんとうに確かな答は、徳がどのようにして人間にそなわるようになるかということよりも前に、徳それ自体は何であるかという問に正面から対処したときにこそ、はじめて明らかになるだろう、とソクラテスは結ぶ(100B)。

二　内容上の主要問題点と対話篇の構造

(1)　「徳」(アレテー)

「徳は教えられうるか」というメノンの問は、いわば当時の流行の論題であった。なぜ、どういう意味で、そうであったのか。「徳」の原語「アレテー」の基本義は、よさ、卓越性、能力ということであり、本篇のなかでも、「アレテー」という語は到るところで、「すぐれてあること」(ἀγαθὸς εἶναι)という言い方と互いに置きかえられて

使われている。

ただしかし、具体的に何が人間の卓越性であり、「すぐれてあること」であるとみなされるかは、それぞれの時代と社会のあり方によって異なるであろう。ホメロスの物語の世界では、武将や王として強く手腕があることや、高貴の生まれであることが「アレテー」であったが、前五世紀のポリス社会においては、「徳」(アレテー)とは何よりもまず、「国家社会(ポリス)の一員としての」(ポリティケー＝政治的)という限定がつくような、国家有数の人物であるための政治的・社会的能力を意味していた。本篇のなかでも、テミストクレスやアリステイデスその他、とくに政治家として著名な人物たちが「徳」に関する考察の手がかりとして取り上げられているし(93B〜94C)、またしばしば、問題の「徳」が国家に関わり政治的活動に関わるものであるということが、そのことを示す限定の言葉によって意図的に明確にされている(98C9, 99B2, 100A1-2など)。

「徳の教育」が問題とされるとき、その直接意味するところは、このようにして、いわゆる道徳教育のようなこととはかなり違っている。民主制のもとでは、人は家柄や財産のいかんにかかわらず自由に国事に参加して、能力さえあれば誰でも頭角をあらわすことができたから、まさにそのような能力としての「徳」(アレテー)が、はたして教育によって人に授けることのできるものであるかどうかという問題は、それを教授することを約束して授業料を取ったソフィストたちの出現と相まって、人々の切実な関心となっていたのである(プラトン以外の同時代の文書としては、『両論』六、エウリピデス『救いを求める女たち』九一三行、『アウリスのイピゲネイア』五六一行、クセノポン『ソクラテスの思い出』第三巻(九の一以下)、第四巻(二の二〇)、同『饗宴』(二の四以下)などを参照)。プラトンの対話篇では、『プロタゴラス』が同じ問題を広い連関において、直接的なかたちで大きく取り上げているが、さらに、この問題を独自の仕方で深化させて追求することは、プラトンの根本モチーフとしてその哲学の全体をつらぬいているともいえる。

『メノン』のソクラテスは、この「徳は教えられうるか」という問をそのまま取り上げることを拒み、「徳とはそもそも何であるか」という、徳それ自体の本質規定への問を優先させる。その理由は、「何(τι)であるか」が知られなければ「どのような性格のもの(ὁποῖόν τι)であるか」は知られえない、ということであった。同じことは全篇の最後にもういちど注意を喚起されていて、この点、同じ注意の言葉で結ばれる『プロタゴラス』や『国家』のⅠと酷似している。そして、その「何であるか」という問に対して相手が提出する答が、つぎつぎとソクラテスの吟味によって拒けられて行く過程——とくに、特定の事例をあげることによってこの問に答えることへの拒否——も、プラトンの初期対話篇の多くに共通するものとして、われわれになじみ深い。事実、メノンがアポリアーにおちいるまでの前半(80Dまで)は、そのまま、否定的結末に終る初期の「ソクラテス的対話篇」の一典型として通用するであろう。

しかし、『メノン』はそこで終らなかった。まったく新しい重要な思想が、「人は自分の知らないものをいかにして探求できるか」というメノンの問をきっかけとして提示される。それが想起説である。

(2)　想起(アナムネーシス)

人間の魂は不死であり、われわれは人間としてこの世に生まれてくる前に、すでにあらゆるものを学んで知ってしまっている。だから、われわれは自分が全然知らないことを学ぶわけではなく、じつは、「学ぶ」とか「探求する」とか呼ばれているのは、すでに獲得しながら忘れていた知識を想い起すこと(アナムネーシス)にほかならないのである。——このような要旨の言葉によって、プラトンの著作のなかではじめて、想起説と呼ばれる思想が提示された。同じ思想は、さらに『パイドン』と『パイドロス』において現われる。『メノン』におけるその現われ方には、どのような特色が見られるであろうか。

『パイドン』(72E～77A)においてふたたびこの想起説が取り上げられたとき、それは、イデア論と呼ばれるプラトンの形而上学的思想の本質的な契機としてであった。「想起」される対象は、ここではっきりと「等しさそのもの」「美そのもの」「善そのもの」といったイデア的真実在として語られていて、こうしたイデア的真実在が*あ*るということと、人間の魂が生前にも存在していたということと、この二つのことが、新たな認識論的局面から取り上げられた想起説を介して、「同等の必然性」をもって確認されることになるのである。同様に『パイドロス』においても、想起説は魂の不死・イデア論と一体的なかたちで、「恋」を主題とするミュートス(245C～257A)のなかで重要な役割を果す。「恋」(エロース)とはこの世の美しい人を見て、美のイデアを想起することとして説明され、一般に人間の認識活動(「知る」こと)は、魂がかつて神々とともに天上において観たそれぞれのイデアを想起することにほかならない、とされる。

そしてわれわれは、想起説が直接語られていない他の対話篇においても、そこにイデア論の思想が表明されているかぎり、プラトンが人間の認識過程を「抽象」や「帰納的一般化」という仕方で説明することに窮極的には満足できないのである以上、「想起」はそれに代るイデア論にふさわしい可能な説明方式として、つねにそこに含意されているとみなし、あるいは少くともそれを補って考えることがゆるされるであろう。

こうした事実は、われわれの『メノン』における想起説の現われ方の独自の性格を、逆に照らし出す。というのは、『メノン』においては、「想起」は語られていても、想起される対象がどのような性格の存在であるかについては何も語られず、とくにそれが『パイドン』や『パイドロス』で言われるような、「美そのもの」「善そのもの」といったイデア的真実在であるということは、まったく語られていないからである。すなわち、『メノン』は、プラトンが魂の不死と学習=想起の説を初めてそれなりに明確なかたちで提出しながら、しかしプラトン哲学のなかで本来それと一体となるべきイデア論そのものは、まだこれを確信をもって提出するに至っていないという状況を示

しているのである。その意味において、本篇における想起説の導入は、いわばまだ試験的な段階にとどまり、その目的と視野も制限されているといえるであろう。「ぼくは、ほかのいろいろの点については、この説のためにそれほど確信をもって断言しようとは思わない」(86B)とプラトンもソクラテスに言わせている。目的は差当りこの説によって、探求への意欲を鼓舞することにあった。

ソクラテスがメノンの召使を相手に行なう、想起説の一種の実験的証明も、同じこのような制限の内にあるものとして、これを見なければならないであろう。「質問するだけで教えなかった」ことがそこで幾度も強調されているにもかかわらず、召使の子が問題の正しい解を発見するに至るのは、ソクラテスの誘導的な質問と、画かれる図形の助けによるところが大きいことは疑いない。けれどもこの点は、当面の目的と視野のもとでは、それほど本質的な問題ではないともいえる。誘導的な質問と図形の助けがあったとしても、大切な点は、まったく幾何を教えられたことのない者が、各段階においてソクラテスの質問が指示するところを理解して答えることができること、彼自身のそのような理解にもとづいて正しい解へ導かれることが可能であったということであろう。「君自身にそう思われる(δοκεῖν)ところをそのまま答えよ」(83D)と、ソクラテスはいつもの流儀(『プロタゴラス』331C、『ゴルギアス』495A、『国家』I. 346Aなどを参照)に従って強調する。そして当面の目的は、魂の内におけるまだ本格的な知識以前の、そのような思わく(δόξαι)の先在(85B～C)を示すことにあったのである。

そのような制限の内において、しかし、このソクラテスと召使の子との問答は、その進行の経過がちょうどそのまま、無知の状態——アポリアーと無知の自覚——探求の再出発——発見(想起)という、ソクラテス的・プラトン的問答法(ディアレクティケー)の本来あるべき典型的な過程を示していて興味ぶかい。

(3) 仮設(ヒュポテシス)

さて、『メノン』そのものにおける対話の進行はといえば、徳の「何であるか」の探求がアポリアーにおちいり、メノンがみずからの無知を自覚したまさにその時点、その段階において、想起説が提示されたのであった。本来ならばこの先に、何が期待されるべきであろうか。

少なくともいまや、召使の子との問答に看取されたモデルそのままに、アポリアーと無知の自覚の先には探求の再出発と発見(想起)の過程が、徳とは何かという課題について期待されてしかるべきであり、徳の本質(「何であるか」)の追求そのものに即して想起の努力こそがなされなければならないはずである。さらに、事柄自体のもつ内的論理としては、それまでの定義追求の試みが、はじめて新たに提示された想起説と結びつけられ、先に見られたようなその本来の内実との充分な連関のもとに置かれることも可能だったであろうし、そしてまさにそのことによって、「ソクラテス的」な本質的特性(「エイドス」と呼ばれる)は「プラトン的」なイデア(同じく「エイドス」と呼ばれる)へと発展する可能性が開かれたはずとさえ、期待できたであろう。

しかしながら、実際には、対話人物メノンはここで、「徳とは何であるか」という問を回避して、いちど拒けられた「どのような性質のものであるか」(教えられうるものであるか)という問への逆行を固執した。このことによって、対話篇の進行は大きく屈折し、右のような内的論理の展開の可能性も、事実上まったく挫折し閉されることになる。

「何であるか」が知られぬままに「どのような性質のものであるか」の探求を求められたソクラテスが、やむなく提案したのが、仮設(前提)を立てて問題を考察するという方法であった。これが幾何学のやり方にならったものであることは、ソクラテスがこの方法について説明している言葉から充分に明らかであるが、今日に伝わるギリシアの幾何学書、または関連文献の中に実際に見出される方法(「アナリュシス」「ディオリスモス」「アパゴーゲー」など)の、どれとどのように正確に対応するかについては、さまざまの解釈と議論があって、ここでその詳細に立

ち入ることはできないし、またその必要もないであろう。なぜなら、『メノン』に関するかぎりでは、この「仮設の方法」なるものの使用の実際は、比較的簡単であり、明瞭だからである。

すなわち、この箇所を通じてわれわれは、(i)「徳は教えられうるものである」、(ii)「徳は知識である」、(iii)「徳は善き(有益な)ものである」という三つの命題を見る。(ii)は(i)が成立するために必要な仮設であり、(iii)は(ii)が成立するために必要な仮設である。そして、この(iii)が対話する両者によって同意されることによって(ii)の帰結が承認され、さらに(ii)の承認によって(i)が帰結として承認される、という手順がふまれている。この場合念頭に置かなければならないのは、三つの命題の主語となる肝心の「徳」の本質(「何であるか」)の規定が、ソクラテスが最初に慨歎しているように、終始未知のままにとどまっている以上、厳密にいって推論全体の内容は文字通り「仮設」の域を出ず、結論もあくまで暫定的な性格をまぬかれえないという点であろう。同時にまた、徳は「どのようなものであるならば」教えられうるか、「どのようなものであるならば」知識であることになるかというように、(i)から(ii)へ、(ii)から(iii)へと、より先にある仮設を見出す手続が、ここで用いられている「仮設の方法」のなかに、一側面として含まれていることにも注意しなければならない。

この仮設の方法は、『パイドン』(99D～101D)や『国家』(VI. 510B～511D)において、先の想起説がそうであったように、イデア論との関連のもとに置かれて、より積極的な意義と役割を与えられることになる。そしてそれとともに――細かい異同を別として――、「より上位」の仮設へとさかのぼるという、『メノン』ではまったく強調が置かれていなかった側面が重要視されるようになってくるのが注目を引く。「上位の」とか「上昇する」とかいった表現は、『メノン』にはなく、『パイドン』(101D～E)と『国家』(VI. 511B)に共通してはじめて現われるものである。とくに後者の箇所(「線分の比喩」)においては、仮設(ヒュポテシス)を文字通り「下に(ヒュポ)置かれたもの(テシス)」として踏み台に用いながら上へさかのぼり、最後に無仮定の原理(＝「善」のイデア)に到達するという

思考の動き（ノエーシス）が語られていて、仮設を絶対的な出発点とみなすような、数学におけるその方法的制約を克服しようとしている。われわれは、この「ノエーシス」（正確にはその一部）として語られている思考の動きに、「想起」（アナムネーシス）として語られていた思考の動きを、重ね合わせてみることができるであろう。

（4）「正しい思わく」と「知識」

しかしながら、われわれの『メノン』では、仮設の方法は、「何であるか」という問の放棄によってやむなくとられたいわば窮余の策として、あくまでも暫定的な帰結しかもたらさないものであることは、先に見られた通りである。こうして、この方法によって得られた「徳は教えられうるもの（知識）である」という帰結は、徳を教える教師が現実に存在しないという事実の前に、たちまちくつがえされなければならなかった。そしてここに、有益なものでありながら知識ではないという条件に応じうるものとして、先に（85C）語られるところのあった「正しい思わく」（ὀρθὴ s. ἀληθὴς δόξα）という概念が再登場する。

「思わく」を真の知識と対比させる考え方は、クセノパネス（Fr. 34, 35（DK））やパルメニデス（Fr. 1. ll. 29－32, 8. ll. 50－52（DK））以来の伝統をもっているが、プラトンの著作のなかにそれがはっきり現われるのは『メノン』が初めてであり、そしてこの区別もやはり、またしても、やがてイデア論のなかで重要な役割を果すようになるものである。両者の区別はちょうど、日常的な経験や感覚によってとらえられるものと、純粋思惟によってのみとらえられるイデア的真実在との区別に対応させられるからである（『国家』V. 476Dsqq., VII. 534A、『ティマイオス』28A, 51B～E のほか、『饗宴』202A、『国家』VI. 506C, 508D, 511D、『パイドロス』247D, 248B、『ピレボス』58E～59A などを参照）。とくに『ティマイオス』（51B～E）では、感覚される事物だけがすべてであるのか、それとも純粋思惟の対象としてのイデアが別にそれ自体で存在するかという、宇宙論のなかで問われた決定的な問は、簡

潔な仕方で、まさにこの正しい思わくと知との区別の有無の問へと還元され、それにもとづいて力づよく肯定的に答えられている。

けれども、『メノン』においては、同じこの「正しい思わく」と「知識」との区別が、区別そのものとしてははっきりしたかたちで語られながらも、しかし右の『ティマイオス』におけるように、「だから(、、、)イデアが感覚的事物とは別にそれ自体で存在する」という帰結は語られていないし、またけっして語られえない。くり返し言うように、イデア論はここではまだ、明確なかたちをとって提出されていないからである。思想のこのような状況のなかでは、したがって、両者の区別の基準も区別それ自体も、のちの著作に見られるそれとは異なった、かなり独自の様相をもっている。

まず、正しい思わくをもつ人は、「ラリサへ行く道」を実際に通ったことはないけれども、どの道を行けばよいかを正しく見当づける人にたとえられていて(97B)、比喩の枠内においてではあるが、実際の経験の有無ということによって知識をもつ人と区別されている。そして、そのような区別にもかかわらず、彼は知識をもつ人とくらべて「導き手として少しも劣るところがない」「有益性の点で少しも劣らない」とくり返し説かれている点は、例えば『国家』(VI. 506C)において、「知なしに正しい思わくをもつ人々は、盲人がどうにか道をまちがえずに歩くのとなんら異ならない」と否定的に語られているのに対して、強調の置かれ方において著しい対照をなすといえるであろう。

『メノン』において提出された、両者の間の区別の面を最も強調する原理的な基準ともいうべきものは、「原因(根拠)の思考によって縛りつけられる」かどうかによる永続性の有無ということであった。そしてこの原因(根拠)の思考とは、先に語られた「想起」のことにほかならないとされる。これに対応する先の記述(85C)をふり返ってみると、幾何学の問題について召使の子の心に浮び上った正しい思わくは、いまのところ「夢のようによびさまさ

れたばかりの状態」にあるけれども、さらに何度も質問を重ねられることによって、「誰にも負けないくらいの正確な知識」となると言われていた。

区別のための原理的基準である「原因(根拠)の思考」ということの、このような実際の内容を見るならば、『メノン』における知識と正しい思わくとの区別は、区別それ自体は強調(98B)されてはいるけれども、しかしその実態はなお一種ゆるやかな差異(ἀλλοῖόν τι, 98B1)にとどまっているといわなければならないであろう。両者の区別がそのまま、感覚的経験の世界とイデア界という、対象そのものの厳しい区別に直結する明確なイデア論の思想のもとでは、思わくから知識への移行は、苦難にみちた精神の飛躍と転換によってはじめて可能となるような、同じく厳しいものであることが強調されるからである。それと対比するかぎり、『メノン』において右のように語られるその移行――想起――は、「忽然として」(ἐξαίφνης)と形容されるような非連続的なものであるよりは、むしろ、「つぎつぎと」(ἐφεξῆς, 82E12)と語られるような連続性を印象づけられる。

(5) 対話篇としての結末

徳は教えられうるもの(知識)ではなく、むしろ正しい思わくとして、知とは無関係に、「神の恵み」によって人間にそなわるものであるというのが、『メノン』における対話が最後に行き着いた結論であった。われわれはこの――かなり奇妙な――結論の言葉を、そのままプラトンの考えとして受けとってよいであろうか。

「徳は知である」というソクラテスの教えを、プラトンが正面きって否定したとは思えない。そのような否定がここで導き出された推論には、実はほとんど一見して明らかな誤謬があった。「徳を教える人が現実に存在しない(しなかった)」ということからは、「徳は知識として教えられうるものではない」という帰結は保証されないからである(de non esse ad non posse non valet consequentia)。プラトン自身も最初は、そのことが推測可能であると

いう控えめな言い方(καλῶς ἂν . . . εἰκάζοιμεν, 89E2)しかソクラテスに語らせていなかったのが、最後の詰めの部分(98E)では、この正当な控え目の言い方は故意にそうされたかのように、消されてしまっているのである。

「徳を教える人が現実に存在しない(しなかった)」ということからは、むろん、「徳は現実に教えられていない(あるいは、これまで教えられたことがなかった)」という帰結しか出て来ない。そしてこれが、プラトンが実際に言おうとしたことではなかったか。右に見た最後の結論に一見何気なく付せられている、「すくなくとも、誰か政治的能力のある人物たちのなかに、ほかの者にもその能力(徳)をさずけることのできるような人が出てくるのでないかぎりはね」(100A)という重要な保留条件は、ちょうどそのことを裏書きしているように思われる。

すなわち、われわれはプラトンの真意を、こう言うことができるであろう。——「徳は知である」というソクラテスの教えは真実である。真の知であるような徳こそが、唯一のほんとうの徳である。そしてそのような徳であってこそはじめて、ほんとうの意味で他に教えることのできるものである。しかし現実には、そのような真の徳＝知をそなえた人は、これまで存在しなかった——おそらくソクラテスその人をのぞいては。したがってまた、有徳の士(οἱ καλοὶ κἀγαθοί)といわれる政治家たちも、徳の教師を名のるソフィストたちも、ほんとうの意味で徳を教えることはできなかった。けれども、ソクラテスの説いた教えは、それが真実である以上、あくまでその実現に向かって努力されなければならない。それが哲学(ピロソピアー)の指示する道である。ポリスという場における具体的な課題としていえば、他人にもほんとうの意味で自らの能力を授けることのできるような(οἷος καὶ ἄλλον ποιῆσαι πολιτικόν)政治家(ポリティコス)、すなわち、真の知としての徳を確実にそなえた政治家こそが、養成されなければならない。換言すれば、必要なのは、哲人政治家の教育なのである……

周知のように、これはやがて『国家』の中心テーゼとして明示された思想であり、プラトンが生涯をかけて追求した実践的課題そのものでもあった。『メノン』はこの点においてもまた、本来ならばこうした帰結にまっすぐに

つながるような契機を内にもちながらも、いちど起った大きな屈折の延長上でなされなければならなかった対話の進行は、表面の結末としては、歪められた結論しかもたらすことができなかったのである。すでに見たように、その屈折は「何であるか」の問をメノンが回避したときに起り、やむなくとられた仮設の方法が導き出した「徳は知(教えられるもの)」という帰結は、この回避によってはじめから暫定的なものであることを運命づけられていたわけである。すべてこうしたことを想えば、対話篇の全体は、それがメノンを相手の対話であることから由来する制約の内にあった、とも言えるであろう。「しかしほんとうに確かな事柄は、徳それ自体が何であるかという問を手がけてこそ、はじめてわれわれにわかるだろう」というソクラテスの最後の言葉は、他の初期対話篇のいくつかと共通する注意ではあるが、『メノン』の場合にはこれだけの事情をふまえて語られているのである。

三 『メノン』の思想的位置と執筆年代

『メノン』がプラトンの諸著作のなかで占める思想的位置については、われわれがこれまで内容上のいくつかの点について行なってきた検討において、すでにほとんど語りつくされているといってよい。すべての事実の線は、この対話篇が『饗宴』『パイドン』『国家』『パイドロス』などの、一連の中期諸対話篇の一歩手前に位置していることを、くっきりと指示しているからである。すなわち、われわれが見たように、『メノン』のなかで、徳の「何であるか」についてのソクラテス的な定義追求が最初に置かれ、ついで想起説、仮設の方法、知識と正しい思わくとの区別など、他の初期対話篇にはそれとして現われていないところのいくつかの重要な考えが初めて提示されながら、しかし中期対話篇にあってはこれらと一体となって展開されているイデア論そのものは、まだ語られていないこと、同様に、哲人政治家教育の課題が示唆されながら、それがまだ文字通りヒントにとどまっていること、――これらの点は、プラトンがこの対話篇において、ソクラテスの言行が指し示していた教えを充分な意味におい

て根拠づけうるような独自の哲学的思想の形成に向かって、そうしたいくつかの新しい考えによって示されるような重要な一歩をふみ出しながら、なおしかし、その行手にあるものが明確な形をむすばぬままに道をまさぐりつつあった段階にいることを、告げているのである。

思想内容の面とはまったく別箇に追求された文体統計学の諸成果もまた、最小限まちがいのないところとして、『メノン』が文体からみて『饗宴』や『パイドン』より前に書かれ、そして『プロタゴラス』より後に書かれた著作であることを示している。同じころに位置づけられる著作としては、『ゴルギアス』が内容的にも関連する要素(ゴルギアス自身のこと、アテナイの政治家批判、ピュタゴラス派的な賢者の話など)が多く、『メノン』と執筆時期が最も近いことが一般に認められている。ではそれは、何年ころであろうか。

周知のように、プラトンは、ソクラテスの刑死後にはじまるいわゆる遍歴時代のしめくくりとして、四〇歳——前三八七年——のころイタリアとシケリア(シシリー)に旅をし、アテナイに帰って間もなく、学園アカデメイアを創設した。イタリアではタラスのアルキュタスと交友をむすんで、ピュタゴラス派の思想とじかに親しく接触したことが知られている。『ゴルギアス』——そして『メノン』——の執筆は、そこに新しく見てとられるピュタゴラス派の思想、およびその他の諸点からみてこの旅からの帰還後とみなすのが自然であるという見解(ドッヅ、ブラックその他)のほうが、イタリア・シケリアへ出発する以前とみなす想定(フィールドその他)よりも、有力であるように思われる。

そしてこの二つの著作の間の前後関係については、想起説や「思わく」と知識との区別など、『メノン』に初出の思想について先に見られたところからだけでも、われわれとしては『メノン』が『ゴルギアス』よりも後の著作であることを、充分の確信をもって言うことができる。『メノン』の後には、『饗宴』や『パイドン』にはじまる中期の諸著作ができるだけすぐ続くと想定するのが自然であり、それにもしも『ゴルギアス』が、プラトンのうちに

これらの重要な思想がすでにかたちづくられてから、そして『メノン』においてそれがいったん提出されてから後に書かれたとしたならば、『ゴルギアス』のなかの記述は、少なくともいくつかの重要な点において、現在のそれとは違ったものになっていたであろう。(なおまた、ちょうど『ソピステス』217Cにおけるソクラテスとパルメニデスとの会合への言及が、対話篇『パルメニデス』のことを指していると思われるのと同じように、『メノン』71C～Dにソクラテスとゴルギアスとの出会いのことが言われているのは、読者に『ゴルギアス』のことを思い出させるつもりで書かれているとみなすことも可能である。)

このようにして、『ゴルギアス』と『メノン』がイタリア・シケリアからの帰国後の執筆であるという想定をとり、そして『メノン』のほうが『ゴルギアス』より後の著作であることがほぼ確実であるとすれば、そこから帰結する絶対年代としては、帰国(前三八七年)の直後にまず『ゴルギアス』が書かれ、ついで『メノン』が前三八六／五年ころに書かれ、さらに前三八五—三年くらいに『饗宴』『パイドン』——という順序とみなすほうに筆者は傾いている——が執筆されたということになるであろう。

しかしながら、こうした絶対年代については、確実な証拠というものがないので、すべては純然たる推測の域を出ない。重要なのは、これらの著作のなかでの位置そのものがわれわれに示すところの、これまで見られたような『メノン』における思想的状況であり、そしてその前後にわたるプラトン哲学発展の動きの軌跡である。『ゴルギアス』において「政治の実践」(『第七書簡』324B9, 325E1)との訣別を行なったプラトンの関心は、いまや『メノン』において、「知」と一体でなければならぬ真の政治的徳性の教育の問題へと移行している。それはプラトンが学園アカデメイアの設立によって自らに課した課題とも対応している。そしてこの課題を裏づけるべき、やがて中期諸対話篇においてイデア論とともに本格的に展開されるプラトン独自の哲学は、いまその形成に向かっての準備が始められつつあり、その布石となるいくつかの思想的契機が、それぞれの可能性を試されるがごとくに、『メノ

ン』において提出されたのである。

後記

(一) プラトンのイデア論はソクラテスの定義追求にその根をもっているが、本格的なイデア論の出現をマークするひとつの重要な徴候は、「Xとは何か」と問われるときのXの実相(エイドス、イデア)と、その箇々の具体的事例との関係が、後者は前者を「分有する」(メテッケイン、メタランバネイン)、そして後者は前者を原物・模範とするその似像であり影である、という言い方によって表現されるようになることである。そしてこれが現われるのは、はっきりと『饗宴』(211B, 212A)や『パイドン』(100C～101C, 74A～75B)が最初であって、それまでは、「何であるか」と問われるXはやはり「エイドス」「イデア」また「Xそのもの」と呼ばれるけれども、しかしその箇々の事例との関係については、後者が前者を――けっして「分有する」「分け持つ」ではなく単純に――「持つ」(エケイン)という言い方や、前者が後者の「内にある」(エン・エイナイ)「現在する」(パラ・エイナイ)といった言い方によってしか表現されていない(『ラケス』191E～192B、『エウテュプロン』5D、――6Eの「パラデイグマ」は中期のそれと意味内容を異にする――、『ヒッピアス(大)』289D, 293E～294A, 300A～Bその他、『クラテュロス』389B～C, E, 390Bなど)。つまりわれわれは、プラトンの中期における――いわゆる「超越的」な――イデアを、箇物との関係について語られるこうした用語法をチェックすることによって、初期の段階からかなり正確に区別することができるのである。

『メノン』におけるこの点の用語法――72Cの「それらはある一つの同じエイドスを持つ」その他――は、明らかに他の中期以前の対話篇におけるそれと同じであって、われわれが本篇ではまだ本格的なイデア論が提出されていないと語ってきた(違う見方をする学者もいる)のは、このことを有力な根拠の一つとしている。こうした用語法の変化(後期のそれも含めて)の詳細とその意義については、私の論文 "Ἔχειν, Μετέχειν and the Idioms of Paradeigmatism in Plato's Theory of Forms", *Phronesis* XIX, pp. 30 sqq. (1974)を参照されたい。

(二) この全集では、「ドクサ」の訳語として、『メノン』『饗宴』『国家』(とくにV末)などの、「知識」と対立的に用いられ

ている場合には、「思わく」を主として用い、『テアイテトス』『ソピステス』などの「判断」(judgement,Urteil)の意味が強い場合には、「思いなし」が用いられる。

この訳・注・解説において参考にした主要な文献(英・独・仏の各種訳書および論文は省略)はつぎの通りである。ブラックとトンプソンに負うところが最も多い。

Bekker=*Platonis scripta graece omnia*, rec. I. Bekker, annotationibus Heindorfii, etc., vol. IV, Londoni, 1826.

Stallbaum-Fritzsche=*Platonis opera omnia*, vol. VI, sect. ii, ed. G. Stallbaum, Gothae, 1836. Ed. ii, rec., prolegomenis et comment. instruxit A. Fritzsche, Lipsae, 1885.

E. Seymer Thompson, *The Meno of Plato*, London, 1901.

St. George Stock, *The Meno of Plato*, London, 1887 ; 3rd edition, revised with appendix, 1924.

R. S. Bluck, *Plato's Meno*, Cambridge, 1961.

Jacob Klein, *A Commentary on Plato's Meno*, North Carolina, 1965.

ナ 行

内接，内接させる　87A～B
「何であるか」と「どのような性質のものか」　71B, 86E, 100B

ハ 行

秘儀　76E
ひとかどの立派な人物たち（οἱ καλοὶ κἀγαθοί）　92E～93A, C, 95A
不足する（余地を残す）〔幾何学用語〕　87A

マ 行

学ぶこと（学習）は想起である　81D
問答法　75D

ヤ 行

善いもの（善）
　人は誰でも——を欲する　77B～78B

ラ 行

流出物　76C～D

『メノン』索引

数字とABCDEは，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字とBCDE(Aは数字の位置)は，これに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア行

悪しきもの(悪)を欲する者は誰もいない　77B～78B
色　75C, 76A, C～D
　――の定義　76D
エレゲイア詩　95D
想い起す　→想起
思わく(δόξα)　85B～C, 85E～86A
　正しい――〔知識との比較〕　97B～98C, 99A～B

カ行

仮設(前提)　86E～87B
形(σχῆμα)　74B～76A
　――の定義　75B, 76A
神の恵み(θεῖα μοῖρα)　99E, 100B
原因(根拠)の思考　98A

サ行

シビレエイ　80A, C, 84B
相(すがた)(本質的特性)(εἶδος)　72C～E
善　→善いもの
想起(想い起す)　81C～82B, E, 84A, 85D, 86B, 87B, 98A
　――説　81C～86C, 98A
ソフィスト　91B～92E, 95B～C

タ行

対角線　85B
正しい思わく　→思わく
正しい使用　88A, E
正しく(正しい仕方で)導く　88E, 97A～B, 98E～99A, C
魂の不死　81B～D, 86B
探求　80D～86C
　――に関する論争家の議論　80D～E, 81D
　――とは想起である　81D, 86B～C
知識(ἐπιστήμη)　85C～D, 86A, 98A
　――と正しい思わく　→思わく
　――〔＝知性(νοῦς)＝知(φρόνησις)〕は有益(善いもの)である　88B～89A
徳，徳性〔全篇の主題〕
　男の――，女の――，〔等々〕　71E～72A
　――は知識である　87B～89A
　――は知識でない　89Dsqq., 99A～B
　――は善(善きもの，有益なもの)である　87D
　――の教師(――を教える人)　89Dsqq., 96C
　――は正しい思わくにもとづく　99B～C
　――は神の恵みによる　99E, 100B
　政治家(テミストクレス，アリステイデス，等々)と――　93B～94E, 99B～C, 100A
　メノンが提出する――の定義　73D, 77B

——と哲学　500C
——と料理法　462E, 464D～E
——の真の効用　480A～481B
——の定義
〔言論の技術〕　449E～451D
〔説得をつくり出すもの〕　453A, 454A, 455A
〔政治術の映像〕　463D～E
〔経験，迎合〕　462C～D, 463B～C, 466A, 467A, 502D, 517A, 522D
——の不正な使用　456D～457C
法，法律習慣(ノモス)　504D
——と自然　→自然
——は万物の王　484B
自然の——　483E
〔弱者，多数者の制定したもの〕　483B, 488D～489A
放埒　477D～E, 478B, 492A, C, 504E, 505B, 507D, 508A
——な生活　493C, 494A
——な人(魂)　493D～494A, 507A, C

マ 行

短い話し方　449C
ミュシア人　521B
民衆(デモス)　481D, 513A～C
召使，——のやり方　517B, D, 518A, C, 521A

ヤ 行

勇気，——のある人　491B～C, 492A, 494D, 495C～D, 497E～498C, E, 507B
優者(より優れた人)　483D～E, 484C, 488B～491C
より力がある，——人(体力強健な人)　488C, 489C～D, 491C

ラ 行

立法術　464B, 465C, 520B
料理人，——と医者　464D～E, 521E
料理法
——と医術　464D, 465A～E, 500B, 500E～501A
——と弁論術　462D～E, 463B
理論(ロゴス，理論的な説明)　465A, 501A
(本当の話)　523A

C, 527 B
魂(精神)
——を甕，篩にたとえる　493 A～C
——だけを魂だけで観察　523 E
——の検査　487 A
——のための技術　464 B, 501 B
——の秩序と規律　504 B～D, 506 E
——の悪い状態〔悪徳〕　477 A～478 A, D～E, 505 B
タルタロス(奈落)　523 B, 524 A, 526 B
知識，——と信念　454 D～E
秩序と規律　503 E～504 D, 506 D～E
作り話(ミュートス)　523 A, 527 A
手当支給制度　515 E
ディテュランボス　501 E
哲学　481 D, 482 A～B, 484 C, 485 A～D, 486 A, 487 C
——者の魂　526 C
——と政治　→政治
テッタリアの魔女たち　513 A
天文学　451 C
陶器づくりの術　514 E
陶片追放　516 D
徳(アレテー，優秀性，卓越性，よさ)　492 C, E, 503 C～D, 506 D～E, 512 D, 527 C～D
——の教師　→ソフィスト
身体の——　479 B, 499 D, 504 C
独裁者　466 B, D, 467 A, 468 D～E, 469 C～D, 473 C～E, 479 A, 492 B, 510 A～C, 525 D
奴隷　452 E, 483 B, 484 A, 485 B, 489 C, 492 A, 502 D, 514 D, 515 A, 518 A

ナ 行

長い話し方，長談義　449 B～C, 461 D～E, 465 B
「似た者が似た者に親しい」　510 B

ハ 行

ハデスの国(冥界)　493 B, 522 E, 525 B～C, E
パンクラティオン　456 D
反駁　457 E～458 A, 462 A, 467 A～B, 470 C～D, 471 D, 482 B, 486 C, 506 A, C
——の方法　471 E～472 C, 473 B～474 B, 475 E
——の目的，効用　458 A
美(美しいこと，立派なもの)　474 D～475 A, 476 B, 476 E～477 A, 478 B
秘儀　497 C
——にあずかっていない人　493 A～B
悲劇　502 B
不正
——を行なうことと受けること　469 B～C, 473 A, 474 B～C, 475 B～E, 482 D～483 C, 489 A, 509 C～510 E, 527 B
——を行なって裁きを受けることと受けないこと　472 D～E, 473 B, 476 A～479 E
——と幸，不幸　→幸福
——は最大の(害)悪　→悪
〔悪徳，魂の悪い状態〕　477 B～E, 519 D, 520 D
弁論家
——と医者　456 B～C, 459 A～B
——とソフィスト　465 C, 520 A
——と独裁者　466 B～467 A, 468 D
——は正しい人であるべし　460 C, 508 C
技術の心得ある——　504 D
弁論術
——と司法の術　464 C
——とソフィストの術　520 B

——と正，不正　470D～471C，472C～473E
幸福者の島　523B，524A，526C
コスモス(宇宙，秩序)　508A

サ 行

裁判　478A～B
——官　478A，480B，481A
死後の——　523B～526D
死
——こそがまことの生　492E
——の定義　524B
自然(ピュシス)
——と法律習慣(ノモス)　482E～484A，488D～489B，491E～492C
——の正義　483D～E，484B～C，488B～C，490A
実力(権力)，——者，——がある　466B，466E～467A，468E，469E～470A，510D～E，513A～B
司法の術　464C，465C，478A，520B
醜(醜いもの)　463C～D，474C～D
——と悪　→悪
——の定義　475A～B
熟練　463B，501B
思慮のある人　489E～491D，497E～499A，507A～C
身体(肉体)
——のための技術　464B，517E～518A
——は墓　493A
死後の——　524B～D
真理　472A～B，473B，482E，486E，487E，526D
数論　450D～451C，453E
正義　460E，468E～469A，470C，476A，D，477A
——と幸，不幸　→幸福
——の徳　470E，492B，504D～E，507E～508B，519A，D，527E
自然の——　→自然
〔司法・裁判〕　478A～B
政治
——家　473E，513B，515C～519C
——活動(政治の仕事)　484E，515A，C，521D，527D
——術　463D～E，464B，521D
——と哲学　485A
正と不正(正邪)〔弁論術の対象〕　454B，454E～455A，D，459D，460A，E
節制　508B
——家，——する人　491D～E
——の徳　492A～B，504D～E，507D，519A
(思慮)——のある人(魂)　506E～507C
節度，——のある人(魂)，——のある生活　493D～494A，506E
説得　452E～454B，454E～455A，459C～D
——をつくり出すもの　→弁論術
善〔行為の目的〕　467E～468C，499E～500A
——と快　→快
人間にとっての最高の——　451D～452D
ソフィスト　465C，519C，520A～B
——の術　463B，465C，520B

タ 行

体育家(体育教師)　452A～B，E，456E，460D，464A，504A，520C
体育術　450A，464B～C，465B～C，517E～518A，C，520B
大衆　458E～459A，E，483B～C，488E～489A，492A～B
大道演説，——家　482C，494D，519D
(大衆演説)　502C～D，503A
たげり(カラドリオン)の生活　494B
正しい人　460B～C，507B，516B～

『ゴルギアス』索引

数字と ABCDE は，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．
本全集訳文の上欄に示された数字と BCDE(A は数字の位置)は，これに対応している．
固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

悪(悪いこと，害悪，害)　458A～B, 467E, 468C～D, 470A, C, 477B～E, 478C～E
　——と苦痛　475A～B, 477C～D, 497D, 498D
　——と醜　463D, 474C～D, 475A～E, 477C, 483A
　最大の——(不正)　469B, 476A, 477B～E, 478D, 479C～D, 480D, 482B, 509B, 511A
いかに生きるべきか　492D, 500C
医者　452A, E, 460B, 464A, 467C, 475D, 478A, 480A, C, 490B～C, 491A, 504A, 505A
　——と弁論家　456B～C, 459A～B
　——と召使　521A
　——と料理人　464D～E, 521E～522B
　公務のために働く——　455B, 456B, 514D
医術　450A, 464B～C, 477E～478B, 517E～518A, 520B
　——と料理法　464D, 465B～D, 500B, 501A
一問一答で話し合う　447B, 448D, 449B, 471D

カ 行

快(楽)
　——と苦(痛)　496C～497D
　——と善　464D～465A, 495A～499B, 500A～B, 500D～503A, 506C～D, 513D～E, 521D～E,
　よい——と悪い——　495A, 499B～D
疥癬　494C
快適な生活　494B～E
幾何学　450D～E, 508A
　——者　465B
　——的な平等　508A
技術，——と経験，迎合　448C, 462B～463B, 464B～465C, 500B, 500E～501C
強者(より強い人)　483C～484C, 488B～491C
教養　470E, 485A
経験，——と技術　→技術
迎合(κολακεία)　463B～C, 464C～465B, 466A, 467A, 501C～503A, 513D, 527C
　——家　466A, 521B
計算術　450D, 451B～C
化粧法　463B, 465B～C
原因(理由)　465A, 501A
賢者たち　493A, 508A, 510B
建築術　514B～C
言論　449E～451D
　——の技術　→弁論術
　——の自由　461E
航海術　511D～E
幸福　478C～E, 491E, 492C, E, 493D, 494A, D～E, 496B, 507C～D, 508B